山口県埋蔵文化財センター調査報告　第51集
下関市文化財調査報告書　11
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書　第40集

宮迫神田遺跡
的場遺跡

２００５

財団法人　山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

下関市教育委員会

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第51集
下関市文化財調査報告書　11
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書　第40集

宮迫神田遺跡
的場遺跡

（みやさこかんだ）
（まとば）

２００５

財団法人　山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

下関市教育委員会

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域社会の創造に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について事前に発掘調査を行い、その結果を記録にとどめ、郷土を築いてきた先人の足跡を後生に残すこととしております。

本書は、豊北町粟野地区、堀越地区の国営農地再編整備事業に先立ち、同地区内に所在する宮迫神田遺跡、的場遺跡について、財団法人山口県ひとづくり財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、宮迫神田遺跡では弥生時代から中世までの集落跡が発見され、縄文時代から中世にいたるまでの数多くの土器類や石器・石製品等も出土しました。また、的場遺跡では中世の遺構が発見され、縄文時代後期の土器が多量に出土しました。

これらの資料は当時の人々のくらしを考える上できわめて貴重な資料となり、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史の基礎資料として、広く活用されることを願うものであります。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年３月

財団法人山口県ひとづくり財団
理事長　牛見　正彦

序

国指定史跡「土井ヶ浜遺跡」を擁し、自然と歴史に恵まれた豊北町では、2001年度（平成13年度）から、国営農地再編整備事業をおこなっています。この事業に先立って、遺跡の有無を確かめるために試掘調査を実施し、その結果に基づいて遺跡の発掘調査をおこなってきました。2004年度（平成16年度）には、江尻下地区、野地地区、寺川地区、河原地区、堀越地区、宮迫地区の発掘調査をおこないました。

本報告書は、堀越地区の的場遺跡、宮迫地区の宮迫神田遺跡の発掘調査報告書です。的場遺跡では、柱穴群と大量の縄文土器が、宮迫神田遺跡からは弥生時代と古墳時代の住居址、弥生時代の土坑、中世の建物跡などが見つかりました。また、後者からは北部九州に特有な大型甕棺の破片が発見されるなど注目される遺物も見つかっています。

粟野川沿岸の発掘調査例は少なく、この地域の縄文・弥生時代の様子はよくわからなかったのですが、今回の調査によって、粟野川周辺では縄文時代から中世にいたる期間、人々が生活していたことがわかり、この地域が豊北町でも重要な場所であったことが明らかになりました。

今回の調査によって得られた遺構・遺物群は、今後豊北町の歴史を明らかにする際の貴重な資料になるものと期待されます。

発掘された埋蔵文化財は、私たちが住んでいる地域の歴史を内容豊かに復元するために欠くことのできない文化遺産です。従って、本書が学術関係者だけでなく、地域の社会教育・学校教育などの分野でも広く活用されることを願っております。

なお、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力・ご援助いただきました関係者各位、地権者や地元の皆様方に深く感謝いたします。

2005年（平成17年）２月10日

豊北町教育委員会

教育長　隅田　　忠

例　言

1　本書は、山口県下関市豊北町大字粟野に所在する「宮迫神田遺跡」、大字神田に所在する「的場遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は、国営農地再編整備事業に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が中国四国農政局の委託を受け、また、一部は下関市教育委員会が平成16年度の国庫補助事業として、共同で実施したものである。

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター
下関市教育委員会

調査担当　山口県埋蔵文化財センター　文化財専門員　堀田　浩一
山口県埋蔵文化財センター　文化財専門員　竹安　昭博
山口県埋蔵文化財センター　調　査　員　有馬　啓介

4　調査に当たっては、山口県教育委員会、中国四国農政局、豊北町農村整備課、並びに地元関係各位の協力、援助を得た。

5　本書の第１図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「豊北町全図」を複製使用したものである。第２図及び第45図は中国四国農政局提供の地図を元に作成したものである。

6　本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）で示し、標高は海抜標高（m）である。

7　資料の鑑定・分析を下記の各氏に依頼した。記して、謝意を表す。

土器表面の砂礫観察　奥田　尚　（橿原考古学研究所　共同研究員）
石材鑑定　亀谷　敦　（山口県立山口博物館　専門学芸員）

8　本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式よる。

9　図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10　本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

ＳＢ：住居・建物　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝状遺構　ＳＰ：柱穴

11　本書の的場遺跡の遺物（縄文土器）の項に関しては、幸泉　満夫氏（山口県立山口博物館　専門学芸員）に執筆を依頼した。

12　本書の作成・執筆は、調査担当者が共同で行い、編集は堀田が行った。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の経緯と概要……3
　1　調査に至る経緯……3
　2　調査の概要……3
Ⅲ　宮迫神田遺跡……5
　1　調査の方法と経過……5
　2　調査の成果……9
　　(1)　遺構……9
　　(2)　遺物……30
　3　まとめ……61
Ⅳ　的場遺跡……63
　1　調査の方法と経過……63
　2　調査の成果……67
　　(1)　遺構……67
　　(2)　遺物……79
　3　まとめ……108
Ⅴ　付編……109
　　宮迫神田遺跡の土器の表面にみられる砂礫

図版目次

宮迫神田遺跡

図版１　調査区遠景
図版２　調査区全景
図版３　調査区遠景、Ｄ区全景
図版４　ＳＢ９、８、４、３、５
図版５　ＳＢ２、１、６、７、ＳＢ７土器出土状況
図版６　ＳＢ18、17、21、19、20
図版７　ＳＫ35、30、３、４、６
図版８　ＳＫ27、12、１、20、26
図版９　ＳＫ９、33、34、ＳＰ229、埋甕、咸平元宝、Ｃ区遺物包含層土器出土状況
図版10　Ｃ区遺物包含層調査区北端下層、Ｃ区遺物包含層土器出土状況、Ｃ区遺物包含層遺物出土状況、Ｃ区遺物包含層トレンチ③土層、Ｃ区遺物包含層調査区北端土層
図版11　宮迫神田遺跡出土遺物(1)
図版12　宮迫神田遺跡出土遺物(2)
図版13　宮迫神田遺跡出土遺物(3)
図版14　宮迫神田遺跡出土遺物(4)
図版15　宮迫神田遺跡出土遺物(5)
図版16　宮迫神田遺跡出土遺物(6)
図版17　宮迫神田遺跡出土遺物(7)
図版18　宮迫神田遺跡出土遺物(8)
図版19　宮迫神田遺跡出土遺物(9)
図版20　宮迫神田遺跡出土遺物(10)
図版21　宮迫神田遺跡出土遺物(11)
図版22　宮迫神田遺跡出土遺物(12)
図版23　宮迫神田遺跡出土遺物(13)
図版24　宮迫神田遺跡出土遺物(14)
図版25　宮迫神田遺跡出土遺物(15)
図版26　宮迫神田遺跡出土遺物(16)
図版27　宮迫神田遺跡出土遺物(17)
図版28　宮迫神田遺跡出土遺物(18)
図版29　宮迫神田遺跡出土遺物(19)

図版30　宮迫神田遺跡出土遺物⑳
図版31　宮迫神田遺跡出土遺物㉑
図版32　宮迫神田遺跡出土遺物㉒
図版33　宮迫神田遺跡出土遺物㉓
図版34　宮迫神田遺跡出土遺物㉔
図版35　宮迫神田遺跡出土遺物㉕
図版36　宮迫神田遺跡出土遺物㉖
図版37　宮迫神田遺跡出土遺物㉗
図版38　宮迫神田遺跡出土遺物㉘
図版39　宮迫神田遺跡出土遺物㉙
図版40　宮迫神田遺跡出土遺物㉚

的場遺跡

図版41　調査区遠景
図版42　調査区全景
図版43　ＳＫ７、９
図版44　ＳＫ２、４・５、８、10、12、ＳＰ３、18、40
図版45　ＳＰ１、66、82、98、Ｄ区遺物包含層土器出土状況
図版46　ＳＰ76、Ｄ区遺物包含層土器出土状況、Ｄ区石列出土状況、Ｄ区石列土層断面
図版47　土器溜状遺構遺物出土状況、土器溜状遺構土器出土状況
図版48　ＳＫ13、14、土器溜状遺構土器出土状況
図版49　土器溜状遺構完掘状況、土器溜状遺構遺物出土状況、土器溜状遺構土層断面
図版50　的場遺跡出土遺物(1)
図版51　的場遺跡出土遺物(2)
図版52　的場遺跡出土遺物(3)
図版53　的場遺跡出土遺物(4)
図版54　的場遺跡出土遺物(5)
図版55　的場遺跡出土遺物(6)
図版56　的場遺跡出土遺物(7)
図版57　的場遺跡出土遺物(8)
図版58　的場遺跡出土遺物(9)
図版59　的場遺跡出土遺物⑩
図版60　的場遺跡出土遺物⑪
図版61　的場遺跡出土遺物⑫
図版62　的場遺跡出土遺物⑬
図版63　的場遺跡出土遺物⑭
図版64　的場遺跡出土遺物⑮
図版65　的場遺跡出土遺物⑯
図版66　的場遺跡出土遺物⑰
図版67　的場遺跡出土遺物⑱
図版68　的場遺跡出土遺物⑲
図版69　的場遺跡出土遺物⑳
図版70　的場遺跡出土遺物㉑
図版71　的場遺跡出土遺物㉒
図版72　的場遺跡出土遺物㉓
図版73　的場遺跡出土遺物㉔
図版74　的場遺跡出土遺物㉕

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡……1

宮迫神田遺跡

第２図　宮迫神田遺跡調査区設定図……6
第３図　宮迫神田遺跡遺構配置図　……７・８
第４図　竪穴住居跡実測図(1)……10
第５図　竪穴住居跡実測図(2)……11
第６図　竪穴住居跡実測図(3)……12
第７図　竪穴住居跡実測図(4)……13
第８図　掘立柱建物跡実測図(1)……15
第９図　掘立柱建物跡実測図(2)……16
第10図　掘立柱建物跡実測図(3)……17
第11図　掘立柱建物跡実測図(4)……18
第12図　ＳＫ35実測図……20
第13図　ＳＫ26、６実測図……21
第14図　ＳＫ４、30実測図　……22
第15図　ＳＫ１、３、12、20実測図……23
第16図　ＳＫ13、15、９実測図……24
第17図　ＳＫ８・27、33、34実測図……26

第18図　ＳＫ36実測図　……27
第19図　埋甕遺構実測図……27
第20図　ＳＰ229実測図　……27
第21図　Ｃ区遺物包含層土層図……28
第22図　竪穴住居跡出土土器実測図(1)……41
第23図　竪穴住居跡出土土器実測図(2)
・土坑出土土器実測図(1)……42
第24図　土坑出土土器実測図(2)……43
第25図　柱穴出土土器実測図……44
第26図　Ａ・Ｂ区遺物包含層出土土器実測図…44
第27図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(1)…44
第28図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(2)…45
第29図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(3)…46
第30図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(4)…47
第31図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(5)…48
第32図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(6)…49
第33図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(7)…50
第34図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(8)…51
第35図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(9)…52
第36図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(10)…53
第37図　Ｃ区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(1)……53
第38図　Ｃ区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(2)……54
第39図　Ｃ区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(3)……55
第40図　Ｄ区遺物包含層出土土器実測図……56
第41図　土製品・玉類・銭・木製品実測図……57
第42図　石器・石製品実測図(1)……58
第43図　石器・石製品実測図(2)……59
第44図　石器・石製品実測図(3)……60

的場遺跡

第45図　的場遺跡調査区設定図……64
第46図　的場遺跡遺構配置図……65・66
第47図　掘立柱建物跡実測図(1)……67
第48図　掘立柱建物跡実測図(2)……68
第49図　掘立柱建物跡実測図(3)……69
第50図　ＳＫ７、９、10実測図……71
第51図　ＳＰ１、66、76、98実測図……72
第52図　Ｄ区石列、ＳＫ13実測図……74
第53図　ＳＫ14実測図……75
第54図　縄文時代遺構配置図　……76
第55図　縄文土器出土状況実測図……77・78
第56図　弥生時代以降の遺物　……89
第57図　縄文土器実測図(1)……90
第58図　縄文土器実測図(2)……91
第59図　縄文土器実測図(3)……92
第60図　縄文土器実測図(4)……93
第61図　縄文土器実測図(5)……94
第62図　縄文土器実測図(6)……95
第63図　縄文土器実測図(7)……96
第64図　縄文土器実測図(8)……97
第65図　縄文土器実測図(9)……98
第66図　縄文土器実測図(10)……99
第67図　縄文土器実測図(11)……100
第68図　縄文土器実測図(12)……101
第69図　縄文土器実測図(13)……102
第70図　縄文土器実測図(14)……103
第71図　縄文土器実測図(15)……104
第72図　縄文土器実測図(16)……105
第73図　石器・石製品実測図(1)……106
第74図　石器・石製品実測図(2)……107

表　目　次

宮迫神田遺跡

第１表　掘立柱建物跡一覧表……19
第２表　石器・石製品観察表……40

的場遺跡

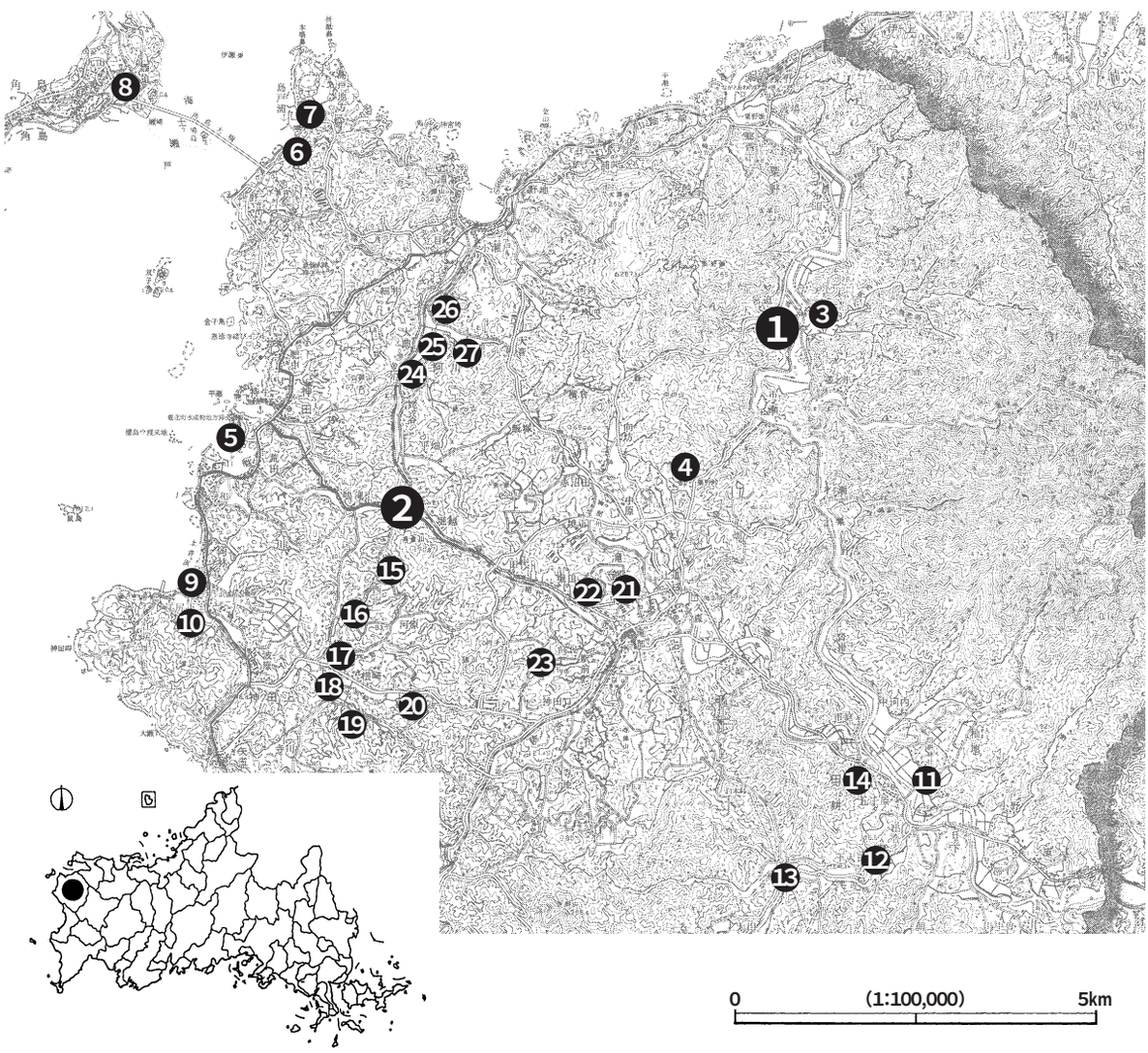
第３表　掘立柱建物跡一覧表……70
第４表　石器・石製品観察表……80

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

宮迫神田遺跡、的場遺跡は、山口県の北西端に位置する豊浦郡豊北町（新下関市）の、それぞれ大字粟野、大字神田に所在する。宮迫神田遺跡は弥生時代を中心に、中世までの集落跡である。また、的場遺跡は中世の集落跡であるが、遺跡の一部からは縄文時代後期の土器が多量に出土し、古くは当該期の集落が存在していたことを示唆している。

両遺跡の所在する豊北町域は、山地や丘陵地の占める割合が非常に高く、とりわけ丘陵地は町のほぼ全域を覆うように広がっている。一方、低地はこれら丘陵地の間を流れる各河川によって形成された谷底平野に限定されており、沖積平野はほとんど見られない。また、狗留孫山（616ｍ）や白滝山（667ｍ）に代表される山地は、町の辺縁部にあって外部との陸路による交流を制限しているが、これらの山地を分断する断層によって南東方面の通路が確保されている。



1	宮迫神田遺跡	2	的場遺跡	3	前田遺跡	4	市の瀬遺跡	5	三浦山古墳群
6	夕陽ヶ丘古墳	7	大河浜遺跡	8	沖田遺跡	9	土井ヶ浜遺跡	10	土井ヶ浜南遺跡
11	甲殿遺跡	12	下太田遺跡	13	上太田遺跡	14	肥後屋敷遺跡	15	上沢遺跡
16	西沢遺跡	17	上今宮遺跡	18	竜王遺跡	19	南ヶ畑遺跡	20	中平尾遺跡
21	堤迫遺跡	22	道祖ノ本遺跡	23	東正寺遺跡	24	神田口遺跡	25	丸山遺跡
26	二刀遺跡	27	平野遺跡						

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

宮迫神田遺跡は、北向きの丘陵先端部に当たる台地（標高約13ｍ）から裾部にかけて立地し、周囲には粟野川と宮迫川沿いに発達した自然堤防の背後の低地帯が広がる。一方、的場遺跡は、南向きの丘陵性の小山塊の先端部裾（標高約40ｍ）に立地し、前面には狭あいな谷底平地が開けている。いずれも内陸に位置しているが、その立地条件は少し異なっている。

2　歴史的環境

両遺跡の所在する地区一帯でのこれまでの発掘調査例はきわめて少なく、地域の歴史的変遷等に関する情報は乏しい。そうした中で、宮迫神田遺跡の所在する粟野地区における既往の調査では、市の瀬遺跡と前田遺跡とが知られており、両遺跡ともに中世の集落跡である。市の瀬遺跡は中世後半から近世初頭に営まれた山間部の小規模な集落跡で、掘立柱建物跡や工房跡、輸入磁器や陶器等の遺構や遺物が見つかっている。前田遺跡は、掘立柱建物跡や鍛冶関連の廃棄用土坑、中世土師質土器や輸入磁器等の遺構や遺物が見つかっている。

一方、的場遺跡の所在する神田地区では、響灘に面した沿岸部の丘陵上に、三浦山古墳群、夕陽ヶ丘古墳がある。三浦山第１号古墳は豊北町で確認された古墳の中で最も古く、５世紀代の小規模な石棺系竪穴式石室をもつ円墳で、墳丘から鉄刀２本分が出土している。夕陽ヶ丘古墳は、６世紀後半の横穴式石室をもつ円墳で、石室内からは鉄刀や馬具、丸玉・臼玉等の装身具が出土している。近世の遺跡としては、埋葬跡の大河浜遺跡がある。また、沿岸部の肥中は「肥中街道」と「山陰道」を結ぶ「北浦道」の重要な道筋であったため、肥中港には中世に大内氏の船倉が置かれ、北浦の港津として重要な位置を担っていた。

こうした粟野・神田地区以外の豊北町内の遺跡では、縄文時代の遺跡としては角島に所在する沖田遺跡があり、縄文時代晩期に位置付けられる土器が包含層からまとまって出土している。弥生時代の遺跡として響灘沿岸では、前出の沖田遺跡、弥生時代前期後半～中期後半における渡来系弥生人の集団墓地として著名な土井ヶ浜遺跡、弥生時代前期の貯蔵穴や土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡等が検出され、土井ヶ浜遺跡に埋葬された人々の集落の一つであったと考えられている土井ヶ浜南遺跡が存在する。内陸部の田耕地区には、この時期の豊北町の拠点的集落の一つとして位置付けられている甲殿遺跡がある。弥生時代前期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡18軒と掘立柱建物跡が20棟検出され、中国戦国時代のガラス製のトンボ玉が出土している。この他に内陸部には、小規模な集落跡として竜王遺跡や南ヶ畑遺跡等がある。古墳時代の遺跡としては、古墳時代の竪穴住居跡や初期須恵器が見つかった平野遺跡や、西沢遺跡がある。古代の遺跡としては、墨書やヘラ書きのある須恵器や緑釉陶器等が出土した二刀遺跡や輸入磁器や製塩土器等が出土した上今宮遺跡がある。中世の遺跡としては、東正寺遺跡、上沢遺跡、中平尾遺跡、神田口遺跡、上太田遺跡、下太田遺跡がある。これらの集落遺跡は概ね町内の主要な街道筋に当たる付近に位置し、こうした遺跡の立地には往時の物流との関連が想定されよう。近世の遺跡としては、集落跡の肥後屋敷遺跡、埋葬跡の堤迫・道祖ノ本遺跡等がある。

いずれにしても豊北町域での広域にわたる発掘調査は、ここ数年におけるものが大半を占めているのが現状であり、それらの結果を踏まえた特異な遺跡立地等の検討を含め、今後のさらなる調査の進展によって地域の歴史がより解明されることが期待されよう。

〔参考文献〕
豊北町史編纂委員会『豊北町史二』（1994年）
山口県埋蔵文化財センター『上太田遺跡　市の瀬遺跡　南ヶ畑遺跡』（2004年）
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム『前田遺跡Ⅰ前田遺跡Ⅱ』（2004年）

Ⅱ　調査の経緯と概要

1　調査に至る経緯

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保存するため、関係機関と事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については、記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。豊北町で始まった国営農地再編整備事業に際しても、中国四国農政局、豊北町農村整備課及び豊北町教育委員会と協議を行い、当該地域の中で遺構が埋存している可能性の高い地域について試掘調査を行った。この結果新たに遺跡が確認された宮迫地区宮迫神田遺跡と堀越地区的場遺跡においては、現状保存が困難な範囲を対象に発掘調査を行うこととなった。調査は、財団法人山口県ひとづくり財団に所属する山口県埋蔵文化財センターが中国四国農政局の委託を受けて、文化庁の国庫補助を受けた豊北町教育委員会と共同で実施することとなった。

2　調査の概要

発掘調査を始めるにあたっては、宮迫神田遺跡・的場遺跡とも中国四国農政局、豊北町農村整備課及び豊北町教育委員会との間で打ち合わせを行うと共に、近隣の小中学校、警察署、自治会等に安全確保のための協力と理解を要請した。

【宮迫神田遺跡】

平成16年５月10日から27日まで重機による耕土除去を駐車場の整地と並行して行い、14日にプレハブ事務所を設置した。調査区は調査前の現地水田区画に従い、高所の南から順にＡ～Ｄ区とし、18日より作業員を動員して遺構面を確定するためのトレンチ調査を行った。この調査に基づいて20日から重機による表土除去を行い、24日からはこれと並行して作業員による遺構検出作業を開始した。その結果、Ａ・Ｂ区では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑や多数の柱穴等の遺構が検出された。また、Ｃ・Ｄ区では、竪穴住居跡や土坑、調査区全体を広く覆う遺物包含層が検出された。このような状況を踏まえ、計画的・効果的に調査する必要から調査方法や掘り込みの順序を検討し、28日からＡ・Ｂ区の遺構の掘り込み作業を開始した。また、その間、６月２日に国土座標杭を設置した。Ａ・Ｂ区の掘り込み作業が終了した６月14日から、Ｃ・Ｄ区の掘り込み作業を開始し、７月14日にはＤ区の掘り込み作業が終了した。また、６月29日には粟野小学校６年生の発掘体験学習を受け入れ、７月31日には発掘調査の成果を広く公開すべく現地説明会を開催した。現地説明会の当日は、悪天候にもかかわらず、地元の人たちを中心に約100名の来訪者があり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構や遺物包含層の弥生土器の出土状況、出土した土器や石器等の遺

表土除去（的場遺跡）

遺構掘り込み（的場遺跡）

空中写真撮影（宮迫神田遺跡）

発掘体験学習（宮迫神田遺跡）

現地説明会（宮迫神田遺跡）

物を見学してもらった。その後、７月22日の空中写真撮影を経て、７月下旬にグリッド実測による遺構の記録保存作業を行った。８月４日には、Ｃ区遺物包含層の地山確認のためのトレンチ掘削と礫層の除去作業を重機によって行った。８月20日の撤収日までＣ区遺物包含層の掘り込み作業を継続して行い、最後にＣ区の平板実測を行ってすべての作業が終了した。

【的場遺跡】

調査に先立って豊北町農村整備課の立ち会いのもと、地権者と駐車場及びプレハブ設置場所の整地について確認を行った。７月27日から重機を使って駐車場の整地及び調査区の耕土除去を行い、８月９日にプレハブ事務所を設置した。調査区は調査前の現地水田区画に従い、高所の東から順にＡ～Ｄ区とし、試掘調査の結果に基づいて８月３日から６日まで重機による表土除去を行った。８月９日から作業員による遺構検出を開始し、24日に終了した。その結果、Ｂ区とＤ区を中心に土坑や多数の柱穴等の遺構と中世の遺物を含んだ包含層が検出された。また、中世の遺物を含んだ包含層の下に、縄文土器を含んだ包含層のあることが確認された。８月23日から中世の遺構と包含層の掘り込み作業を開始し、26日には国土座標杭を設置した。遺構の掘り込み作業が済んだ所から、個別遺構の実測とグリッド実測を並行して行った。９月13日にはＢ区の近世の面とＤ区の中世の包含層を重機を使って除去し、15日には中世の面の遺構の掘り込み作業が終了したので、22日に空中写真撮影を実施した。その後、27日に中世以前の包含層を確認するためのトレンチ調査を行い、これに基づいて９月30日から２日間、Ｂ区からＤ区にかけての中世の面を重機を使って除去し、10月４日から縄文土器を含んだ包含層の検出及び掘り込み作業を開始した。その間、縄文土器の出土状況を図面や写真による記録保存作業を行った。29日に掘り込み作業は終了したので、11月１日に遺物包含層の範囲や出土した遺構を平板実測し、２日に発掘調査現場でのすべての作業を終了した。

前半の宮迫神田遺跡の発掘調査は、天候にも恵まれて当初の予定通り作業を進めることができた。後半の的場遺跡の発掘調査は、８月・９月と再三にわたる台風の上陸・接近により、進捗状況に少なからずの影響が出たが、両遺跡とも大過なく作業を終えることができた。多くの調査資料を山口県埋蔵文化財センターに持ち帰って検討を加え、出土遺物の復元、実測、写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。

Ⅲ　宮迫神田遺跡

1　調査の方法と経過

宮迫神田遺跡は、豊北町北東部の粟野地区にあり、豊田町に流れを発し支流を集め油谷湾へと注ぐ粟野川の左岸に位置する。調査区は南側の丘陵先端部に当たる標高約13.0ｍの台地（Ａ・Ｂ区）と、そこから東側に落ち、粟野川と宮迫川沿いに発達した自然堤防の背後の低地（Ｃ・Ｄ区）に分かれ、調査面積は約2,300㎡の広さである。

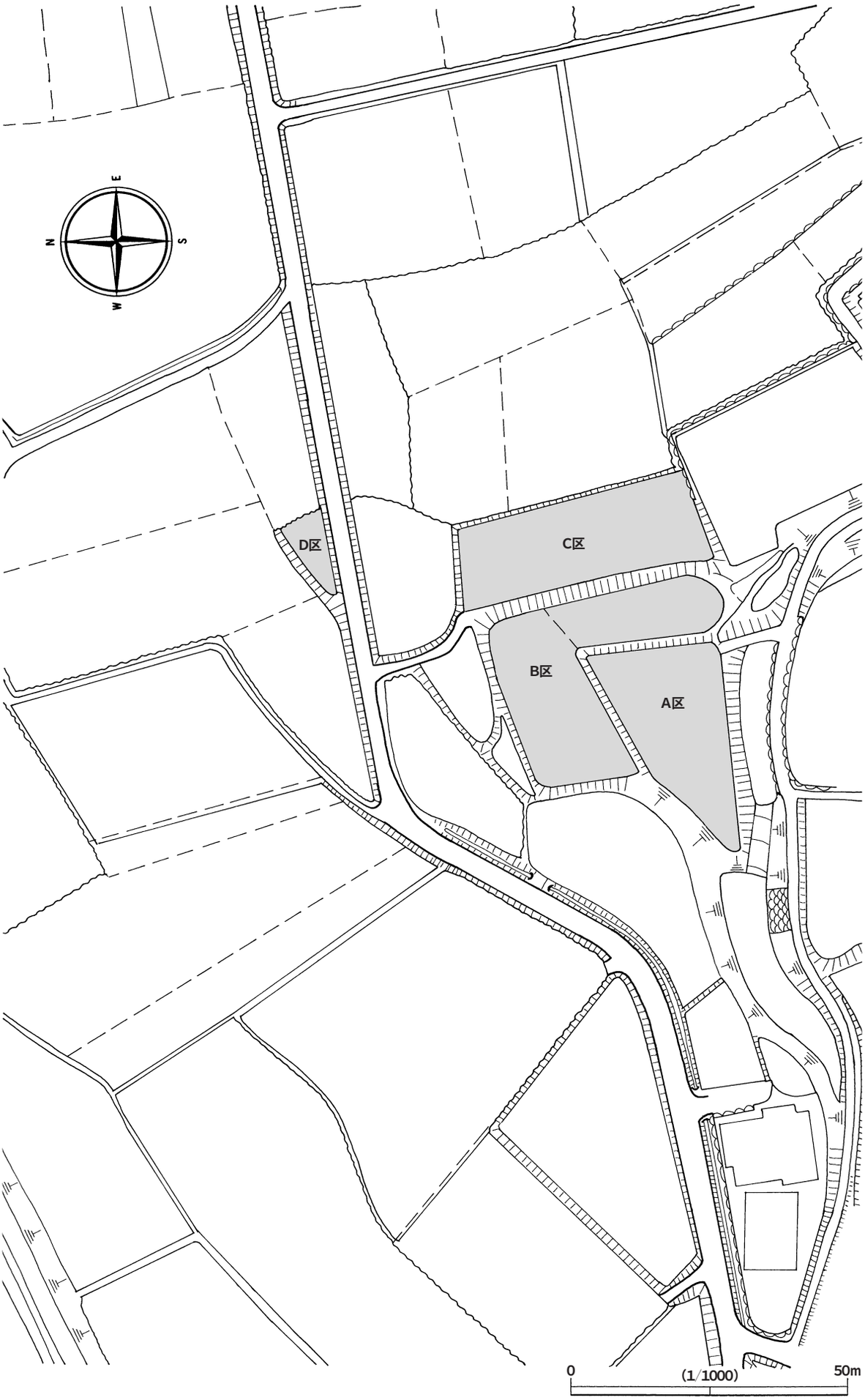
調査区は、調査前の現地水田区画に従い、高所の南から順にＡ～Ｄ区とした。Ｂ区については水田としては別の区画であったが、比高差がほとんどなかったため、同一の調査区名にした。

重機による耕土除去後、予察調査で試掘を行っていなかったＢ区北半部東側と南端部、Ｃ区南端部と北端部に６本のトレンチを設定し、遺構面の確認を行った。Ｂ区北半東側では、町だおし（近世以降の水田拡張に伴う造成）に伴う多量の礫を含む造成土が40～50㎝存在することを確認した。また、Ｃ区では予察の段階で、黒褐色粘質土の遺物包含層が１ｍ以上厚く全体を覆っていることが確認されていたが、トレンチ調査でも予察の試掘結果と同じように、弥生土器、須恵器、土師器等の土器を多量に含んだ遺物包含層が調査区全体を広く覆って堆積していることが確認できた。

この結果を受けて、Ａ区から順に重機を投入して慎重に表土除去を行った。表土除去を行うにつれてＡ区では南半部東側で町だおしに伴う真砂土の客土層が現れたので、重機によるトレンチ調査をしながら除去した。Ｂ区北半東側において確認された町だおしの造成土は北半西側でも現れたため、重機による表土除去の段階ですべて除去した。Ａ・Ｂ区の町だおしの造成土により、当初想定していた土量よりも多量の排土が出た。Ｃ区では南半部のトレンチ調査やその土層観察において、整地土が確認されたので表土除去の段階ですべて除去した。

表土除去が終了した地区から順に遺構検出を行った。Ａ区では竪穴住居跡、土坑、柱穴等の遺構が検出された。検出された竪穴住居跡７軒は、町だおしによる削平を受けており遺存状態は不良であった。また、南側部分も水田化による削平が著しく遺構らしきものは確認できなかった。Ｂ区では遺構面が礫を含んで固く検出に手間取ったが、竪穴住居跡、土坑、柱穴等の遺構が確認された。しかし、Ａ区と同じように南側部分は水田化による著しい削平を受けており、遺構らしきものは確認できなかった。また、北半部西側の竪穴住居跡や土坑等の遺構も町だおしによる削平により、遺存状態は不良であった。Ｃ区では調査区の中央部西側で遺存状態の良い竪穴住居跡が１軒と土坑が５基、北端部の遺物包含層で多数の柱穴が確認された。Ｄ区では表土除去ののちに、調査区全体を覆っている遺物包含層の堆積状況を確認するために、東西・南北に２本のトレンチを設定し調査を行った。その結果、遺物包含層の下に多数の柱穴があることを確認した。遺物包含層を掘り込んで竪穴住居跡１軒と多数の柱穴を検出した。

遺構検出によって確認できた遺構を慎重に掘り込み、図面と写真による記録作成を行った。Ａ・Ｂ・Ｄ区の掘り込みが終了し、Ｃ区はまだ掘り込みの途中ではあったが空中写真撮影を経て、グリッド実測を行った。また、調査終了日までＣ区の遺物包含層の掘り込み作業を行い、最後に平板実測を行って、現場での調査を終えた。



第２図　宮迫神田遺跡調査区設定図

第３図　宮迫神田遺跡遺構配置図

2　調査の成果

⑴　遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡20棟、土坑36基、溝状遺構２条、埋甕遺構１基、柱穴約600個である。調査区の中で、遺構が密集するのは標高の高いＡ区とＢ区で、標高の低いＣ区とＤ区は遺構が少ない。全体的に遺構の遺存状態は悪く、遺構面は削平されている可能性が高い。出土遺物などから弥生時代～中世の所産と考えられる。

ここでは、主な遺構を取り上げ、説明を加えることとする。

①　竪穴住居跡（第４～７図、図版４・５）

竪穴住居跡は、Ａ区７軒、Ｂ区１軒、Ｃ区１軒、Ｄ区で１軒の合計10軒が検出された。いずれも後世の水田開発による削平のため、遺存状態は良くない。平面形は円形が７軒、方形を呈するものが３軒である。

ＳＢ８（第４図、図版４）

Ａ区南半部西側に位置する。北西側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。遺存する壁の高さは最大で28㎝を測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約7.2ｍに達する。削平を受けているが南側には幅40～80㎝、高さ12㎝のベッド状遺構が設けられている。北側の床面上には焼け締まった土が残っていた。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生中期後半に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ10（第４図）

Ａ区南半部西側に位置する。壁の大半は削平を受けて消失している。遺存する壁の高さは最大で42㎝を測る。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ４（第４図、図版４）

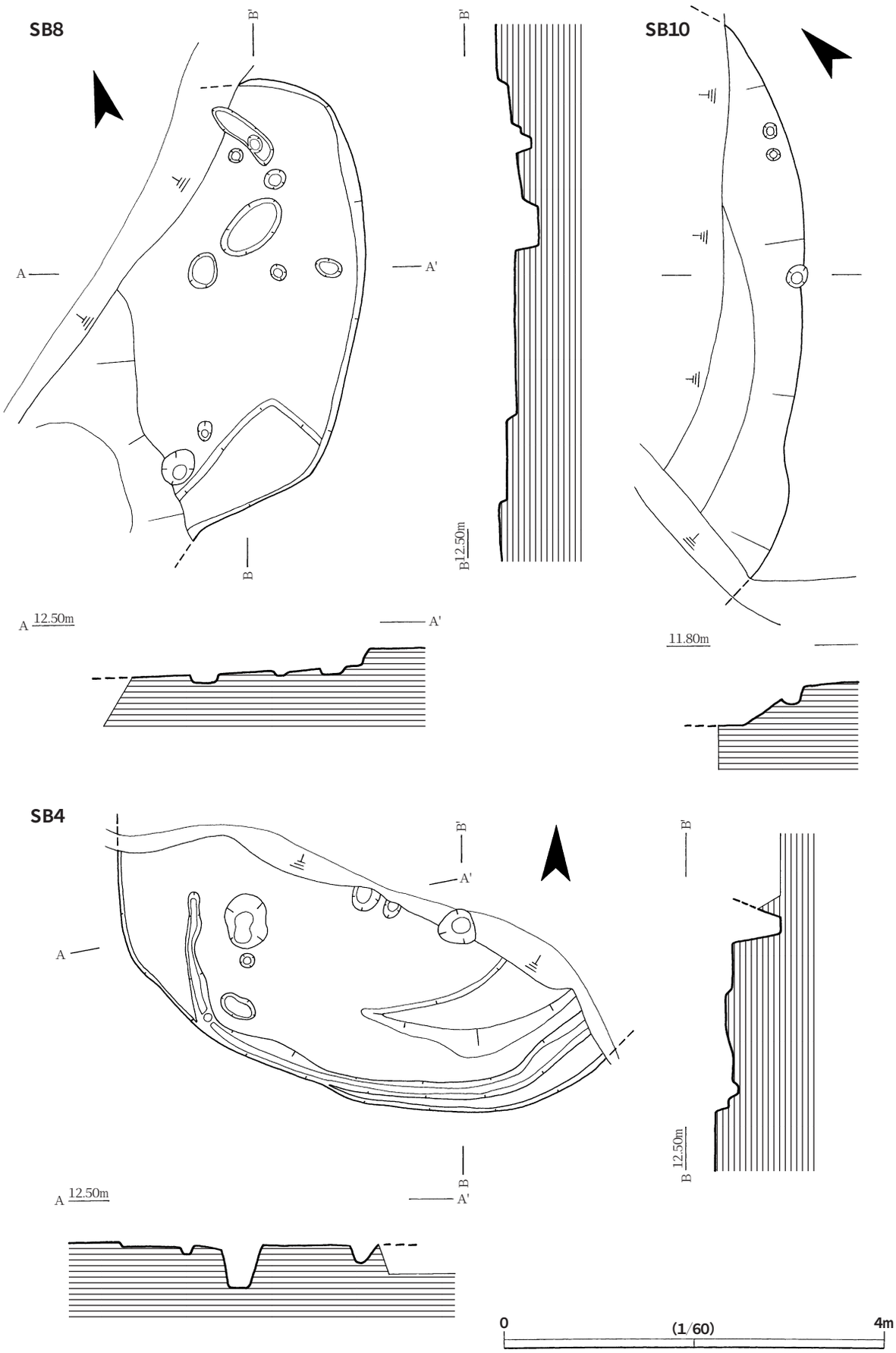
Ａ区中央部に位置する。北側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。消失した部分を復元すれば、推定径は約7.1ｍに達する。遺存する壁の高さは最大で18㎝を測り、壁溝は幅８～18㎝、床面からの深さ６～９㎝である。削平を受けているが西側には幅78㎝、高さ７～10㎝のベッド状遺構が設けられている。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、古墳時代初頭に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ３（第５図、図版４）

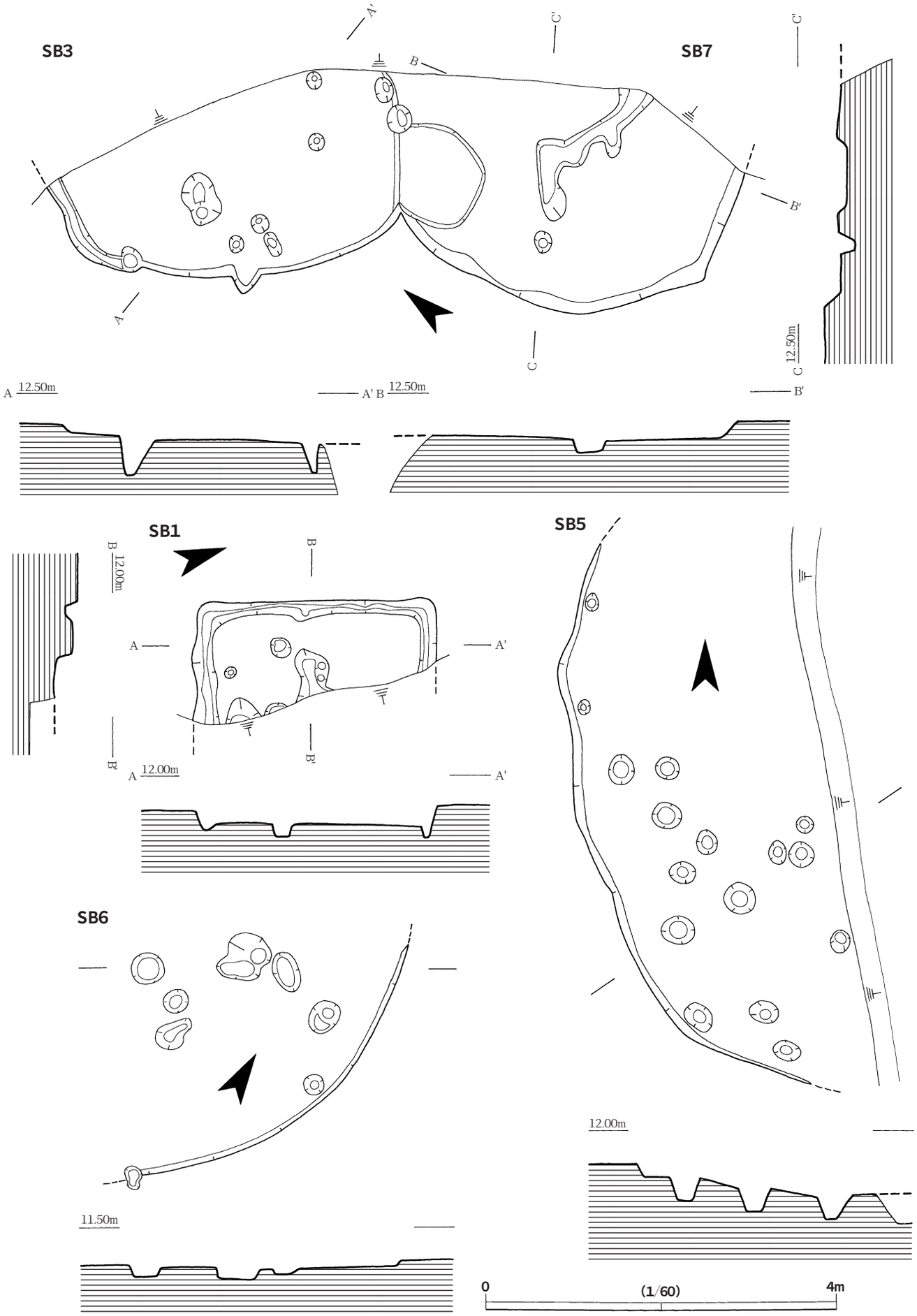
Ａ区南半部東側に位置する。北側の壁は消失し、東側はＳＢ７に切られている。平面形は円形を呈していたと考えられる。消失した部分を復元すれば、推定径は約6.4ｍに達する。遺存する壁の高さは最大で26㎝を測り、壁溝は幅15～21㎝、床面からの深さ６～23㎝である。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ７（第５図、図版５）

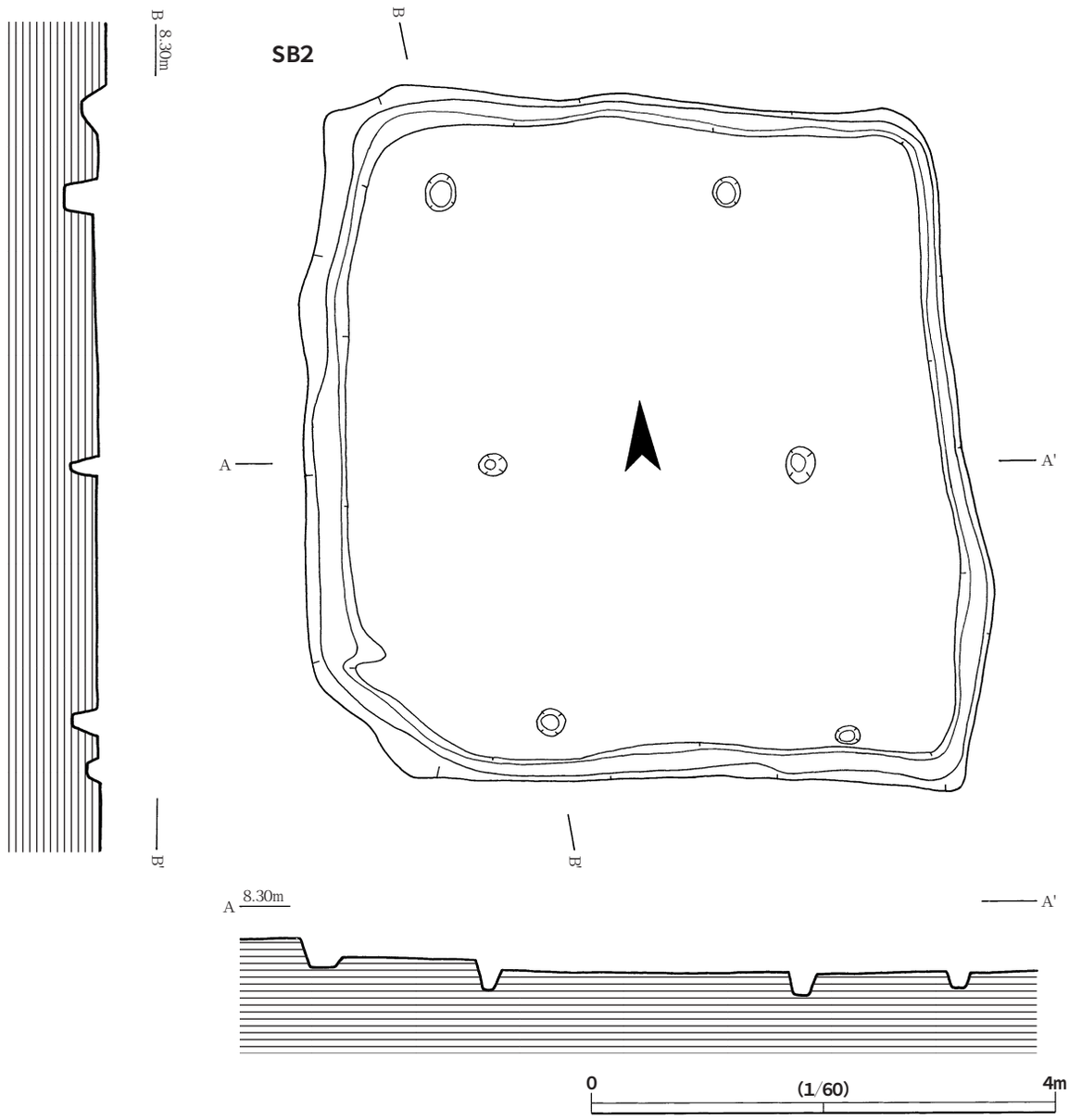
Ａ区南半部東側に位置する。遺構の南東側半分は後世の開発によって削り取られているが、南側と西側の壁と住居内の溝を確認できる。壁の高さは遺存部で最高21㎝。平面形は方形を呈していたと考えられる。現存規模は東西2.6ｍ、南北5.2ｍであり、小型の住居であると推定できる。幅25～37㎝、



第 4 図　竪穴住居跡実測図(1)



第５図　竪穴住居跡実測図(2)



第６図　竪穴住居跡実測図(3)

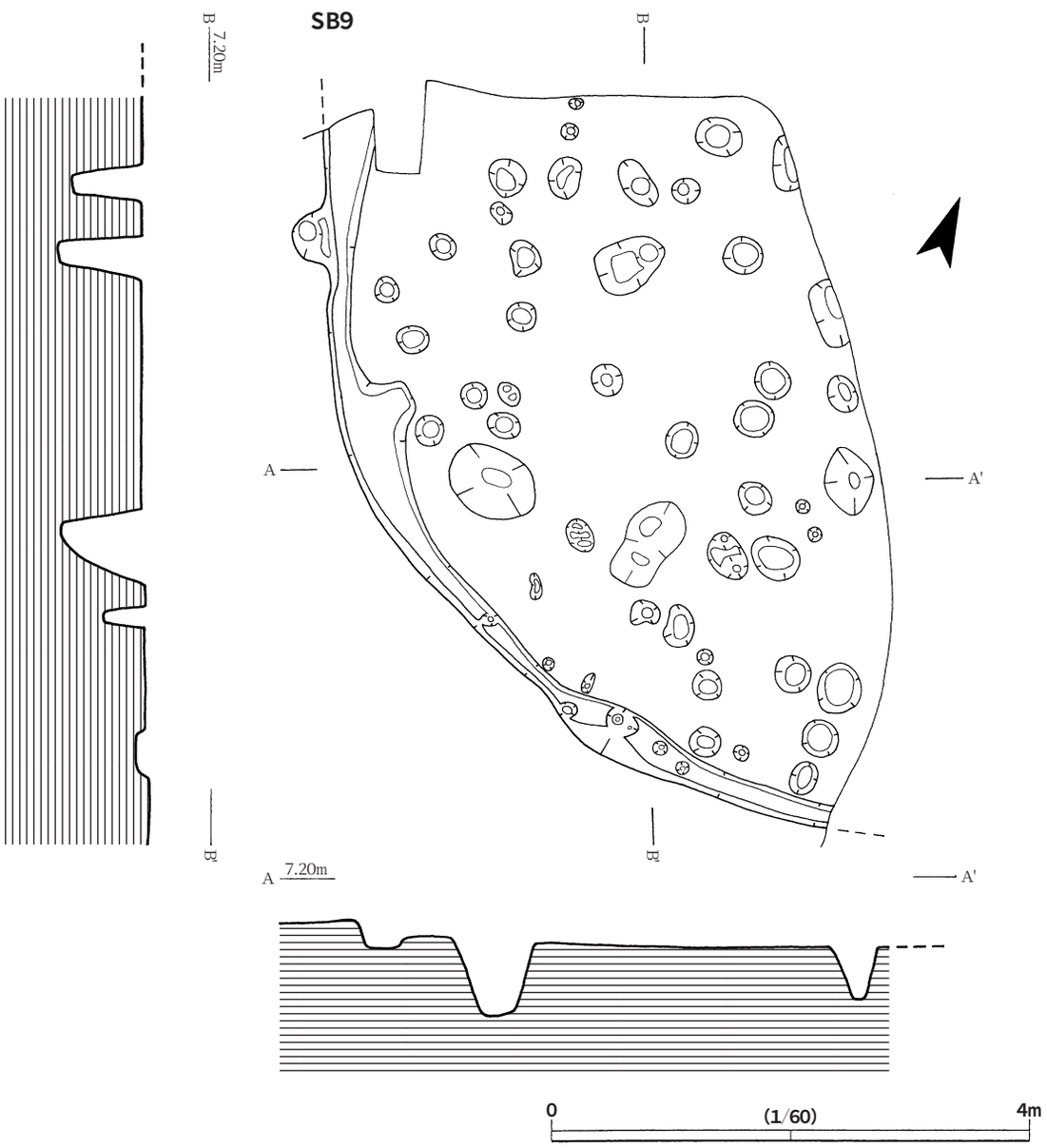
床面からの深さ10～19㎝の排水溝が中央に設けられており、低位側の屋外に続いていたと考えられる。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期から５世紀代に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ１（第５図、図版５）

Ａ区中央部東側に位置する。遺構の東側半分は後世の開発によって削り取られているが、西側の壁と溝を確認できる。遺存する壁の高さはで最高25㎝。平面形は方形を呈していたと考えられる。現存規模は東西1.4ｍ、南北2.8ｍであり、小型の住居であると推定できる。壁溝は幅18～24㎝、床面からの深さ６～10㎝である。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期から古墳時代に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ５（第５図、図版４）

Ａ区北半部東側に位置する。東側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。



第７図　竪穴住居跡実測図(4)

遺存する壁の高さは最大で30㎝を測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約9.0ｍに達する。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期後半の時期に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ６（第５図、図版５）

Ｂ区北半部西側に位置する。西側の壁は消失している。平面形は円形を呈していたと考えられる。遺存する壁の高さは最大で９～11㎝を測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約6.2ｍに達する。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、弥生時代中期後半に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ２（第６図、図版５）

Ｃ区南半部西側に位置する。平面形は正方形に近く、長軸6.12ｍ、短軸5.68ｍ、遺存壁高は最大で

32㎝の規模をもつ。主柱穴は６本で、黒褐色粘質土が堆積していた。壁溝は幅20～40㎝、床面からの深さ８～30㎝である。遺物は細片の土師器が多く、復元できるものはなかった。時期は古墳時代に属する住居であろうと考えられる。

ＳＢ９（第７図、図版４）

Ｄ区東側に位置する。北側と東側は調査区外で検出できなかった。平面形は円形を呈していたと考えられる。遺存する壁の高さは最大で30㎝を測り、消失した部分を復元すれば、推定径は約9.8ｍに達し、今回出土した竪穴住居では最大の規模である。壁溝は幅12～50㎝、床面からの深さ６～10㎝である。周辺の遺構及び遺構面検出時に出土した遺物の時期等から、古墳時代初頭に属する住居であろうと考えられる。

②　掘立柱建物跡（第８～11図、第１表、図版６）

調査で確認できた掘立柱建物跡はＳＢ11～30の20棟であり、そのうち時期のわかる建物跡は弥生時代が１棟、古墳時代が１棟、中世が10棟である。その他については時期がわからない。これらの建物跡は、高位のＡ区とＢ区に集中する。

ＳＢ17（第８図、図版６）

Ｂ区北半部中央に位置する２間×１間の建物で、棟方向はＮ16°Ｅ。建物規模は桁行4.72ｍ×梁行2.24ｍ、床面積約10.6㎡である。柱穴の直径は50～102㎝で、深さは11～27㎝である。柱穴の遺存状態は悪く、著しい削平を受けたものと考えられる。ＳＰ６、７、８、９からは弥生土器片が出土しており、この建物は弥生時代に比定される。

ＳＢ18（第８図、図版６）

Ｂ区北半部東側に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ14°Ｅ。建物規模は桁行4.32ｍ×梁行1.92ｍ、床面積約6.6㎡である。柱穴の直径は32～54㎝で、深さは17～41㎝である。ＳＰ86から出土した土師器片より、建物の時期は中世と考えられる。

ＳＢ21（第８図、図版６）

Ｂ区北半部西側に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ３°Ｅ。建物規模は桁行3.92ｍ×梁行3.00ｍ、床面積約11.8㎡である。柱穴の直径は20～28㎝で、深さは６～22㎝である。ＳＰ26、36からは土師器片が出土しており、この建物は中世に比定される。

ＳＢ28（第８図）

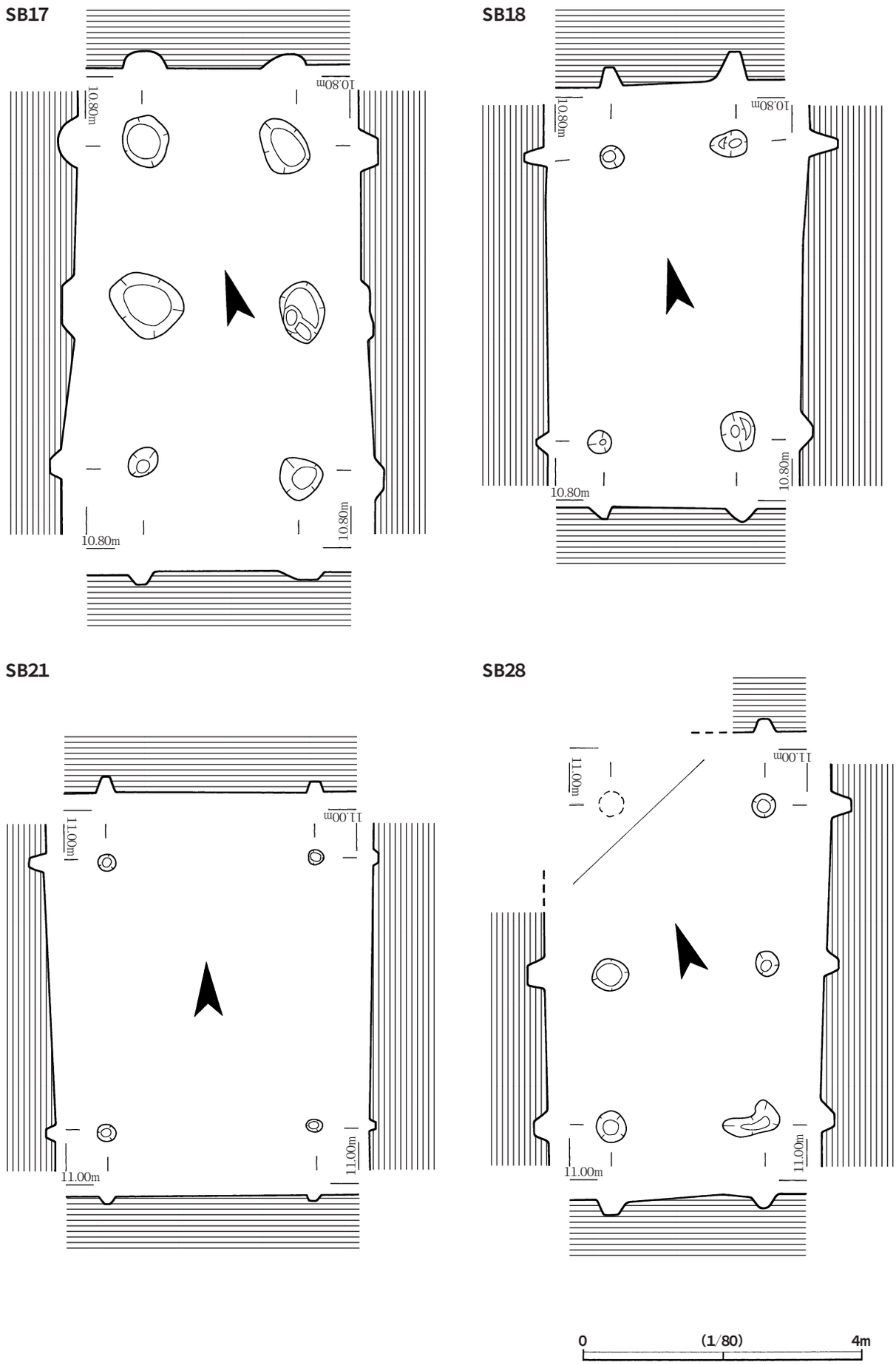
Ｂ区北半部西側に位置する。２間×１間の建物と考えられるが、北西隅の柱穴は削平のため存在しない。棟方向はＮ19°Ｅ。建物規模は桁行4.60ｍ×梁行2.20ｍ、床面積約10.1㎡である。柱穴の直径は34～54㎝で、深さは18～28㎝である。時期が判定できるような遺物は出土していない。

ＳＢ24（第９図）

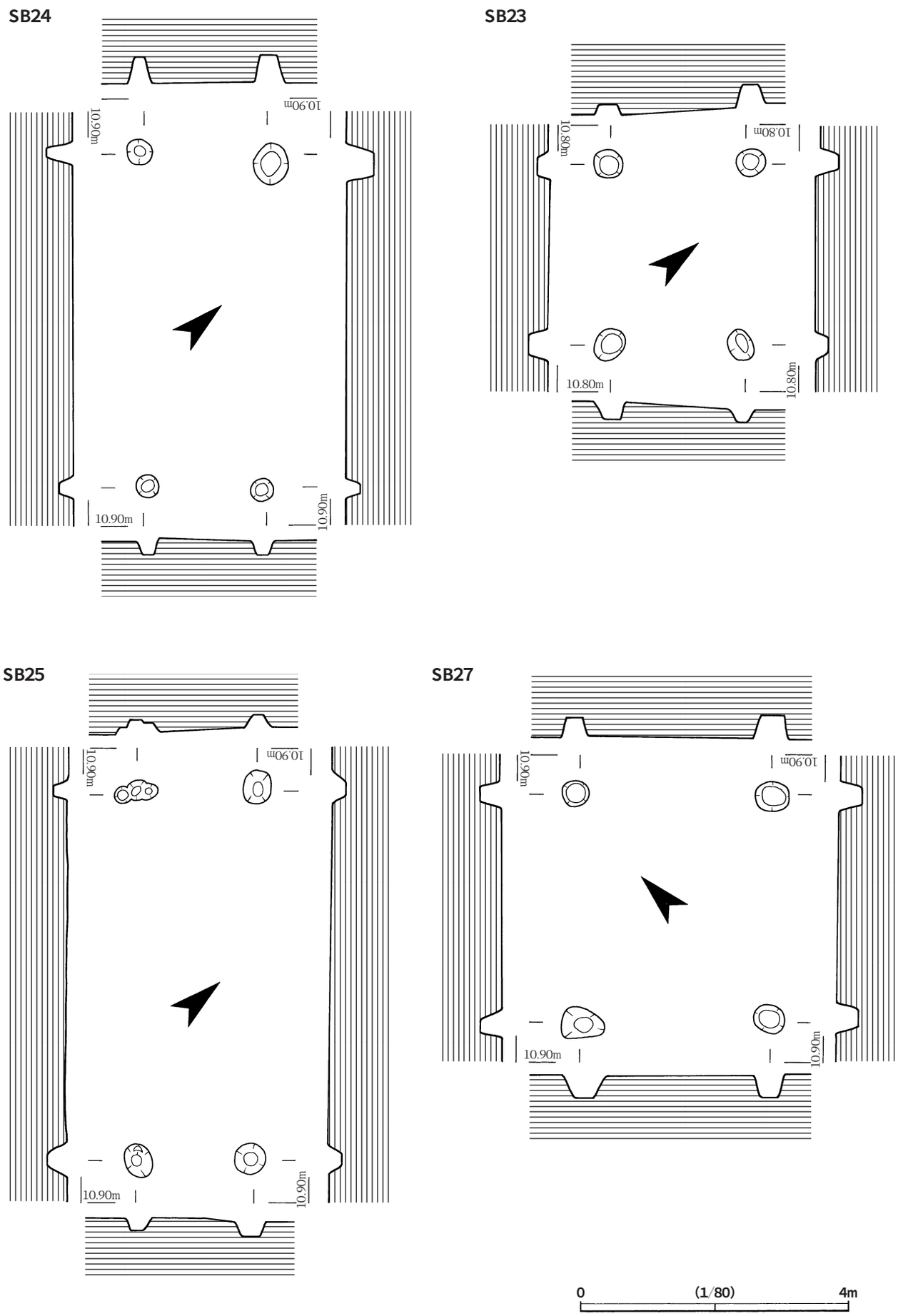
Ｂ区北半部東側に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ50°Ｗ。建物規模は桁行5.04ｍ×梁行1.84ｍ、床面積約9.3㎡である。柱穴の直径は36～62㎝で、深さは22～40㎝である。ＳＰ95から出土した土師器片や瓦質土器片から、建物の時期は中世と比定される。

ＳＢ23（第９図）

Ｂ区北半部東側に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ51°Ｗ。建物規模は桁行2.72ｍ×梁行



第８図　掘立柱建物跡実測図(1)



第９図　掘立柱建物跡実測図(2)

2.04ｍ、床面積約5.5㎡である。柱穴の直径は44～52㎝で、深さは21～35㎝である。ＳＰ105から出土した土師器片から、建物の時期は中世か。

ＳＢ25（第９図）

Ｂ区北半部東側に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ50°Ｗ。建物規模は桁行5.56ｍ×梁行1.76ｍ、床面積約9.8㎡である。柱穴の直径は30～50㎝で、深さは17～21㎝である。棟方向や建物規模がほぼＳＢ24と同じであることから、この２棟の建物はほぼ同時期の所産である可能性が高いと考えられる。

ＳＢ27（第９図）

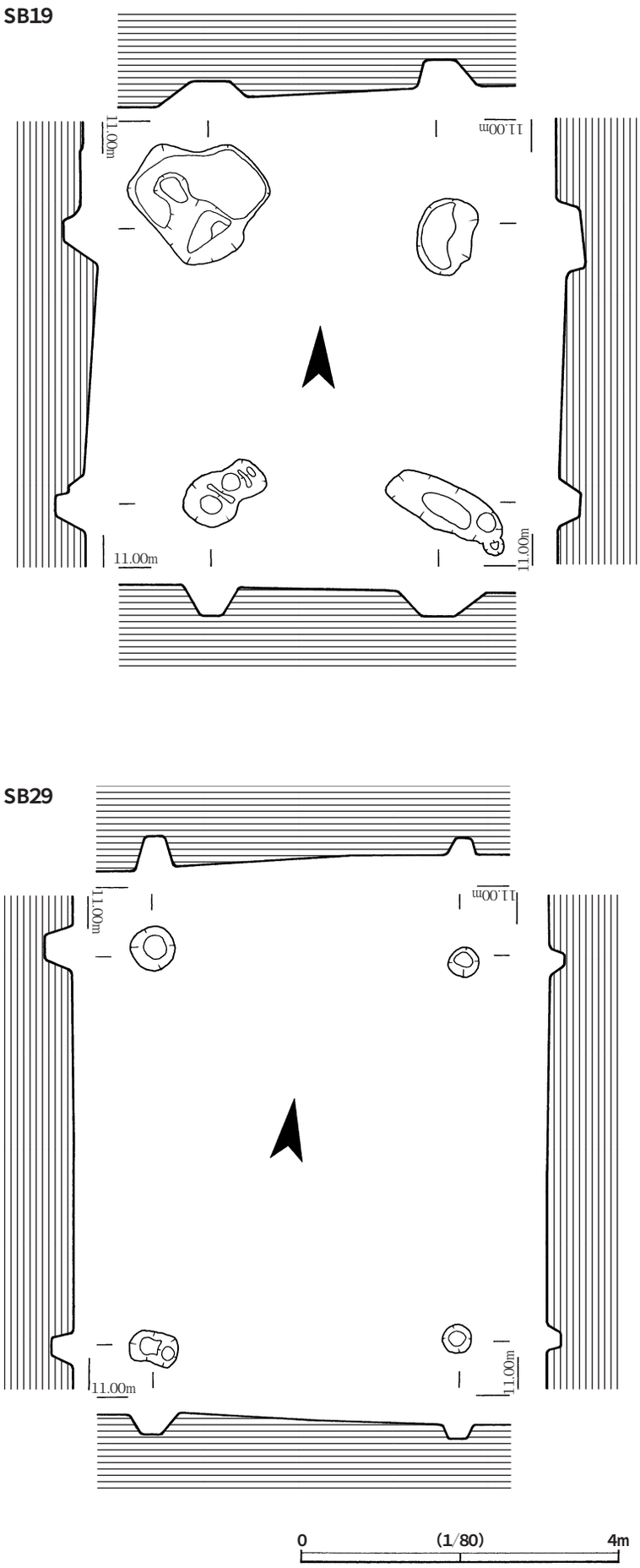
Ｂ区北半部東側に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ47°Ｗ。建物規模は桁行3.40ｍ×梁行2.88ｍ、床面積約9.8㎡である。柱穴の直径は40～64㎝で、深さは32～42㎝である。ＳＰ96から出土した土師器片から、建物の時期は中世か。

ＳＢ19（第10図、図版６）

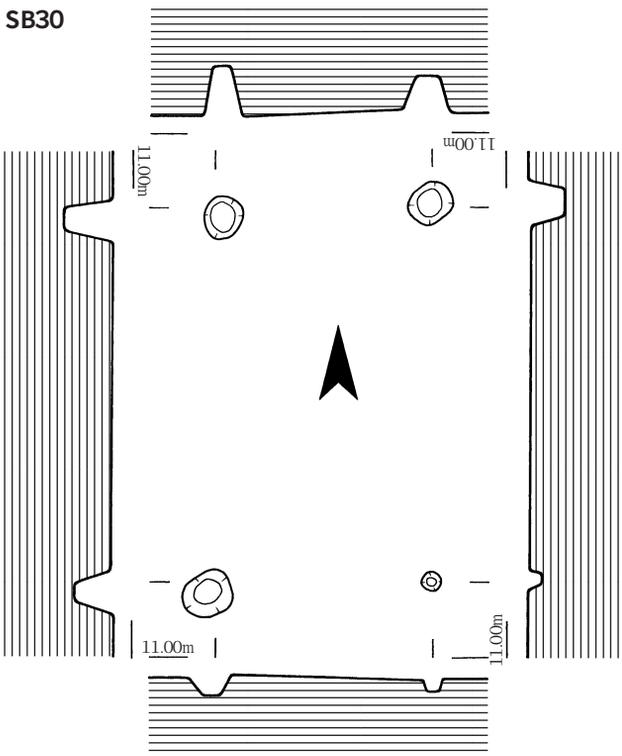
Ｂ区南半に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ４°Ｗ。建物規模は桁行3.52ｍ×梁行2.88ｍ、床面積約10.1㎡である。柱穴の直径は44～50㎝で、深さは20～32㎝である。建物を構成している柱穴はそれぞれＳＫ13、14、17、18の埋土を掘り込んでいる。ＳＫ13、14、17、18から出土した土師器片の形式から建物の時期は中世か、あるいはそれ以降と考えられる。

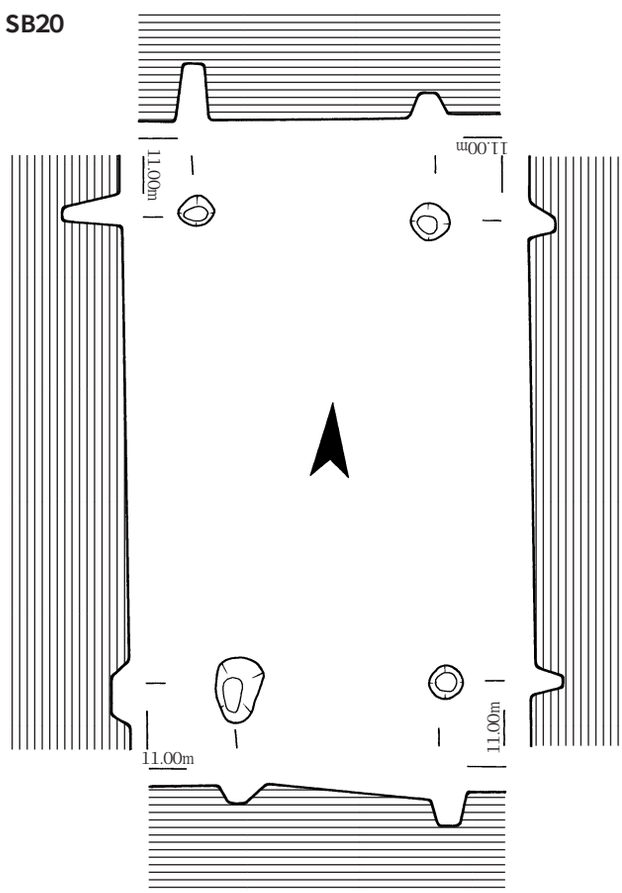
ＳＢ29（第10図）

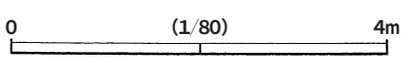
Ｂ区南半に位置する１間×１間の



第10図　掘立柱建物跡実測図(3)







第11図　掘立柱建物跡実測図(4)

建物で、棟方向はＮ９°Ｗ。建物規模は桁行4.92ｍ×梁行3.88ｍ、床面積約19.1㎡である。柱穴の直径は38～60㎝で、深さは16～35㎝である。時期が判定できるような遺物は出土していない。

ＳＢ30（第11図）

Ｂ区南半に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ３°Ｗ。建物規模は桁行4.00ｍ×梁行2.28ｍ、床面積約9.1㎡である。柱穴の直径は22～56㎝で、深さは14～53㎝である。ＳＰ69、89から出土した土師器片から、建物の時期は中世と考えられる。

ＳＢ20（第11図、図版６）

Ｂ区南半に位置する１間×１間の建物で、棟方向はＮ３°Ｗ。建物規模は桁行4.96ｍ×梁行2.56ｍ、床面積約12.7㎡である。柱穴の直径は34～70㎝で、深さは19～65㎝である。ＳＰ110から出土した土師器片から、建物の時期は中世か。

③　土坑（第12～18図、図版７～９）

今回の調査で36基の土坑が確認された。検出された土坑の多くは遺存状態が不良で、上面がかなり削平を受けているものと考えられる。調査区別に見ると、Ａ区が16基、Ｂ区が14基、Ｃ区が６基で、Ａ区とＢ区に土坑は集中していた。平面形は円形が３基、長円形が18基、不整形が15基で、長円形が最も多かった。

ＳＫ35（第12図、図版７）

Ａ区西側ＳＢ８の南西に位置する。不整形で、規模は長軸445㎝、短軸234㎝、深さは約72㎝。埋土は黒褐色粘質土の単層である。弥生土器の壺（74・75）や甕（77～80）等が出土しており、弥生時代前期末～中期後半の遺構と考えられる。

第１表　掘立柱建物跡一覧表

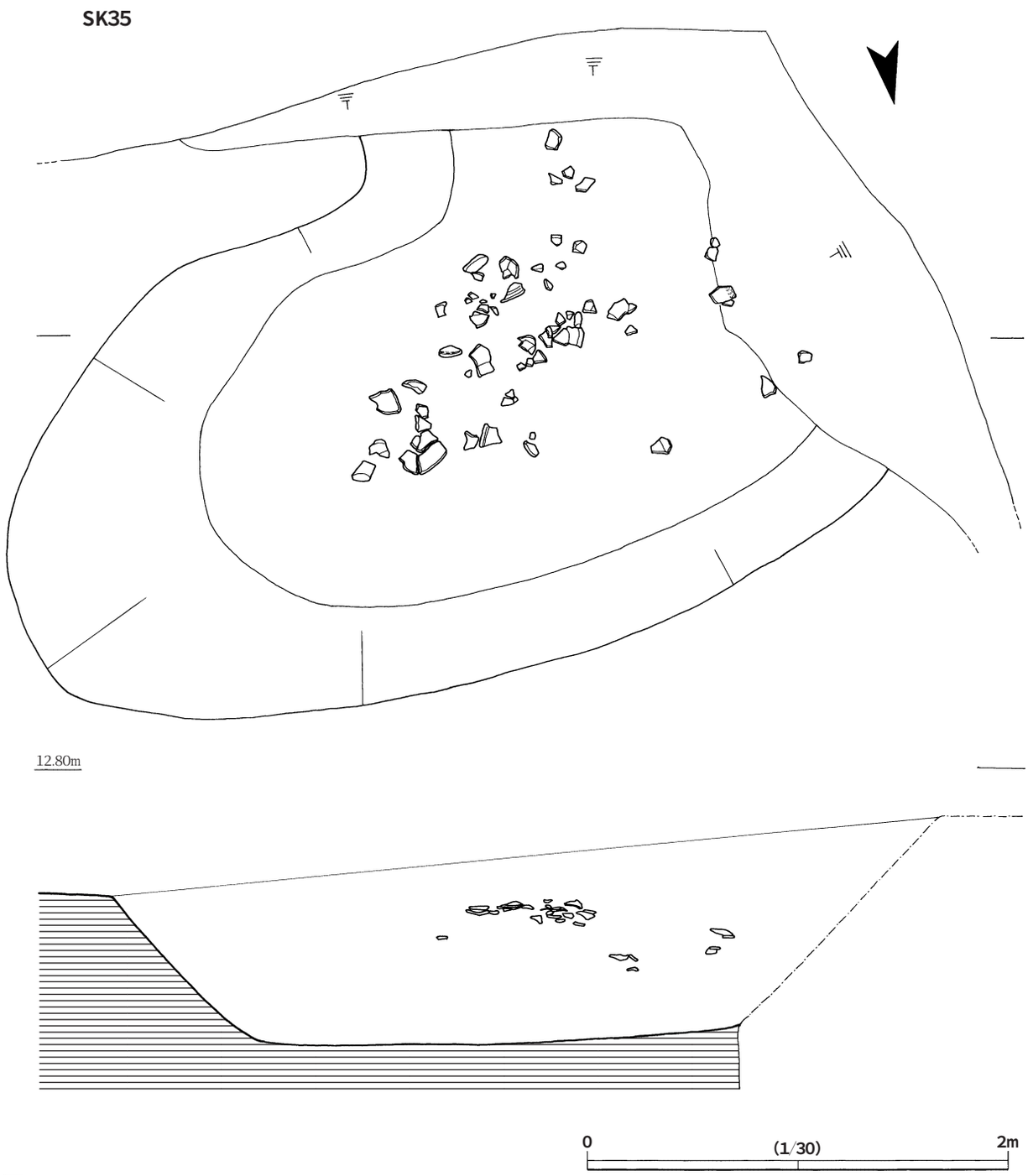
遺構番号	地区	規模(間)	棟方向	柱間 桁行 建物の南西隅から(m)	柱間 梁行 建物の南西隅から(m)	出土遺物	時期	備考
ＳＢ11	A	１×１	N79°W	4.06	2.60			
ＳＢ12	A	１×１	N78°W	2.88	2.76			
ＳＢ13	A	１＋α×１	N３°W	1.64＋α	2.34			
ＳＢ14	A	１＋α×１	N３°W	3.46＋α	2.30			
ＳＢ15	A	１＋α×１	N70°W	2.94＋α	2.26	土師器片	中世	
ＳＢ16	B	１×１	N８°W	4.00	3.10			
ＳＢ17	B	２×１	N16°E	4.72(2.40,2.32)	2.24	弥生土器片	弥生時代	
ＳＢ18	B	１×１	N14°E	4.32	1.52	土師器片	中世	
ＳＢ19	B	１×１	N４°W	3.52	2.88	土師器片	中世	
ＳＢ20	B	１×１	N３°W	4.96	2.56	土師器片	中世	
ＳＢ21	B	１×１	N３°E	3.92	3.00	土師器片	中世	
ＳＢ22	D	１×１	N40°E	2.00	1.60	土師器片	古墳時代	
ＳＢ23	B	１×１	N51°W	2.72	2.04	土師器片	中世	
ＳＢ24	B	１×１	N50°W	5.04	1.84	土師器片・瓦質土器片	中世	
ＳＢ25	B	１×１	N50°W	5.56	1.76			
ＳＢ26	B	１×１	N40°E	4.38	2.76	土師器片	中世	
ＳＢ27	B	１×１	N47°W	3.40	2.88	土師器片	中世	
ＳＢ28	B	２×１	N19°E	4.60(2.12,2.48)	2.20			
ＳＢ29	B	１×１	N９°W	4.92	3.88			
ＳＢ30	B	１×１	N３°W	4.00	2.28	土師器片	中世	

ＳＫ26（第13図、図版８）

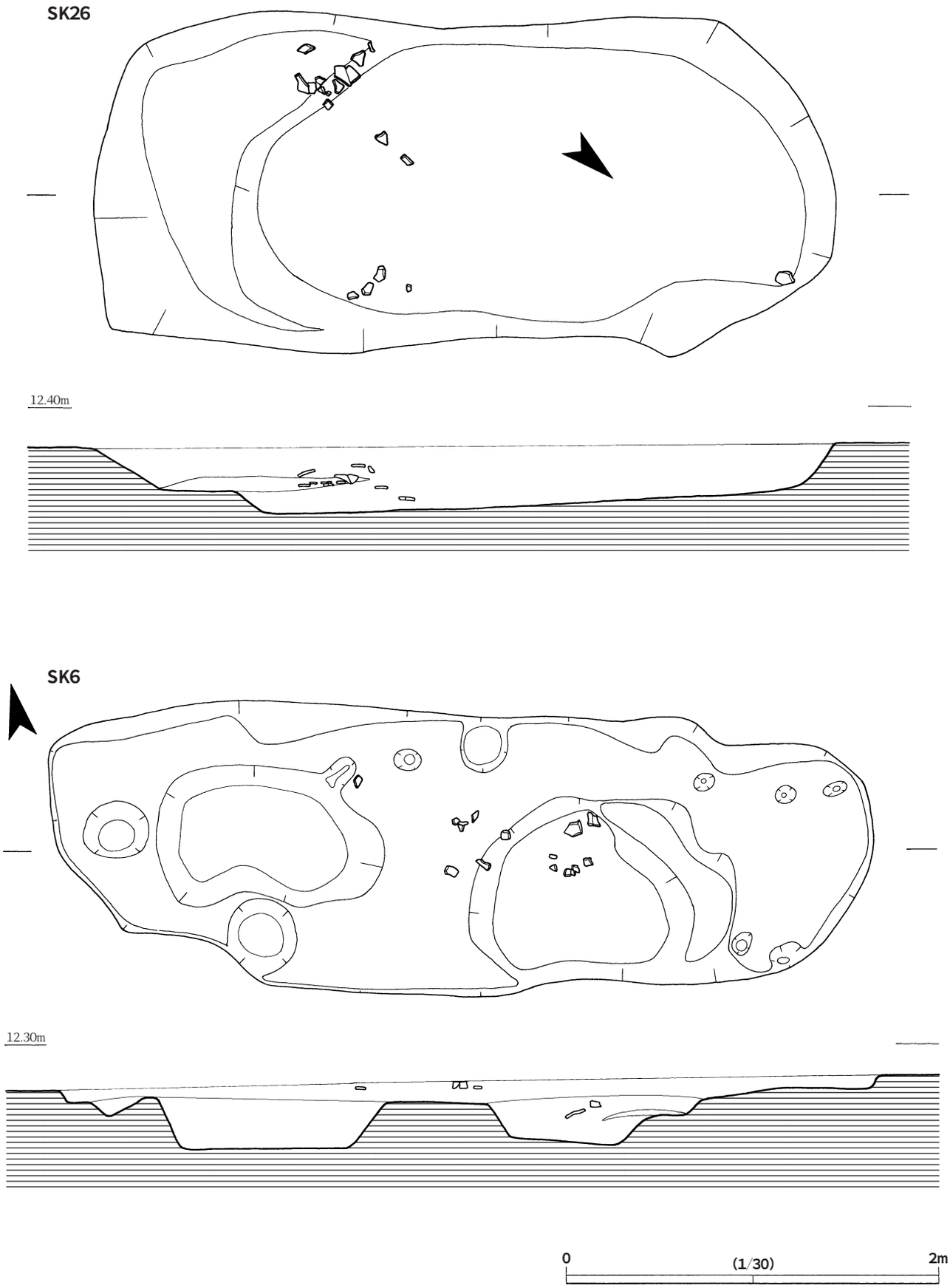
Ａ区南半部東側でＳＢ７の南西に位置する。長円形で、規模は長軸399㎝、短軸183㎝、深さは約38㎝。埋土は３層に分かれ、上層は褐灰砂質土、中層は暗灰質粘質土、下層は黒褐色粘質土である。弥生時代中期初頭と比定される壺や甕が出土している。

ＳＫ６（第13図、図版７）

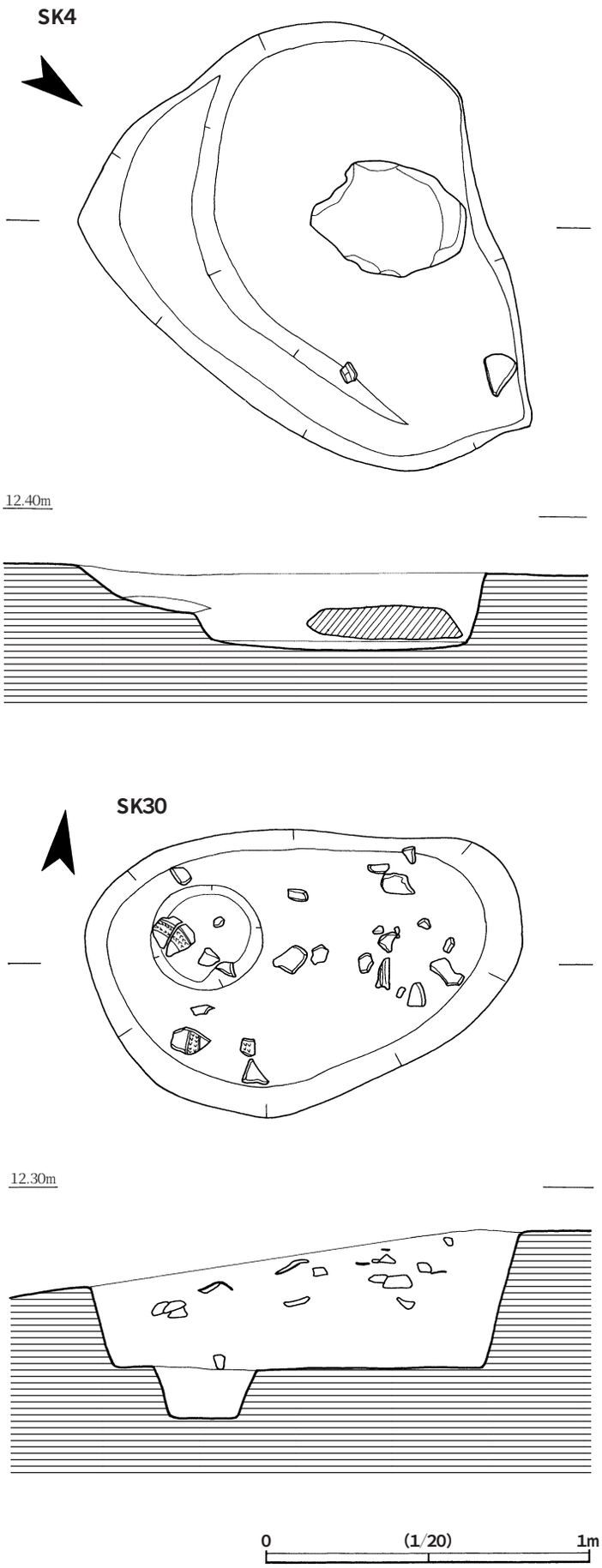
Ａ区中央部に位置する。不整形で、規模は長軸436㎝、短軸156㎝、深さは約34㎝。埋土は灰黄褐色粘質土の単層である。捏ね鉢（48）が出土しており、中世の遺構と考えられる。



第12図　ＳＫ35実測図



第13図　ＳＫ26・６実測図



第14図　ＳＫ４・30実測図

ＳＫ４（第14図、図版７）

Ａ区中央部に位置する。不整形で、規模は長軸146㎝、短軸123㎝、深さは約23㎝。埋土は灰褐色粘質土の単層である。中央部に作業台とみられる扁平な礫石が置かれていた。土師器の皿（47）等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ30（第14図、図版７）

Ａ区西側でＳＢ８の北東に位置する。長円形で、規模は長軸132㎝、短軸90㎝、深さは約48㎝。埋土は黒褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕（67）や壺（68）等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

ＳＫ１（第15図、図版８）

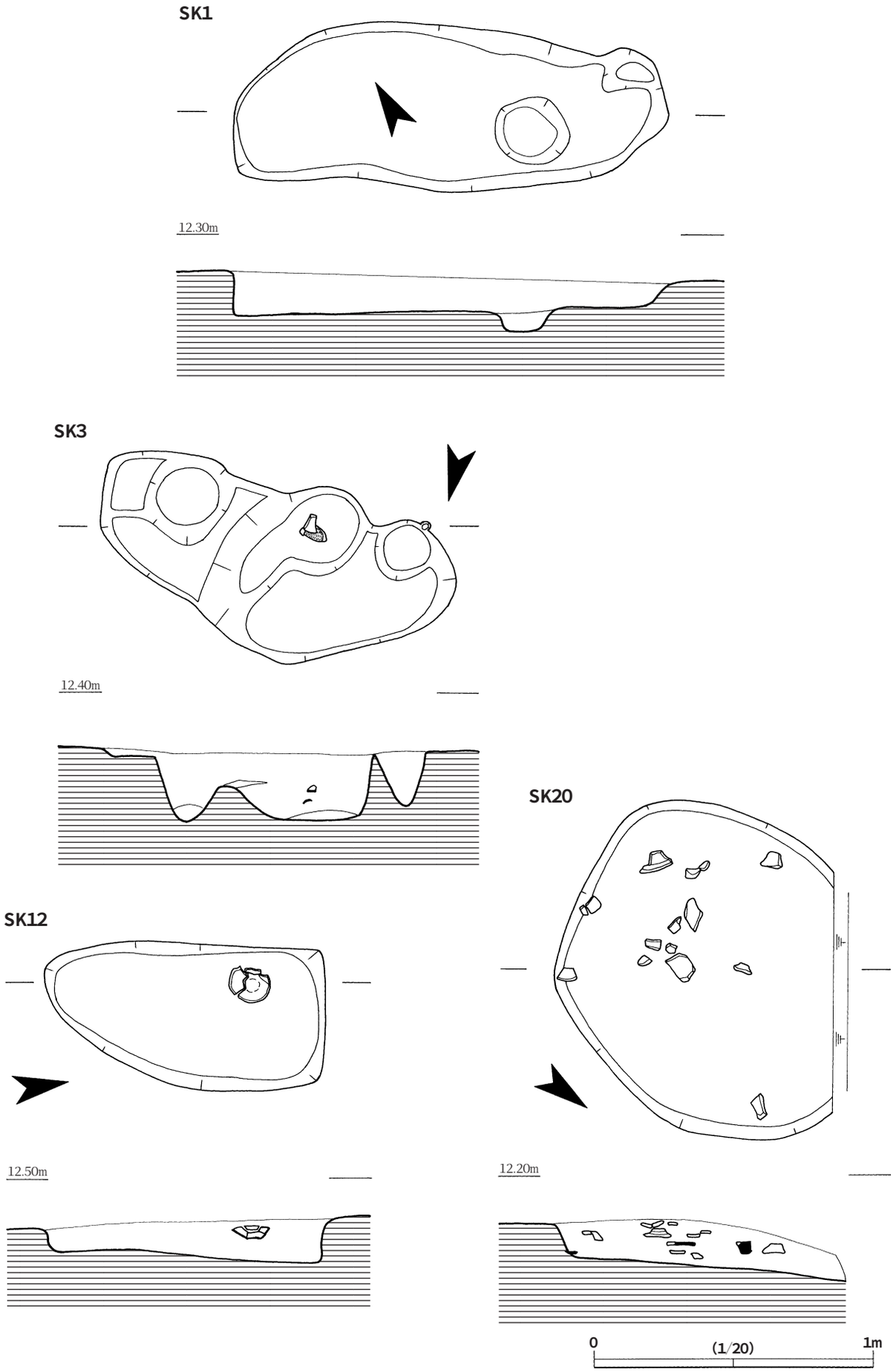
Ａ区中央部でＳＢ４の南西側に位置する。長円形で、規模は長軸155㎝、短軸62㎝、深さは約20㎝。埋土は褐灰色粘質土の単層である。弥生土器の甕（44）等が出土しており、弥生時代中期の遺構と考えられる。

ＳＫ３（第15図、図版７）

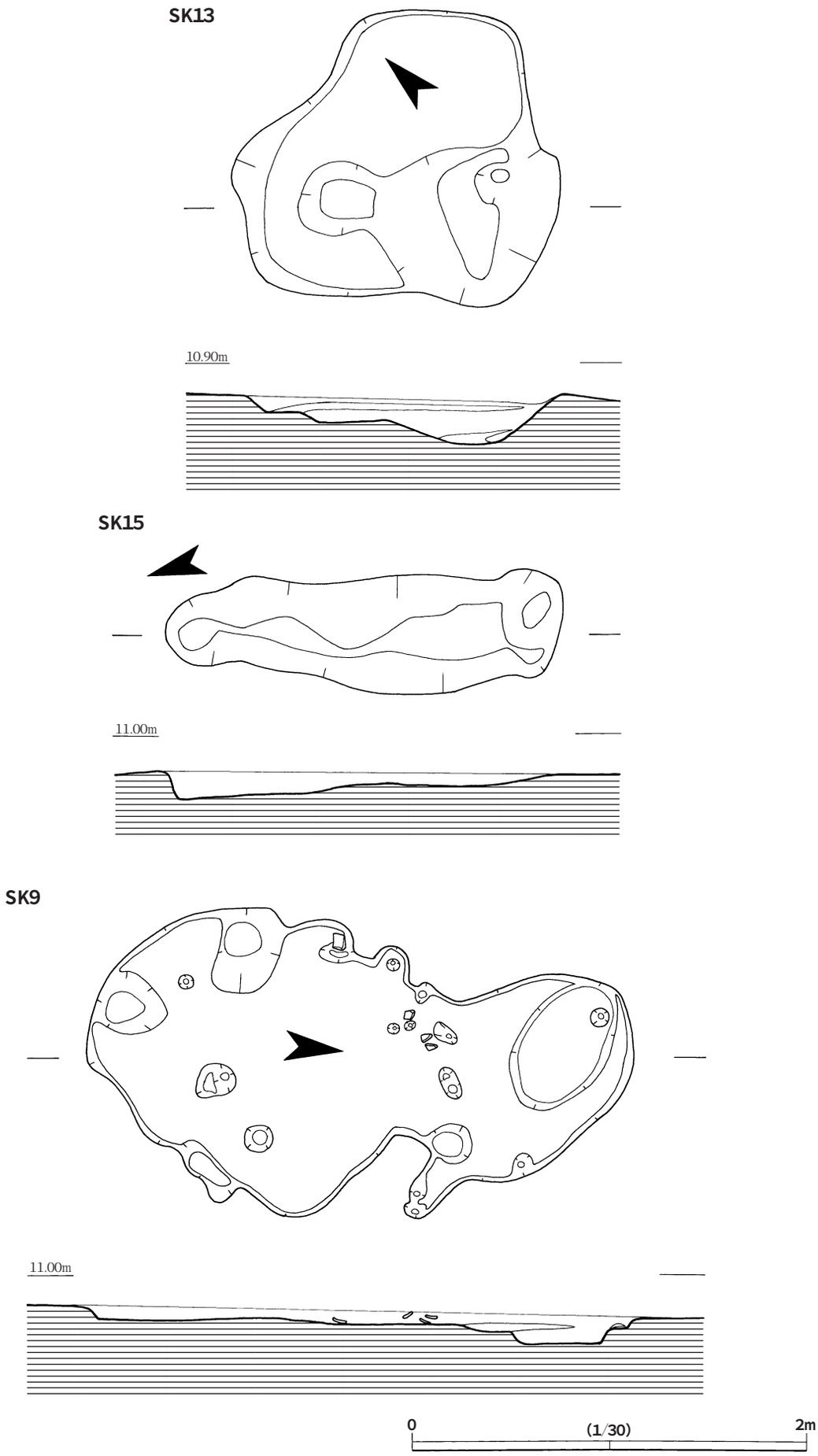
Ａ区中央部に位置する。不整形で、規模は長軸132㎝、短軸66㎝、深さは約24㎝。埋土は褐灰色粘質土の単層である。土師器の椀（45・46）等が出土しており、12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＫ12（第15図、図版８）

Ａ区中央部に位置する。長円形で、規模は長軸100㎝、短軸52㎝、



第15図　ＳＫ１・３・12・20実測図



第16図　ＳＫ13・15・９実測図

深さは約15㎝。埋土は暗灰黄色粘質土の単層である。後世の水田化のために上部が削平されている。土師器の杯（50）が出土しており、12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＫ20（第15図、図版６）

Ａ区東側でＳＢ７の中で検出された長円形の土坑で、上部はＳＢ７に切られている。規模は長軸130㎝、短軸106㎝、深さは約16㎝。埋土は暗褐色粘質土の単層である。弥生土器（53・54）等が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

ＳＫ13（第16図）

Ｂ区南半部に位置する。不整形で、規模は長軸165㎝、短軸144㎝、深さは約32㎝。埋土は黒褐色粘質土の単層である。土師器の杯（51）等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ15（第16図）

Ｂ区南半部に位置する。不整形で、規模は長軸198㎝、短軸63㎝、深さは約14㎝。埋土は褐灰色砂質土の単層である。土師器の皿（52）等が出土しており、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ９（第16図、図版９）

Ｂ区北半部西側に位置する。不整形で、規模は長軸274㎝、短軸152㎝、深さは約14㎝。埋土は褐灰色砂質土の単層である。弥生土器の甕（49）等が出土しており、弥生時代前期末の遺構と考えられる。

ＳＫ27（第17図、図版８）

Ｂ区北半部西側でＳＢ６の北東に位置する。不整形で、規模は長軸240㎝、短軸128㎝、深さは約22㎝。埋土は褐灰色粘質土の単層である。弥生土器の壺や甕（55～66）等が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

ＳＫ33（第17図、図版９）

Ｃ区北半部西側に位置する。長円形で、規模は長軸113㎝、短軸84㎝、深さは約12㎝。埋土は黒褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕（69～71）等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

ＳＫ34（第17図、図版９）

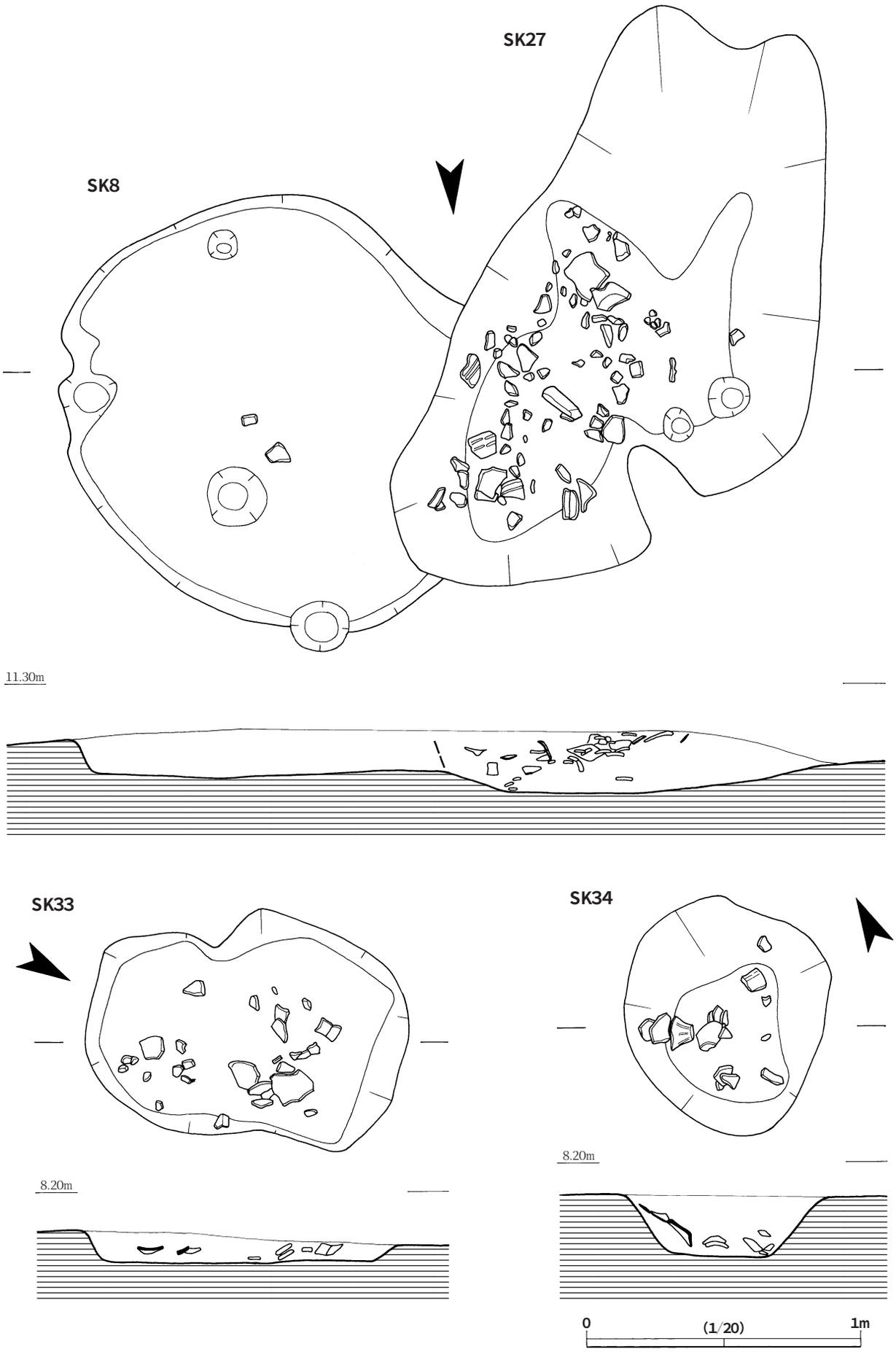
Ｃ区中央部西側に位置する。長円形で、規模は長軸88㎝、短軸73㎝、深さは約22㎝。埋土は灰黄褐色粘質土の単層である。弥生土器の甕（72）等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

ＳＫ36（第18図）

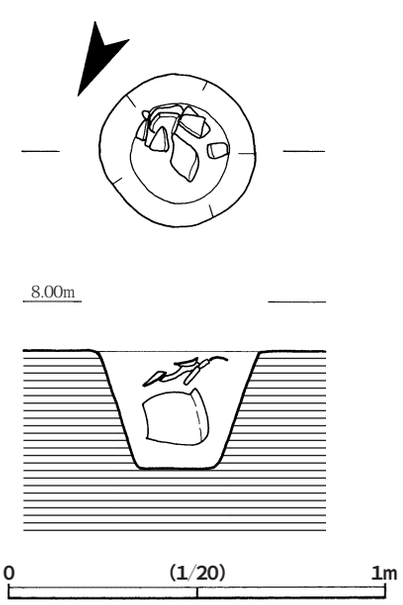
Ｃ区中央部西側に位置する。円形で、規模は長径42㎝、短径40㎝、深さは約32㎝。埋土は褐灰色粘質土の単層である。弥生土器の甕（84）等が出土しており、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

④　埋甕遺構（第19図、図版９）

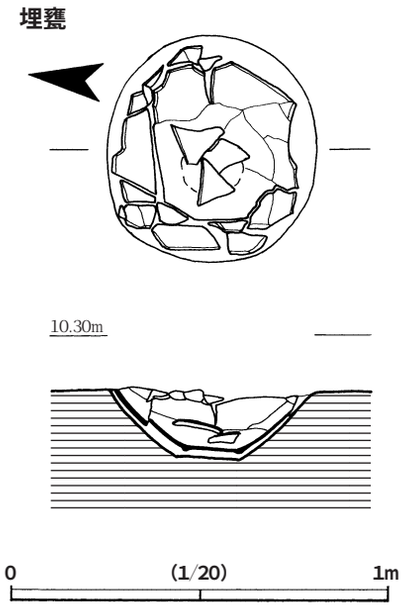
Ｂ区南半部東側に位置する。楕円形で規模は直径約50㎝、深さ15㎝。甕本体は瓦質焼成である。削平により口縁～胴部は失われている。埋納遺物はなく、用途も明確ではないが、中世の終わり～近世の遺構と考えられる。



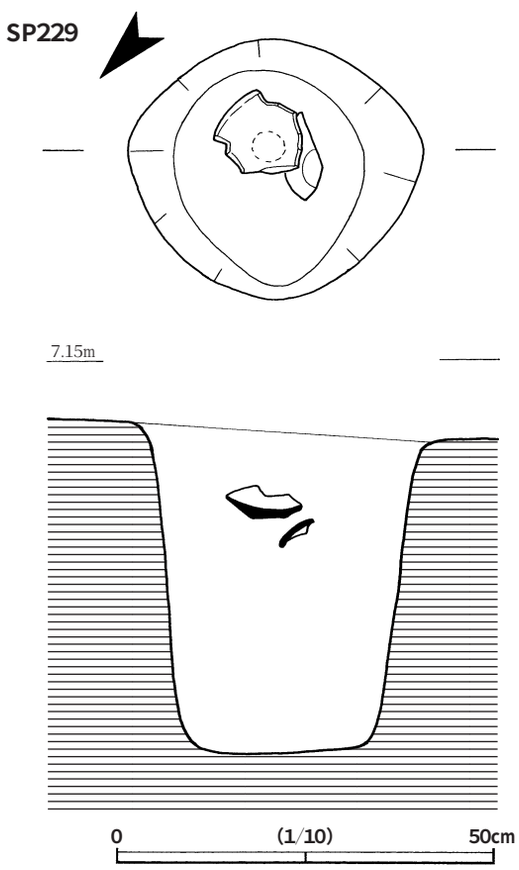
第17図　ＳＫ８・27・33・34実測図



第18図　ＳＫ36実測図



第19図　埋甕遺構実測図



第20図　ＳＰ229実測図

⑤　柱穴

今回の調査によって検出された柱穴は約600個で、そのうち遺物を含むものが231個であった。

ＳＰ229（第20図、図版９）

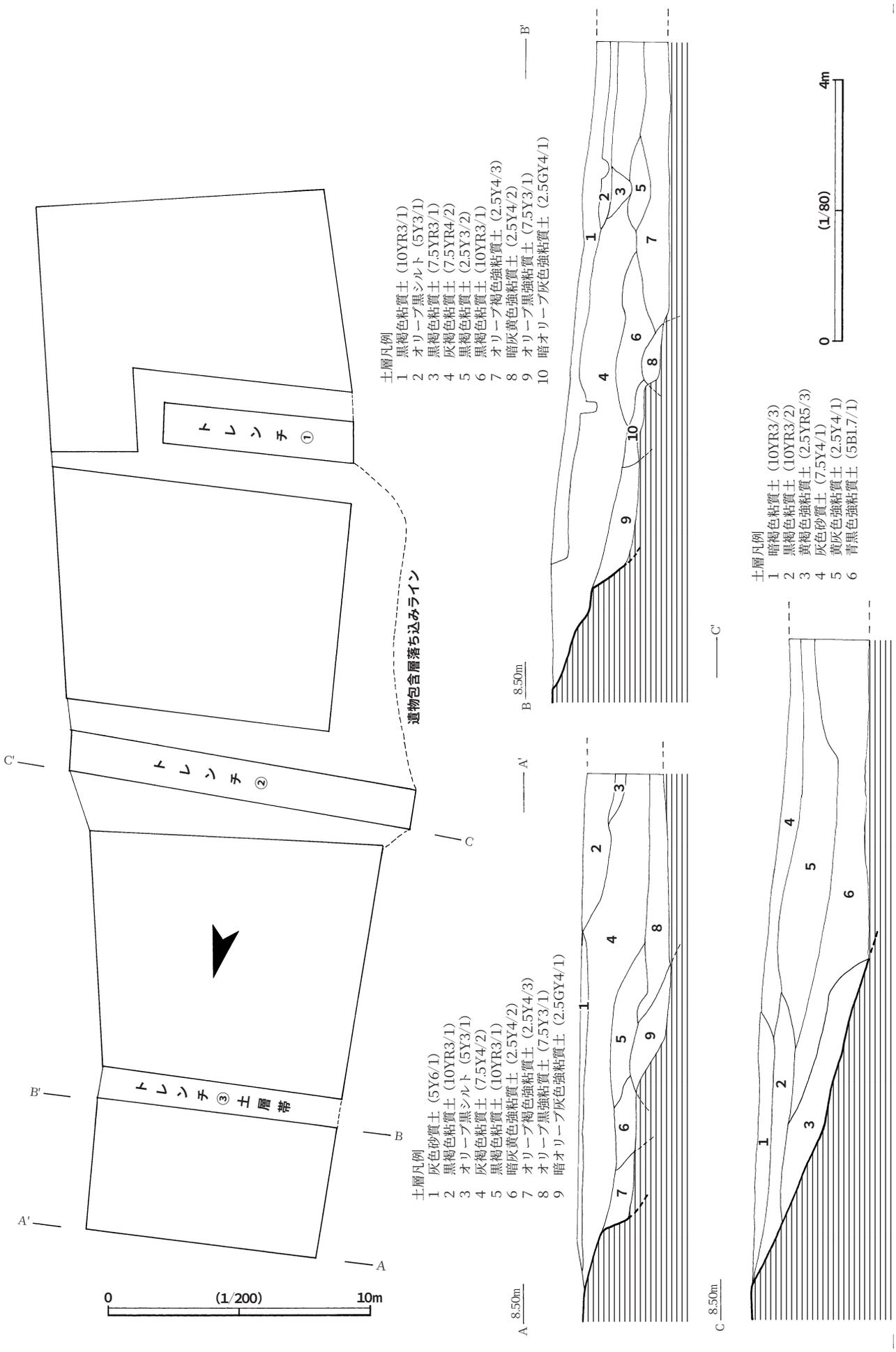
Ｃ区北半部東側に位置する。円形で、直径約40㎝、深さ約45㎝。良好な状態で土師器の杯（91～93）や緑釉陶器の椀（94）が出土しており、10～11世紀の遺構と考えられる。

⑥　遺物包含層（第21図、図版９、10）

Ｃ区とＤ区で遺物包含層を確認した。

Ｃ区は粟野川と宮迫川沿いに発達した自然堤防の背後の低地である。Ｃ区遺物包含層は地形的には南西方向から北東方向に緩やかに傾斜しながら延びる谷状の落ち込みに堆積した包含層である。現在の粟野川の左岸に隣接しており、北東方向に落ち込む地形は、河岸や水辺に連なっていく斜面と考えられる状況にある。この遺物包含層下の地山面を確認するためのトレンチを重機で掘削したが、地山面が急激に落ち込んでおり、トレンチ②では、包含層落ち込みラインから東へ約5.0ｍ、深さ1.6ｍまでしか地山面を確認することができなかった。

土器の出土状況についてみてみると、Ｃ区遺物包含層の北半西側上層では、古墳時代の高坏、小型



第21図　C区遺物包含層土層図

丸底土器、ミニチュア土器等の祭祀にかかわる土器が多量に廃棄された状況が検出された。また、その下層からも、弥生時代前期末の壺や甕の原形をとどめる土器片がまとまって検出され、その中に石剣も確認された。祭祀に使用された土器が一括廃棄されたものと判断される。

遺物包含層の北半東側上層では、須恵器、土師器、製塩土器、緑釉陶器、輸入磁器、土錘等が出土し、中層からは弥生時代後期～古墳時代前半の土器が出土した。中層では山陰系の土器がみられた。また、下層からは弥生時代前期末～中期の土器が多量に出土し、北部九州系や瀬戸内系の土器もみられた。トレンチ①からは、弥生時代中期、北部九州だけで埋葬用として使われた甕棺の破片や丹塗り壺の土器片も出土している。

Ｄ区遺物包含層は黒褐色粘質土が厚さ40～50㎝ほど、竪穴住居跡や柱穴等の遺構を覆う状態でＤ区全体に堆積していた。主な出土遺物は縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器である。

⑵　遺物

1　竪穴住居跡出土土器（第22・23図、図版11～14）

ＳＢ１（1・2）　1・2は弥生土器甕の口縁部である。1は如意形口縁、2はくの字口縁である。ともに混入品と考えられる。

ＳＢ２（3）　3は土師器高杯である。杯底部と脚柱の接合部が残存する。

ＳＢ３（4）　4は甕形土器の底部で、上げ底である。

ＳＢ４（5）　5は山陰系の複合口縁の土器である。口縁部は外反する。

ＳＢ５（6～11）　6～8・10は甕形土器の口縁部である。6・7は口縁部がくの字状に屈曲し、7は跳ね上げ口縁である。8は鋤形口縁の甕形土器の口縁部である。10はくの字状に屈曲する口縁をもつ土師器の甕形土器である。胴部は大きく張ると思われる。9は複合口縁壺の口縁部である。11は甕形土器の底部で、平底である。

ＳＢ６（12）　12は甕形土器の口縁部である。口縁端部はやや跳ね上げ気味である。

ＳＢ７（13～25）　13・14は土師器高杯で、床面より出土した。13は杯部が稜線によって口縁部と体部に分かれる有稜高杯である。口縁部は直線的に外側に開き、脚部は円錐状に緩やかに開く。接合には充填技法が用いられていると考えられる。14は杯底部と脚柱部が残存する。以下は埋土より出土した弥生土器である。15は如意形口縁の甕形土器である。口縁端部に刻目を施し、口縁直下には1条沈線が確認できる。16・17は内折口縁をもつ壺形土器である。16は口縁部外面にヘラ状工具による2条沈線を施し、注口状の内面凸帯が巡る。18は逆Ｌ字口縁の鉢形土器である。口縁部上面にヨコナデによる平坦面をつくる。19は壺形土器の口縁部である。口唇部をやや拡張させる。20は壺形土器の口縁部である。21は鋤形口縁の高杯形土器の口縁部である。口縁部上面はほぼ水平で、内面の突出は弱い。22・23は甕形土器の口縁部である。22はくの字口縁で、23は跳ね上げ口縁である。24・25は甕形土器の底部である。ともに平底である。

ＳＢ８（26～35）　26～30は甕形土器の口縁部である。26・27は口縁部がくの字状に屈曲し、外面にハケ目痕が残る。28・29は跳ね上げ口縁を呈し、28は口縁直下に三角凸帯、29には押圧凸帯が巡る。30は鋤形口縁である。口縁部上面はほぼ水平で、内面の突出がみられ、口唇部はコの字状に仕上げられている。須玖Ⅱ式段階に位置付けられると考える。31は瀬戸内系の無頸壺ないし脚付鉢の口縁部と思われる。外面には頂部に刻目のある凸帯を施す。口縁部上面は内傾し、内面突出がみられる。32～35は甕形土器の底部で、いずれも平底である。26～35は弥生時代中期後半の所産である。

ＳＢ９（36～40）　36は小型丸底土器で、やや内湾気味に外側に開く口縁部をもつ。37は山陰系の鼓形器台である。やや外反気味に外側に開く。器面が磨滅しており、受部か脚部かは不明である。38は壺形土器の胴部である。粗雑な縦横方向の貝殻羽状文を施す。それらを区切る縦方向の2条貝殻沈線がみられる。内外面ともハケ調整であるが、外面にはミガキ調整が加えられている。39は内折口縁の壺形土器である。口縁部外面にハケ状工具による2条沈線が巡る。40は跳ね上げ口縁の甕形土器の口縁部である。38～40の弥生土器は混入品であろう。

ＳＢ10（41～43）　41は壺形土器の口縁部である。口縁部外面に3条1組の櫛状工具による斜線文を施す。42は口縁部が緩やかに外湾して開く甕形土器である。外面にハケ目痕がみられる。43は甕形

土器の底部である。やや凸レンズ状を呈す。

2　土坑出土土器（第23・24図、図版13～16）

ＳＫ１（44）　44は甕形土器の口縁部である。くの字状に屈曲する。

ＳＫ３（45・46）　45・46は土師器椀である。底部に断面三角形の高台を付す。底部外面の切り離し痕は不明である。

ＳＫ４（47）　47は土師器皿である。底部外面の切り離し痕は不明である。

ＳＫ６（48）　48は土師質の捏ね鉢である。内面にはハケ目が残る。外面のハケ目はナデ消されている。

ＳＫ９（49）　49は甕形土器の口縁部である。如意形口縁を呈する。

ＳＫ12（50）　50は土師器杯である。器壁が薄く、体部がやや内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕がみられる。

ＳＫ13（51）　51は土師器杯の底部である。底部切り離しは回転糸切りによる。

ＳＫ15（52）　52は土師器皿である。底部外面の切り離し痕は不明である。

ＳＫ20（53・54）　53は高杯形土器の口縁部と思われる。鋤形口縁で、口唇部はコの字状に仕上げられている。内面突出は断面三角形である。54は甕形土器の底部で、平底である。

ＳＫ27（55～66）　55～59は甕形土器の口縁部である。55は逆Ｌ字口縁を、56～59はくの字口縁である。また、58・59は口縁端部を跳ね上げる。56～58の口縁下には１条の三角凸帯を付す。60は壺形土器の口縁部である。口縁部外面には円形浮文を付す。口縁部上端には押圧凸帯、内面に注口状の貼付凸帯を施す。61は口縁部がやや垂下する壺形土器の口頸部である。口縁部は大きく開き、外反する。垂下部に５条１組の櫛状工具による山形文が認められる。頸部には４条の三角凸帯が巡る。62・63は須玖式系の壺形土器と考えられる。62は胴部で２条の稜角付凸帯を付す。63は肩部で３条の三角凸帯が確認できる。64は壺形土器の口縁部である。垂下口縁を呈し、垂下部にはヘラ描山形文が施されている。65は壺形土器の口縁部である。長頸広口壺である。66は壺形土器の底部である。器壁はやや厚く、平底である。これらは弥生時代中期に属する土器である。

ＳＫ30（67・68）　67は甕形土器の口縁部である。如意形を呈する。68は有段口縁壺である。肩部には貝殻羽状文が施され、羽状文の上に１条ヘラ描沈線が、下に２条ヘラ描沈線が巡る。体部は内外面ともハケ調整後、ミガキ調整が行われていると思われる。

ＳＫ33（69～71）　69～71は如意形口縁の甕形土器である。69は口縁下に２条のヘラ描沈線がみられる。70の口唇部には刻目を施し、口縁下には２条のヘラ描沈線が巡る。71は胴部がやや張る。口唇部には刻目を有し、口縁下には３条のヘラ描沈線が巡る。

ＳＫ34（72）　72は甕形土器である。平底の底部より体部はやや内湾気味に立ち上がる。如意形口縁で、口縁下には１条のヘラ描沈線を有す。

ＳＫ35（73～83）　73は縄文土器の口縁部である。縄文時代前期、曽畑式の深鉢形土器で、滑石が多く混入する。内外面には列点刺突文が施されている。曽畑式Ⅰ期～Ⅱ期に位置付けられる。74は壺形土器の肩部である。ヘラ描の有軸羽状文が施され、その上に段が確認できる。内外面ともミガキ調整が行なわれている。75は壺形土器の胴部である。胴部最大径部に幅広の凸帯を付し、２条の貝殻沈

線文の間に竹管文を施す。その直上には縦方向の貝殻羽状文と貝殻木葉文が確認できる。76は無頸壺である。胴部が張り、逆L字状の口縁を付ける。77～83は甕形土器の口縁部である。77～80・83は内面突出が明瞭な鋤形口縁を呈する。79・80は口縁端部が垂下する。77・78・80・83には口縁下に三角凸帯が認められる。81は口縁部が内湾して立ち上がる。82はくの字口縁の甕形土器で胴部が張る。73の縄文土器は混入品で、74～83の弥生土器が遺構に伴うものと考える。

ＳＫ36（84）　84は甕形土器である。平底の底部より体部はやや内湾気味に立ち上がる。胴部はやや張り、最大径は中位よりやや上方にある。口唇部に刻目を施し、口縁下に１条のヘラ描沈線が巡る。

埋甕遺構（85）　85は瓦質の大甕である。内面には同心円状のタタキ目痕とハケ目痕が認められる。外面の調整痕はナデ消されている。

3　柱穴出土土器（第25図、図版16・17）

ＳＰ108（86）　86は白磁碗で、底部が欠損している。

ＳＰ110（87）　87は土師器杯である。体部がやや屈曲し、口縁部が開く。

ＳＰ130（88）　88は如意形口縁の弥生土器甕である。外面にハケ目痕、内面にミガキ痕が認められる。

ＳＰ131（89）　89は如意形口縁の弥生土器甕である。口唇部に刻目を施し、口縁下に１条のヘラ描沈線が巡る。内外面にハケ目調整が行われている。

ＳＰ142（90）　90は須恵器の杯身である。体部がほぼ直線的に立ち上がる。底部外面の回転ヘラ切り痕はナデ消されている。

ＳＰ229（91～94）　91～94は一括して出土した良好な資料である。91～93は土師器杯である。体部はほぼ直線的に立ち上がるが、93は口縁部が外反する。底部の切り離しは回転糸切りによる。94は緑釉陶器の椀である。底部の切り離し痕は不明で、低い高台を付す。胎土は橙色で、釉薬の遺存状態はよくない。

ＳＰ230（95）　95は土師器杯の底部である。底部の切り離しは回転糸切りによる。底部には断面三角形の高台を付す。

4　遺物包含層出土土器（第26～40図、図版17～36・40）

Ａ・Ｂ区遺物包含層出土土器（96～101）（第26図、図版17）

96は弥生土器甕の口縁部である。内外面にハケ目痕が認められる。97は弥生土器甕の底部である。上げ底で胴部との境がくびれる。98は土師器皿である。底部外面に回転糸切り痕を残す。99～101は土師器杯である。99は器高が約３㎝で、体部が直線的に外側へ大きく開く。底部外面には回転糸切り痕がみられる。100は体部がほぼ直線的に立ち上がる。底部外面の切り離し痕は不明である。101は体部がやや内湾気味に立ち上がる。

Ｃ区遺物包含層出土土器（第27～39図、図版17～34・40）

弥生土器（102～224）（第27～36図、図版17～28・40）

102～150は壺形土器である。

102・105・106は有段口縁壺である。102は肩部に段がみられ、４条のヘラ描沈線とヘラ描羽状文からなる文様帯を有す。口唇部平坦面には２条沈線を巡らす。106の頸部内面にはミガキの痕跡が認められる。103は壺形土器の胴部で肩部に段を有す。肩部文様帯には縦方向の４条ヘラ描沈線により区画されるヘラ描羽状文を施す。107は偏球形の胴部で最大径は中位にある。肩部には段を有し、縦横方向のヘラ描羽状文を巡らす。縦方向の２条ヘラ描沈線により区画される。頸部には縦方向の３条ヘラ描沈線が肩部より延びる。底部には１条のヘラ描沈線が巡る。103・107の外面にはハケ目痕やミガキ痕が残る。104は肩部に段を有し、ヘラ描有軸羽状文とヘラ描重弧文を施す。内面にはミガキ痕がみられる。

108・109は小型の壺形土器である。108は有段口縁壺である。肩部の段下に３条のヘラ描沈線を巡らす。口縁部には１箇所に穿孔がある。外面には胴部から底部にかけて明瞭な黒斑が認められる。109の肩部文様帯は貝殻羽状文と貝殻木葉文からなる。肩部の段は認められない。口縁部の内面凸帯は１箇所で切れる。110～112の壺形土器は肩部に段を確認できる。肩部文様帯は貝殻羽状文からなり、上下の沈線は二枚貝の腹縁によるものである。112は胴部最大径が上位にあり、羽状文帯の拡幅化がみられる。いずれも外面には丁寧なミガキ調整が施されている。113の肩部文様帯は貝殻羽状文で構成される。最下段は縦方向と横方向の羽状文からなる。内外面にはミガキ調整が行われている。114は胴部が張る有段口縁壺である。肩部に段を有し、文様帯は貝殻有軸羽状文、貝殻山形重弧文からなる。有軸羽状文は12単位で方向を変えると思われ、山形重弧文は基本的に３つの山形文と１つの重弧文が１単位となる。口唇部平坦面には２条の貝殻沈線が巡る。内外面とも丁寧なミガキ痕が残る。115は主文様帯である貝殻羽状文の下に貝殻山形文を施文する。頸部の沈線は多条化する傾向を示すが、肩部の段は残る。内外面ともハケ調整の後ミガキ調整が行なわれている。116・117は偏球形の胴部で最大径は中位にある。116の肩部には貝殻羽状文と貝殻山形重弧文が施されているが、114に比べ施文が粗雑である。肩部には段を有し、内外面に丁寧なミガキ痕が残る。117は器面が磨滅しており、文様の遺存状態はよくないが、貝殻重弧文が施され、さらにそれを区切る縦方向の貝殻沈線が確認できる。肩部の段の有無は不明である。118は肩部文様帯の上下にタテハケによる段が形成されている。無鋸歯の二枚貝腹縁による斜格子文が巡る。内外面ともハケ目痕が多くみられ、胴部外面に僅かにミガキ痕が認められる。119～127は肩部または胴部である。文様帯には貝殻有軸羽状文（119）、貝殻有軸羽状文と貝殻鋸歯文の組み合わせ（120）、貝殻羽状文と貝殻山形重弧文の組み合わせ（121・122）や貝殻羽状文と貝殻木葉文、貝殻重弧文の組み合わせ（124）がある。123には刺突文と貝殻木葉文が確認できる。125の肩部文様帯には上から貝殻斜格子文、貝殻重弧文が施される。126は肩部に三角凸帯を付し、その直上に２条、直下に３条の刺突文が巡る。さらにその下に貝殻羽状文が確認できる。127には縦方向のハケ目調整がなされ、さらに横方向に５条１組の櫛描直線文が施される。119・123・124・125は肩部に段を確認できる。128は壺形土器の口縁部である。朝顔形に大きく開く。口縁部上面に肥厚帯を付し、ヘラ描鋸歯文が巡る。129は壺形土器である。胴部最大径部に幅広の凸帯を付し、３条のヘラ描沈線が巡る。胴部上半全体が文様帯である。頸部には７条のヘラ描沈線を施す。胴部には貝殻羽状文、貝殻鋸歯文を施し、それらは縦方向の貝殻有軸羽状文によって区切られる。

130～133は壺形土器の口頸部である。頸部には多条の沈線が巡り、130は二枚貝の腹縁、131～133

はヘラ状工具によるものである。130には口縁部上面に肥厚帯を、やや下がった位置に内面凸帯を付す。口唇部に２条の貝殻沈線を施す。131には内面凸帯を付し、口唇部に１条のヘラ描沈線が認められる。133は口唇部にヘラ描沈線が巡り、さらに刻目を施す。頸部には段を有す。134は壺形土器の頸部である。３条の三角凸帯を付す。135は直口壺の口頸部である。口唇部に刻目を施し、弱い内面突出がみられる。口縁下には２条の三角凸帯が巡る。136・137は偏球形を呈する壺形土器である。137は平底である。138～143は壺形土器の口頸部である。口縁部がいわゆる垂下口縁状（142）もしくはその兆候が認められるもの（139・140・141）や跳ね上げ状のもの（143）がある。138・139・141・142には施文原体に櫛状工具の利用がみられる。138の口縁部内面には上から３条櫛描直線文、３条櫛描波状文、３条櫛描直線文、そして２条１組の工具による刺突文が巡る。139の口唇部には３条櫛描斜格子文を施す。口縁部内面には上から４条１組の櫛状工具による山形文、二枚貝の腹縁押圧による文様が巡る。頸部に押圧凸帯を有す。141の口縁部外面には４条１組の櫛状工具による斜格子文を施し、さらに３つ１組の円形浮文を付す。頸部に押圧凸帯が認められる。142には垂下部上端に刻目、３条１組の櫛状工具による斜格子文が巡る。頸部に２条の押圧凸帯が巡る。

144～149は壺形土器の口縁部である。144は口縁部上面に平坦面をつくり、内面の突出が弱く、口唇部は凹む。145～149は口縁部の内面突出が顕著となり、いわゆる鋤形口縁となる。口唇部はコの字状を呈するか、ヨコナデ調整により凹む。145は口縁部が水平で146～149は垂下する。146は丹塗磨研の壺形土器で口縁端部に１条の沈線が巡る。胎土は精良である。149は口縁部上面に円形浮文を付し、口縁端部に竹管文が施される。144は城ノ越式、145は須玖Ⅰ式、146～149は須玖Ⅱ式併行期に位置付けられよう。150は須玖Ⅰ式併行期に位置付けられる壺形土器である。口縁部には内面突出がみられ、口唇部はヨコナデ調整によりくぼむ。頸部はしまり、胴部は球形に大きく張る。胴部には２条の三角凸帯を付す。底部外面には板状原体によるナデつけ痕がみられる。151は丹塗磨研の壺形土器である。頸部には暗文がみられる。頸部と胴部の境には三角凸帯が巡り、胴部は大きく張るものと思われる。内外面には丁寧なミガキ調整が施される。

152～218は甕形土器である。

152～154はいわゆる有段甕である。口縁部からやや下がった位置にタテハケの押圧による段が形成されている。如意形口縁で、いずれも口唇部下端に刻目が施される。155～157・164・168は口縁下に１条沈線が巡る甕形土器である。155・164には口唇部に刻目が施され、168の口縁端部には２条沈線が巡る。157・164は小型の甕形土器で、口径に対して器高が低い。160～163・166・167は口縁下に２条沈線が巡る甕形土器である。161～163は口唇部に刻目が施され、166・167は刻目とともに、２条沈線が巡る。163・167は胴部が張る形態である。158は口縁部がくの字状に屈曲する甕形土器である。口唇部下端に刻目を施す。159は胴部がやや張る甕形土器である。口縁部は端部を巻き込むような玉縁状の形態である。165は小型の甕形土器である。口唇部上端に刻目を有し、口縁下に刺突文が巡る。底部はやや上げ底である。169～174は口縁下の沈線の間や沈線下に刺突文（169～173）または竹管文（174）を施した甕形土器である。口唇部下端には刻目が巡る。170には二枚貝の腹縁によるとみられる２方向の刻目が巡る。170・171は胴部が張り、171は胴径が口径を上回る。175は口唇部下端に刻目を有す如意形口縁の甕形土器である。口縁下の沈線間には不規則に施された刺突文がみられる。176

は口縁部に断面円形の粘土帯を貼り付けた甕形土器である。いわゆる擬朝鮮系無文土器であろう。177・178は口縁下に三角凸帯を有する甕形土器である。177の口唇部下端と三角凸帯には刻目が、178の口唇部にはヘラ状工具による斜格子文が施されている。179～181は逆Ｌ字口縁の甕形土器である。180は口唇部に刻目を有し、口縁下に２条の沈線が巡るが、181は無文である。182は甕形土器の底部である。上げ底で胴部との境がくびれる。

183～193は鋤形口縁の甕形土器である。内面の突出は明瞭で、187～189のように口径が大きいものは口唇部が丸みを帯びる傾向がある。183には確認できないが、それ以外の口縁直下には三角凸帯を付す。器面は比較的丁寧なナデ調整により仕上げられているが、184・186・189のように胴部外面にハケ目痕が残るものもある。これらの胎土には石英・長石・角閃石等の砂粒を多く含む。焼成は良好である。これらは須玖Ⅱ式併行期に位置付けられよう。194～197は大型甕形土器で、弥生時代に北部九州地域で盛行したいわゆる成人埋葬専用甕棺の一部であると推定される。194は口縁部で口縁下に稜角付凸帯を付す。Ｔ字状口縁をなす。口縁部復元径は41.0㎝である。195は胴部上半部である。口縁下に稜角付凸帯が巡る。196・197は胴部片である。２条の三角凸帯を付す。これらは同一個体である可能性が高い。内外面に丁寧なナデ調整を行ない、平滑に仕上げているため、ハケ目痕やタタキ痕は確認できない。焼成は良好で、焼き上がりの色調（器表面）は橙色を呈する。また、割れ口から観察できる器壁内の胎土の色調は暗赤褐色である。胴部が張り、全体的に非常に丸味を帯びていると考えられる。弥生時代中期後葉の須玖式甕棺であろう。付編にこれらの資料の胎土に含まれる砂礫の観察結果を掲載した。

198は口縁下に三角凸帯を付す甕形土器である。口縁部上面に肥厚帯を貼り付け二重の口縁部を形成する。田部盆地の下七見遺跡等で多くみられる内折口縁土器の範疇に入ると思われる。口縁部の２箇所と三角凸帯の頂部に二枚貝の腹縁を押圧した刻目を施す。199～211は口縁部がくの字状に屈曲する甕形土器である。口縁直下に200～202は押圧凸帯を、203～208は三角凸帯を有する。200の凸帯押圧部にはツメ跡と思われる線状の痕跡がみられる。また、200・201・203～211は口縁端部を跳ね上げる。201・205・206・209は口唇部がくぼむ。205の内外面には丹塗が施されている。

212～216は甕形土器で、口縁端を拡張したもの（214・215）、複合口縁のもの（212・213・216）がある。213には口縁部外面に２条の沈線が、215・216は擬凹線文が巡る。また、215には口縁下に櫛状工具によるノの字状文が施されている。これらは山陰系の影響を受けたものである。217・218は底部が凸レンズ状を呈する甕形土器である。口縁部はくの字状に屈曲する。218には底部内面にケズリ痕が認められる。

219はいわゆる口縁肥厚鉢である。口縁部外面の肥厚帯には４条のヘラ描沈線を施す。口縁部上面は内傾する。肥厚帯には丁寧なミガキ調整がみられる。220・221は瀬戸内系の無頸壺ないし脚付鉢の口縁部と思われる。外面には頂部に刻目のある凸帯を施す。口縁部上面は内傾し、３条１組の櫛状工具による斜格子文が巡り、円形浮文を付す。内面突出がみられる。220・221は同一個体の可能性がある。

222は丹塗磨研の高杯形土器である。口縁部は鋤形で、内面にはミガキ痕がみられる。223は低脚杯の脚部で、ハの字状に開く。224は脚部である。中空で、５孔の円形透かしが巡ると考えられる。こ

の種の装飾性のある脚部は備中や備後の第３様式期に散見するが、関連性の有無は定かでない。

古墳時代以降の土器（225～306）（第37～39図、図版29～34・40）

225～265は古墳時代の土師器である。

225は山陰系の複合口縁の甕形土器である。口縁部は外反する。226は直口の広口壺である。227は直口の壺形土器である。丸底で、体部内面にはケズリが加えられている。228～234は小型丸底土器である。228～233は壺形土器である。口縁部が直線的に立ち上がるもの（228）と内湾気味に立ち上がるもの（229・231）がある。233は退化した極小の底部をもつ。これらには概ね口縁部にヨコナデ調整、体部外面には斜方向のハケ目調整が施され、体部内面にはケズリが加えられている。230・232には黒斑がみられる。234は鉢形土器である。直線的に外側に大きくに開く口縁部をもつ。235は底部に円盤を貼り付けた小型の壺形土器である。体部内面にはケズリが加えられている。236は口縁端部がやや広がる壺形土器である。

237は脚付の甕形土器である。口縁部は直線的に延び、胴部内面にはケズリ痕がみられる。238～246は甕形土器である。口縁部が直線的に立ち上がるもの（242・246）と内湾気味に立ち上がるもの（240・241）、外反気味に立ち上がるもの（238・239・243・244・245）がある。また、241は口縁端部を肥厚させており、布留式甕の特徴をもつ。これらには概ね口縁部にヨコナデ調整、体部外面には斜方向または縦方向のハケ目調整が施され、体部内面にはケズリが加えられている。

247～258は高杯形土器である。247・248・251・252・255～257は有稜高杯である。口縁部が直線的に外側に開くもの（247・256）、緩やかに外反して外側に開くもの（248・251・255）がある。255・256は杯部稜線からの口縁部の立ち上がりが強く、杯部が深くなる形態である。255・257の中空の脚部は裾部へ円錐状に緩やかに開き、１孔の円形透かしを有す。257の接合には充填技法が用いられていると考えられる。249・250・253・254・258は高杯形土器の脚部である。脚部が円錐状に緩やかに開くもの（258）と脚柱部から脚裾部へ屈曲して開くもの（250・253・254）がある。249には上下２段にそれぞれ２孔、計４孔の円形透かしが確認できる。249の脚柱部は中実で内面にしぼり痕がみられる。その他の脚部は中空である。高杯形土器の外面は基本的には丁寧なナデ調整が行なわれている。259・260は低脚杯である。脚部はハの字形に開く。260は体部内外面に丁寧なミガキ調整が施されている。

261は大型の複合口縁の壺形土器である。口縁部への立ち上がりはほぼ直立する。口径22.2㎝、頸部内面径14.5㎝を測る。体部外面と頸部内面にハケ目痕が残る。体部内面にはケズリ痕が多くみられる。体部には黒斑がみられる。

262は椀形土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が行なわれている。263～265はミニチュア土器である。これらは椀形や鉢形を呈している。

266～277は須恵器である。266～269は杯蓋である。天井部中央に266には宝珠状つまみを、267には釦状つまみを付す。268・269には輪状つまみを付す。270～276は杯身である。270～274の底部には高台を付す。270・271の外面には自然釉が付着している。272の底部内面には「×」と思われるヘラ記号がみられる。すべてロクロ整形。回転ヘラ切り痕はナデ消されている。277は長頸壺である。口縁下に段を有し、頸部に１条の沈線を巡らす。

278～281は土師器椀である。278・280・281は体部が内湾しながら立ち上がる。279は体部がやや内

湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。これらには断面台形もしくはそれに近い高台を付す。279には底部外面に回転糸切り痕が残る。280の底部切り離しは回転ヘラ切りによる。278・281の底部外面の切り離し痕は不明である。282～285は土師器杯である。体部がやや内湾気味に立ち上がるもの（282）とほぼ直線的に立ち上がるもの（283～285）がある。底部外面には回転糸切り痕が認められる。286は土師器皿である。体部が内湾気味に立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りによる。

287～294は緑釉陶器の椀である。291～294の底部にはハの字状に開く高台を付す。胎土は橙色の土師質のもの（287・289～291・293・294）と灰白色の須恵質のもの（288・292）がある。293の釉薬は黄褐色である。

295～302は輸入磁器である。295・297～299・301・302は青磁碗で、296・300は白磁碗である。297の内面にはヘラ状工具や櫛歯状工具による花文が施される。外面には櫛目がみられる。301の見込みには陰刻で花文が施される。302の内面には櫛目がみられる。

303～306は六連式の製塩土器である。内面にはヘラ状工具によるナデつけが行われており、布目痕は不明である。外面には指頭圧痕が認められる。305は底部外面が黒色に変色しており、これは二次焼成によるものと思われる。

Ｄ区遺物包含層出土土器（307～325）（第40図、図版34～36・40）

307は縄文土器の深鉢形土器である。内外面とも二枚貝の条痕による調整であるが、内面は大部分がナデ調整によって消されている。内面口縁下に１条の沈線が、胴部屈曲部外面の上に二枚貝による２条凹線が巡る。縄文時代晩期前半の岩田Ⅳ類古段階に位置付けられる。

308～313は弥生土器である。308は壺形土器の肩部で段を有す。縦方向の３条貝殻沈線が貝殻羽状文を区切る。内外面にはミガキ痕がみられる。309は壺形土器の口縁部である。口縁部肥厚帯上面に貝殻鋸歯文を施す。310は口縁部を欠く壺形土器で、丸底気味の底部を有する。311は口縁部と胴部下半を欠く壺形土器である。形態は球形を呈すると思われる。外面にはハケ目痕がみられる。312・313は甕形土器の口縁部である。退化した跳ね上げ口縁で、外面にはハケ目痕が認められる。

314～323は古墳時代の土師器である。314～320は甕形土器である。口縁部が直線的に立ち上がるもの（314～317・319）と内湾気味に立ち上がるもの（318）、外反気味に立ち上がるもの（320）がある。315・317・318・320は胴部が大きく張る。これらには調整が不明であるものを除き、概ね口縁部にヨコナデ調整、体部外面には斜方向または縦方向のハケ目調整が施され、体部内面にはケズリが加えられている。321は広口壺の口縁部である。口縁部は外反気味に立ち上がる。322は高杯形土器の口縁部である。有稜高杯で、緩やかに外反して外側に開く。323は椀形土器である。体部下半内外面に指頭圧痕が残る。

324は緑釉陶器椀の底部である。底部に貼付高台を付す。色調は釉薬がオリーブ黒色で、胎土が橙色である。325は土師器皿である。器面が磨滅しており、底部外面の切り離し痕は不明である。

5　土製品（第41図、図版36）

土錘（326～348）　23点の土錘が出土した。土錘の出土は遺跡が日本海に注ぐ粟野川に隣接しているという地理的な要因によるのであろう。326～347は中心部に孔がある筒形の管状土錘、348は両端

部に孔を開けた棒状土錘である。329は球形の土錘である可能性もある。336・337は他と比べて大きく、紡錘形を呈する。装着した網や対象とした魚の違いを表すのかもしれない。表面はナデ調整が行われており、指頭圧痕が残るものもある。胎土はいずれも精良な粘土である。

土製勾玉（349）　Ａ区ＳＫ35より出土した。完形品で長さ4.2㎝、幅1.3㎝、厚さ1.1㎝、孔径0.5㎝である。表面はナデ調整である。

6　玉類（350～353）（第41図、図版40）

350・351は碧玉製の管玉である。350は長さ９㎜、径４㎜、孔径２㎜である。351は長さ12㎜、径４㎜、孔径２㎜である。いずれも緑灰色である。352はＡ区ＳＢ８より出土したガラス小玉である。長さ５㎜、最大径６㎜、孔径1.5㎜で、色調は淡水色を呈する。353は碧玉製の棗玉である。長さ８㎜、最大径6.5㎜、孔径３㎜で、色調は深緑色を呈する。

7　古銭（354）（第41図、図版40）

354は咸平元宝である。宋の真宗の咸平元年（998年）に鋳た。

8　木製品（355～358）（第41図、図版36）

355～358はＣ区遺物包含層トレンチ①下層より出土した。建築材と考えられるが、加工痕は明瞭でなく、遺存状態はよくない。

9　石器・石製品（第42図～44図、第２表、図版37～39）

石鏃（359～390）　石鏃は32点出土した。359～389は打製石鏃である。大部分は基部の形状と茎の有無より凹基無茎式石鏃に分類されるものである。凹基の形状は抉りが浅いものが多いが、375のように深い抉りをもつものもある。両面に丁寧な押圧剥離により形態加工しているものがある一方で、片面側に素材面を多く残すものもみられる。386は剥片鏃である。石材には安山岩が多用され、一部に黒色黒曜石や姫島産黒曜石が用いられている。また、387・388は形態や剥離の規模より石鏃以外の器種の可能性もある。389は他の石鏃に比べ断面に厚みがあり、打製石錐の可能性もある。390は泥岩製の磨製石鏃である。丁寧な研磨調整により両面に逆Ｙ字の明確な稜を有する。よって断面形は切先部で菱形、基部で扁平な６角形を呈する。平基無茎式である。

石錐（391）　391は安山岩製の打製石錐である。横長剥片を素材としており、頭部が大きい。錐部端が欠損しているが、残存部の断面形は菱形に近い。

打製石斧（392・393）　392は玄武岩製、393はＡ区ＳＫ35より出土した安山岩製の打製石斧である。扁平打製石斧で、いずれも刃部を欠損する。表面の風化が激しい。

磨製石斧（394～399、403～405）　394～397は小型石斧である。394・397はＡ区ＳＫ35より出土した資料である。刃部は394・395が蛤刃で、397が両刃に近い形態である。いずれも安山岩製と思われるが、表面の風化が激しく研磨痕は不明瞭である。398・399は小型柱状片刃石斧である。この種の柱状片刃石斧は断面が方形で身に抉りはない。398は左側面に研磨調整が施されていない。扁平片刃石

斧を再加工している可能性がある。石材には泥岩を使用している。399は凝灰岩製である。403～405は太型蛤刃石斧の未製品である。いずれも敲打調整段階で製作を放棄されたものと考えられる。403・405はひん岩、404は凝灰岩製である。

打製石鎌（400～402）　400～402は泥岩製の打製石鎌である。400・401は本来磨製石鎌として製作されたと考えられるが、新たに刃部を作り出し、打製石鎌として使用されたのであろう。400は刃部が内湾気味である。401は使用痕の観察により複数回の刃部形成が確認できる。402はＡ区ＳＫ26より出土しており、破損品を再加工している。

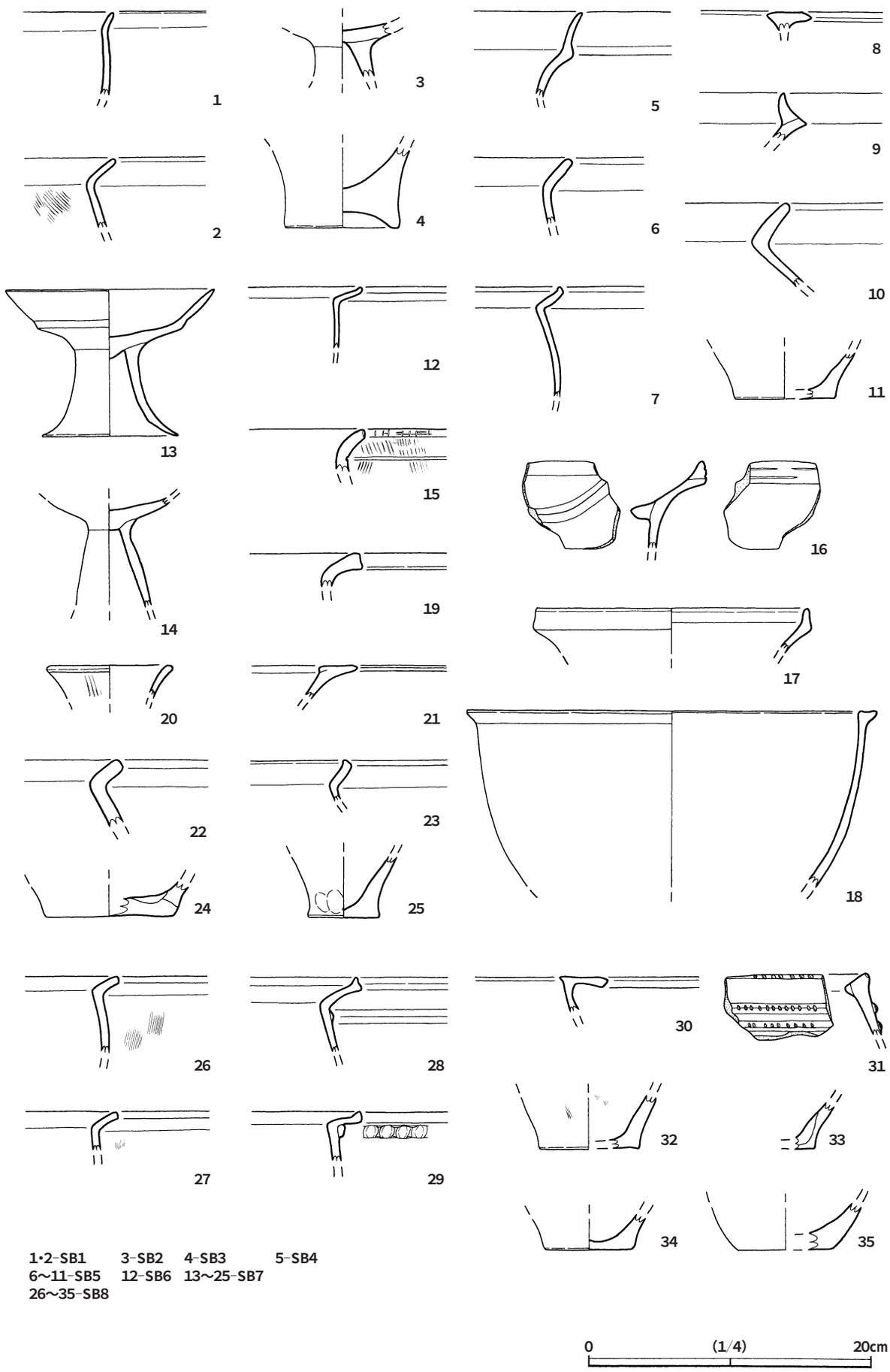
磨製石庖丁（407・408）　407・408は泥岩製の磨製石庖丁である。407は内湾刃に外湾背を有し、鎌形に近い形態となると思われる。両刃である。408は大型品である。背が外湾するが、欠損により刃部形態は不明である。いずれも両面穿孔である。

磨製石剣（409）　409は磨製石剣である。茎部は欠損している。表面の風化が激しく研磨痕は不明瞭である。身の中央の鎬はなく、断面形は扁平な６角形に近い。石材は砂岩である。

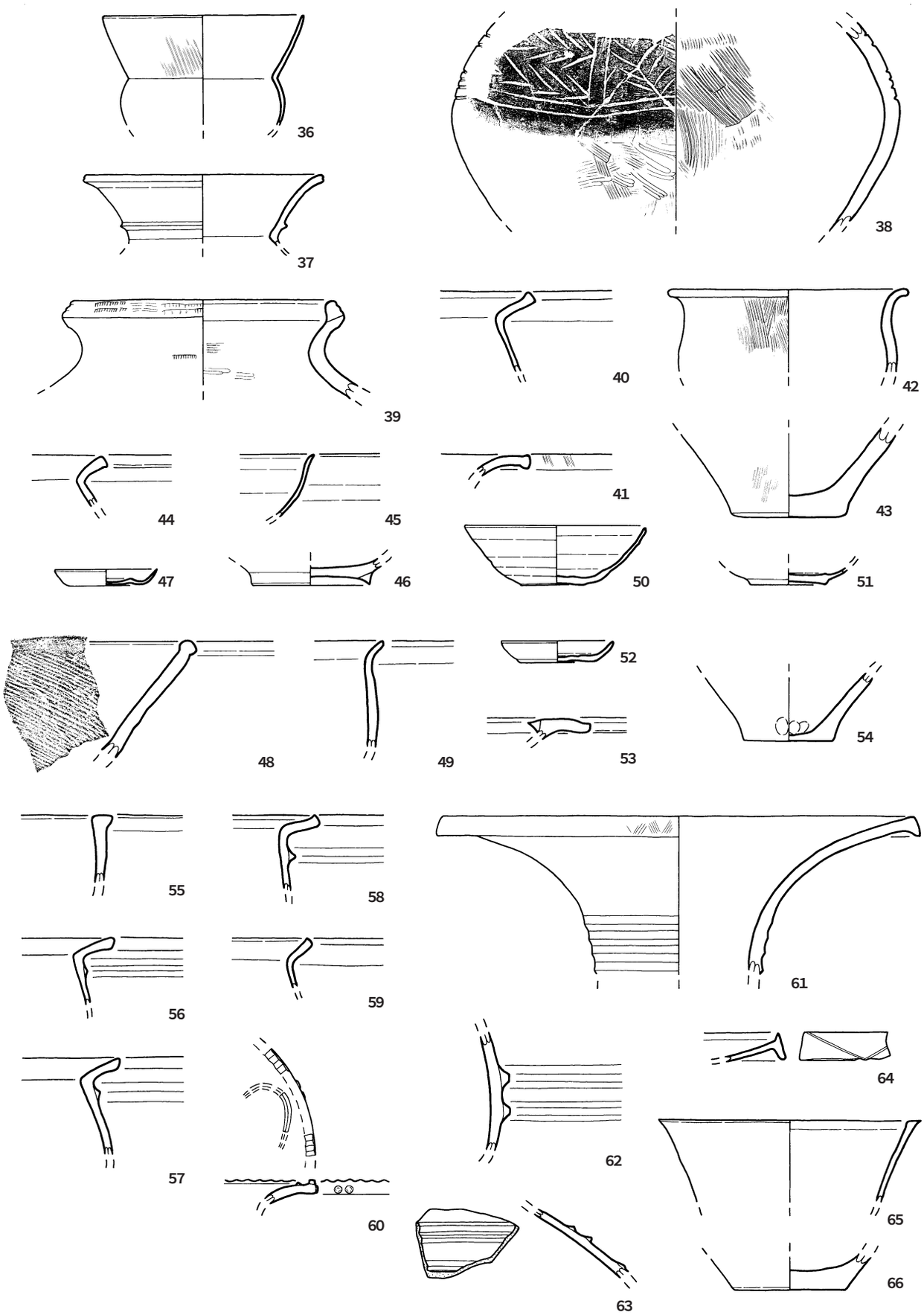
有孔石製品（406）　406は砂岩製の有孔石製品である。穿孔は両面から行われている。欠損品で使用用途は不明である。

第２表　石器・石製品観察表

番号	器　種	石　材	形態加工	備　考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
359	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	18.4	13.5	2.7	0.4
360	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	18.8	15.8	3.9	0.9
361	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	17.3	14.1	3.2	0.5
362	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	25.9	13.0	3.6	1.0
363	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	18.9	19.4	3.8	1.1
364	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	19.8	12.0	2.9	0.6
365	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	16.9	13.7	3.4	0.5
366	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	18.7	14.2	4.1	0.7
367	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	18.3	14.0	3.9	0.8
368	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	鋸歯。	20.9	14.0	3.2	0.6
369	凹基鏃	安山岩	押圧剝離		11.9	12.2	3.3	0.3
370	凹基鏃	黒色黒曜石	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	15.2	13.2	2.4	0.3
371	凹基鏃	安山岩	押圧剝離		18.7	16.5	3.3	0.7
372	石鏃	安山岩	押圧剝離		12.6	11.8	3.4	0.3
373	凹基鏃	黒色黒曜石	押圧剝離		15.0	8.7	3.7	0.4
374	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	24.6	15.4	3.0	0.8
375	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	26.7	18.6	4.3	1.2
376	凹基鏃	姫島産黒曜石	押圧剝離		29.7	25.4	6.5	3.4
377	凹基鏃	安山岩	押圧剝離		28.8	19.1	4.0	1.5
378	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	27.1	21.2	4.5	1.9
379	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	21.5	14.8	3.1	0.9
380	凹基鏃	安山岩	押圧剝離		20.2	15.2	4.2	1.0
381	凹基鏃	安山岩	押圧剝離	裏面に素材面を多く残す。	15.3	16.4	3.5	0.6
382	凹基鏃	安山岩	押圧剝離		20.2	17.6	2.9	0.7
383	凹基鏃	安山岩	押圧剝離		22.0	18.5	3.4	1.0
384	石鏃未製品	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	22.3	17.8	4.1	1.2
385	石鏃未製品	安山岩	押圧剝離	周縁加工のみで表裏に素材面を多く残す。	23.5	16.7	2.2	0.8
386	剝片鏃	安山岩	なし		18.7	13.3	2.8	0.5
387	石鏃？	姫島産黒曜石	押圧剝離		16.3	17.6	4.6	0.7
388	石鏃？	安山岩	押圧剝離	石鏃に比べて剝離の規模が大きい。	17.8	15.6	4.4	1.2
389	石鏃？	安山岩	押圧剝離	素材打面部一部残存。石錐の可能性あり。	21.6	12.2	6.4	1.3
390	磨製石鏃	泥岩	研磨	下端面も研磨。	36.4	17.1	4.0	2.6
391	打製石錐	安山岩	押圧剝離		25.8	21.6	5.3	2.4
392	打製石斧	玄武岩	直接打撃	表面風化顕著。	164.5	56.8	19.0	278.1
393	打製石斧	安山岩	直接打撃	表面風化顕著。	92.7	49.6	21.2	127.2
394	磨製石斧	安山岩	直接打撃＋研磨	表面風化が激しく研磨痕不明瞭。	86.0	56.2	23.0	163.5
395	磨製石斧	安山岩？	直接打撃＋研磨	表面風化顕著で刃部研磨痕不明瞭。	60.2	60.4	13.7	71.5
396	磨製石斧	安山岩	敲打＋研磨	表面風化顕著で表面状態が不明瞭。	68.4	47.5	25.0	127.7
397	磨製石斧	安山岩？	敲打＋研磨	表面風化顕著で研磨面が大部分剝落。	78.0	43.9	12.7	76.9
398	柱状片刃石斧	泥岩	研磨	小型。扁平片刃石斧を再加工か。	68.8	15.2	9.4	17.9
399	柱状片刃石斧	凝灰岩	研磨	小型。	52.2	14.5	8.5	11.7
400	打製石鎌	泥岩	研磨＋直接打撃	磨製石鎌を再加工か。被熱による表面剝落顕著。	44.6	91.3	11.3	65.0
401	打製石鎌	泥岩	研磨＋直接打撃	磨製石鎌を再加工か。	43.8	118.1	14.1	103.4
402	打製石鎌	泥岩	直接打撃	破損品を再加工。	57.3	110.3	11.2	90.9
403	磨製石斧未製品	ひん岩	敲打	太型蛤刃石斧の未製品。	135.2	73.5	56.2	784.2
404	磨製石斧未製品	凝灰岩	直接打撃＋敲打	太型蛤刃石斧の未製品。	160.4	66.4	57.0	938.3
405	磨製石斧未製品	ひん岩	敲打	太型蛤刃石斧の未製品。	93.9	76.0	67.5	770.9
406	有孔石製品	砂岩	研磨	表面風化が激しく研磨痕不明瞭。	27.0	30.0	1.1	8.1
407	磨製石包丁	泥岩	研磨	被熱資料。	61.0	73.6	6.9	52.6
408	磨製石包丁	泥岩	研磨		55.1	90.1	7.2	47.9
409	磨製石剣	砂岩	研磨	表面風化が激しく研磨痕不明瞭。	114.2	35.4	6.3	32.1

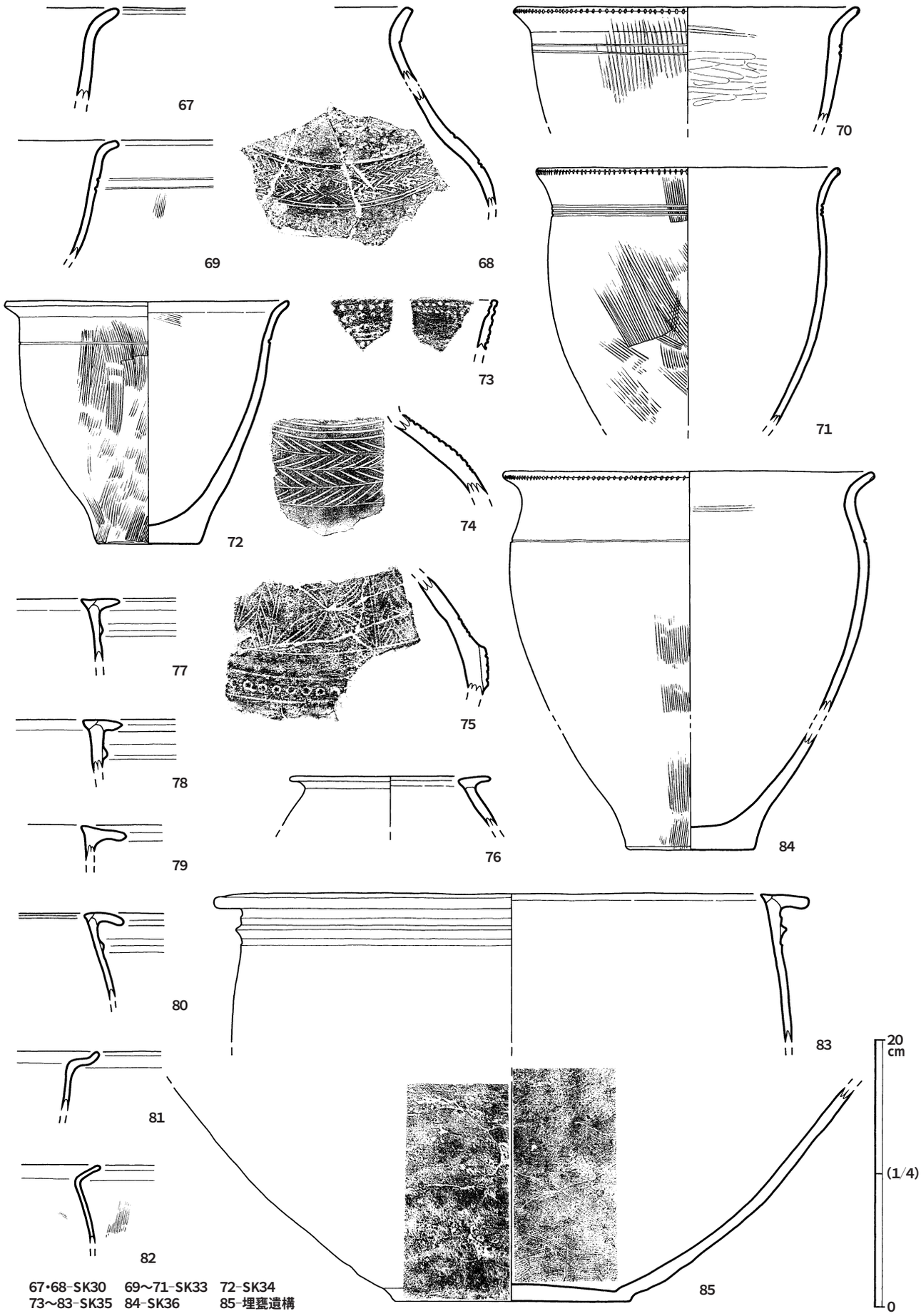


第22図　竪穴住居跡出土土器実測図(1)

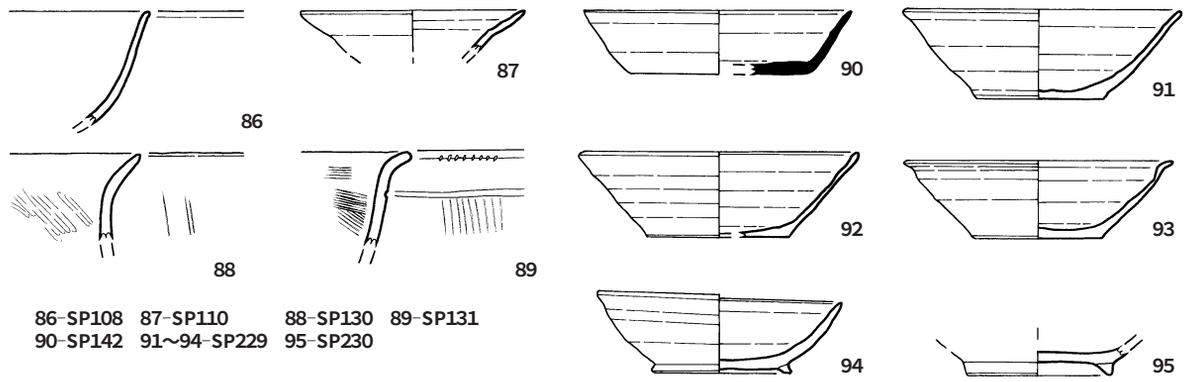


36～40-SB9　41～43-SB10　44-SK1　45・46-SK3　47-SK4　48-SK6
49-SK9　50-SK12　51-SK13　52-SK15　53・54-SK20　55～66-SK27

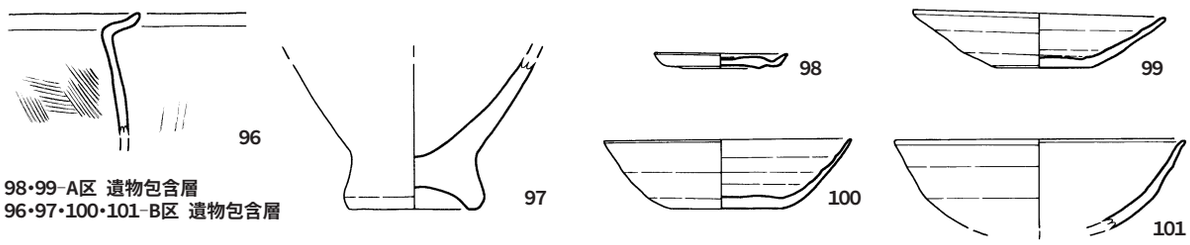
第23図　竪穴住居跡出土土器実測図(2)・土坑出土土器実測図(1)



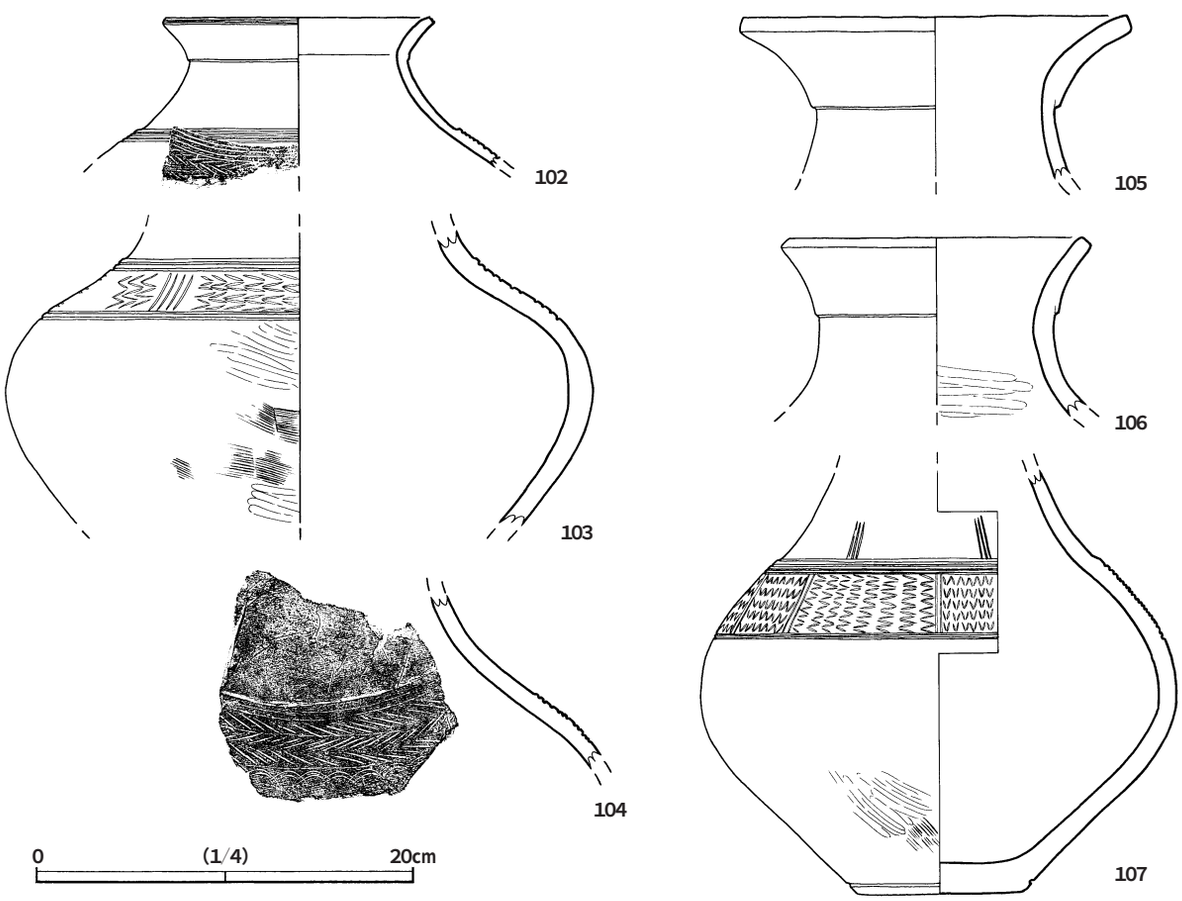
第24図　土坑出土土器実測図(2)



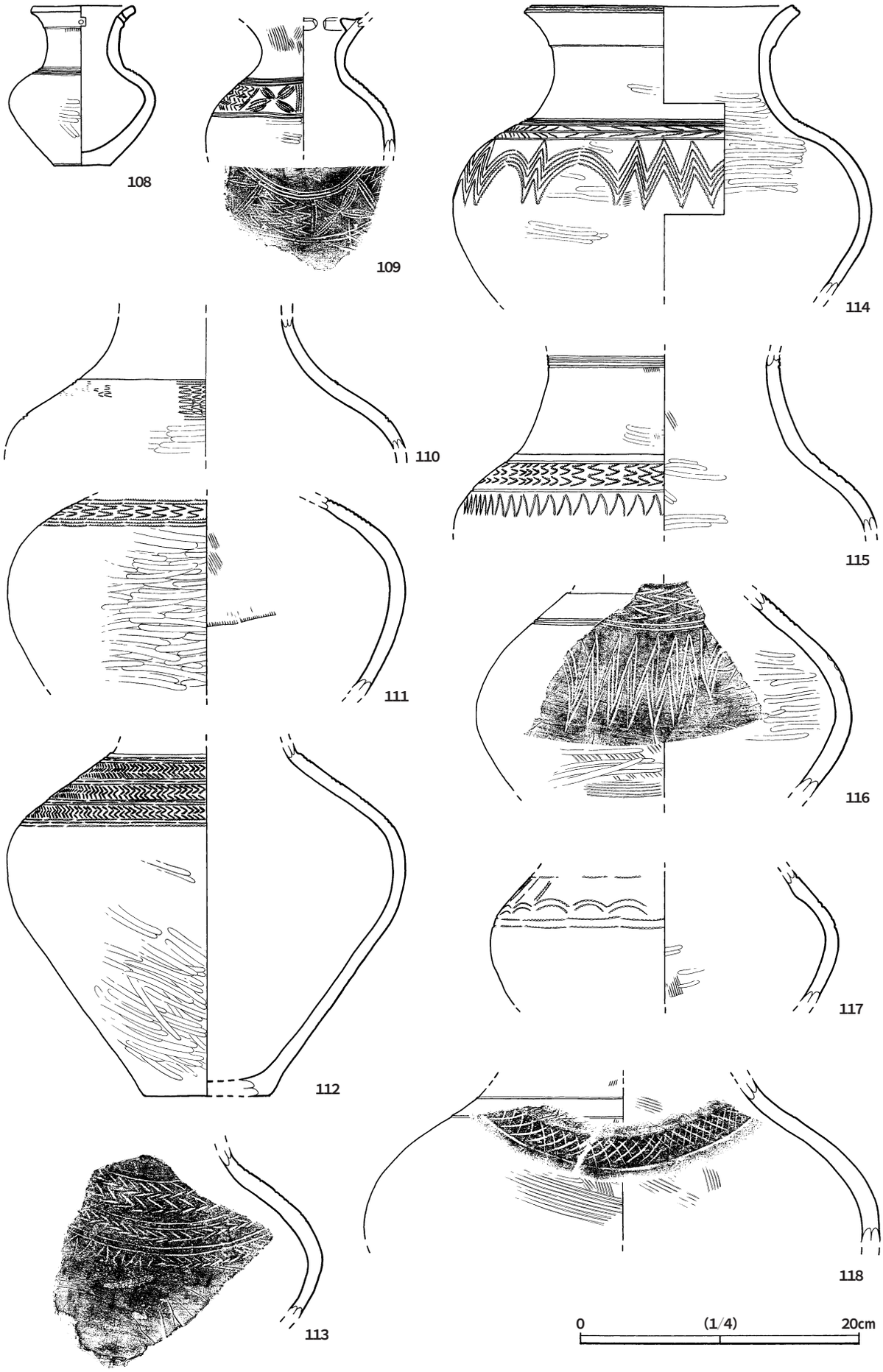
第25図　柱穴出土土器実測図



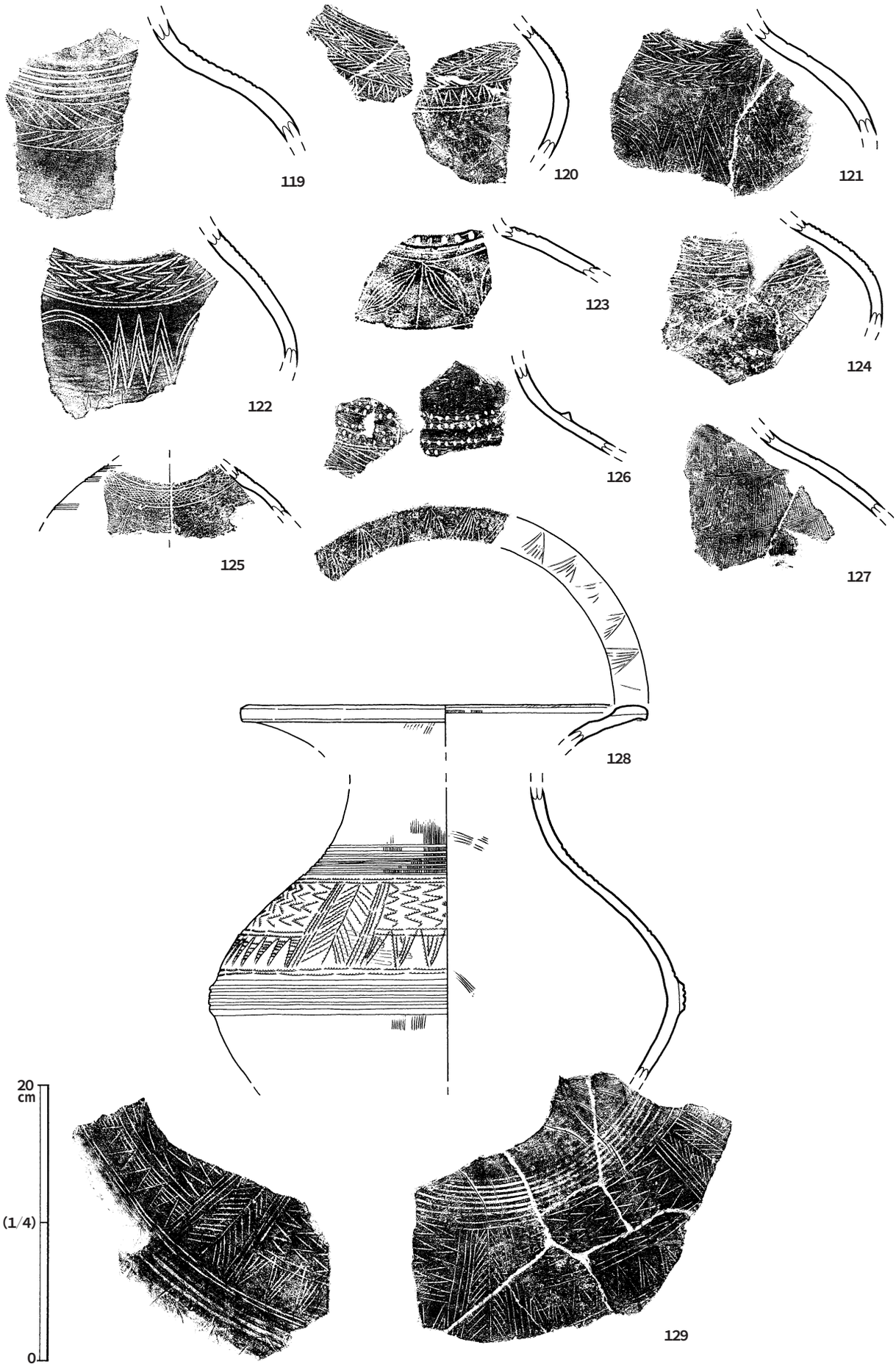
第26図　Ａ・Ｂ区遺物包含層出土土器実測図



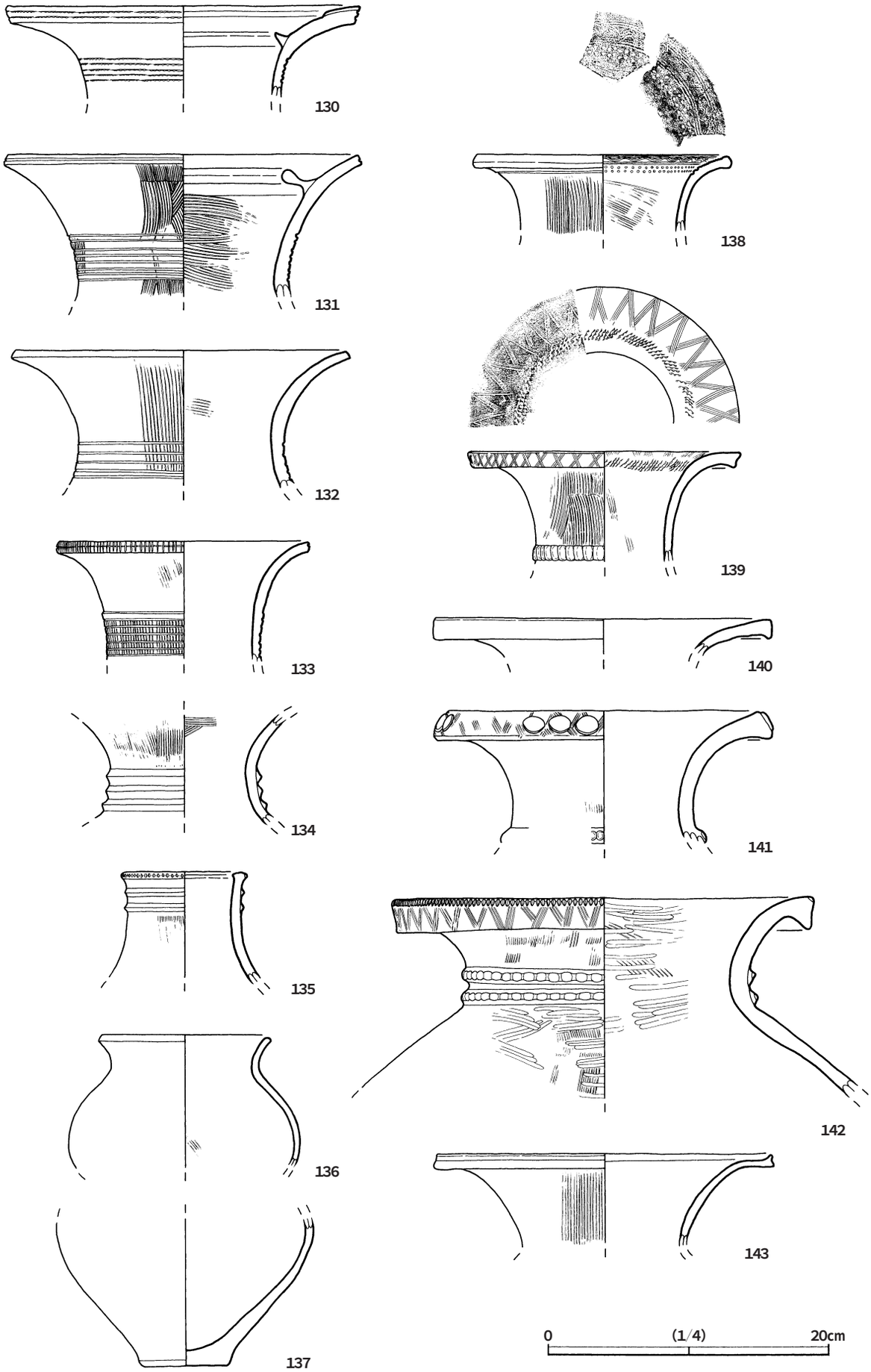
第27図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(1)



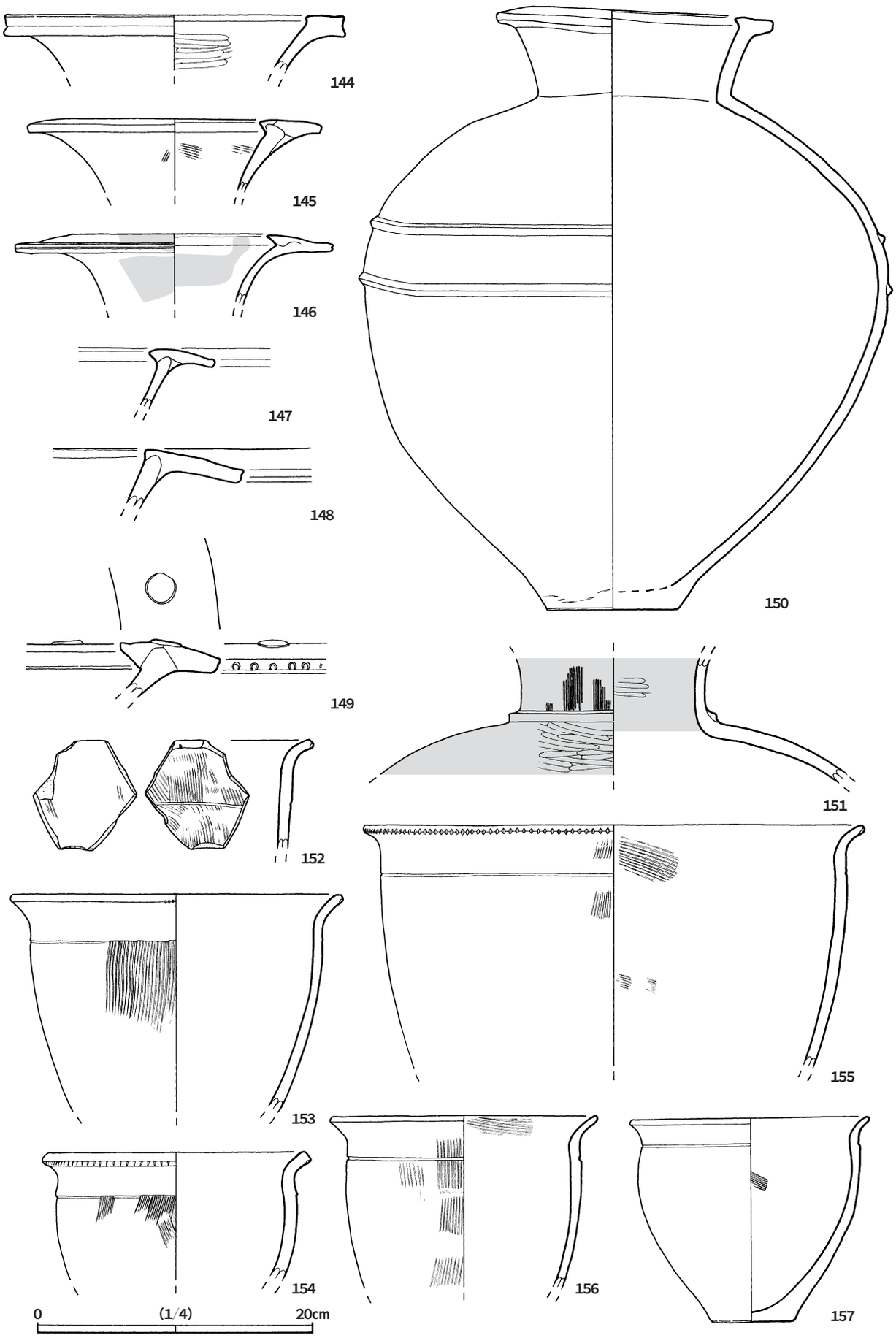
第28図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(2)



第29図　C区遺物包含層出土弥生土器実測図(3)

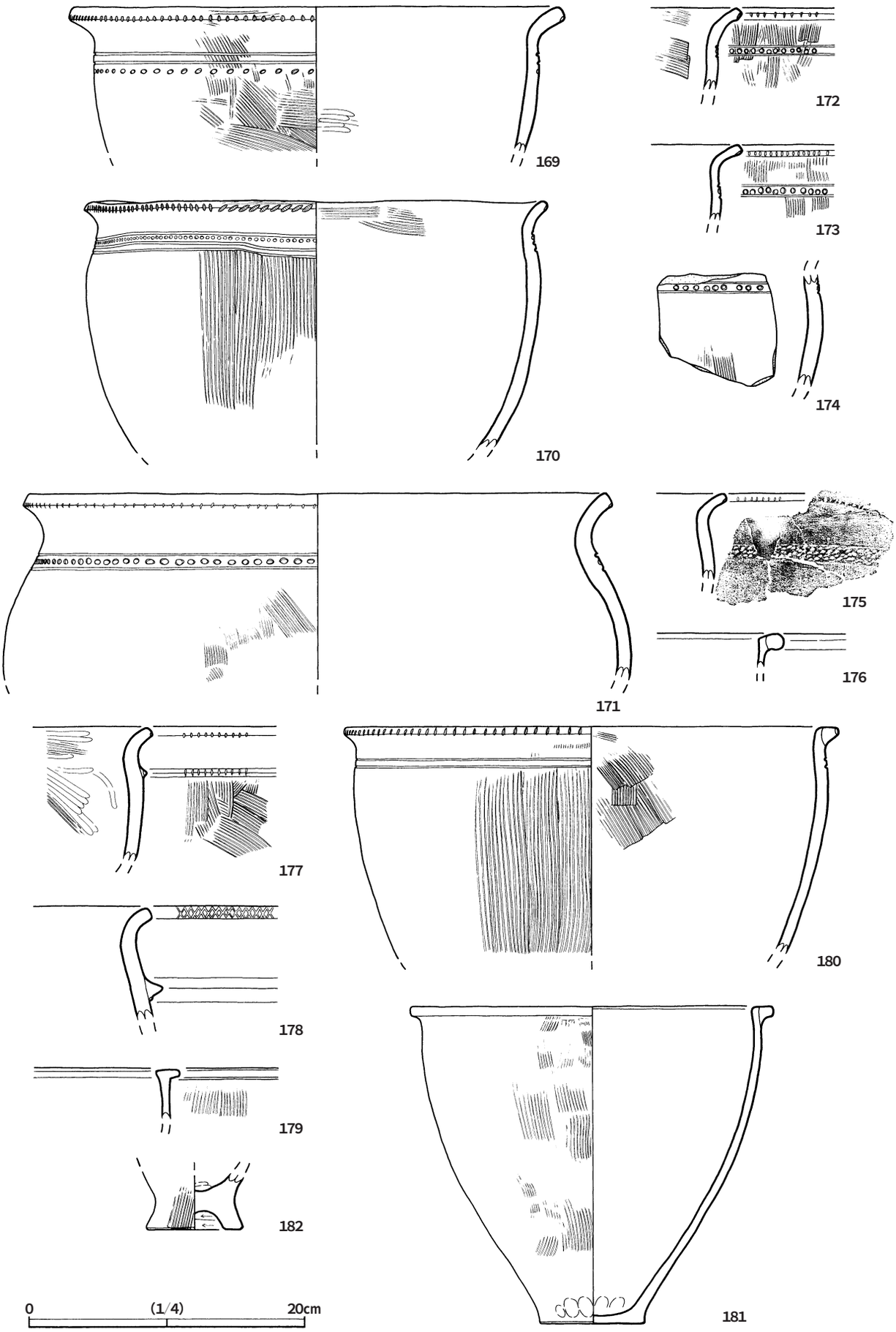


第30図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(4)

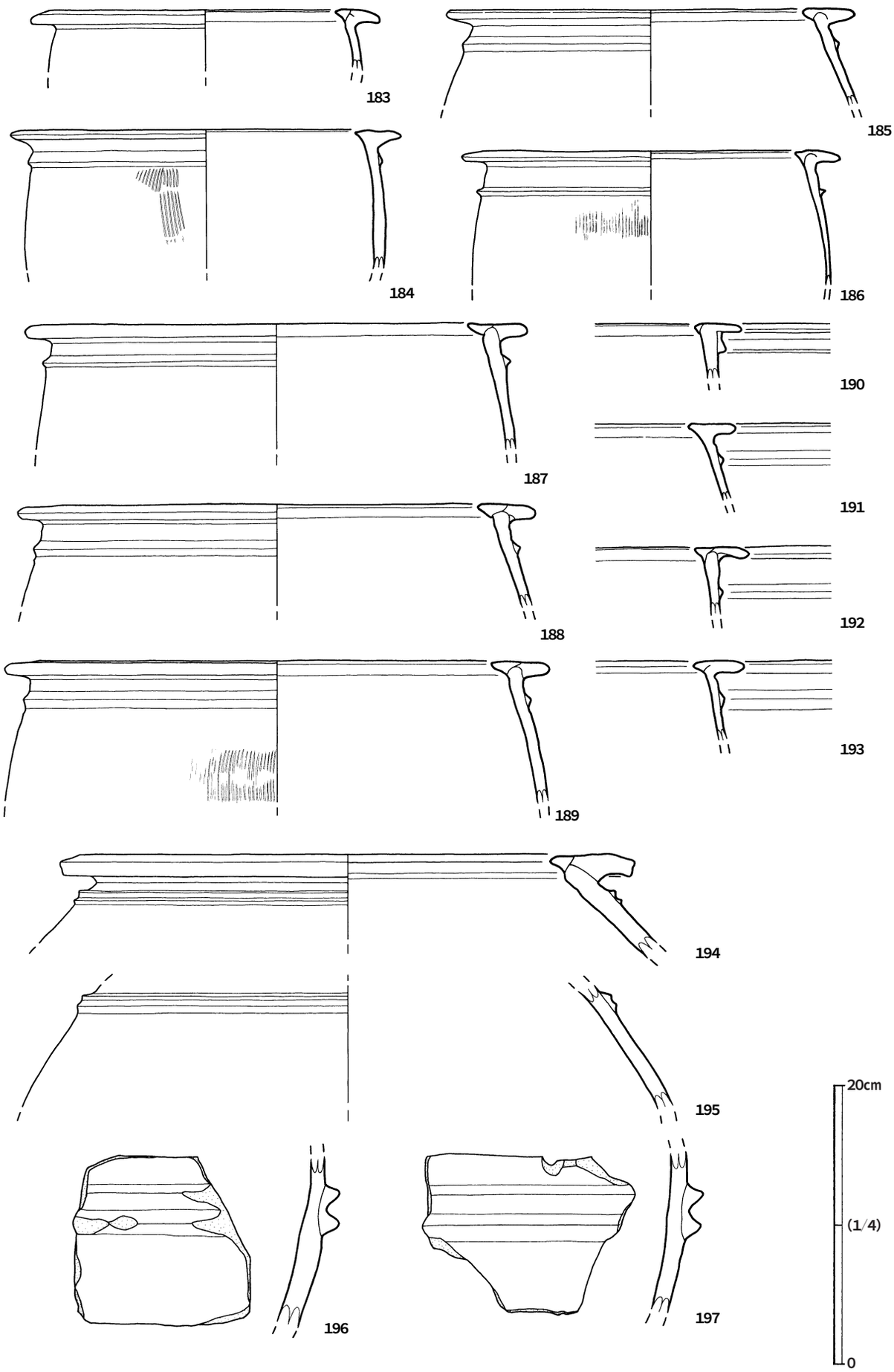


第31図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(5)

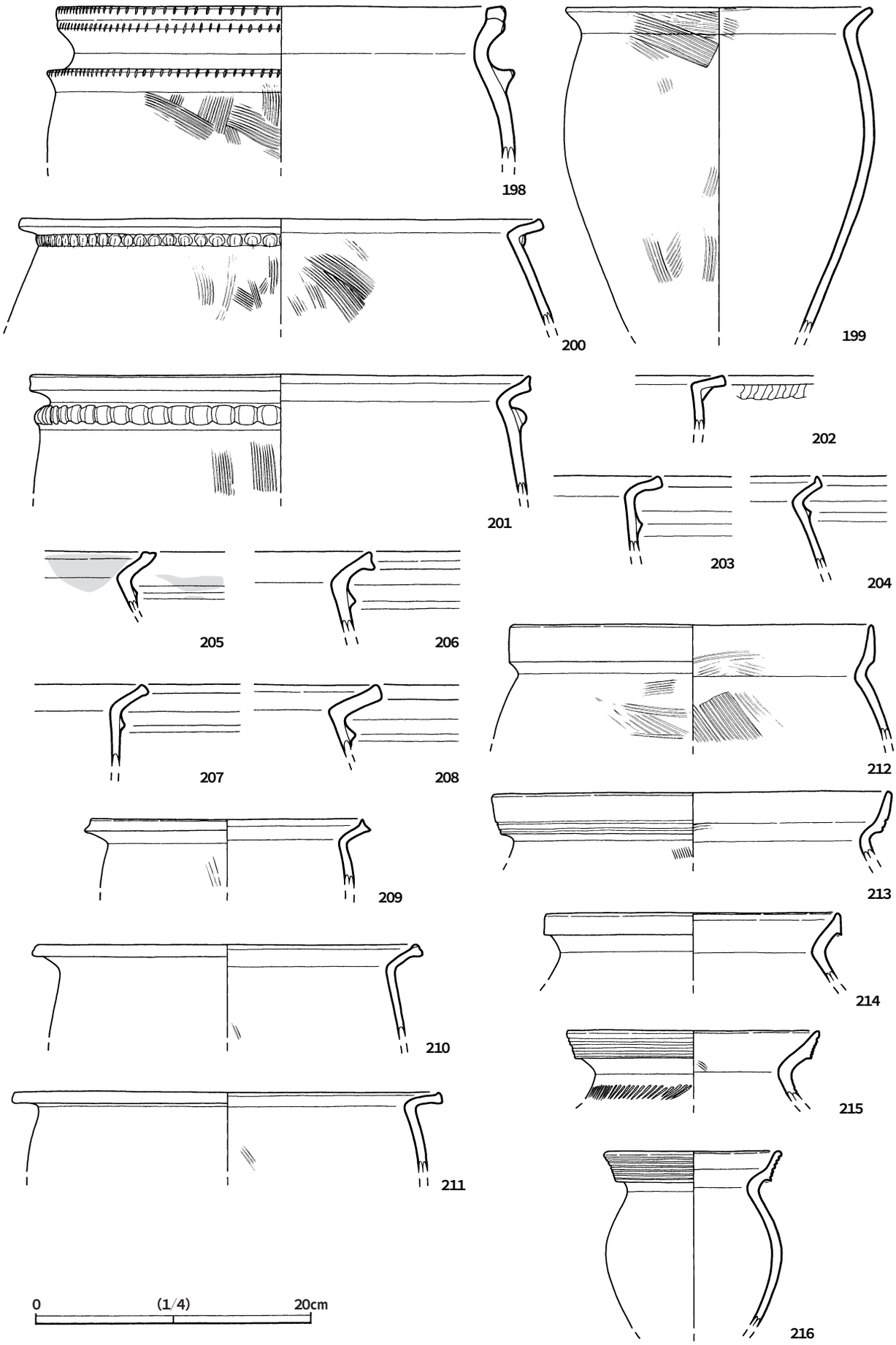
第32図　C区遺物包含層出土弥生土器実測図(6)



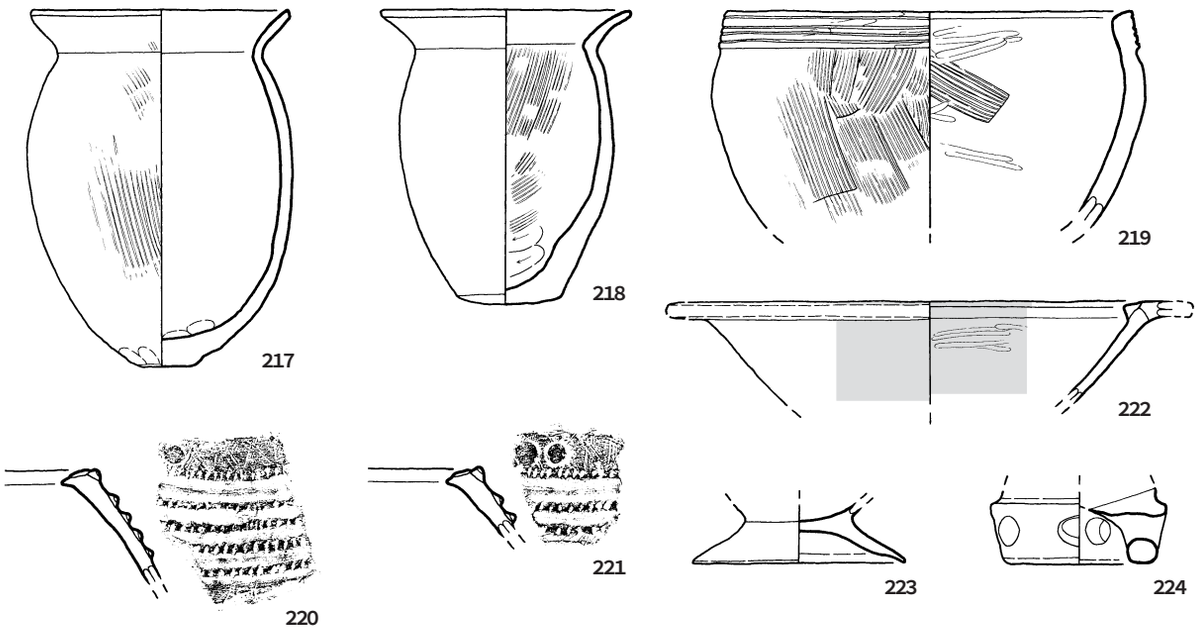
第33図　C区遺物包含層出土弥生土器実測図(7)



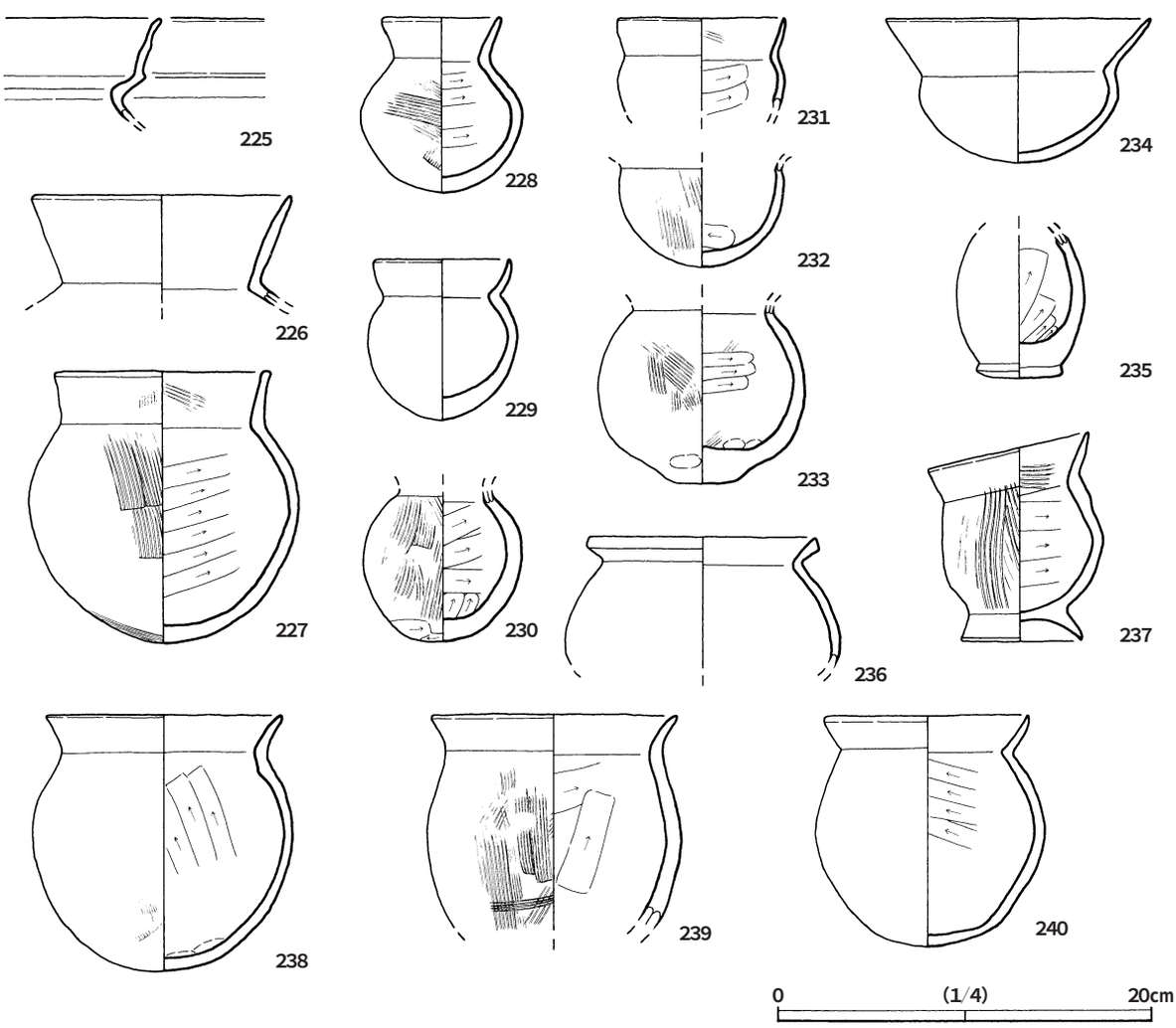
第34図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(8)



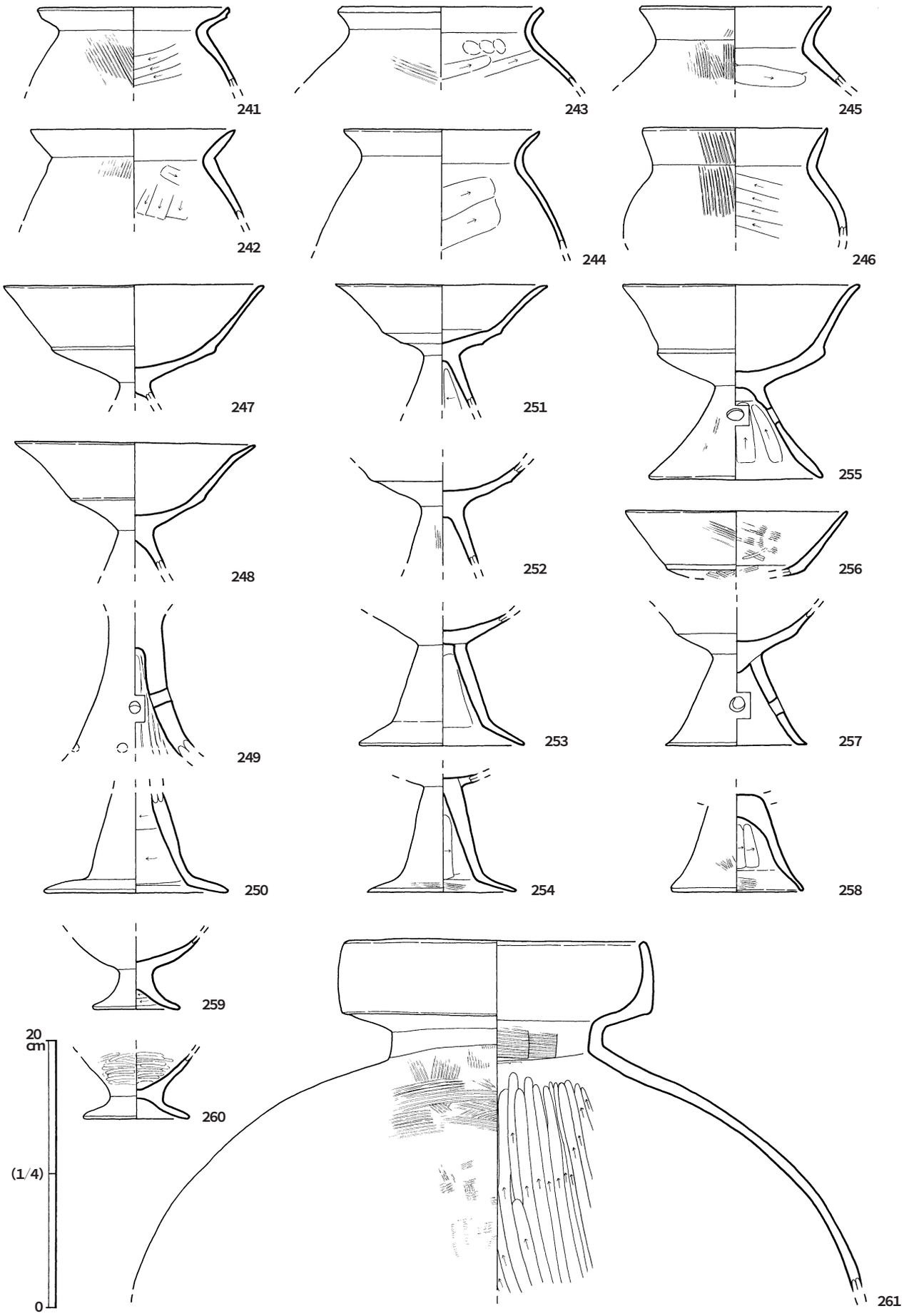
第35図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(9)



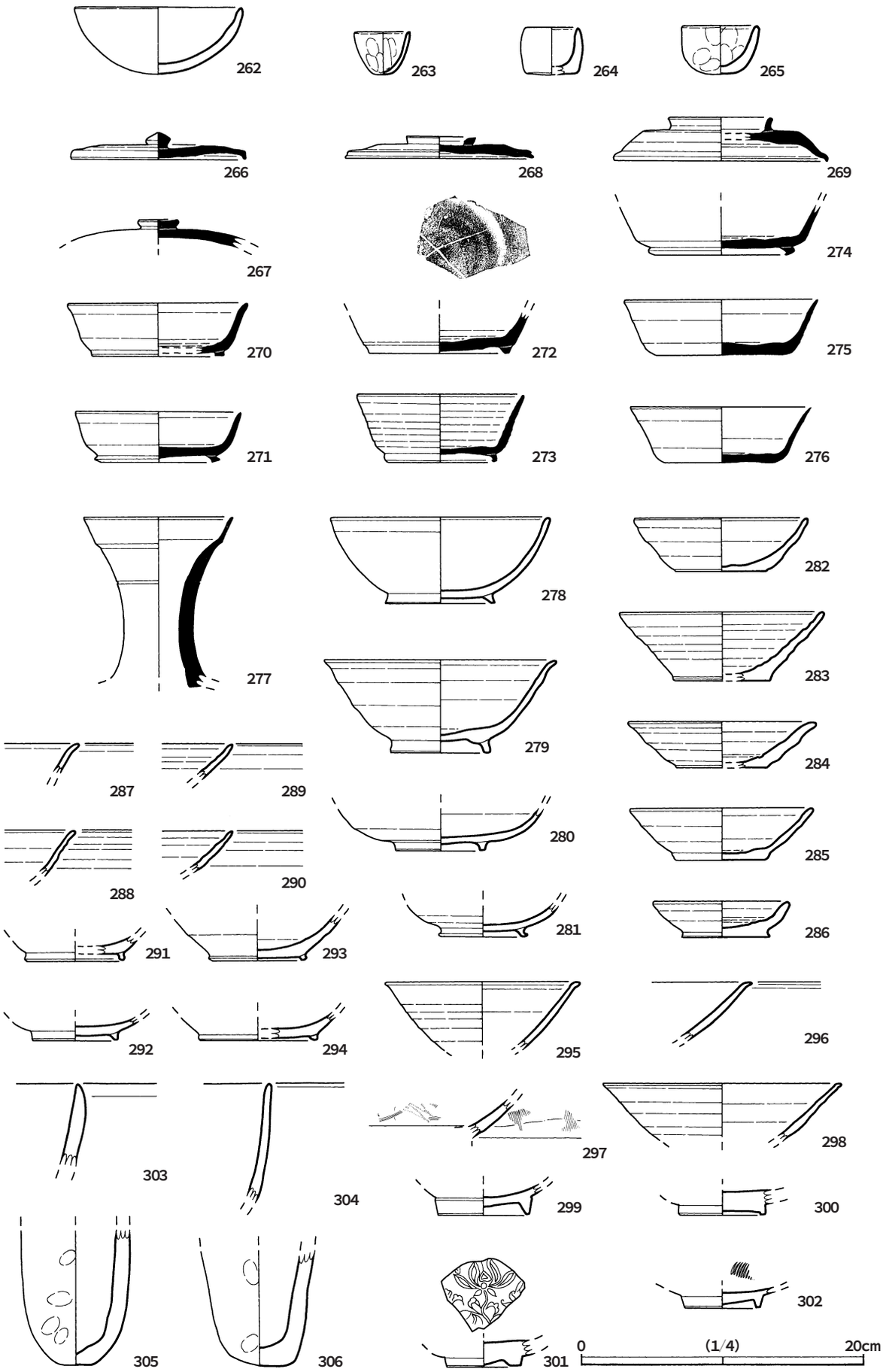
第36図　Ｃ区遺物包含層出土弥生土器実測図(10)



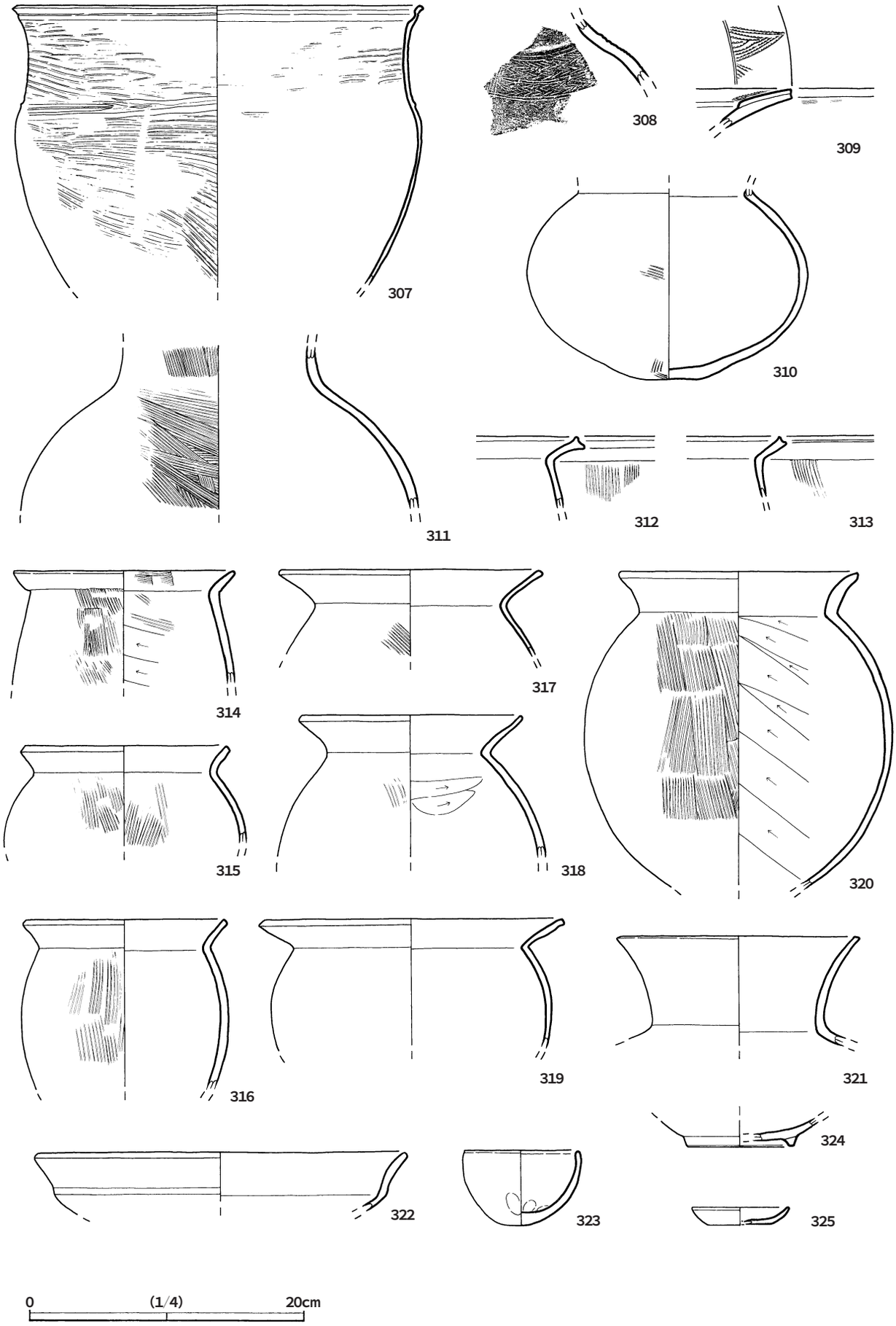
第37図　Ｃ区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(1)



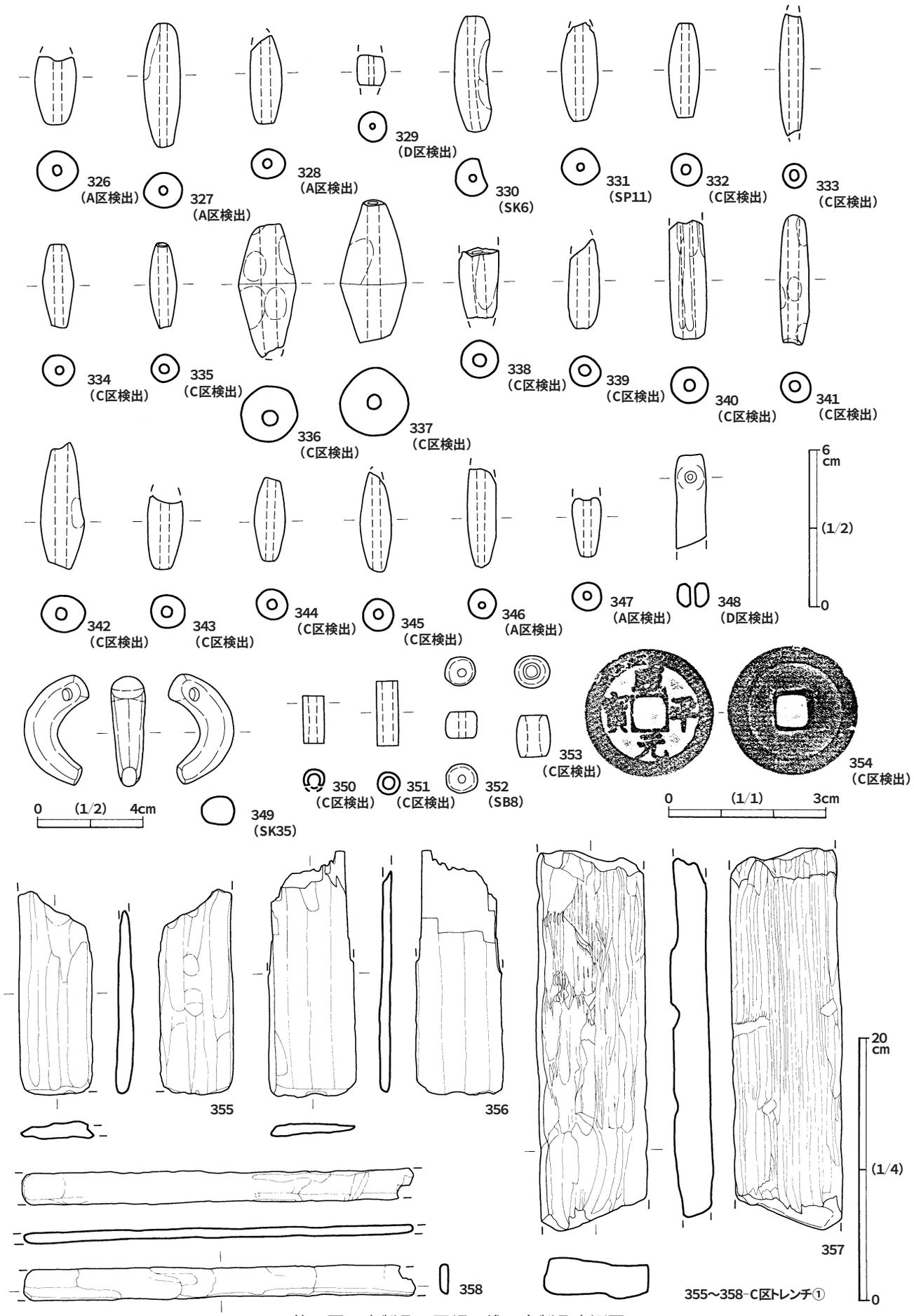
第38図　C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(2)



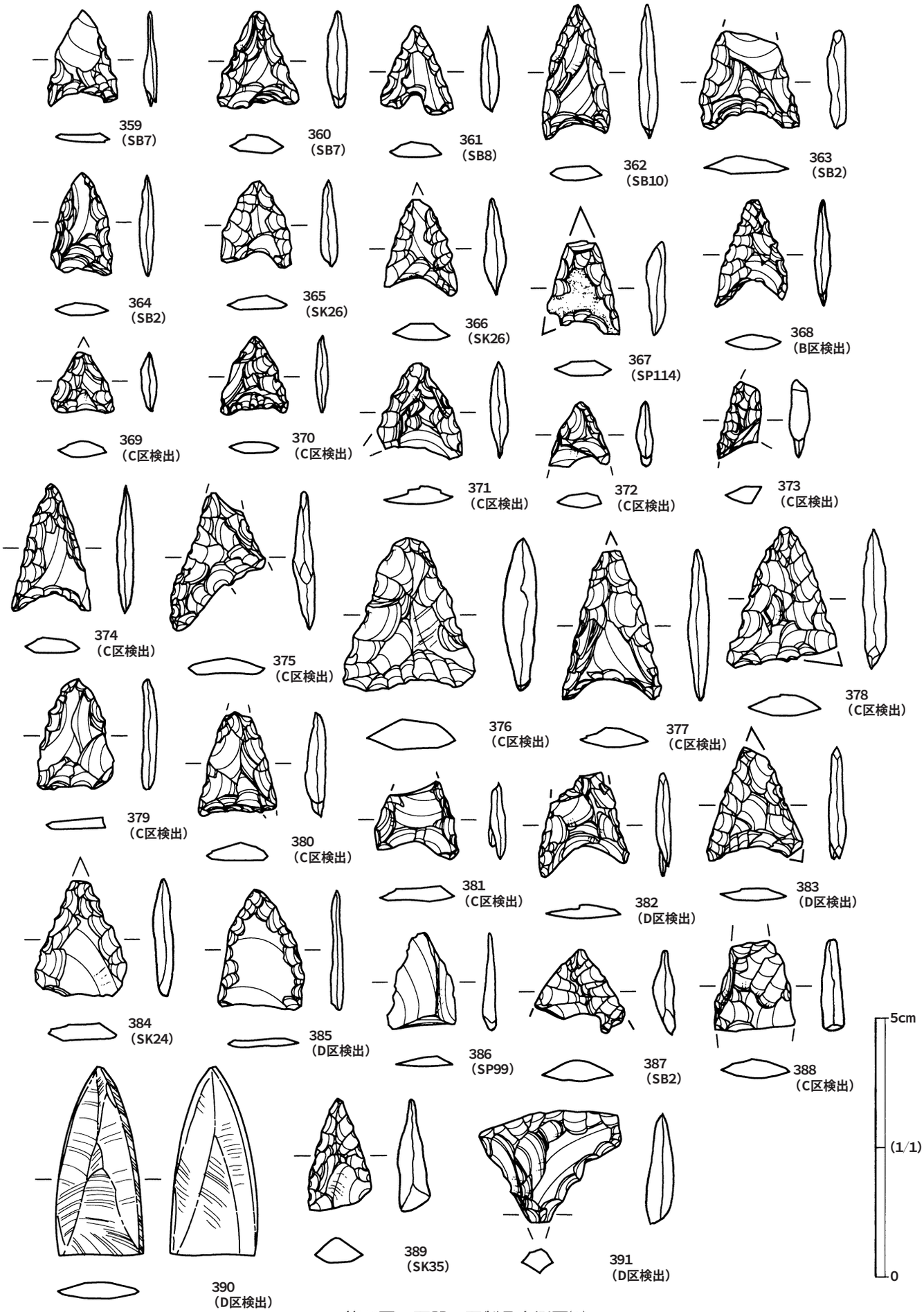
第39図　C区遺物包含層出土古墳時代以降の土器実測図(3)



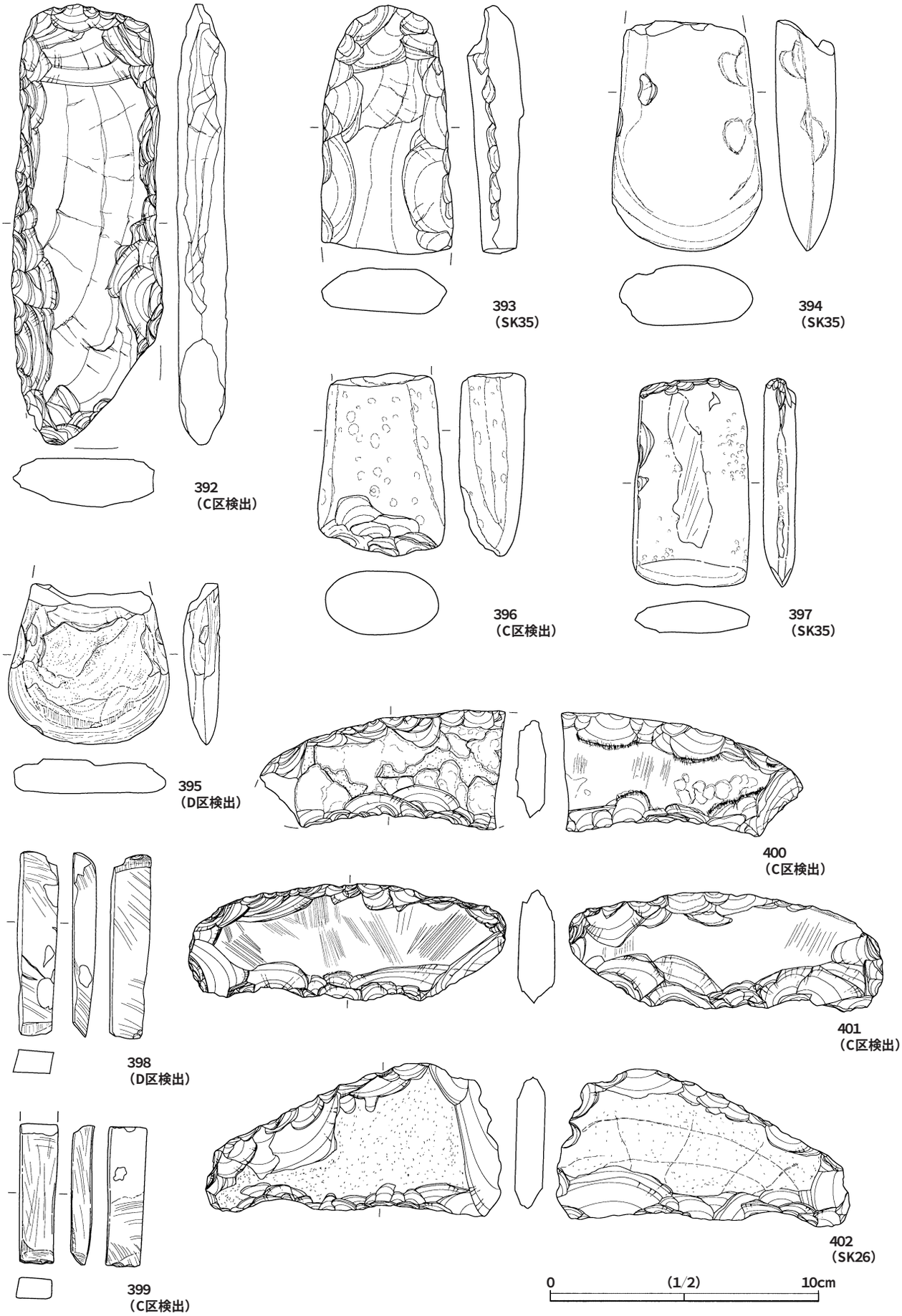
第40図　D区遺物包含層出土土器実測図



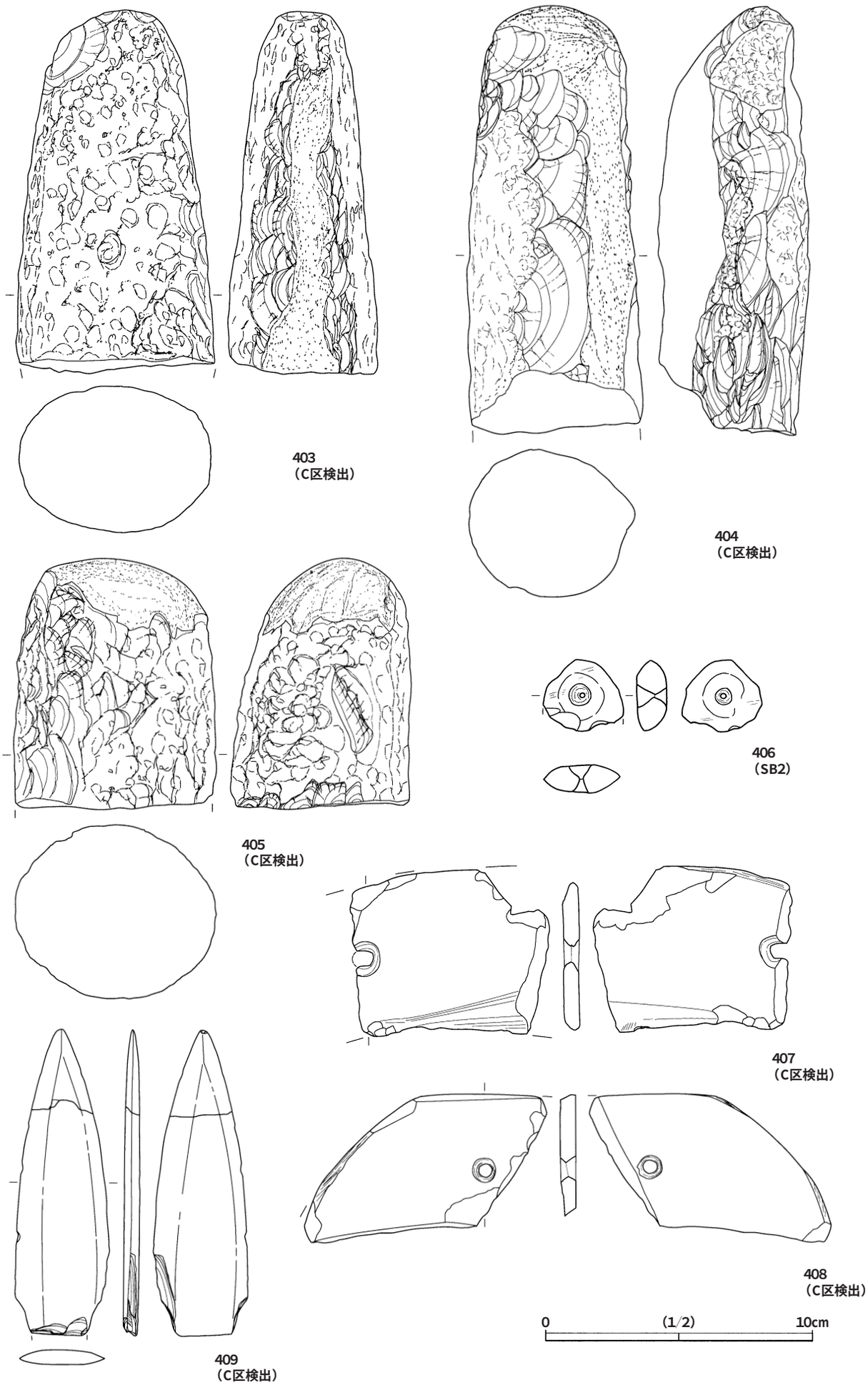
第41図　土製品・玉類・銭・木製品実測図



第42図　石器・石製品実測図(1)



第43図　石器・石製品実測図(2)



第44図　石器・石製品実測図(3)

3　まとめ

宮迫神田遺跡の発掘調査により検出した遺構は、弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡10軒、弥生時代～中世の掘立柱建物跡20棟、溝状遺構２条、土坑36基、柱穴600余りである。出土遺物は、弥生時代前期後半～中期後半の弥生土器や古墳時代前期初頭の土師器が中心を占め、その他に、縄文土器、須恵器、土師器、六連式製塩土器、緑釉陶器、輸入磁器（青磁・白磁）、石器・石製品（石剣、石鏃、石斧、石鎌、石庖丁、管玉、棗玉等）、土製品（勾玉、土錘）、ガラス製品（小玉）、木製品、輸入銭等が確認された。これらの遺構や遺物の出土状況から、山口県北西部の沿岸部近くに位置する宮迫神田遺跡では、縄文時代から中世までの長い期間にわたって、人々が間欠的に生活を営み、とりわけ弥生時代には拠点的集落が形成されていたということが明らかになった。

遺構は後世の水田開発で著しい削平を受けており、遺存状態が悪かったものの、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が10軒検出された。主柱穴や炉等はほとんど検出されなかったが、住居の形は円形や隅丸方形で、円形竪穴住居跡では推定径が５～７ｍの中規模のものから、約10ｍの大型のものまである。住居の大半はＡ・Ｂ区の高位で発見されたが、低位のＣ・Ｄ区でも１軒ずつ発見されており、ある程度のまとまりをもった集落が断続的に営まれていたと推察される。掘立柱建物跡は出土遺物はわずかであるが、中世のものが多く認められ、時期が確定できない建物についても、ほぼ同時期と考えて大過ないであろう。

遺物は多量に検出されたが、その大半がＣ区遺物包含層からの出土である。Ｃ区遺物包含層の層序は、最下層には弥生時代前期の土器が包含されており、時期に濃淡はあるが、基本的には上層の古代の土器が含まれる層まで累重的な堆積があったと思われる。遺物包含層からの遺物の出土量を考えると、調査区上位側にも遺構の広がりが推定される。遺構に伴う遺物は僅かで小破片が多く、残念ながら良好な一括資料は少ない。以下、宮迫神田遺跡の出土遺物で特徴的な遺物を取り上げてみる。

Ａ区ＳＫ35とＤ区遺物包含層から、縄文土器（73・307）が出土した。73はＡ区ＳＫ35から出土した曽畑式系の深鉢形土器口縁部片で、宮迫神田遺跡の出土遺物の中では最も古く位置づけられるものである。滑石を多く含んでおり、搬入品の可能性が高い。307はＤ区遺物包含層から出土した縄文時代晩期前半の岩田式（岩田４類古段階）の深鉢形土器である。

弥生時代前期後半～中期の土器では、Ｃ区遺物包含層等から、綾羅木Ⅱ式～綾羅木Ⅳ式に相当する段階の土器が多数出土している。施文構成で注目されるのは山形重弧文を施した壺形土器（114・116・121・122）で、羽状文もしくは有軸羽状文との組み合わせをもつ。また、176は口縁部に断面円形の粘土帯を貼り付けた朝鮮系の後期無文土器で、口縁部上面にヨコナデによる平坦面がみられる。

弥生時代中期の土器では他地域から持ち込まれた搬入土器、もしくは影響を受けた外来系土器が多数出土している。127・138・139には櫛描文がみられ、139には口縁部内部に櫛描山形文と貝殻文が施されている。これらは弥生時代中期前半代に位置づけられる。31・220・221は瀬戸内系の無頸壺もしくは脚付鉢の口縁部片で、山口県内では類例に乏しい資料である。29はＳＢ８からの出土で、頸部に押圧凸帯が巡る跳ね上げ口縁の甕形土器片や、須玖Ⅱ式の鋤形口縁の甕形土器と共伴しており、いずれも小破片ではあるが、周辺地域との併行関係を把握するうえで非常に重要な意味をもつと思われる。北部九州系の土器は城ノ越式から須玖Ⅰ式、須玖Ⅱ式併行期のものが出土しており、最も数が多いの

は須玖Ⅱ式併行段階の土器である。また、中期後葉から中期末にかけての周防部で盛行する跳ね上げ口縁の甕形土器も多く出土していることから、この時期が宮迫神田遺跡のひとつのピークである可能性が高いであろう。151は丹塗磨研土器片であり、須玖Ⅱ式古段階のものと思われ、後述する須玖式の甕棺片とほぼ同一地点より出土した。弥生時代後期に相当する遺物は少なく、再びまとまった遺物の出土がみられるのは古墳時代からである。

Ｃ区遺物包含層トレンチ①からは北部九州系の甕棺片が出土した（194・196・197）。復元した口縁部径の大きさや器壁の厚さ等から、北部九州地域で盛行したいわゆる成人用甕棺の一部と考えられる。また、トレンチ周辺の遺物包含層掘り込み時にも、破片（195）が出土した。橋口達也氏の編年観（橋口1979）を援用するならば、概ねＫⅢａ式の範疇に入ると思われる[(1)]。日常土器では須玖Ⅱ式古段階に相当し、弥生時代中期後葉（川上1994・平2004）である可能性が高い。

その他、弥生時代後期中頃の口縁部に擬凹線文を施した山陰系の複合口縁甕（212～216）が出土している。また、ＳＢ９からは山陰系の鼓形器台（37）が小型丸底土器と伴に出土しており、古墳時代初頭に位置づけられる。

Ｃ区遺物包含層の北半西側上層では、古墳時代の高杯、甕、鉢や壺の小型丸底土器、ミニチュア土器等の祭祀にかかわったと思われる土器が、使用後に一括廃棄された状況で検出された。また、その下層においても、弥生前期末の壺や甕の原形をとどめる土器が一括廃棄された状況で検出された。弥生土器と伴に石剣も検出され、祭祀に使用された土器が一括して廃棄されたものと判断される。この辺りが粟野川の河岸や水辺に近かったこともあり、水に係る祭祀との関連も想定されよう。

今回の出土した土器が県北西部における良好な資料として、この遺跡の特性を踏まえながら山口県西部（長門地域）での編年作業や山口県東部（周防地域）とのかかわり、さらには、北部九州、山陰、瀬戸内地域等の資料との比較検討のうえで有効に活用されるとともに、それによって今後、宮迫神田遺跡の性格やこの地域の歴史の中での位置づけがより明らかになることが期待される。

註

(1)橋口達也氏は大形甕棺をＫⅠ～ＫⅤ期に大別し、中期を口縁下に凸帯がない時期と、口縁下凸帯出現以降の時期に二分し、前者をＫⅡ期（ＫⅡａ～ｃ）、後者をＫⅢ期（ＫⅢａ～ｃ）としいている。また、ＫⅢａ期の甕棺は森貞次郎氏の分類では須玖式甕棺に相当する（森1968）。
橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告』XXXⅠ　中巻　福岡県教育委員会。

〔参考文献〕
川上洋一　1994「弥生時代の北部九州における甕棺と日常土器の併行関係に関して」『橿原考古学研究所論集』第11　創立55周年記念　橿原考古学研究所　吉川弘文館。
平　美典　2004「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『第53回埋蔵文化財研究集会弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会　第53回埋蔵文化財研究集会実行委員会。
森貞次郎　1968「弥生時代における細形銅剣の流入について－細形銅剣の編年的考察－」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念委員会編　平凡社。

Ⅳ　的場遺跡

1　調査の方法と経過

的場遺跡は釜ヶ岳の西側ふもとの緩やかな斜面に位置している。そのため、調査対象となる４区画の水田には若干の比高差がある。よって、調査区を標高に準じて設定した。標高40.81ｍで最も高い地点にあるＡ区からＢ区、Ｃ区とし、最後に標高39.31ｍの区画をＤ区とした。調査は、予察調査の結果をもとに重機による表土除去から始めた。まず、Ａ区では現地表面から約30㎝下で柱穴と黒褐色の薄い粘土層を確認した。Ｂ区の中央からＣ区に向けては、地山層とは明らかに違う堆積層を北側で確認したために、Ｃ区に向けて２本のトレンチを設けて調査することとした。Ｃ区では、大小さまざまな礫が露出し、ポイントを決めて深掘り調査をすることとした。Ｂ区南側においては花崗岩バイラン質の土層からかなり多くの柱穴を確認することができた。Ｂ区東端では、青灰色粘質土の下から湧水し、そのためＢ区東端は谷部にあたると考え、トレンチ調査のみを行うこととした。Ｄ区は予察調査の段階では未調査だったがＢ区南側の柱穴群の検出状況から遺構の密度が濃いと考え、慎重にトレンチ調査を行うこととした。また、Ｂ区とＤ区の区界において水田改修の跡や、それに伴うであろう整地土層が現れ、従来より約50～60㎝深掘りをしたところ、縄文土器片が数点と石器の一部が出土した。そこで中世の遺構面の下に、縄文時代の遺構の埋存が予想された。

これらの重機による表土除去やトレンチ・深掘り調査の結果を基にＡ区から遺構の検出・掘り込みを開始した。Ａ区は薄い遺物包含層が認められ、その下からＳＫ９が検出された。Ｂ区中央は、著しい削平を受けた様子で遺構の遺存状態は不良であった。また、Ｃ区との区界においては水田改修による整地土層を確認した。しかし、その下からＳＫ８を検出した。また、Ｃ区では、遺構を検出することはできなかった。Ｄ区ではＢ区南側に続いて、遺構を検出することができた。また、南端でも遺構面と異なる堆積上の範囲を確認し、同時にその境界を区画にするような状態で石列が出土した。そこで、トレンチを設定し、土層の確認を行ったが、水田改修に伴う整地土であることが判明した。その後、グリッド実測、ついで空中写真撮撮を行い、中世遺構の調査を終了した。

続いて、縄文土器片と石器が出土した遺構密度の濃いＢ区南側とＤ区にそれぞれ３本ずつトレンチ（南北方向）を設けて、縄文土器が出土する土層面の範囲を確定し、重機による中世の土層除去を行った。その後、人力で縄文土器を含む土層面を検出した。その結果、縄文土器を含む土層は一定の範囲にのみ存在していることが判明し、単なる遺物包含層ではなく意図的に土器を廃棄した場所と考え、この範囲を大きく一つの遺構とした。そして、多量の縄文土器および13点の石器が出土し、土坑２基と柱穴23個を確認した。また、Ｂ区東端のトレンチ調査の結果、弥生時代中期の壺がほぼ完形で出土した。更なるトレンチ調査及び掘り込みを続けたが、激しい湧水のため調査を続行することが不可能となった。その後、遺構の平板実測を行い、的場遺跡の発掘調査を終了した。

第45図　的場遺跡調査区設定図

第46図　的場遺跡遺構配置図

2　調査の成果

⑴　遺構（第47～55図、図版43～49）

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡８棟（中世）、土坑14基（中世12基・縄文時代２基）、柱穴522個（中世499個・縄文時代23個）である。これらの遺構のほとんどがＢ区とＤ区に集中しており、Ｂ区に関してはＤ区との区界の斜面上で大半が検出された。また、Ｃ区は試掘調査においては数点の遺物が確認されていたが、削平が著しく、遺構がほとんど遺存していなかった。特徴的な遺構としては多量の縄文土器が出土した「土器溜状遺構」があげられる。

①　掘立柱建物跡（第47～49図、第３表）

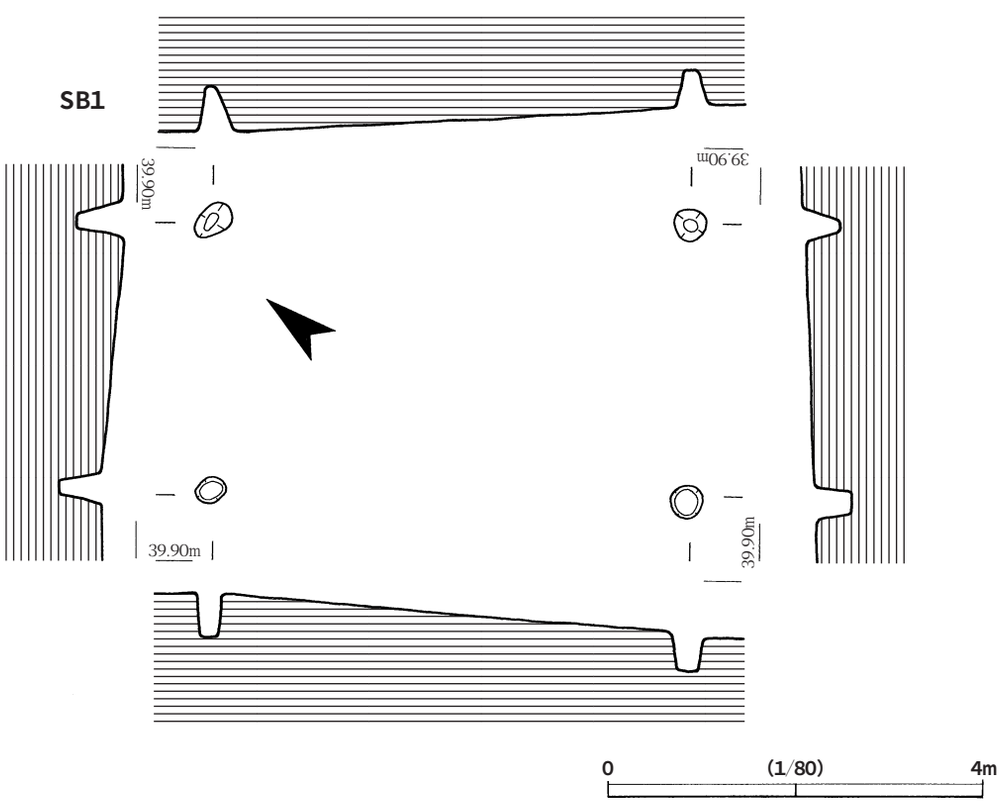
今回の発掘調査で、中世の遺構面から検出された柱穴群において、Ｂ区で４棟、Ｄ区で４棟、合計８棟の建物が復元できた。

ＳＢ１（第47図）

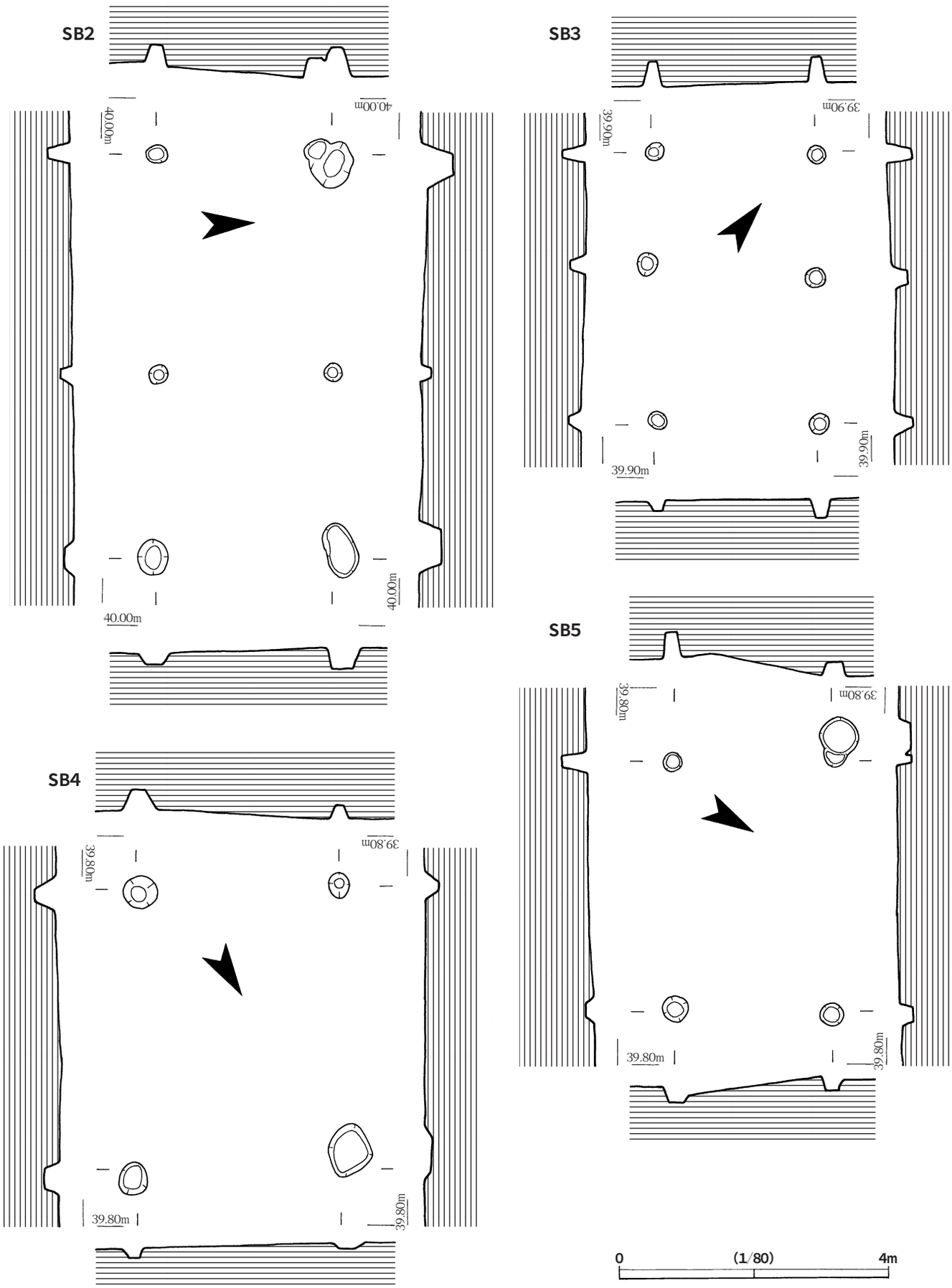
Ｂ区東端に位置する。１間×１間の建物で、棟方向はＮ39°Ｗである。建物規模は桁行5.08ｍ×梁行2.88ｍである。柱穴の規模は径32～44㎝、深さは40～52㎝を測る。３個の柱穴からそれぞれ１点ずつ土師器の小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

ＳＢ２（第48図）

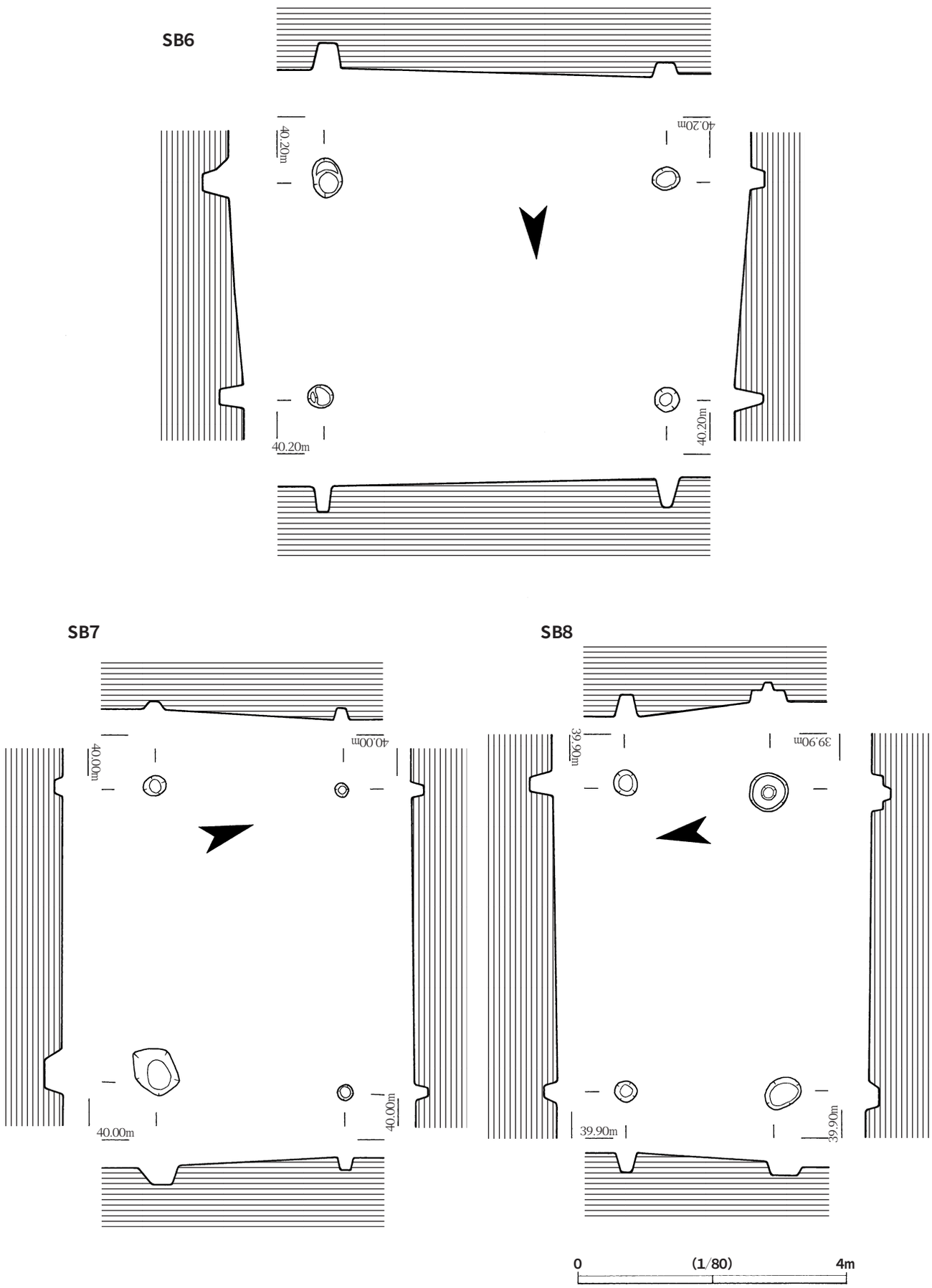
Ｂ区中央部に位置する。２間×１間の建物で、棟方向はＮ88°Ｅである。建物規模は桁行6.04ｍ×梁行2.60ｍである。柱穴の規模は径28～80㎝、深さは20～48㎝を測る。４個の柱穴から多数の土師器片が出土しており、この建物の時期は14～15世紀頃のものと比定される。



第47図　掘立柱建物跡実測図(1)



第48図　掘立柱建物跡実測図(2)



第49図　掘立柱建物跡実測図(3)

ＳＢ３（第48図）

Ｂ区中央部に位置する。２間×１間の建物で、棟方向はＮ40°Ｗである。建物規模は桁行4.08ｍ×梁行2.44ｍである。柱穴の規模は径28～36㎝、深さは20～40㎝を測る。１個の柱穴のみ土師器片が出土しており、この建物の時期は14～15世紀頃のものと比定される。

ＳＢ４（第48図）

ＳＢ2・3の西に位置する。１間×１間の建物で、棟方向はＮ62°Ｅである。建物規模は桁行4.20ｍ×梁行3.00ｍである。柱穴の規模は径36～84㎝、深さは12～32㎝を測る。２個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は15～16世紀頃のものと比定される。

ＳＢ５（第48図）

Ｄ区東側に位置する。１間×１間の建物で、棟方向はＮ25°Ｅである。建物規模は桁行3.72ｍ×梁行2.36ｍである。柱穴の規模は径28～76㎝、深さは16～40㎝を測る。３個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は13～14世紀頃のものと比定される。

ＳＢ６（第49図）

Ｄ区西側に位置する。１間×１間の建物で、棟方向はＮ78°Ｗである。建物規模は桁行5.08ｍ×梁行3.28ｍである。柱穴の規模は径36～60㎝、深さは24～44㎝を測る。２個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は14～15世紀頃のものと比定される。

ＳＢ７（第49図）

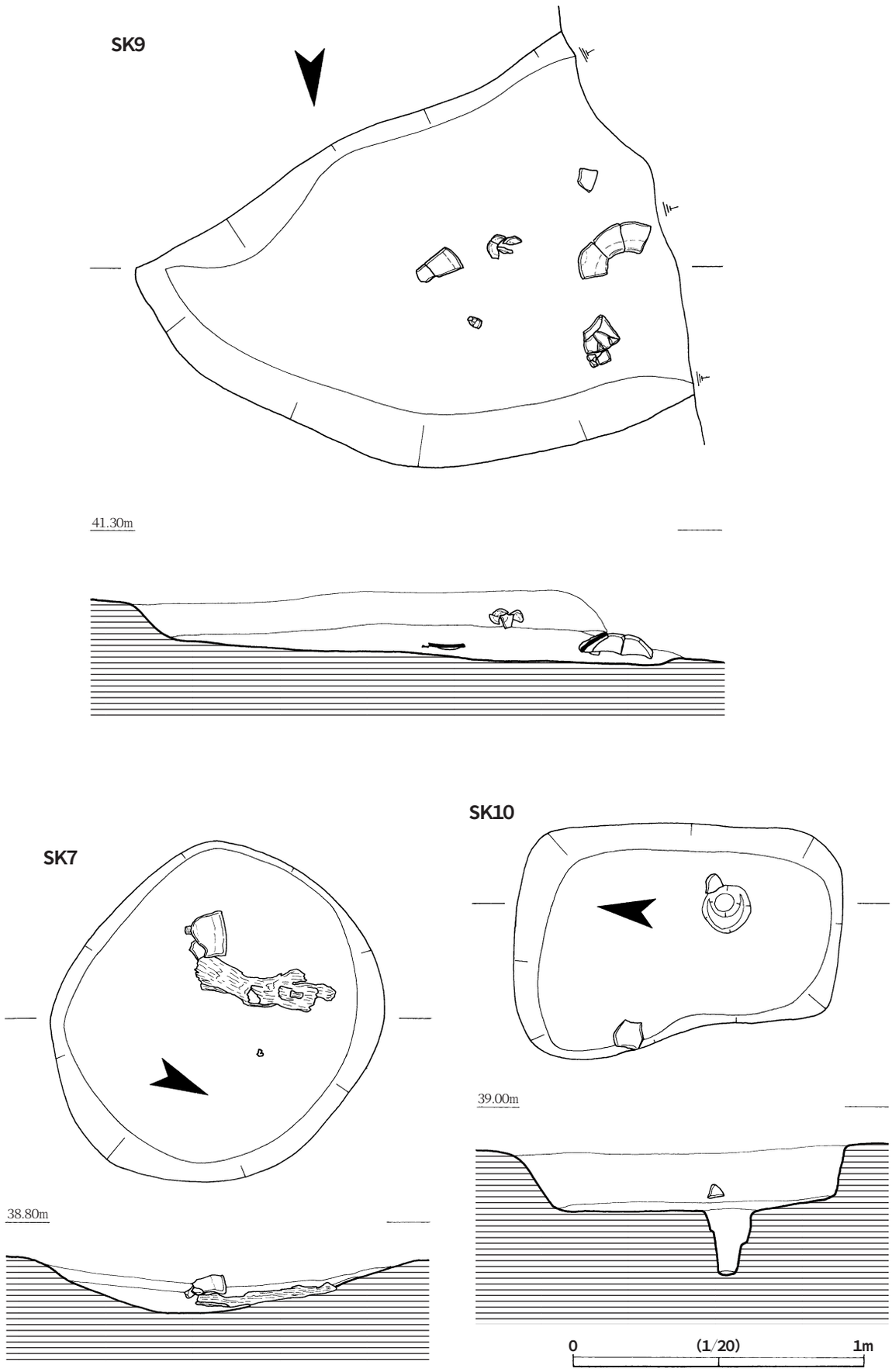
ＳＢ５と重なり合うように位置する。１間×１間の建物で、棟方向はＮ79°Ｗである。建物規模は桁行4.40ｍ×梁行2.80ｍである。柱穴の規模は径24～80㎝、深さは16～28㎝を測る。２個の柱穴から少量の土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

ＳＢ８（第49図）

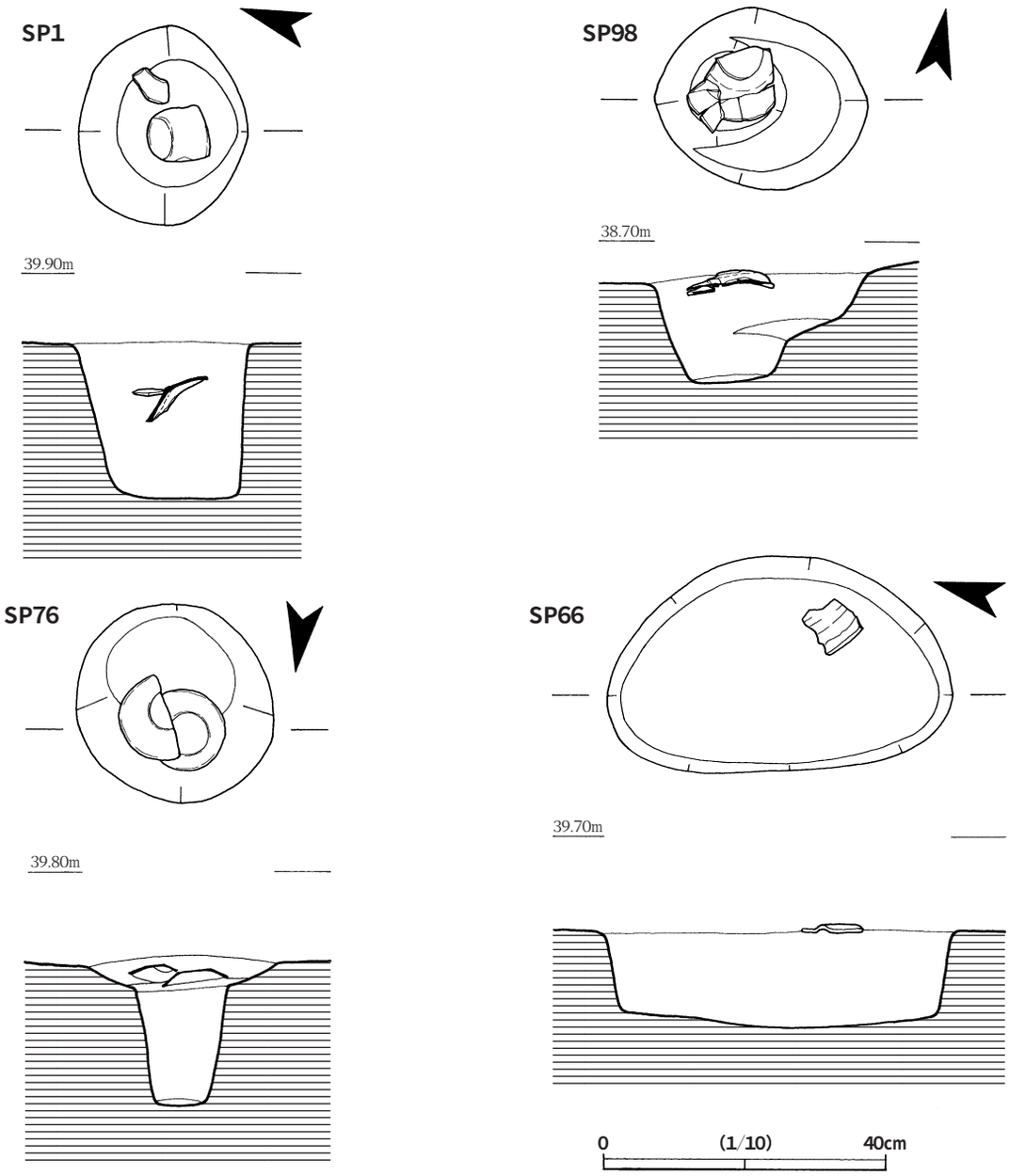
ＳＢ６とほぼ棟方向を同じくし、重なり合うように位置する。１間×１間の建物で、棟方向はＮ82°Ｗである。建物規模は桁行4.56ｍ×梁行2.20ｍある。柱穴の規模は径32～56㎝、深さは24～36㎝を測る。３個の柱穴から土師器片が出土しており、この建物の時期は15～16世紀頃のものと比定される。

第３表　掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	規模(間)	棟方向	柱間		出土遺物	時期
			桁行	梁行		
			建物の南東隅から(ｍ)	建物の南東隅から(ｍ)		
ＳＢ１	１×１	N39°Ｗ	5.08ｍ	2.88ｍ	土師器片	時期不確定
ＳＢ２	２×１	N88°Ｅ	6.04ｍ(2.72ｍ・3.32ｍ)	2.60ｍ	土師器片	14～15ｃか
ＳＢ３	２×１	N40°Ｗ	4.08ｍ(2.40ｍ・1.68ｍ)	2.44ｍ	土師器片	14～15ｃか
ＳＢ４	１×１	N62°Ｅ	4.20ｍ	3.00ｍ	土師器片	15～16ｃか
ＳＢ５	１×１	N25°Ｅ	3.72ｍ	2.36ｍ	土師器片	13～14ｃか
ＳＢ６	１×１	N78°Ｗ	5.08ｍ	3.28ｍ	土師器片	14～15ｃか
ＳＢ７	１×１	N79°Ｗ	4.40ｍ	2.80ｍ	土師器片	時期不確定
ＳＢ８	１×１	N82°Ｗ	4.56ｍ	2.20ｍ	土師器片	15～16ｃか



第50図　ＳＫ７・９・10実測図



第51図　ＳＰ１・66・76・98実測図

②　土坑（第50・52～55図、図版43・44・47～49）

今回の発掘調査でＡ区で１基、Ｂ区で４基、Ｄ区で９基、合計14基の土坑が確認され、特にＤ区では２基の縄文時代の土坑を検出した。埋土はほとんどが単層である。Ａ、Ｂ区においては不整形なものが多く、Ｄ区では円形のものが多い。以下、代表的な５例（中世３基、縄文時代２基）と縄文時代の「土器溜状遺構」を取り上げ、説明を加えたい。

ＳＫ７（第50図、図版43）

Ｄ区西端に位置する。円形で、規模は長径120㎝、短径102㎝、深さは約20㎝を測る。埋土は灰黄褐色粘質土（10ＹＲ4/2）の単層である。残度の高い瓦質の足鍋が埋土中から出土していることから、遺構の時期は16世紀後半と比定される。また、足鍋に伴ってかなり多くの炭化物も出土したが、用途は不明である。

ＳＫ９（第50図、図版43）

Ａ区北側の薄い包含層の下から検出された。埋土は灰黄褐色粘質土（10ＹＲ4/2）の単層である。最大幅1.30ｍで、遺構の西側は後世の開発によって削り取られている。土師質の捏ね鉢や杯が出土した。これらのことから遺構の時期は15世紀頃と比定される。

ＳＫ10（第50図、図版44）

Ｄ区東端に位置する。隅丸方形で、規模は長軸110㎝、短軸70㎝、深さ20㎝を測る。埋土は褐灰色砂質土（10ＹＲ4/1）の単層である。また、径15㎝、深さ23㎝の柱穴が検出された。その柱穴の中から遺物は検出されなかったが、埋土中から備前焼の甕の底部が出土している。このことから、遺構の時期は中世と比定される。

土器溜状遺構（第54・55図、図版47～49）

Ｂ区とＤ区の区界に位置する。縄文土器が意図的に廃棄されたと思われるこの範囲を大きくひとまとめとし遺構とした。中世の遺構面の下から、この遺構は検出された。南に緩やかに傾斜し高低差は約90㎝、上部にテラスを伴った擂鉢状の遺構である。また、埋土は最大幅約40㎝の６層からなり、上層から最下層に至るまで万遍なく多量の縄文土器が出土した。出土した遺物から、縄文時代後期前葉の土器溜状遺構であると考えられる。柱穴は23個検出され、約半数にあたる10個の柱穴から遺物が出土し、時期は縄文時代後期前葉と比定される。上部中央に溝のような遺構を検出したが、用途は不明である。また、底面より２基の土坑を検出した。以下に説明を加えたい。

ＳＫ13（第52・54図、図版48）

「土器溜状遺構」東側に位置する。円形で、規模は長径98㎝、短径80㎝、深さ38㎝を測る。埋土に大量の石が含まれていたため集石遺構かと思われたが、確定できず遺構の性格は不明である。遺物は円孔を伴った縄文土器の口唇部片が１点出土している。遺構の時期は縄文時代後期前葉と比定される。

ＳＫ14（第53・54図、図版48）

「土器溜状遺構」中央に位置する。長円形で、規模は長径2.56ｍ、短径2.04ｍ、深さ1.30ｍを測る。この遺構の掘り込みが１ｍを越えたあたりから湧水が激しくなったため、掘り込みを中断した。この遺構全体からはかなりまとまった数の土器が出土したが、それ以外の遺物や柱穴は確認できなかった。遺構の時期は縄文時代後期前葉と比定される。

③　柱穴（第51図、図版44～46）

今回の発掘調査では、掘立柱建物を構成するものも含んだ522個（縄文時代のものは23個）の柱穴が検出された。また、その中で234個の柱穴から遺物が出土した。以下、代表的な４例を取り上げ、説明を加えたい。

ＳＰ１（第51図、図版45）

Ｂ区西側に位置する。円形で、直径28㎝、深さ22㎝を測る。埋土は褐灰色砂質土（10ＹＲ4/1）の単層である。土師質の皿片と杯が出土しており、15～16世紀初頭の遺構と比定される。

ＳＰ66（第51図、図版45）

ＳＢ８を構成する柱穴の１つである。長楕円形で、直径49㎝、深さ14㎝を測る。瓦質の鍋の口縁部片が出土しており、15～16世紀頃の遺構と比定される。

ＳＰ76（第51図、図版46）

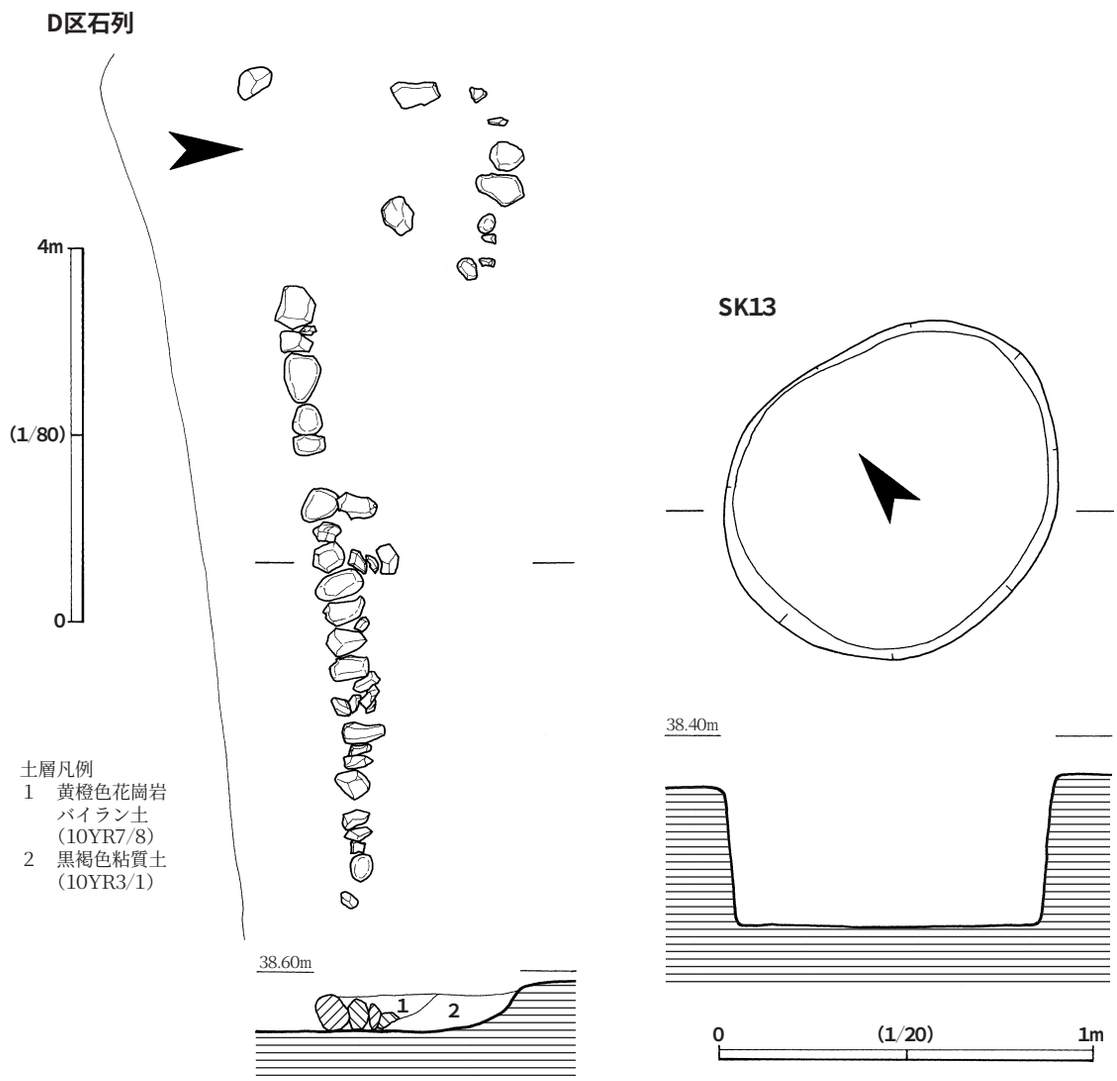
Ｄ区西側のＢ区との区界に位置する。円形で、直径29㎝、深さ22㎝の中段を伴った遺構。土師質のほぼ同型同大の杯が下向きの重なった状態で出土しており、遺構の時期は15世紀頃と比定される。

ＳＰ98（第51図、図版45）

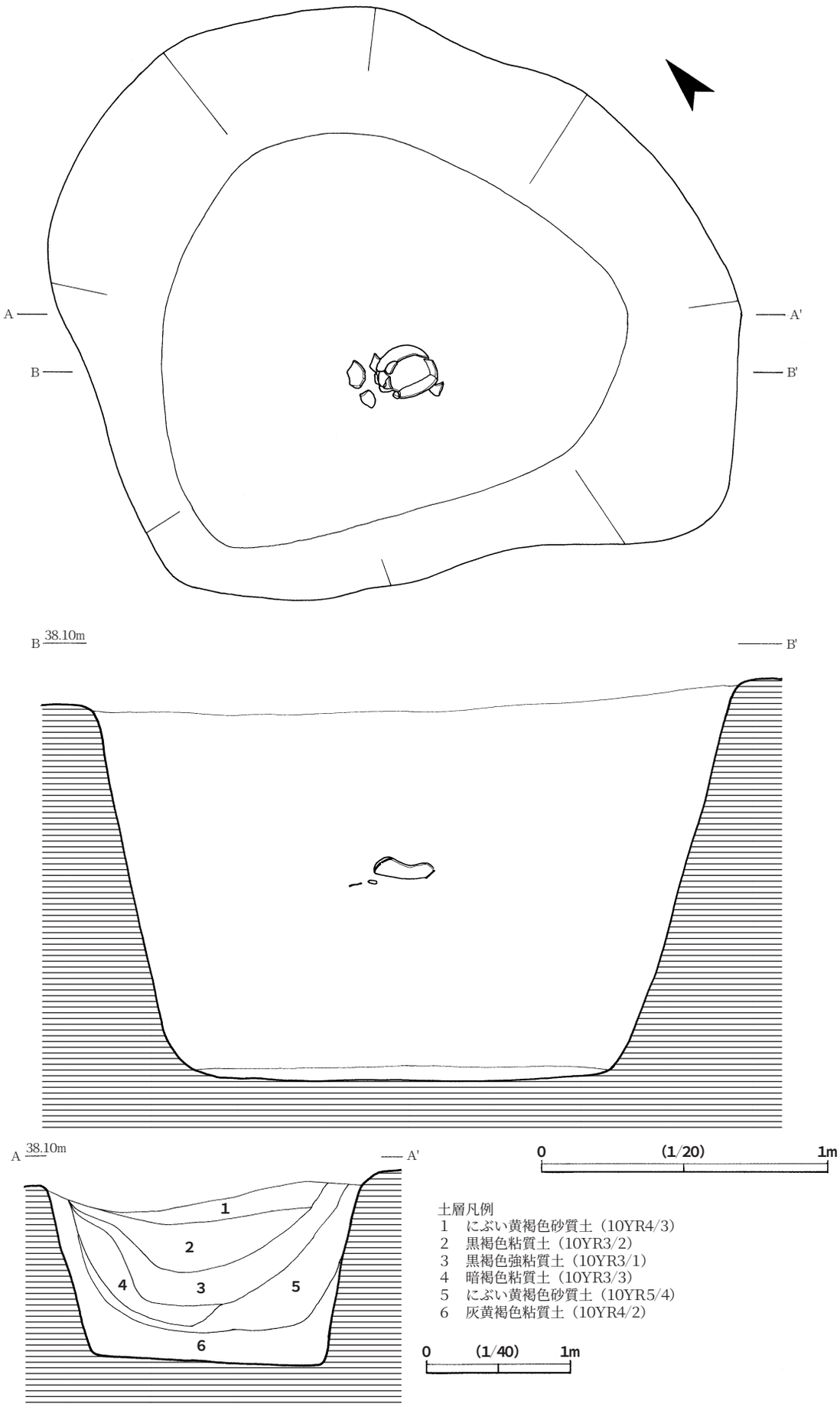
Ｄ区東側のＳＢ７の中に位置する。円形で、直径30㎝、深さ14㎝の中段を伴った遺構。土師質の杯が出土しており、15世紀頃の遺構と比定される。

④　石列（第52図、図版46）

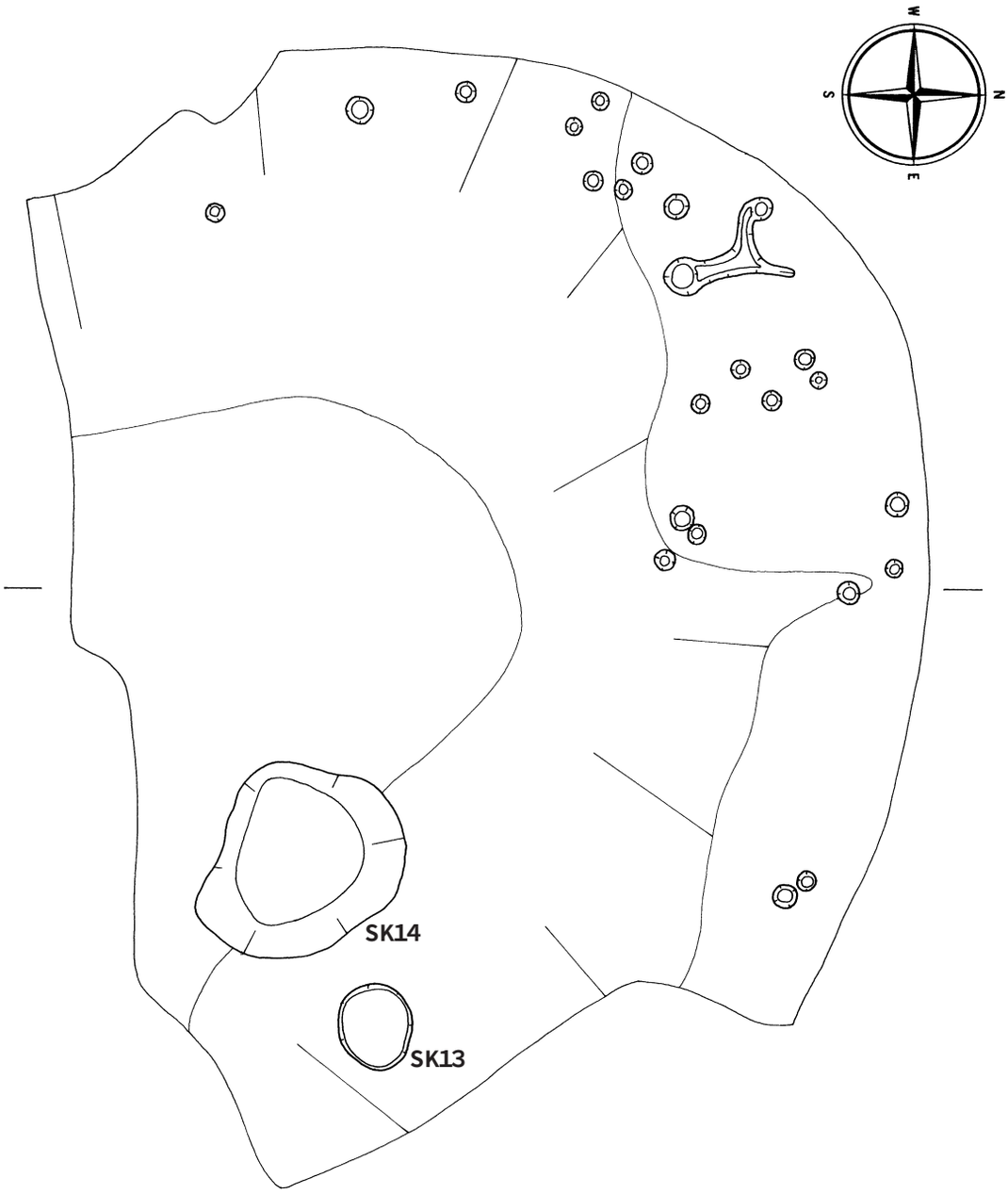
今回の発掘調査で、Ｄ区南端に東西に延びる約6.40ｍの石列を検出した。２層の整地土によって地山部分が広げられ、堰き止めるようにして石が置かれていた。大きさは20㎝弱程度で、しっかりとした組み方の石列ではない。検出した石列の続きを確認することもできず、Ｄ区南端部分だけのために設けられたのではないかと考えられる。このことから、中世以降の水田改修による石列と推測する。

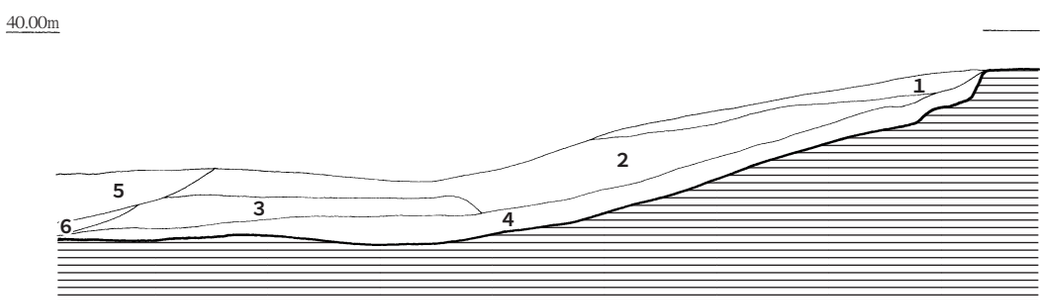


第52図　Ｄ区石列・ＳＫ13実測図



第53図　ＳＫ14実測図

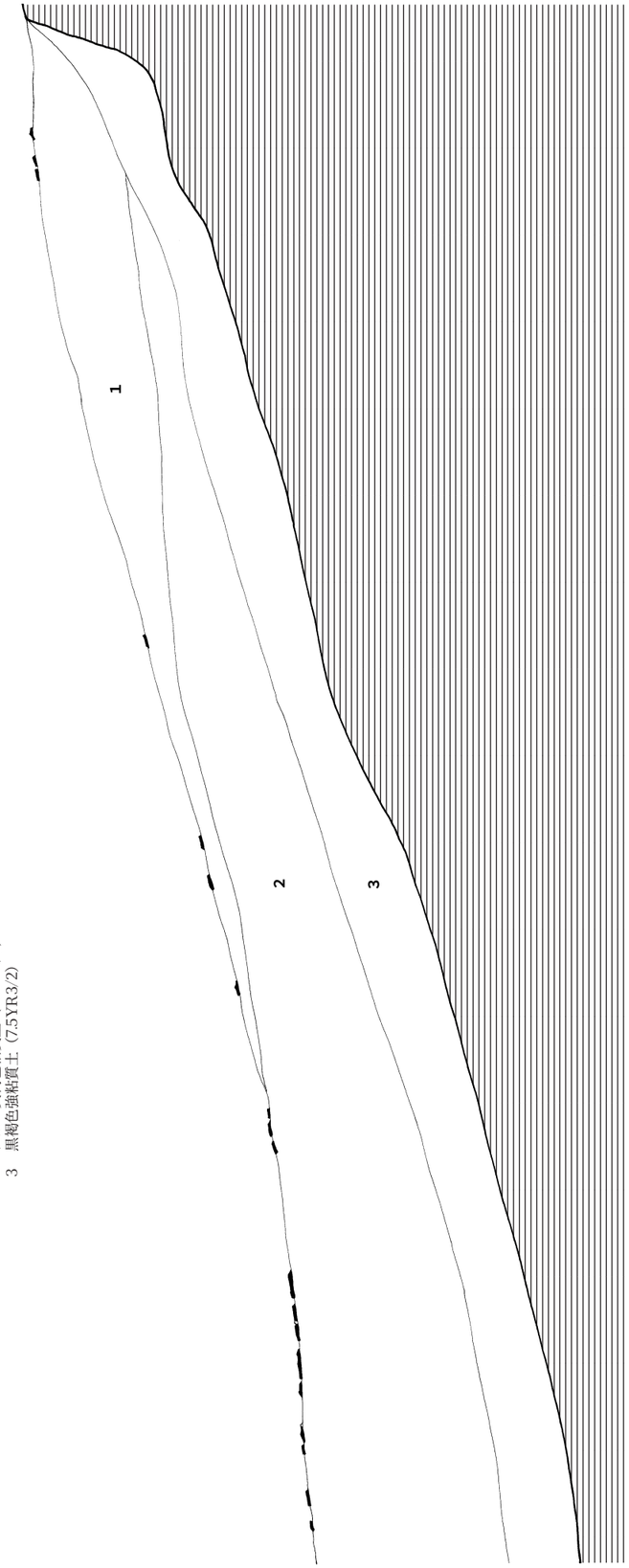




土層凡例
1　褐色粘質土（7.5YR4/6）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
（10cm大の礫を多く含む）
4　黒褐色強粘質土（7.5YR3/2）
5　灰黄褐色土（10YR4/2）
6　明黄褐色粘質土（10YR6/6）

0　(1/40)　2m

第54図　縄文時代遺構配置図



土層凡例
1　褐色粘質土（7.5YR4/6）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　黒褐色強粘質土（7.5YR3/2）

第55図　縄文土器出土状況実測図

⑵　遺物

弥生時代以降の土器　（第56図、図版50～52）

１～10・14は土師器皿である。小型で概ね口径６～８㎝、器高は１㎝前後である。２～７・14の底部外面には回転糸切り痕が残る。11～13・15～21・23は土師器杯である。体部がやや内湾気味に立ち上がる。12・13・15・16・19・21・23の底部外面には回転糸切り痕が認められる。全体的に色調は白色系で、器壁が薄い。粘土柱ミズビキ技法で製作されたものと考える。24～26・32は土師質土器である。24は鉢の口縁部である。25は捏ね鉢である。口縁部に注ぎ口が付く。26・32は鍋の口縁部である。32の内面と外面下半にはハケ目がみられる。22・27～31・33～37は瓦質土器である。22は鉢の口縁部である。27・28は擂鉢の口縁部である。内面にはオロシ目が施される。29・30は鍋の口縁部である。31・33～37は防長型足鍋である。31の外面下部には格子目タタキ痕がみられ、ススの付着が認められる。33は口縁部、34～36は脚部である。これらの足鍋は15～16世紀の所産である。38・40は陶器碗である。透明釉を施す。40は唐津焼で見込みに砂目がみられる。41は青磁皿である。内外面にはヘラ先による線描蓮弁文が施されている。高台内には釉剝ぎがみられる。39は陶器甕の底部である。内外面にナデ調整がみられる。44は弥生時代中期の小型の壺形土器である。口縁部はくの字状に屈曲し、最大径は胴部中位にある。胴部から底部にかけて黒斑がみられる。42は土師器甕のくの字状の口縁部である。43は土師器高杯の脚柱部である。柱実である。

石器・石製品（第73・74図、第４表、図版74）

石鏃（276～278）

276～278は打製石鏃である。276・277は凹基無茎式石鏃である。表裏面に丁寧な押圧剝離により形態加工しており、素材面を残さない。278は未製品で、基部の形成は行われていない。277・278は土器溜状遺構からの出土である。石材には276・278に安山岩、277に姫島産黒曜石が用いられている。

打製石斧（279・280）

279は砂岩製、280は玄武岩製の打製石斧である。280は形態が撥形の扁平打製石斧である。いずれも土器溜状遺構からの出土である。

磨製石斧（281～291）

欠損品が多く即断はできないが、断面が楕円形で、頭部が細く棒状を呈し、蛤刃であるいわゆる乳棒状磨製石斧が多く含まれていると考える。縄文時代で最も一般的な磨製石斧であり、当遺跡の主要時期とも一致する。281～288・290は縄文時代後期前葉に位置付けられる土器が多数検出された土器溜状遺構より出土している。288は磨製石斧を直接打撃により再加工している。291は刃部が欠損しており、欠損部に敲打痕がみられる。破損後に敲石に転用されたのであろう。283は身幅の狭い小型の両刃石斧か。281・284～287・289・291は玄武岩製で、282・288・290は凝灰岩製、283は泥岩製である。

温石（292）　Ｄ区ＳＰ178出土の滑石製の温石である。１孔を有する有孔方板状石製品である。

第４表　石器・石製品観察表

番号	器　　種	石　　材	形態加工	備　　考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
276	凹基鏃	安山岩	押圧剥離		29.0	20.4	3.9	1.4
277	凹基鏃	姫島産黒曜石	押圧剥離		23.3	14.3	3.8	0.7
278	石鏃未製品	安山岩	直接打撃		27.5	17.8	6.8	2.2
279	打製石斧	砂岩	直接打撃＋敲打		112.3	65.8	39.6	299.4
280	打製石斧	玄武岩	直接打撃	風化顕著。	109.2	58.0	16.7	153.7
281	磨製石斧	玄武岩	直接打撃＋敲打	風化顕著。	65.3	38.2	20.8	61.9
282	磨製石斧	凝灰岩	敲打		65.4	43.7	30.6	88.7
283	磨製石斧？	泥岩	研磨	右側辺から直接打撃で再加工。	55.8	27.4	13.3	25.2
284	磨製石斧	玄武岩	直接打撃＋敲打		57.9	60.7	25.7	121.1
285	磨製石斧	玄武岩	敲打＋研磨	風化顕著。	49.0	53.5	16.7	36.8
286	磨製石斧	玄武岩	直接打撃＋敲打＋研磨	風化顕著、縦斧。	92.8	55.5	29.7	202.7
287	磨製石斧	玄武岩	直接打撃＋敲打＋研磨	風化顕著、縦斧。	93.4	50.9	26.9	162.8
288	磨製石斧	凝灰岩	直接打撃	磨製石斧を再加工、表面風化顕著で研磨痕不明瞭。	85.4	57.2	32.9	227.5
289	磨製石斧	玄武岩	直接打撃＋敲打	風化顕著で刃部の研磨痕不明瞭。	140.7	50.2	24.3	205.3
290	磨製石斧	凝灰岩	敲打	被熱資料。	107.8	60.3	42.7	381.0
291	磨製石斧→敲石	玄武岩	直接打撃	端部に敲打痕、風化顕著、磨製石斧を敲石に転用。	127.4	56.0	38.2	383.9
292	温石	滑石	不明	被熱顕著。	76.9	72.9	23.9	168.0

縄文土器（第57～72図、図版53～73）

下関市（旧豊北町）的場遺跡における2004年度の調査では、Ｂ・Ｄ区下層で多量の縄文遺物が出土した。時期的には、以下述べるように僅か１点の例外（月崎下層式小片）を除いて全て縄文時代後期前葉に限定されており、その出土状況が示唆するように、極めて短期間のうちに多量廃棄されたかの様相を呈している。土器型式には連続する若干の時期幅が確認されており、遺構の性格についてはなお慎重に議論する必要があろうが、ここではＢ・Ｄ区斜面テラス上付近において一括出土した土器群を「土器溜状遺構」と仮称し、その土器内容について述べていきたい。なお、同遺構底面より土坑ＳＫ13、ＳＫ14が検出されているが、それら出土遺物との時期差は全く認められなかったため、ここでは土器溜状遺構出土土器と合わせて報告することにした（ＳＫ13：168、ＳＫ14：115・135・136・170・173・174・203・217・218・227）。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、壺形、注口土器からなり、多孔底土器は全く含まない。文様系統は磨消縄文系（第Ⅰ群）、沈線文系（第Ⅱ群）、刻目隆帯文系（第Ⅲ群）、集約沈線文系（第Ⅳ群）、無文系（第Ⅴ群）に大別される。九州阿高系土器は全く確認していない。以下、深鉢・鉢、浅鉢、壺形、注口土器の順に述べるが、底部片については各型式との対応が不明瞭であるため、浅鉢の記述ののち、一括して扱うことにした。

深鉢・鉢（45～196）

深鉢・鉢は全器種中の89.7％を占める（口縁部個体識別法：宇野1992）。文様系統は、磨消縄文系（第Ⅰ群）、沈線文系（第Ⅱ群）、刻目隆帯文系（第Ⅲ群）、無文系（第Ⅴ群）が識別できた。また混在資料として唯一、月崎下層式第２類土器１点を確認しているが（潮見1968）、小片のため、今回図示することはできなかった。

45～51は磨消縄文系（第Ⅰ群）中津式土器。いずれも中津Ⅰ式新段階（玉田1989・1990）以降の資料である。縦位展開の紡錘文を主文におく45・46は同一個体とみられる。波頂部口唇には垂下縄文帯間に刻目を加えている。48もまた横帯から垂下する紡錘文状のモチーフが窺えるが、詳細意匠は不明である。調整は、46が巻貝条痕後撫で、48が二枚貝条痕後撫でで、47の内外面には山陰東部～近畿北部で顕著な板状工具による細密条痕が用いられている（横山1978・1979、谷口2004）。45内面、49外面は磨滅が著しく、調整は不明である。

52～54は概ね中津Ⅱ式併行期に伴う沈線文系（第Ⅱ群）土器。いずれも横長Ｊ字文等を主文におく横位展開を基調とし、文様の多段化傾向が窺える。52内面、53外面には一部巻貝条痕が残る。

55～63は磨消縄文系（第Ⅰ群）福田Ｋ２式土器。三条沈線の例はないが、細い二条縄文帯が横位基調で交叉連繋する58・59や、胴部主文の発達する62・63は新相と捉えるべきであろう。58の縄文部には無節Ｒｌ とＬｒが交互に充填施文されている。60は口縁が逆く字状に屈曲し、口縁部文様帯が独立化傾向にある新相の例で、頸部内面には、四国西南部において顕著な鋭い屈曲稜線を有している。原則として、器表面には磨き調整が施されている。

64・65は深鉢注口部。64の口唇には一条の単独沈線が、65の外面には工字状の細い二条縄文帯が描かれ部分的に短節ＲＬ縄文が浅く充填施文されている。

66～110は第Ⅲ群刻目隆帯文系、およびその系譜上にある未命名類型の土器。二枚貝腹縁を原体と

する狭義コウゴー松式は皆無である（秦2000）。第Ⅲ群は４類に細分可能である。刻目隆帯文系Ⅲ－１類は口唇部に並行し、やや下がった位置に段状ないし微隆帯を設け、そこに連続した刻目文を施す例のうち、口唇にも刻目等を有する例（66～70・73～79）。拓影のように円形刺突文を主とするが、71のみヘナタリ属小巻貝の腹部押捺による。66は部分的であるが、やや肥厚した口唇上に右斜位（右斜下方向）の太い刻目文が僅かに窺える。波状縁を成す例では二条上下の刻目帯を連絡し、垂下する刻目帯を配する例（67～69）、浅い凹点文を有する例（73・74）が主流で、口唇に刻目のない71・72にも後者と同様の凹点文が窺える。75、および76は口唇にハ字状の連続刻目文が配される例。刻目のモチーフ自身は周防灘周辺で散見されるものである。76内面には、四国西南部において顕著な鋭い稜線一条が看取される。78・79は口唇部が内外に大きく肥厚し、文様が横走沈線と刻目文の組合せ（以下、刻目横線文と仮称）となる、縁帯文成立期段階に相当する例で、頸部に無文帯を発達させている。刻目帯は頸胴部界線上に位置するようになり、径３㎜の小振りな円形刺突を、極めて退化した微隆帯上に施している。器面調整は、67内面、および78・79が巻貝条痕、69外面が板状工具による細密条痕、67外面・68・70～73・77が巻貝条痕後撫でである。

刻目隆帯文系Ⅲ－２類は口縁部が幅狭に肥厚ないし段状に屈曲し、その端部上縁付近に刺突、ないし刻目文を配する一群（80～90）。月崎上層Ⅰｃ類（潮見1968）や、中村友博が問題提起した仮称、屋敷式（中村1999）と極めて類似する。Ⅲ－１類のように口唇に刻目等を付加する例は稀有である。刻目原体にはヘナタリ属小巻貝を用いる例が圧倒的に多く、注目される。うち80～85は回転押捺、86は巻貝尾部による刺突である。87～89はハ字状の刻目文が連続施文されている。調整は全て巻貝条痕で、うち81外面・82・83・85・87内面・88・90内外面には撫で調整が加えられている。

刻目隆帯文系Ⅲ－３類は口縁部外縁端に刻目を付す例で（91～106）、無文系口唇刻目土器との峻別が困難な場合もあるが、本遺跡資料の特徴を成す類型のため、ここでは特別にⅢ－３類として扱った。これまでに下関市神田遺跡、山口市屋敷遺跡、北九州市勝円Ｃ遺跡、永犬丸遺跡、中縄手遺跡、小倉城下屋敷跡、鞍手町新延貝塚、古賀市川原西遺跡、豊後高田市森貝塚などにおいてその出土を確認していたが、纏まった出土事例は今回が初めてである。文様帯強調のため口縁端部外縁を肥厚、ないし内弯屈曲させる例が多い。刻目・刺突原体には例外的に竹管小口部を用いた例（91）、ヘナタリ属小巻貝の回転押捺（92・103）、押引（93・94：同一個体）例が認められるが、多くは棒状工具による。器面は、いずれも巻貝条痕、ないし条痕後撫でによって仕上げられている。

刻目隆帯文系Ⅲ－４類は口縁端部外面、ないし外縁に刻目沈線系統のモチーフを描く例で（107～110）、松ノ木式に代表される縁帯文成立期土器との関連を考慮するうえで興味深い。棒状工具による施文を基調とするが、うち107の小円形刺突はヘナタリ属小巻貝の頂部を原体としている。

111～140は縁帯文成立期に相当する深鉢・鉢形土器。磨消縄文系を基調に沈線文系、刻目隆帯文系との融合化を果たしている。111は口唇に一条の横走沈線を配し、端部外縁にはヘナタリ属の回転押捺によるハ字状の刻目が、頸部下半には沈線文系に特徴的な浅く太い横走沈線が計４条、粗雑に描かれている。このほか114・118・119にも巻貝回転押捺、117の円形刺突は巻貝尾部を原体としている。115の波頂部には幅４～５㎜の太い沈線で渦状の立体意匠が施され、頂部には竹管状工具による小刺突が加えられている。121は口唇主文部が平縁を成す例で、下弦弧状のモチーフが想定される。両翼

外縁には細かな刻目が付されている。本例と118は内外色調が橙色（５ＹＲ6/8）を呈しており、瀬戸内南西方面からの搬入の可能性がある。128～129は波頂部が拡張し外傾屈曲する例で、いずれも中央には径1.5㎝前後の貫通孔が穿たれている。これらには把手的機能を有した可能性がもたれる。なお、129の口縁部外面には浅く細やかな短節ＬＲ縄文が部分的に施文されている。130は内面施文形の例で、本遺跡では唯一の出土事例となる。楕円形区画文を幹線に上縁には刻目、下縁には深い小円形刺突文が配されている。131～140は胴部片。131の縄文原体には無節の太いＬｒ縄文が、133・135・136には巻貝擬縄文が用いられており（うち135・136は同一片）、該期としては特異である。139・140は胴部上半の全面に縦位短沈線文が連続施文される例で、北陸方面を起源とするモチーフの可能性が挙げられる。なお140の刺突部地文には短節ＲＬ縄文が施されている。

141～151は無文系深鉢・鉢のうち口唇に刻目や沈線文を付加する例。141はハ字状刻目、143～146・148はヘナタリ属小巻貝の回転押捺による。151は口唇上に横走沈線を施す鉢形の例で、波頂部において「ノ」字状に端部が遊離している。口径は推定27.8㎝である。器面は、141・143・145・149外面が撫で、147は幅広工具による磨きで、その他は巻貝条痕ないし巻貝条痕後撫でによって仕上げられている。

152～174は全く意匠を伴わない無文系深鉢・鉢のうち、波状縁ないし突起状口縁を呈する例。152は注口状突起を伴う無文系としては稀有な例で、中津Ⅰ式新段階～同Ⅱ式に相当するものと推察される。153は端部が緩く不規則、かつ短い振幅を成す波状縁の砲弾形深鉢で、口径は推定で29.4㎝を測る。瀬戸内地方では中期船元式段階からみられる形態であるが、本例は内外面とも巻貝条痕が明瞭であり、その出土状況から判断しても後期初頭中津式段階に収まる可能性が強いであろう。154～158・160は波頂部が鋭い三角形状を呈する例で、大分県コウゴー松遺跡など、九州東北部の後期前葉段階に一定量散見される形状である。これらのうち160は内外色調が赤褐色（2.5ＹＲ4/8）を呈しており、瀬戸内西南部方面からの搬入の可能性が考慮される。163・165・166は頸部が強く外反、ないし屈曲する例で、口唇はいずれも肥厚する。福田Ｋ２式新段階～縁帯文成立期段階の資料と推定される。調整は巻貝条痕、ないし条痕後撫でを主体とするが、155・156・164は幅広工具による磨き、162は内外とも板状工具による細密条痕が採られており、東西双方の広域的な製作技法上の交流が指摘される。167～174は口唇が肥厚し、リング状突起や円孔を有する例で、169・170を除き紐等を伴った把手様機能が想定される。概ね縁帯文成立期に相当するだろう。器面は168～171については磨滅不明、167・173・174は撫で、172は巻貝条痕後撫でである。

175・177は平縁であるが、口唇が強く肥厚し、頸部の外反する器形から推察して、上記163・165～174とはほぼ同時期であると捉えることができる。

178～196は平縁の無文系深鉢・鉢。178は口径31.4㎝を測るほぼ完形の例で、本遺跡では大型の器体となる。内外面とも撫で調整によって仕上げられている。当該地域周辺、すなわち山陰地方～玄界灘周辺、および瀬戸内西部（芸予諸島以西）に多い器形である。本遺跡でも砲弾形を呈すると予想される例は無文系深鉢の過半数に達する。179～185は砲弾形を呈する深鉢、ないし鉢形の例である。器面は撫で調整による185を除いて、いずれも巻貝条痕、ないし巻貝条痕後撫でによって仕上げられている。なお185の胎土には角閃石の含有が顕著に認められた。186～189は口縁の強く内弯する鉢で、

うち188の推定口径は23.0㎝を測る。器面は186が撫で、188は削りによる擦過を伴う撫で、199は巻貝条痕後撫でである。187は粗い指頭圧痕と同擦過を伴う例で、山陰地方に多い調整手法である。色調はにぶい橙色（7.5ＹＲ6/4）を呈している。188の胎土中には角閃石が、189には水晶、花崗岩の混和が顕著に認められた。

190～196は頸部に屈曲を有する深鉢・鉢。190は長胴かつ頸部の短く外反する例で、口径は24.4㎝を測る。191は推定口径29.3㎝、口縁が直口し、器高のやや低平な例。なお190・191の内外面はともに巻貝条痕後撫でによって仕上げられている。192は推定口径25.5㎝、口頸部が長く外傾する例で、内外ともに巻貝条痕が顕著である。以上190～192は福田Ｋ２式～縁帯文成立期に相当する。

193は頸部内面に鋭い一条の稜線を有し、口縁の短く内弯する例で、口径は27.2㎝を測る。内外面とも巻貝条痕後撫で、胎土中には角閃石を特徴的に含む。色調が明赤褐色（５ＹＲ5/8）を呈しており、瀬戸内南西部方面からの搬入の可能性がもたれる。福田Ｋ２式段階に相当すると考えられよう。194は口径31.8㎝を測る当該遺跡では大型の鉢で、器高19.8㎝、底径13.3㎝と、ほぼ完形に復元された。頸部で緩やかに屈曲外反し、底部は凹底に仕上げる。内外面ともに巻貝条痕が顕著である。195は口径17.2㎝、器高約15.5㎝と推定される小型の鉢で、頸部で強く屈曲し、口縁が外傾直口する。福田Ｋ２式～縁帯文成立期に多い器形である。内外面とも磨滅が著しいが、一部巻貝による横位擦過痕が遺存している。196は外面を縁帯状に肥厚させる例で、外面は撫で、内面には巻貝条痕が顕著に残されている。刻目隆帯文系に伴う無文系深鉢と推定されるが、無文深鉢・鉢総数（口縁部）559点中、この外面肥厚タイプは僅かに３点（0.5％）であった。周防灘周辺域以南との小地域差を反映している。

浅鉢（197～224）

浅鉢は全器種中の10.3％を占める（口縁部個体識別法：宇野1992）。器形的には中華ナベ形（Ｇ類）と皿形（皿Ｂ類）が主流で、ボウル形（Ｆ類）が一定量、緩「く」字状（Ｄ類）や瀬戸内の福田Ｋ２式段階に顕著な内傾屈曲口縁の浅鉢（Ｃ類）は、当該遺跡では原則として存在しない（分類：幸泉2004ｃ）。文様系統では無文が86.8％（口縁部計73点中）で圧倒的主体を占める。有文では器面調整の丁寧な磨消縄文系（第Ⅰ群）が主流で、沈線文系（第Ⅱ群）、刻目隆帯文系（第Ⅲ群）、集約沈線文系（第Ⅳ群）の割合は極めて少ない。

197～205・207・211は磨消縄文系（第Ⅰ群）浅鉢である。211以外は全て福田Ｋ２式併行期に相当する。197は口径35.3㎝を測る大型の浅鉢で、口縁が強く内傾する。口縁部には枠状の区画文が、胴部には大振りの鉤手状Ｊ字文が横位連繋によって繰返し描かれている。縄文原体は短節ＲＬ、無文部および内面には丁寧な幅広工具による磨き調整が加えられている。198もまた同等の器形を採る浅鉢で、縦位橋状の把手が貼付けられ、口縁両翼には弧状縄文帯が、胴部には横長鉤手状の連繋意匠が描かれている。器面は内外とも幅広工具により丁寧に磨かれている。199～201は口縁端部を欠き、全形が皿状を呈する例。うち201は僅かながら破面外縁に屈曲稜線が残されており、短い外反口縁をさらに付設して、本来は鋭い「く」字状口縁を呈していたものと予想される。内面には浅い隆帯による「の」字状意匠が施されている。

202～204は大型皿状を呈する例で、頸部内面にはいずれも段状の稜線が設けられている。口唇部には一条の横走沈線が配されており、204の例から何らかの主文が施されていたものと推定される。器

面は内面側を中心に巻貝条痕後磨き調整が加えられている。205・207は中華ナベ形を呈する例で、T字状に肥厚する口縁端部外縁において二条沈線刻目帯が描かれている。207例から主文部には下弦弧状文等のモチーフが配されていたものと推定される。211は外面が縁帯状に肥厚するボウル形浅鉢で、本遺跡では唯一の出土事例となる。縁帯部意匠は上縁の開放する区画文を主文に下弦弧状の意匠で連繋しており、区画外には短節ＬＲ縄文が施されている。縁帯文成立期に相当する。

206は刻目隆帯文系（第Ⅲ群）浅鉢で、本遺跡では唯一の出土例である。やや肥厚した口縁部の外縁側に連続した直刻文を施文する。調整は粗雑で、外面は粗い撫で、内面には密な巻貝条痕を加えている。208～210は四国南中央域に分布する松ノ木式に特徴的な集約沈線文系（第Ⅳ群）、あるいはその系譜上にある例。208はボウル状を呈し、ヘナタリ属小巻貝による擬似縄文地に連続する弧状沈線の描かれる例で、器形および意匠に幾分、第Ⅳ類との類縁性が窺える例。209・210は器面を幅広工具により平滑に磨き上げる集約沈線文系（第Ⅳ群）浅鉢で、重畳する菱状、あるいは横走沈線文が連続施文されている。これらは縁帯文成立期に相当する。

212～224は無文系（第Ⅴ群）浅鉢。うち212～217は口唇に刻目等を付す例。212は口径23.0㎝、器高9.8㎝、底径9.0㎝を測る厚く深手の例で、口唇は平縁であるが、推定四箇所において五回前後の小刻目を付している。器面は内外とも巻貝条痕後撫でである。213～215は皿形の例。調整は213が巻貝条痕後撫で、214・215は二枚貝頂部による肌理細かな条痕を施す例で（中村2003）、出雲地方周辺で比較的多く認められる手法である。216・217は中華ナベ形の例。いずれも緩やかな波状縁を呈する。調整は巻貝条痕によるが、217内面については幅広工具による丁寧な磨き調整が加えられている。なお217口唇の付加文はヘナタリ属小巻貝による擬似縄文である。

218～224は完全な無文浅鉢である。218はボウル形、219～221は中華ナベ形、222は緩「く」字状、223・224は皿形を呈し、うち221は口縁部内面が縁帯状に肥厚する。器面は219・222が内外巻貝条痕後撫で、220・223が巻貝条痕後磨き、221・224は幅広工具による磨きによって仕上げられている。法量は、220の口径が27.6㎝、224は口径19.5㎝、器高3.3㎝、底径11.1㎝、223は口径38.7㎝、器高11.6㎝、底径9.8㎝を測る。なお224については内面に稜線を伴うやや特異な小皿形に復元したが、本来蓋形となる可能性が残されている（幸泉2004ｃ）。

底部（225～266）

225～260には深鉢・鉢底部、261～266には浅鉢底部片を纏めた。225～235は平底。うち225～228・230～232・235は中央が極めて浅く（３㎜以内）凹む平底Ⅱ類（幸泉2002ａ・2002ｂ・2003・2004ａ）で、平底の主体を占める。229～231は円盤部の器壁が厚く、うち229・230は外縁が僅かに張るなど、九州北部、特に遠賀川以西の製作技法に近い。器壁が薄く外縁を意図的に拡張させる234については、北九州市周辺域からの影響が想定されよう。底径は、順に9.5㎝、9.9㎝、12.8㎝、13.3㎝、11.0㎝、11.0㎝、10.7㎝、12.5㎝、12.5㎝、13.8㎝、11.4㎝である。径９～12㎝に収まる例が全平底中の64.1％を占めた。236～255は高台底。外縁隆帯はハ字状に張る例が多いが（236～238・240・241・244～247・250・251）、隆帯高５㎜未満の例が殆どであり、石見西部～広島湾沿岸周辺地域とはこの点が異なっている。

252～255は山陰地方中部、出雲周辺に多い低平高台で（幸泉2004ａ）、本遺跡においても一定量の

出土を確認している。底径は順に10.7㎝、11.1㎝、11.7㎝、10.4㎝、7.8㎝、8.6㎝、9.2㎝、10.2㎝、11.0㎝、10.4㎝、11.0㎝、11.6㎝、10.3㎝、11.0㎝、12.2㎝、13.4㎝、11.3㎝、12.5㎝、11.4㎝、10.0㎝である。径９～12㎝に収まる例が全高台底中の71.2％を占めた。256～260は凹底。256は外縁に明瞭な断面三角形の粘土紐を貼付ける例で、底径は6.3㎝と小型である。257～260は平底Ⅱ類と製作技法が酷似する例で、本遺跡出土の凹底は、殆どがこのタイプである。ここでは深さ３㎜以上の例を便宜上、凹底と分類している。底径は257から順に9.2㎝、9.4㎝、10.8㎝、9.7㎝である。

261～266は浅鉢底部。261は外縁を僅かに隆起させる低平高台、262～264はいずれも高台底である。器面は261が巻貝条痕後磨き、262～264は磨きによって仕上げられている。底径は、順に8.9㎝、10.5㎝、10.5㎝、10.9㎝である。265・266は丸底片。内外とも撫でによって仕上げられている。浅鉢丸底の出土総点数は僅か３点であり、全浅鉢底部中の4.3％を占めるに過ぎない。

壺形土器・注口土器（267～274）

267～273は壺形土器片。全器種組成中に占める割合は僅か0.1％である。267は無頸の広口壺で、幸泉分類の壺Ｄに相当する（幸泉2004ｃ）。外面には区画状沈線文が描かれている。268は胴部が算盤玉状に鋭く張る例で、上半の二条ＬＲ縄文帯下には極細線による浅い矩形の意匠が連続施文されている。269～273は把手片。縦位貫通孔を有す269・270、横位貫通孔の271・272、貫通孔のない273に分類できる。270は凹線と低い隆帯、273は刺突と沈線を組合わせた施文である。274は縁帯文成立期前後に相当する注口部片である。注口部全長3.5㎝、外径1.8㎝、開口部内径は７㎜と小振りである。外器面は撫で調整によって仕上げられている。

「的場遺跡土器溜状遺構出土縄文土器の学史的意義」

以上、下関市的場遺跡で検出された土器溜状遺構出土資料を中心に説明を加えてきた。帰属時期は僅か１点の例外（月崎下層式小片）を除いて、全て縄文後期前葉に限定された。型式学的には福田Ｋ２式併行～縁帯文成立期が圧倒的主体であり、若干の中津Ⅱ式土器を含んでいた。これらのなかで、本遺跡においては、まず刻目隆帯文系（第Ⅲ群）土器の成果を挙げねばなるまい。未報告資料を含めた有文深鉢・鉢の組成比（口縁部識別法）によると、Ⅰ：Ⅱ：Ⅲ：＝31.3：4.2：64.6（％）で、周辺諸遺跡の例に比べ、第Ⅱ群沈線文系土器の割合の低さと、第Ⅲ群刻目隆帯文系土器の卓越を指摘できる。従前より、この刻目隆帯文系土器が瀬戸内西部～九州東北部地域において比較的多く発見されることが知られており、四国西南部の宿毛式、九州東内陸部のコウゴー松式それぞれの一翼を成す類型として、古くから認識されてきた。あるいはまた、両型式が九州御手洗Ａ式のプロトタイプとして同古段階とする見解も以前に出されている（西脇1990）。しかしながら、前者の宿毛式は二条縄文帯を地文に、また後者のコウゴー松式の場合、厳密には二枚貝腹縁圧痕を原体にするなど、小地域的差異が顕著であり、地域間関係の解明が課題となっていた。

幸泉は文様系統の再整理から刻目隆帯文系という包括的名称を提起し、瀬戸内西部域における同系統の再整理を行ったが、当時の資料不足から系譜関係、および地域間関係について充分言及することができなかった（幸泉1999）。同年、中村友博は中四国縄文研究会香川大会において山口県下出土の刻目隆帯文系土器をもとに、屋敷式の仮設定と問題提起を行ったが、標式とすべき土器が小片僅か数

点であることに加え、組成比上の割合が不安定で、さらに磨消縄文系ほか他系統との共伴関係すら明らかでないなど、独立型式設定を議論するには、より充実した標式資料の存在が不可欠であった（中村1999）。

そうした中、今回下関市的場遺跡において後期前葉段階に限定しうる短期形成の土器溜状遺構が検出され、該期資料が多量に得られたことは、非常に大きな成果であった。器種、文様系統の概要はこれまでに述べてきた通りであり、第Ⅲ群刻目隆帯文系に関してみても、巻貝原体を多用する点や、文様帯構成に大きく二類型が存在すること、さらには口唇部外縁端部側に刻目を付す類型が新たに明らかにされるなど、周防灘沿岸、九州東北部地域との類縁性を有しつつも、長門周辺地域の独自性と呼べるものを初めて浮彫にできた意義は大きい。ここでは的場遺跡出土の刻目隆帯文系土器を「的場類型」と仮称し、今後周辺地域との系統比較を実践するうえでの、布石としたい。

無文系（第Ⅴ群）土器、および底部の検討では、当該遺跡が周防灘～九州東北部と、山陰中西部双方の影響を、少なからず享受していた事実を明らかにした。特に底部では響灘沿岸諸遺跡と極めて近似した特徴を有しつつも、底径が若干小さい点や、山陰地方の影響をより多く看取できる点において、小地域的独立性の保証が概ね可能となった。深鉢・鉢底部出土総数553点の組成比集計結果からは、平底：高台底：凹底＝54.2：40.7：5.1（％）という結果が得られている。周防灘沿岸～玄界灘周辺地域で主体を占める平底が底部総体の過半数を占めるなど、地理関係に起因する九州地方との交流の深さを窺わせる。低平高台をはじめとする外縁隆帯の低い高台底については相当数の出土が確認されており、日本海を介した山陰中部、出雲方面からの製作伝統についても、少なからず受け容れていた事実が明らかにされた。

器面調整については巻貝条痕の頻用が的場遺跡の特徴であるが、伴出資料に細密条痕や二枚貝頂部条痕、指頭による粗い撫で調整を施す例が一定量認められる点ではやはり、山陰方面からの影響を想定せざるをえない。このほか文様系統組成において沈線文系（第Ⅱ群）を殆ど含まない点では、周防灘北岸域との差異が指摘された。このように、的場遺跡検出の土器溜状遺構出土土器は、単に長門地域における編年研究への貢献にとどまらず、瀬戸内海側、さらには日本海を介した九州、山陰相互の交流関係を究明するうえで、その指標とすべき重要な成果を提供したことになろう。

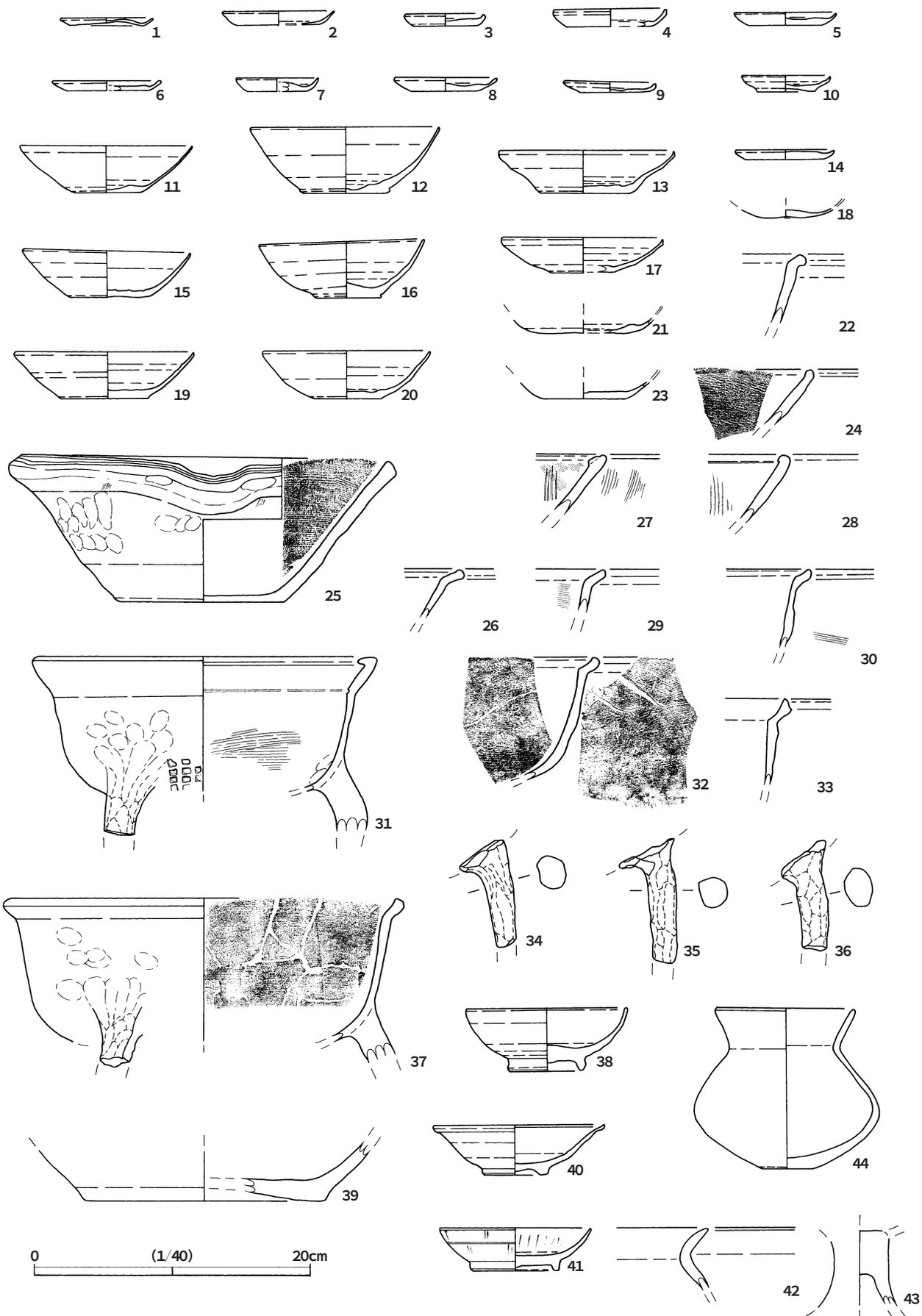
縄文土製品　（第72図　275、図版73）

275は、縄文後期前葉段階に形成された土器溜状遺構より出土した土製品である。用途は不明である。断面凸レンズ状、平面形は円盤状を呈する。文様は確認できない。直径9.0㎝、右側縁を折損している。表面は撫で調整によって比較的平滑に仕上げているが、裏面は指頭圧痕を顕著に残す粗雑な作りである。焼成がややあまく、橙色（５ＹＲ6/6）を呈している。

（幸泉　満夫）

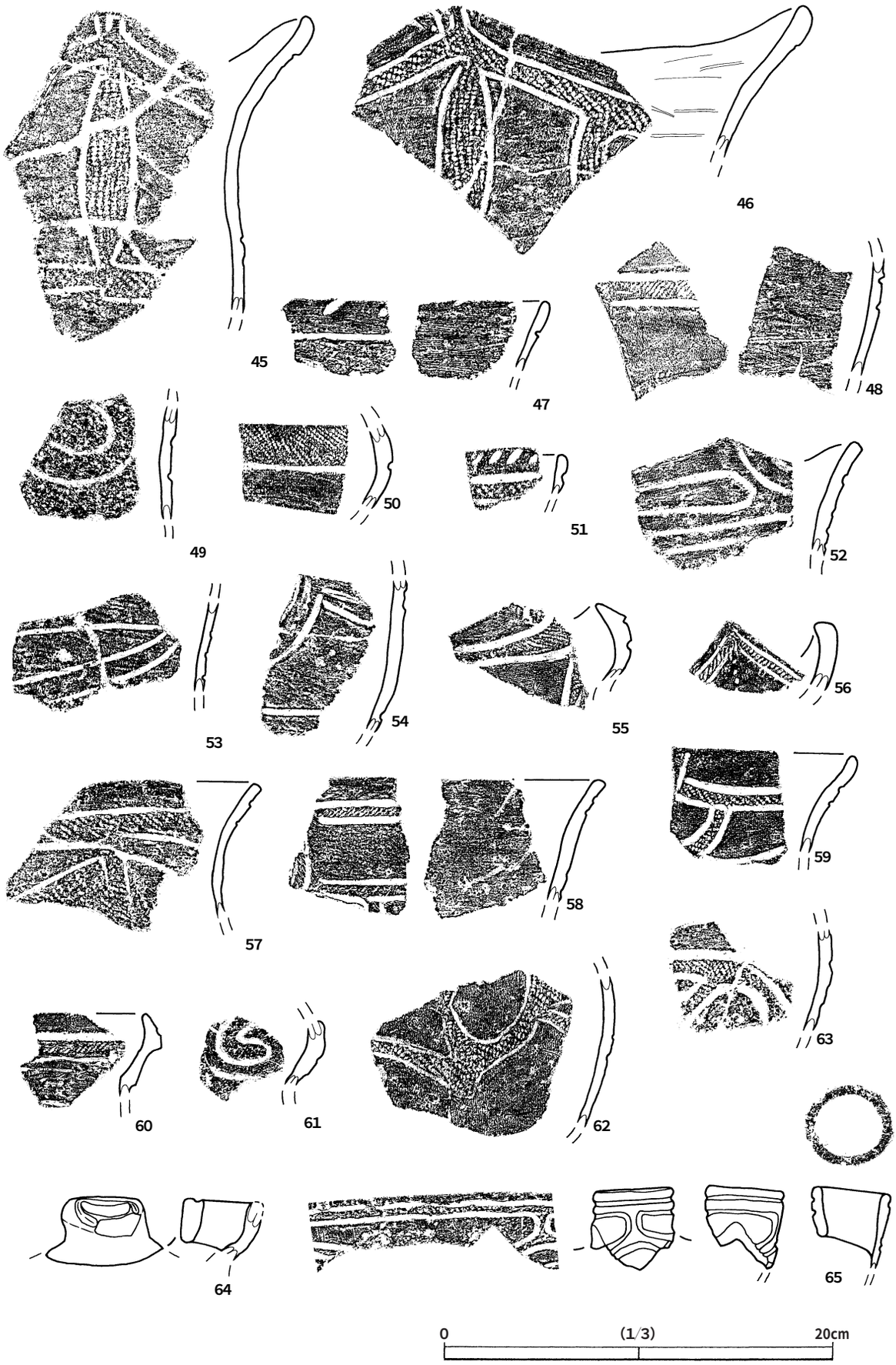
〔参考文献〕

泉　拓良・玉田芳英（1986）「文様帯系統論」『季刊考古学』第17号
宇野隆夫（1992）「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
幸泉満夫（1999ａ）「西瀬戸内における九州系縄文土器」『眞朱』第３号
幸泉満夫（1999ｂ）「包含層出土遺物　縄文土器」・「石井国友遺跡出土の縄文後期土器について」『石井国友遺跡－第１～４次調査区－』今治市教育委員会
幸泉満夫（2001）「西日本縄文後期土器組成論」『考古学研究』第48巻第３号
幸泉満夫（2002）「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集
幸泉満夫（2003）「土器底部から見た縄文社会の地域性」『瀬戸内海考古学研究』瀬戸内海考古学研究会十周年記念大会
幸泉満夫（2004ａ）「山陰地方における縄文時代後期社会の小地域性」『考古論集』河＝正利先生退官記念論集
幸泉満夫（2004ｂ）「西部瀬戸内」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会
幸泉満夫（2004ｃ）「土器から見た山地域と沿岸域」『研究発表資料集』日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会
幸泉満夫・幸泉文子（2005）「九州の成立期縁帯文土器」『山口県立山口博物館研究報告』第31号
澤下孝信（1991）「土器様式伝播考」『古文化談叢』第25集
澤下孝信（1994）「九州・四国磨消縄文系土器」『季刊考古学』第48号
潮見　浩（1968）「月崎遺跡」・「宇部の縄文文化－月崎遺跡の縄文式土器について－」『宇部の遺跡』宇部市域遺跡群学術調査団・宇部市教育委員会
橘　昌信編（1974）『コウゴー松遺跡調査報告』大分県久住町教育委員会
谷口　肇（2004）「「細密条痕」の復元」『古代』第116号
玉田芳英（1989）「中津・福田ＫⅡ式土器様式」『縄文土器大観』４
玉田芳英（1990）「中津式土器」『特集・称名寺式土器に関する交流研究会の記録』横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録第７冊
千葉　豊（1992）「西日本縄文後期土器の二三の課題」『古代吉備』第14集
中村友博（1999）「山口県縄文時代研究の現状と課題」『中・四国縄文時代研究の現状と課題』中四国縄文研究会10周年記念大会資料
中村友博（2003）「刷毛目様細密条痕の一種について」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念論文集
西脇対名夫（1990）「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』長崎県多良見町教育委員会
秦　広之（2000）「コウゴー松式土器に関する覚書」『おおいた考古』第13集
藤田英憲・徳永　裕・石井龍彦（2004）『郷遺跡』山口県埋蔵文化財センター
前田光雄（1994）「宿毛式，その特質」『研究紀要』第１号、高知県文化財団埋蔵文化財センター
水ノ江和同（1993）「九州の縁帯文土器」『古文化談叢』第30集上
柳浦俊一（2000ａ）「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』第17集
柳浦俊一（2000ｂ）「山陰地方における福田Ｋ２式並行の土器群について」『古代吉備』第22集
横山浩一（1978）「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第二十三号
横山浩一（1979）「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第二十四号

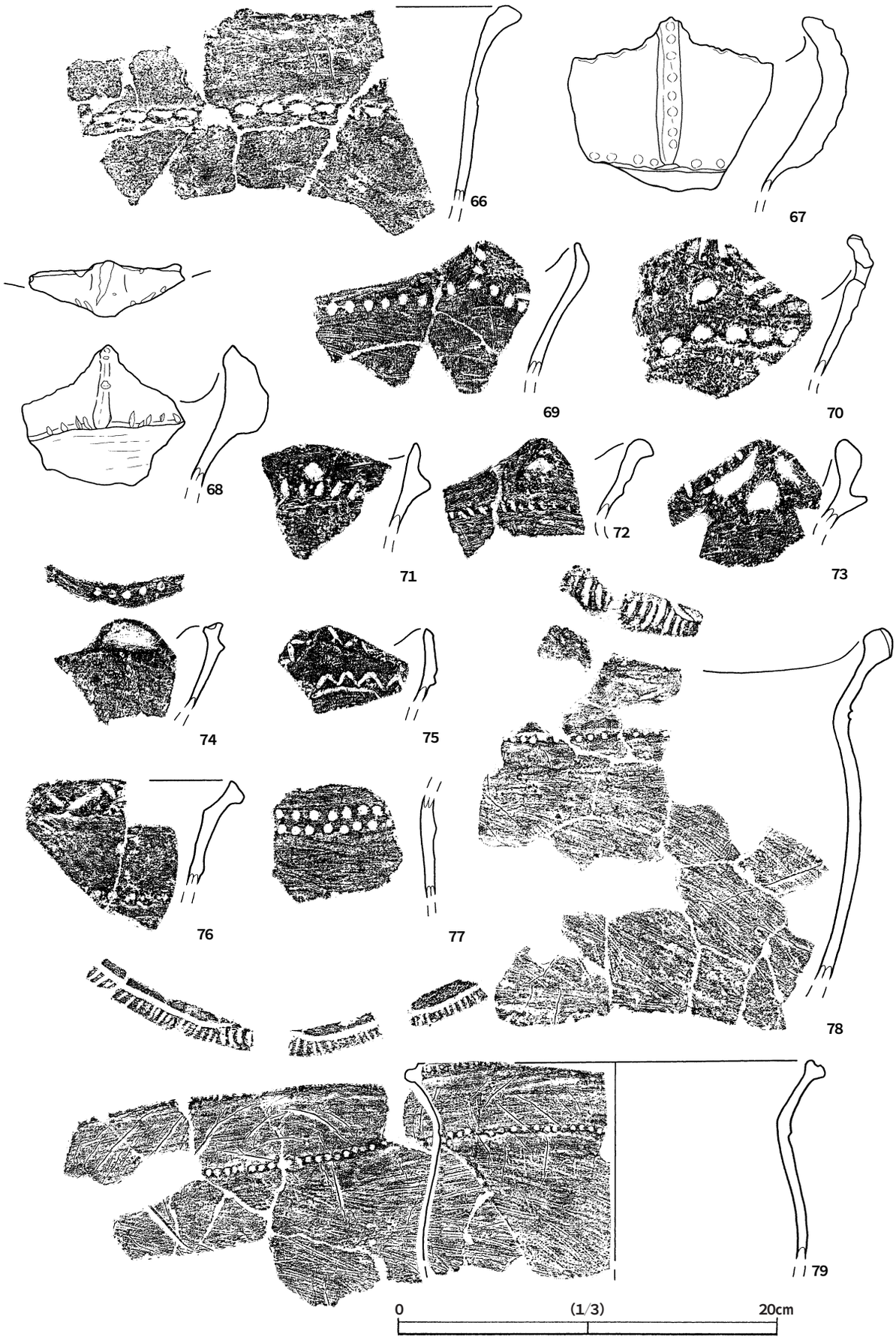


22-SK1　31-SK7　21・25-SK9　39-SK10　33-SK11　23-SK12
11・18-SP1　15・19-SP76　1-SP82　12-SP98　2・6-SP115　34-SP164　7-SP198　29-SP217　26-SP221　17-SB2　30-SB7

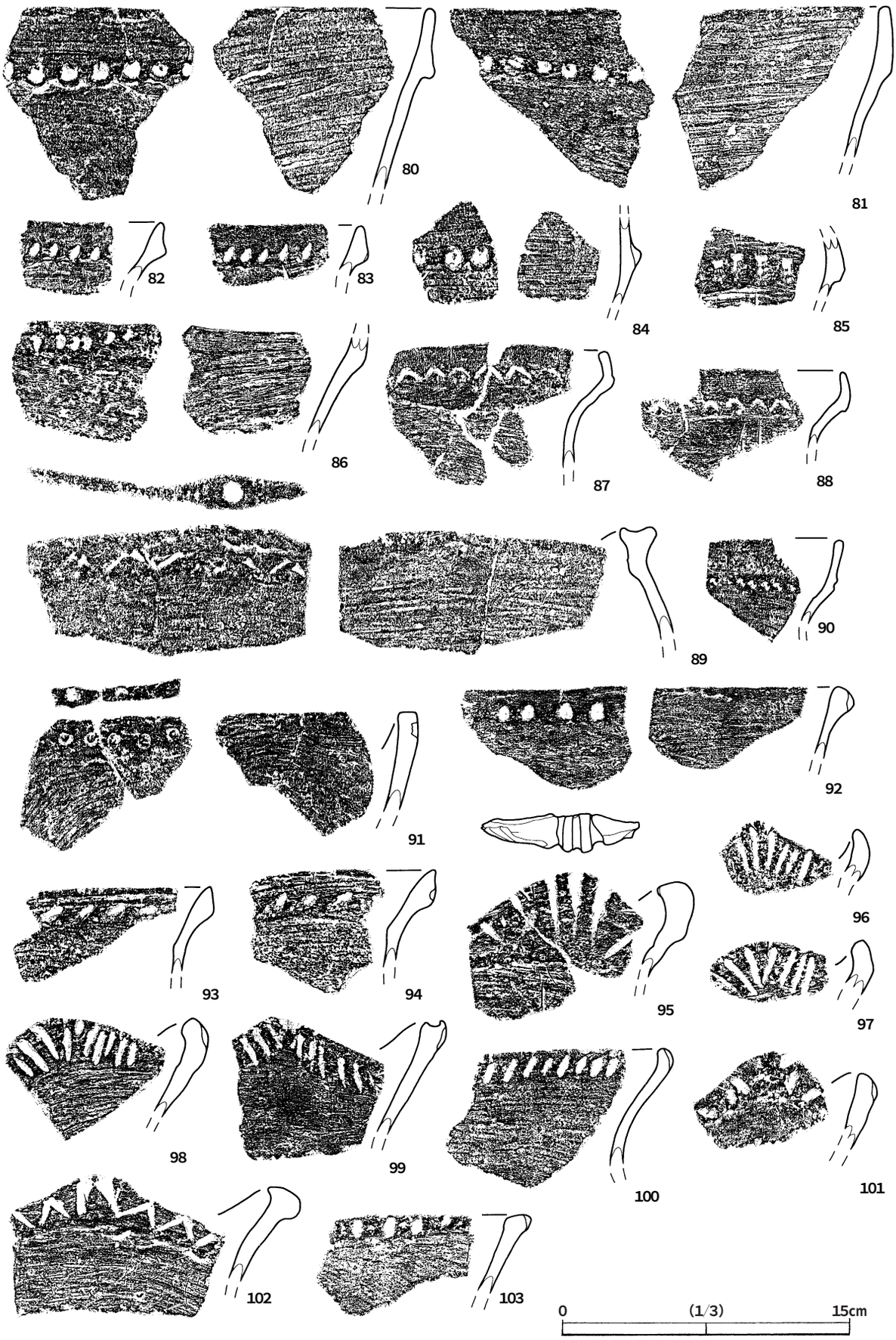
第56図　弥生時代以降の遺物



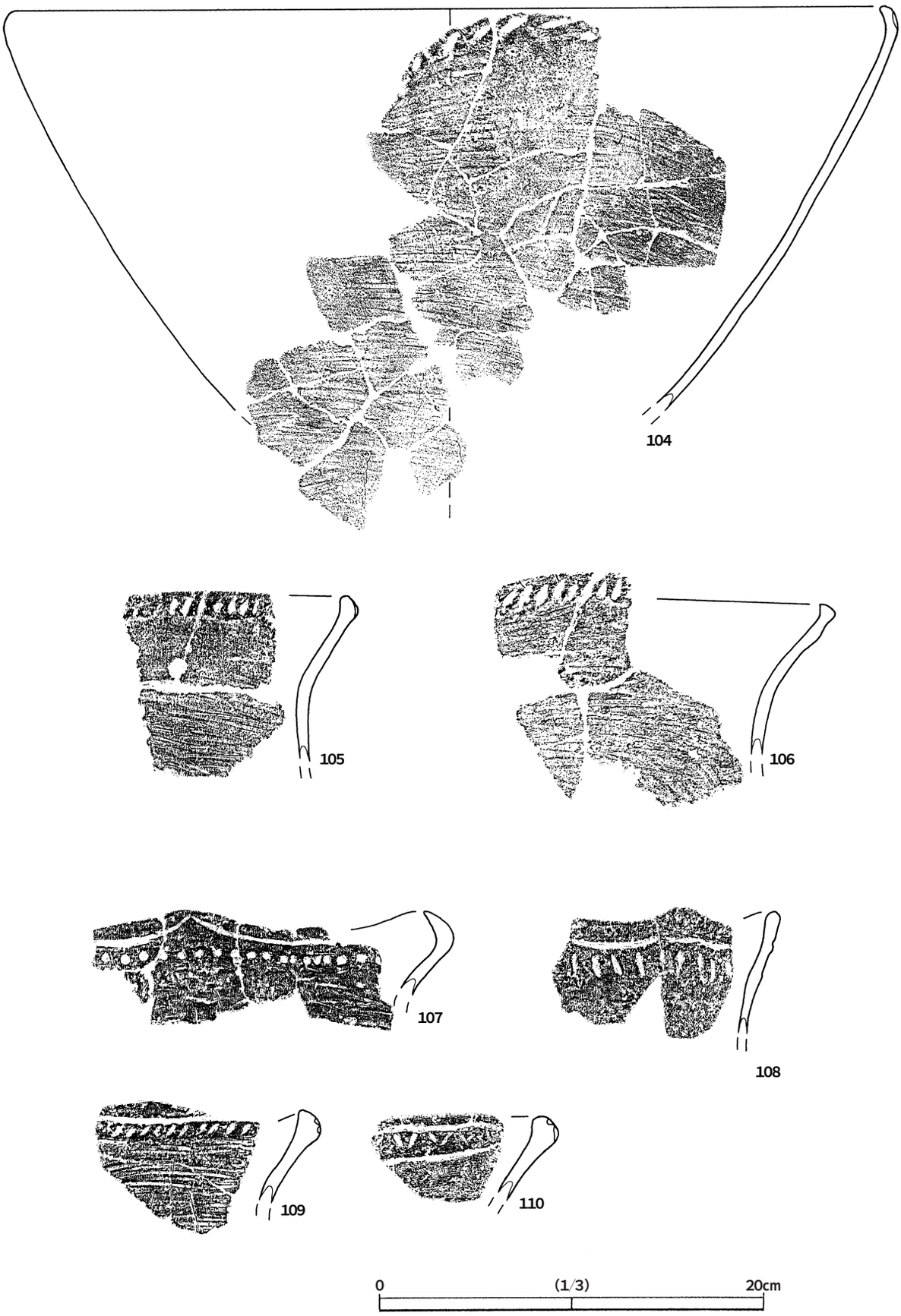
第57図　縄文土器実測図(1)



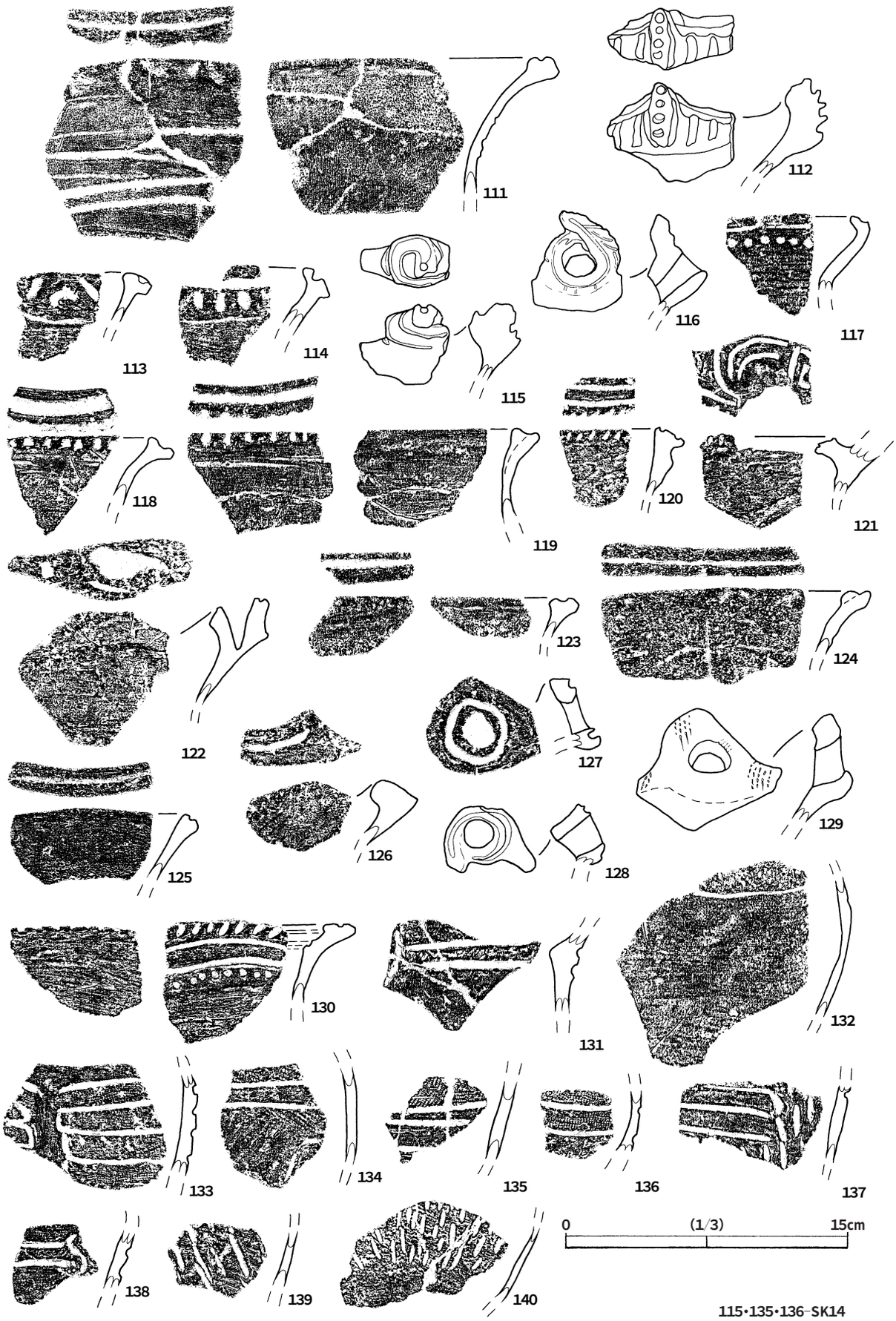
第58図　縄文土器実測図(2)



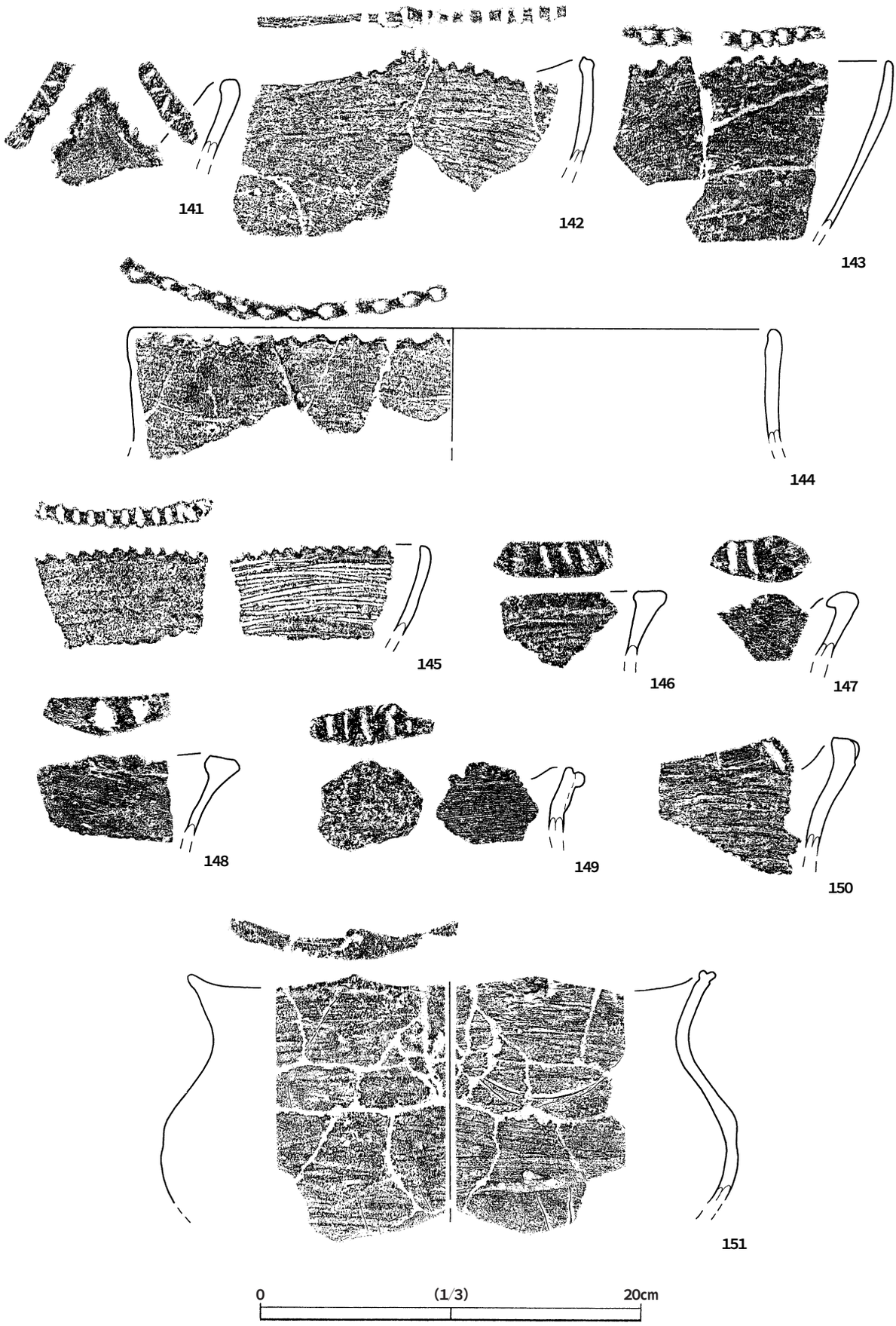
第59図　縄文土器実測図(3)



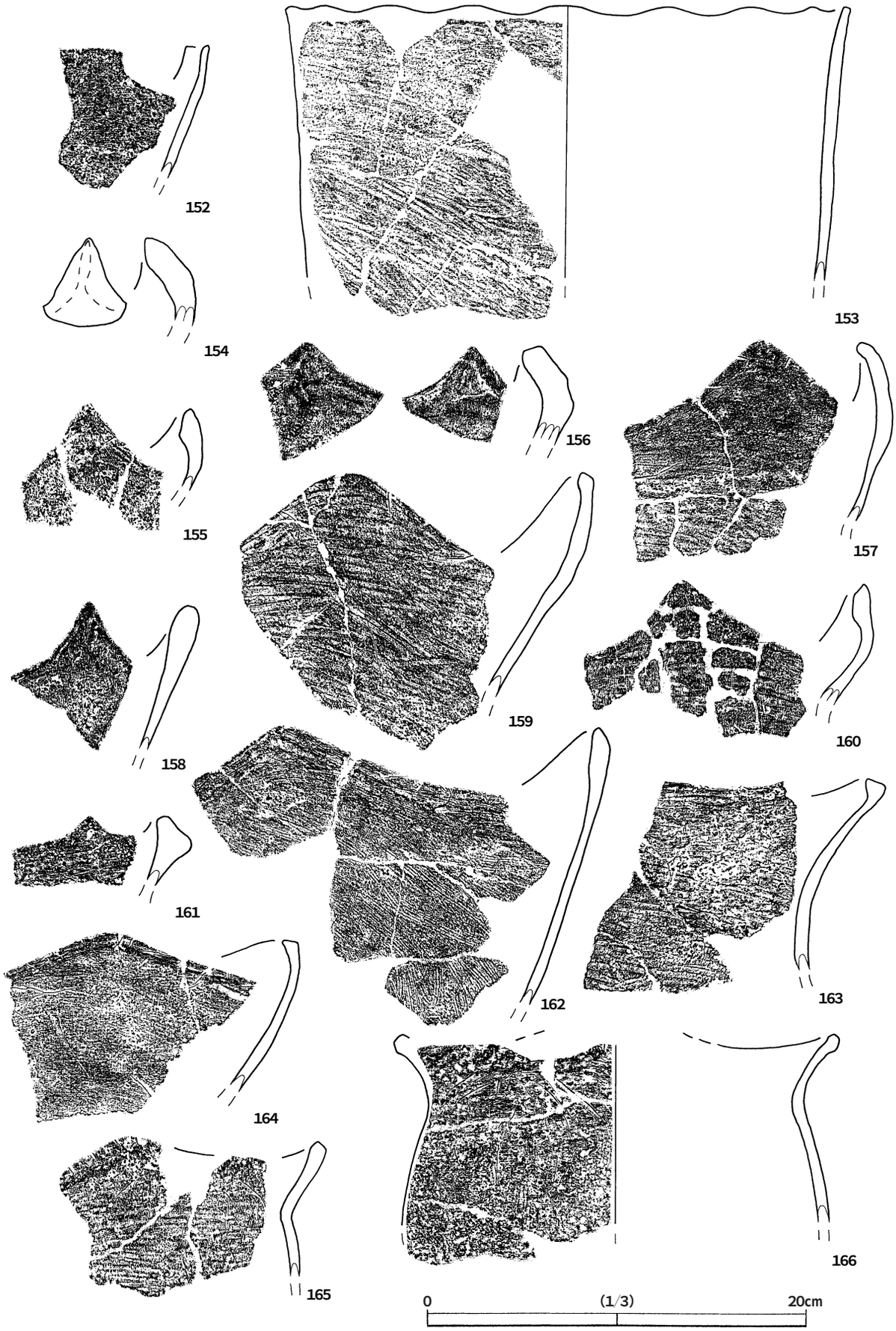
第60図　縄文土器実測図(4)



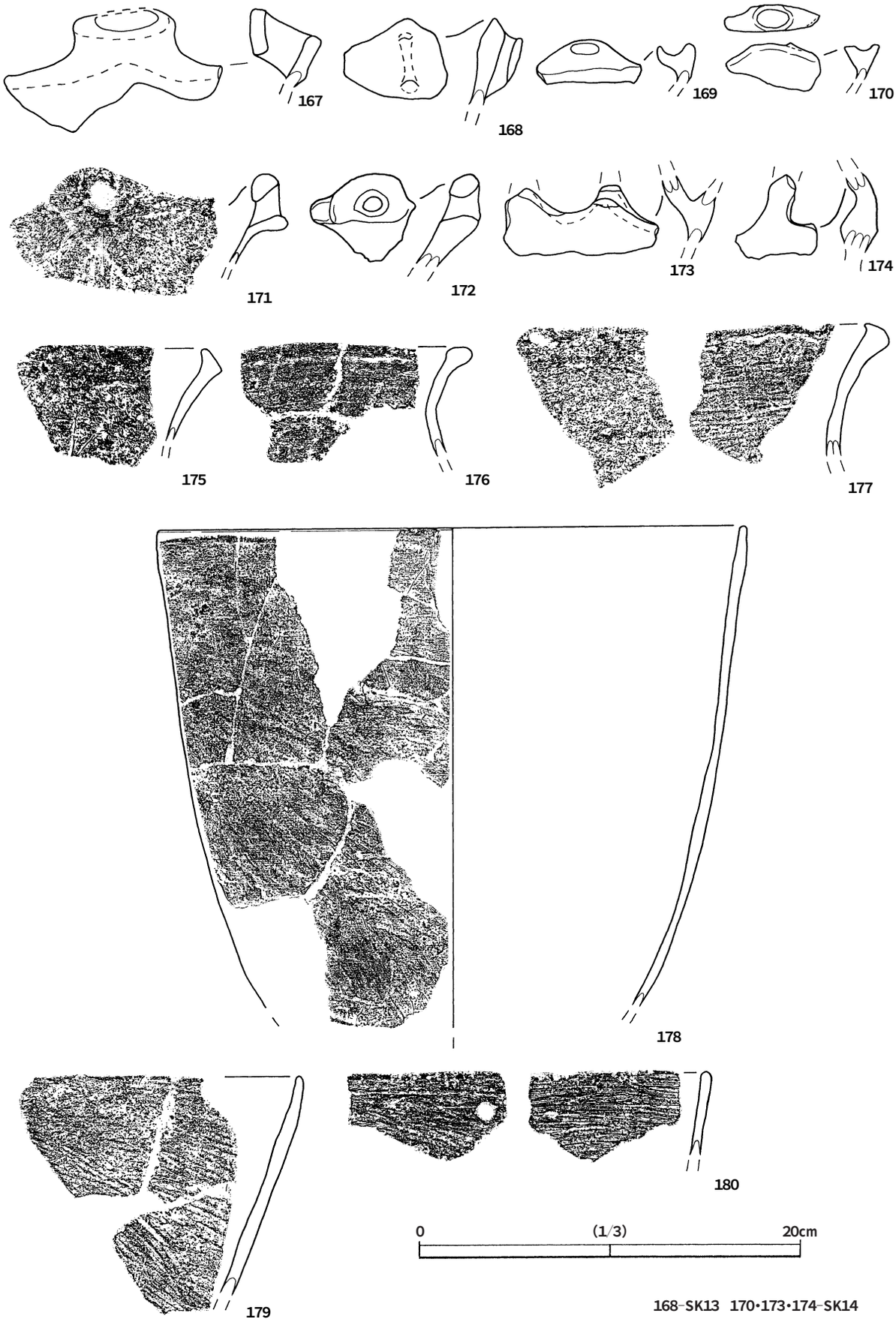
第61図　縄文土器実測図(5)



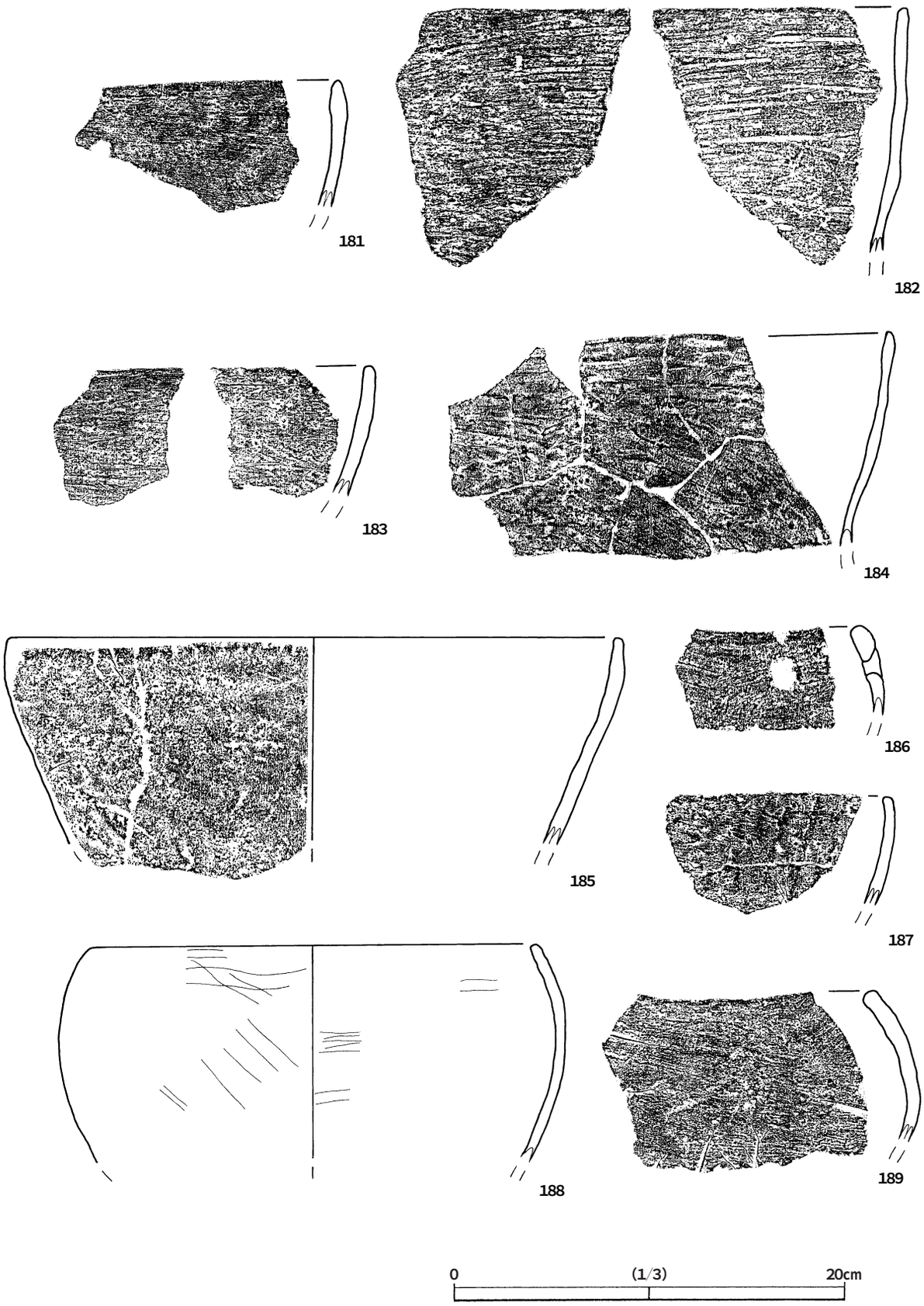
第62図　縄文土器実測図(6)



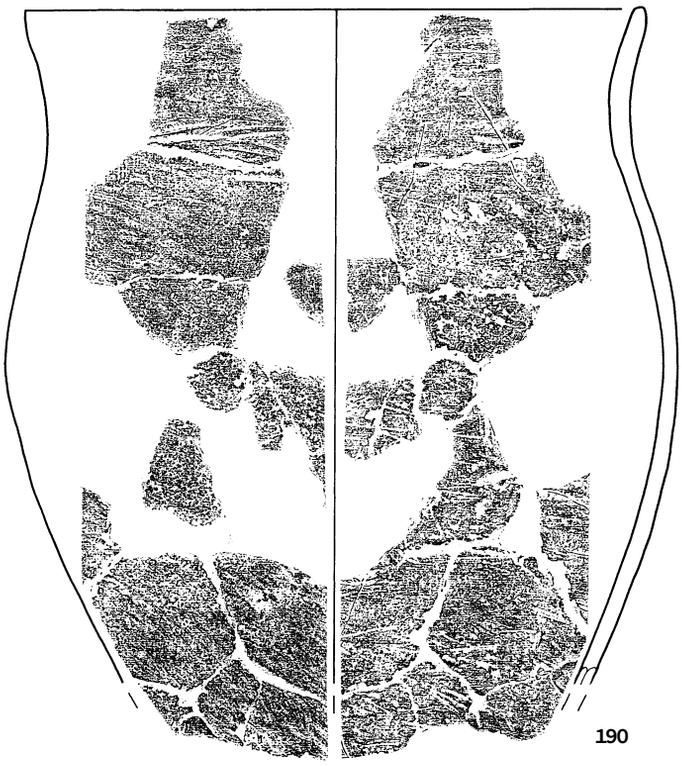
第63図　縄文土器実測図(7)

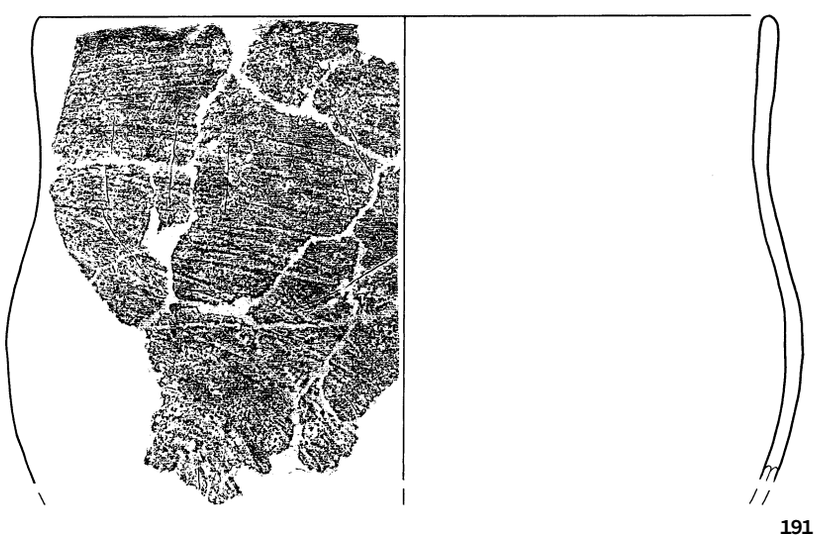


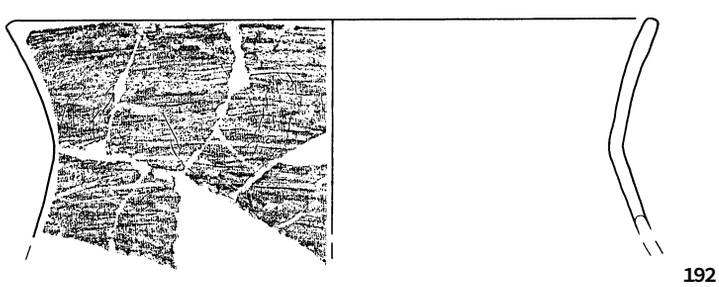
第64図　縄文土器実測図(8)



第65図　縄文土器実測図(9)

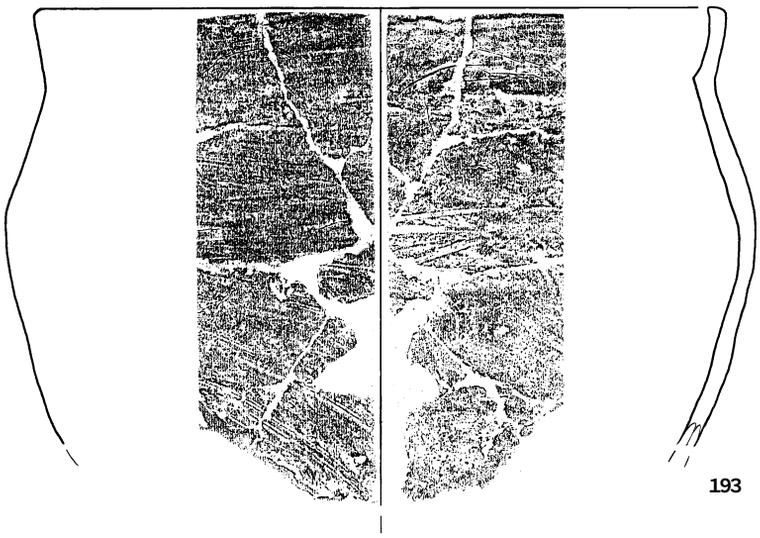


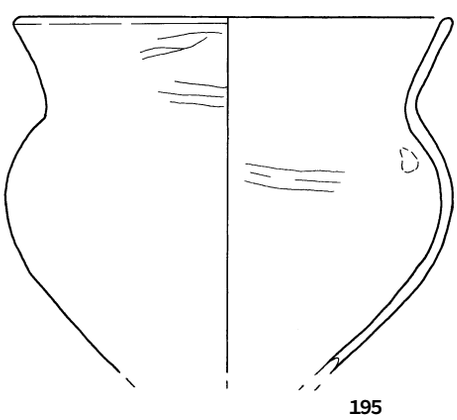


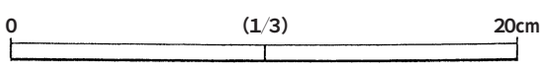


0 (1/3) 20cm

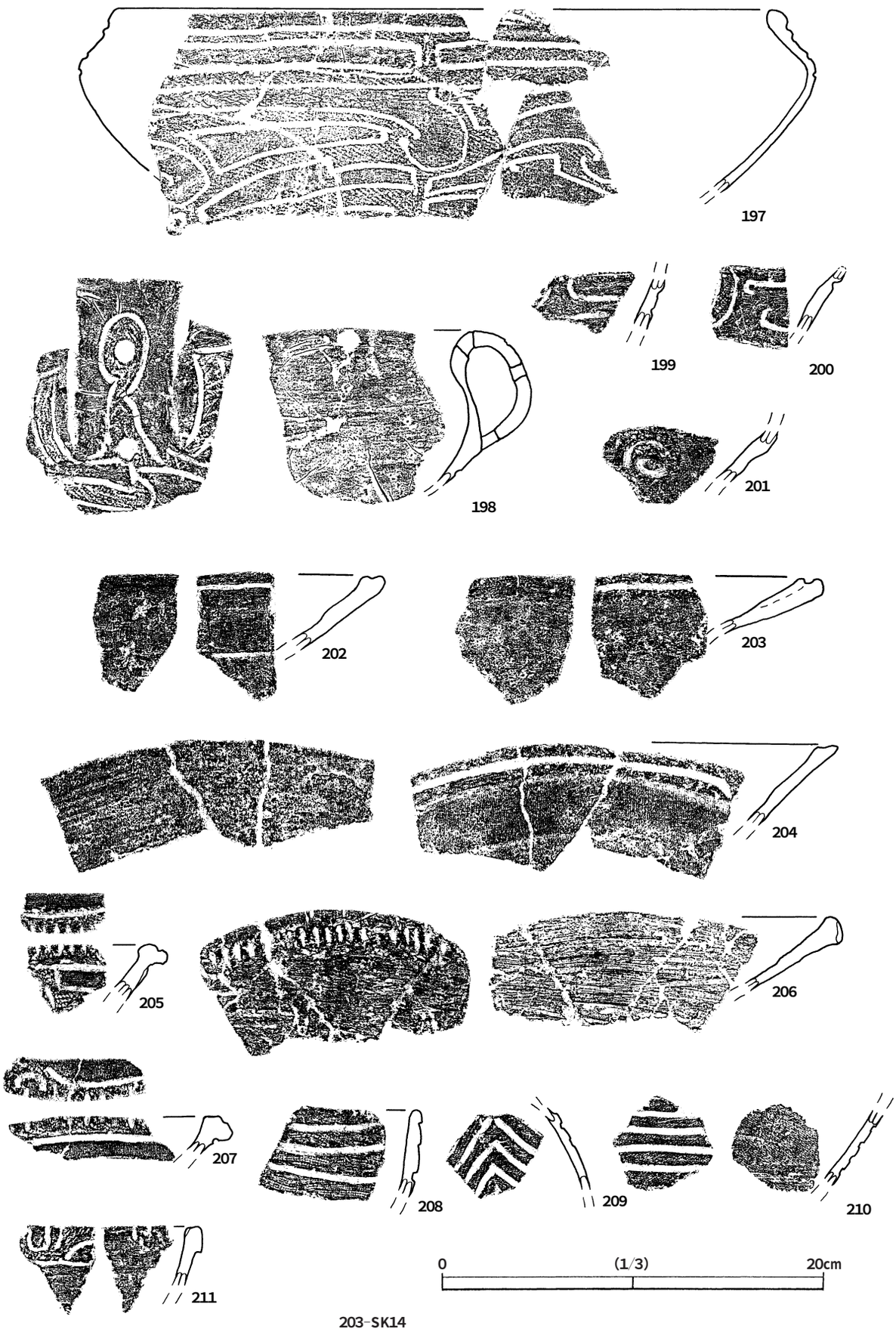
第66図　縄文土器実測図⑽



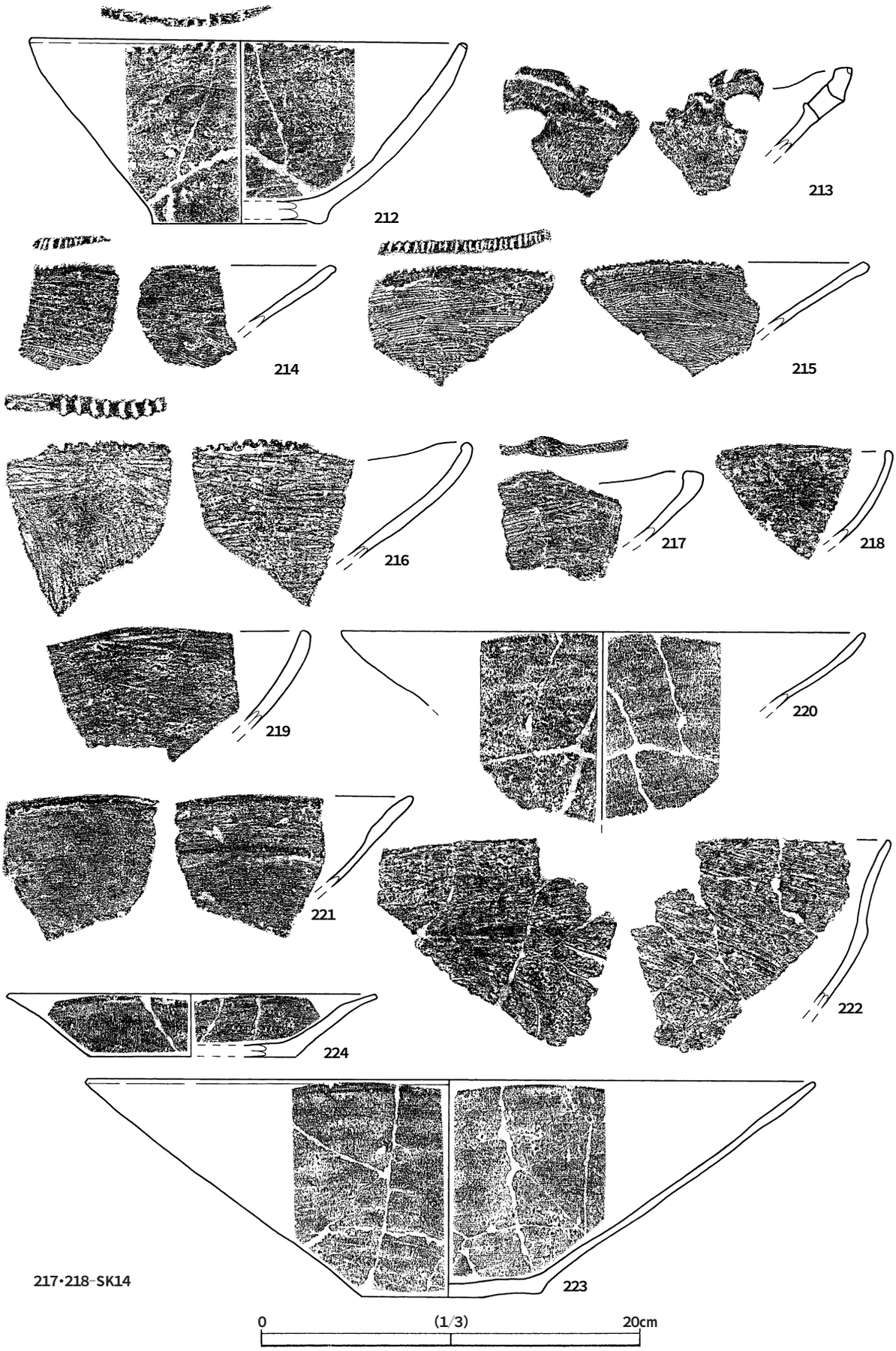




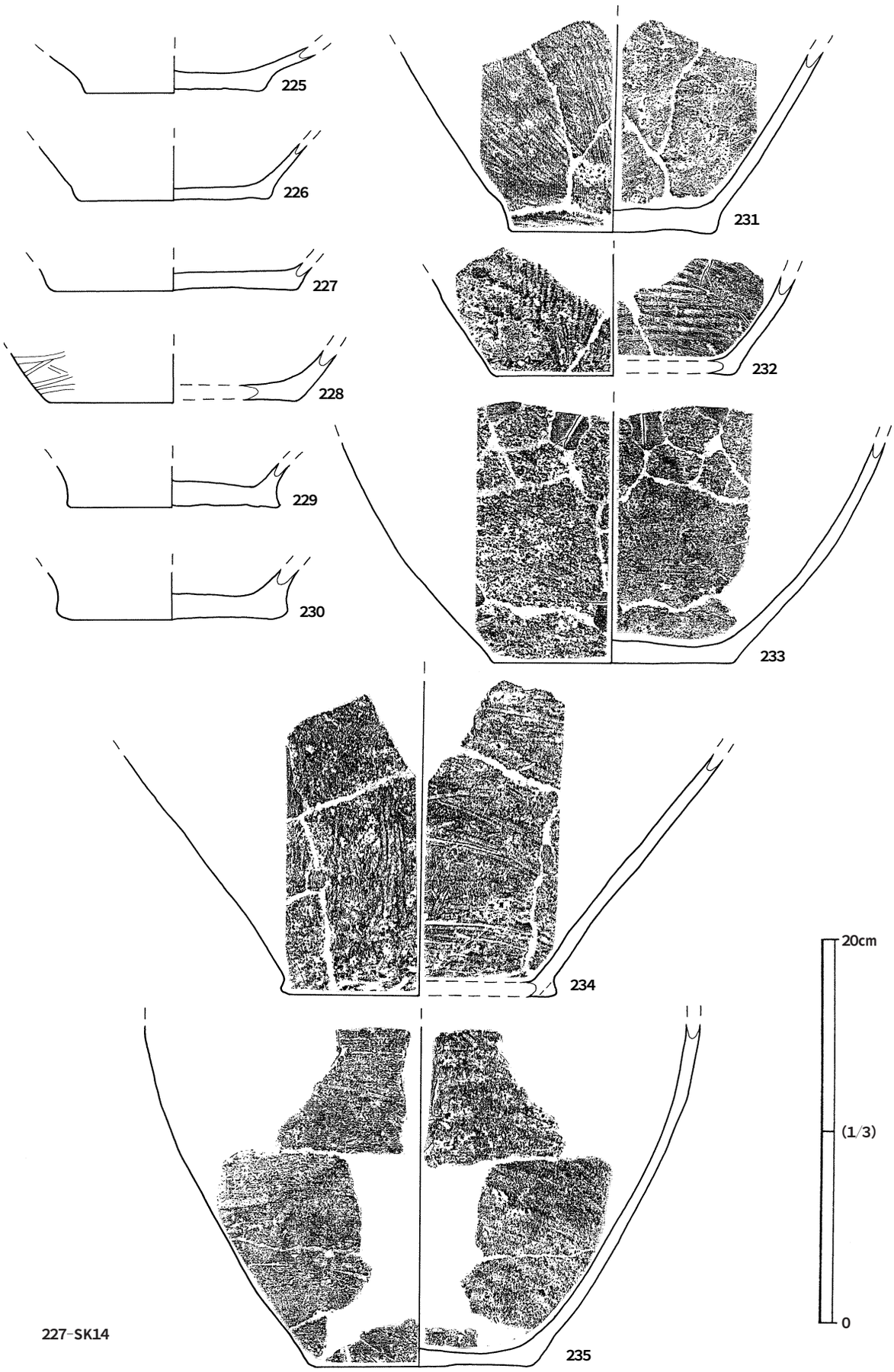
第67図　縄文土器実測図(11)



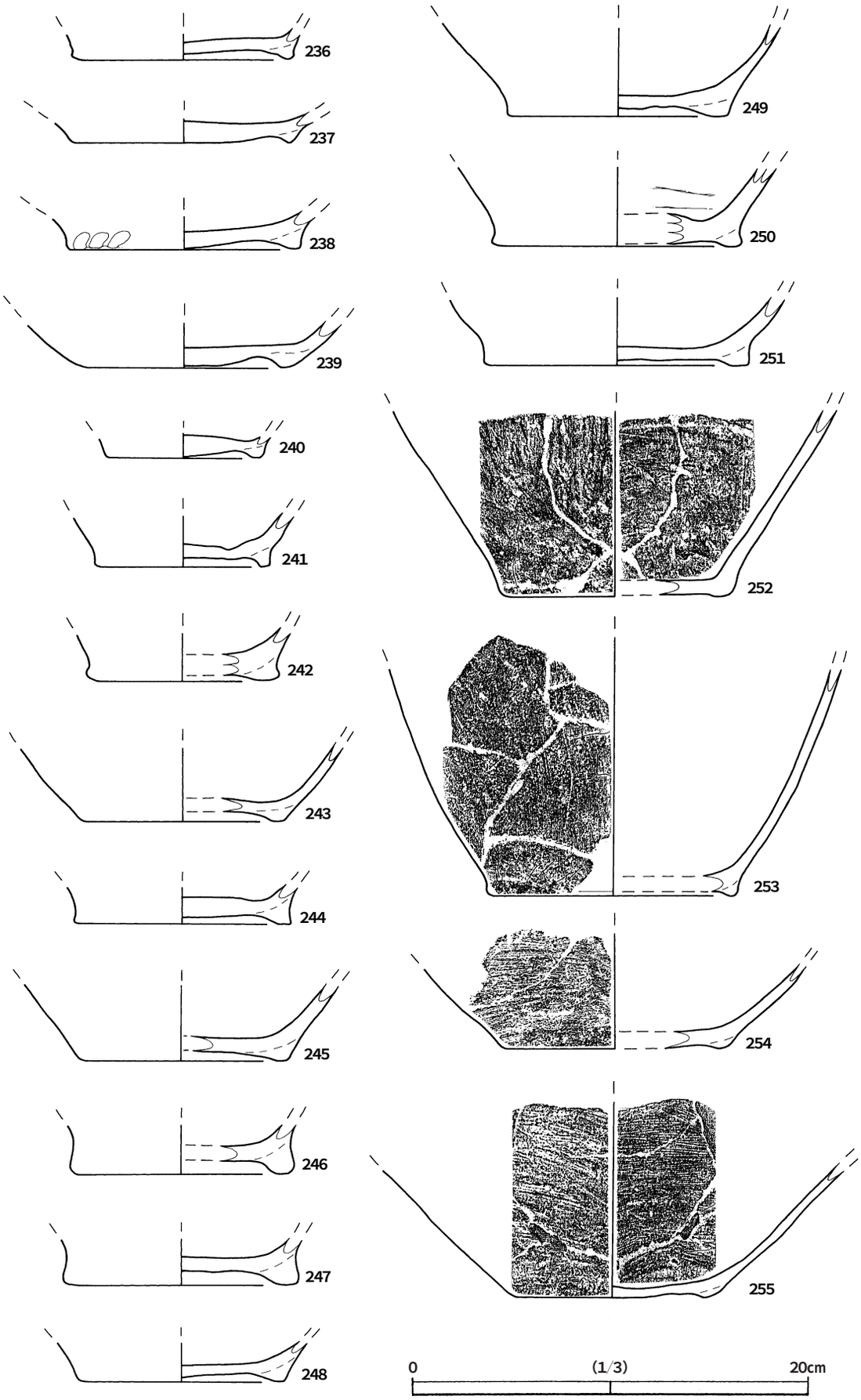
第68図　縄文土器実測図(12)



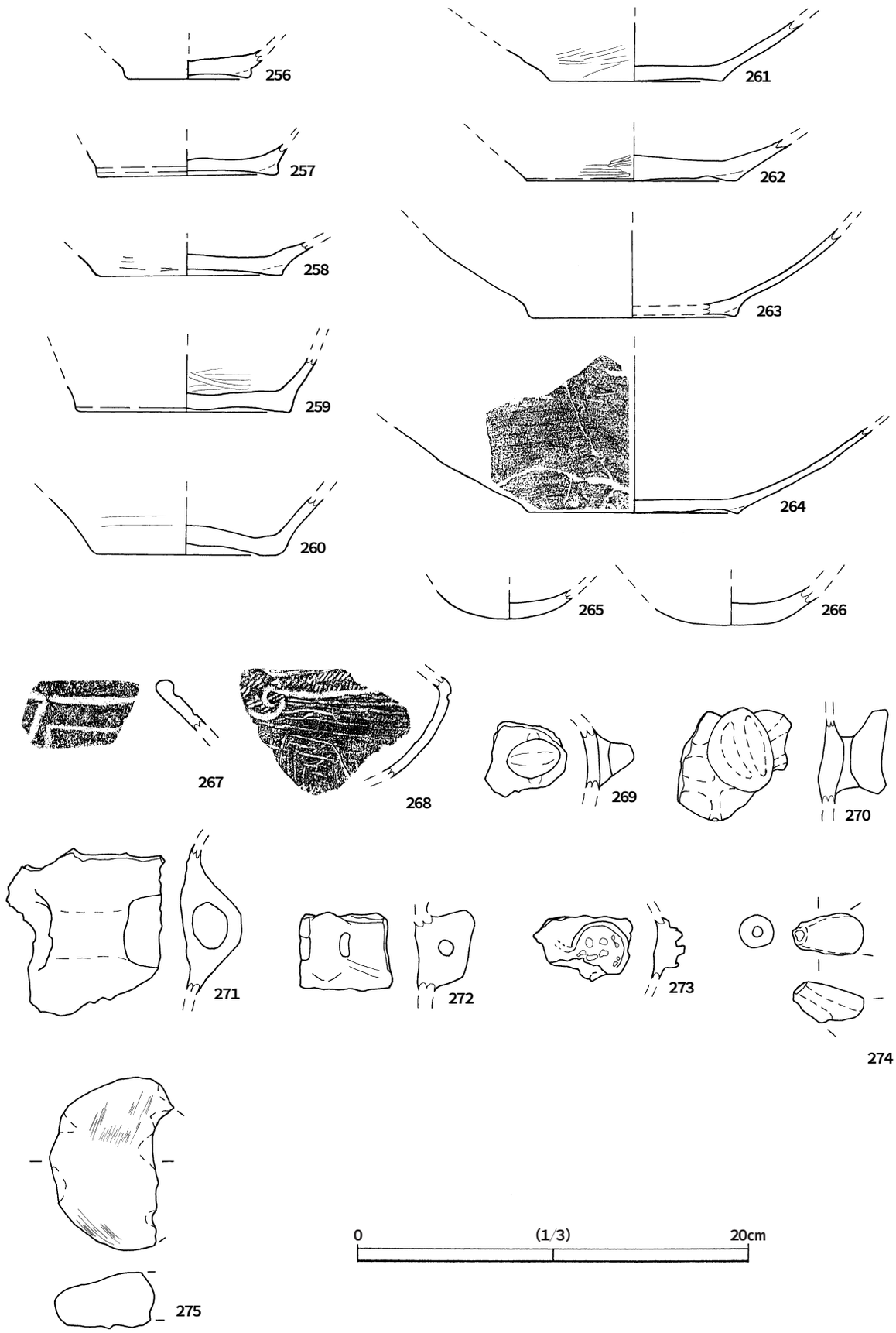
第69図　縄文土器実測図(13)



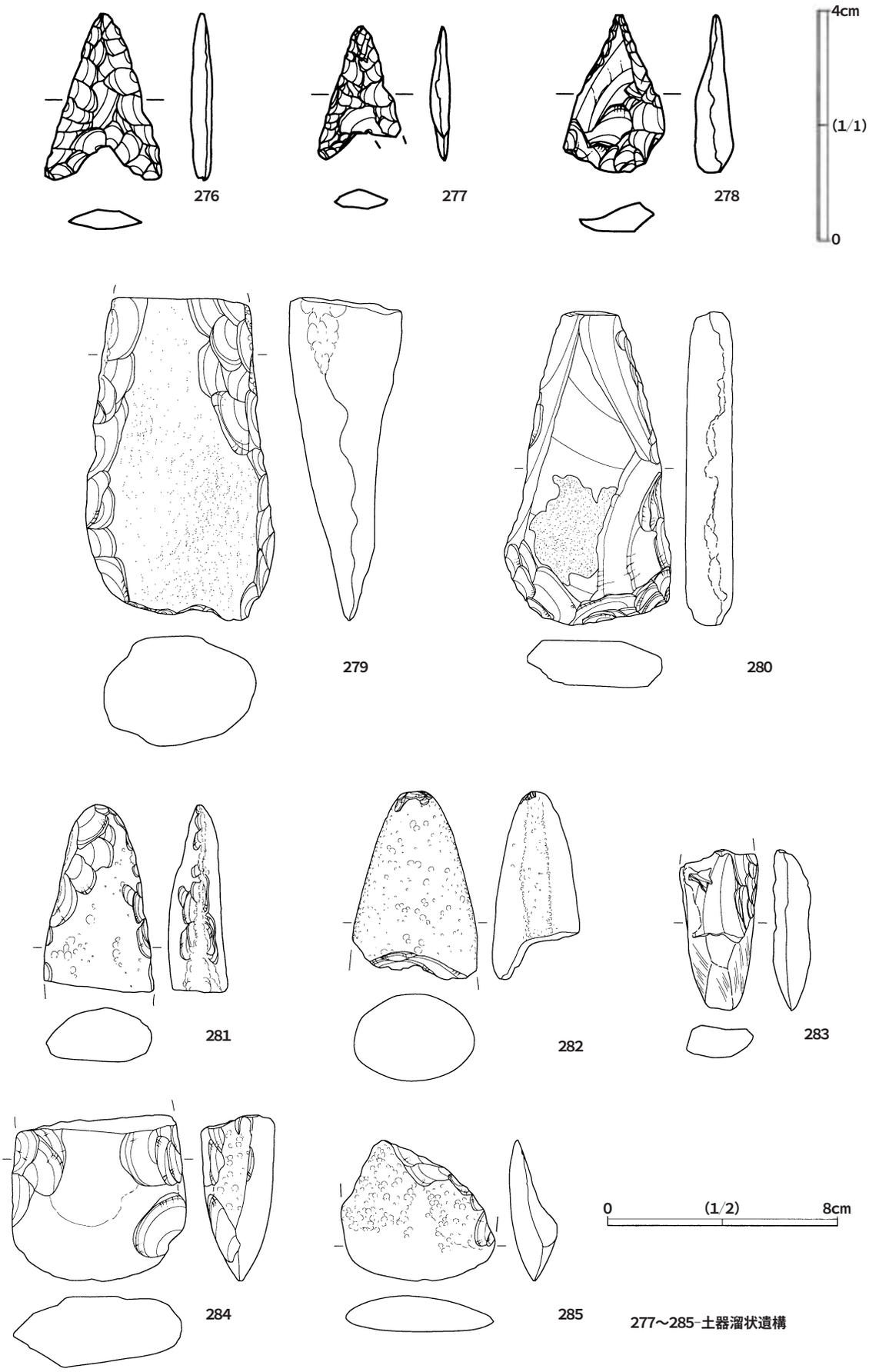
第70図　縄文土器実測図(14)



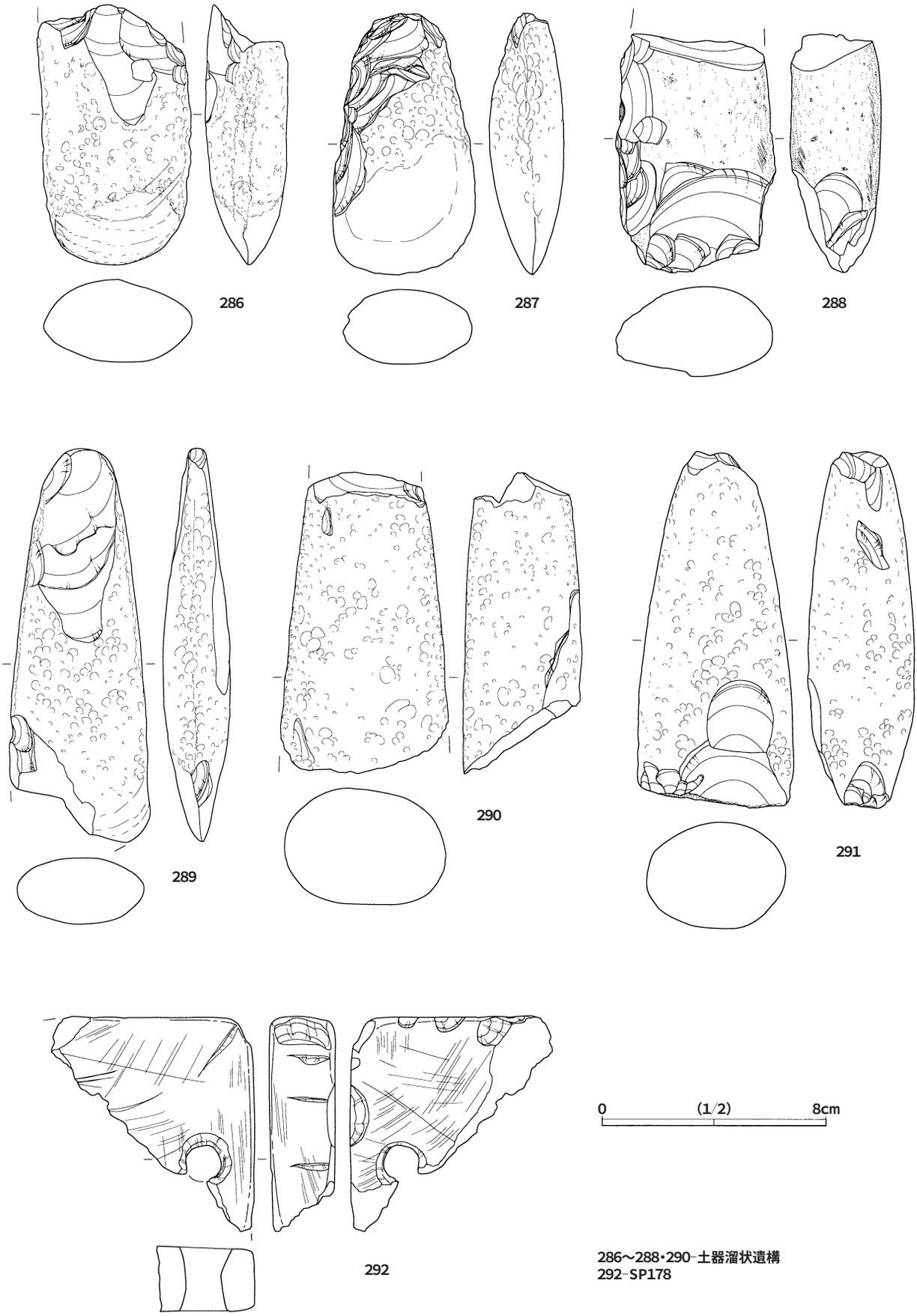
第71図　縄文土器実測図(15)



第72図　縄文土器実測図(16)



第73図　石器・石製品実測図(1)



第74図　石器・石製品実測図(2)

3　まとめ

今回の調査で確認できた遺構は、掘立柱建物跡８棟、土坑14基、柱穴522個、土器溜状遺構１基である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、瓦質土器、陶磁器、石製品等がある。これらの遺構や遺物は縄文土器後期と中世の大別２期に分かれ、遺構の９割は遺跡の南側に集中している。縄文時代の遺構としては、土坑２基、土器溜状遺構１基、小ピット群があり、他は掘立柱建物跡をはじめとして中世に属するものである。掘立柱建物跡の柱穴には、ＳＰ1・76・98のように建物の柱を抜き取った後、意図的に土器が埋納されたと考えられる例も認められ、建物廃絶に伴う祭祀行為を窺わせるものである。中世の出土遺物は多くが土師器で15～16世紀頃のものが多く、青磁や17世紀前半の唐津焼などの陶磁器も出土している。この頃、肥中街道は大内氏により、国内外の交易ルートの中心として重要な役割を果たしている。肥中街道の通り道にあたるこの地も例外なく交易の恩恵を授かったと思われる。このことは、神田地区が中世にかなり経済的に活況であったと記録に残っていることからも窺える。

今回の調査で最も注目されるのは、調査区最下層に当たる土器溜状遺構から、縄文時代後期の土器が多量に出土したことである。豊北町における縄文時代の遺跡には晩期の沖田遺跡がある。また、本年度調査した宮迫神田遺跡からは、縄文時代の前期と晩期の土器が出土している。しかし、今回のように多量の縄文土器が検出された例は豊北町ではこれまでに無く、県西部においても近年類例を見ない。縄文時代後期を主体とした遺跡の調査例としては、県東部においては、内陸山間部に位置する本郷村の郷遺跡があり、400点を超える縄文土器片や17基のおとし穴遺構などが検出され、土器は後期のものが多い。また、県西部の縄文時代の遺跡として、神田遺跡が知られている。神田遺跡は本州最西端にあり、河岸段丘から海成砂堆にかけて立地した臨海遺跡であり、縄文時代の早期末から後期に及ぶがその主体は後期にある。また、貯蔵穴とみられる土坑や埋葬跡などが検出されている。それぞれ、地理的環境条件はやや異なるが、縄文時代後期という点を考えると、今回の的場遺跡における縄文土器出土は、従来の分布域の空白地を埋める重要な地理的位置を占めており、今後の広域的な土器編年や地域間交流等の研究において貴重な基礎資料を提示することとなるであろう。

的場遺跡は、わずかに張り出した丘陵上に位置し、目前の平地も狭く、周囲の山は険しい。このような地理的制約等によって、この地では大集団を構成することは困難とみられ、比較的小集団による生活が営まれていたと思われる。今回、土器溜状遺構の下位からは柱穴状の小ピット群を検出したが、建物として復元することはできなかった。しかし、多量の土器が出土した土器溜状遺構や土坑の存在は、より高位側に竪穴住居等の生活の場が形成されていたことを十分に推定させるものである。また、斜面下位側に当たる調査区南側は土器などの廃棄的な役割を果たしていたものと推測されよう。残念ながら、近世以降の水田開発によって縄文遺構の大半は失われたものとみられる。本遺跡における縄文時代の具体的な集落の様相は現段階の資料では解明できないが、さらに今後の周辺地域の調査による新たな進展に期待したい。

〔参考文献〕
山口県教育委員会　『神田遺跡　第１次発掘調査概要』1971年
豊北町史編纂委員会　『豊北町史二』1994年
山口県埋蔵文化財センター　『切畑南遺跡Ⅱ』2000年
山口県埋蔵文化財センター　『郷遺跡』2004年

Ⅴ　付　　編

宮迫神田遺跡の土器の表面にみられる砂礫

奥田　　尚

宮迫神田遺跡から出土した土器破片の資料14点の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。最初に、資料全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察結果と推定される砂礫採取地について述べる。

第１表に示すように資料番号194①、197、194②、186、187、195は殆ど同じような砂礫構成を示すことから同じ砂礫構成の砂礫を使用しているといえる。

資料番号194①、197、194②、186、187、195：砂礫種は花崗岩・石英・長石・黒雲母・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～５㎜、量が僅か～ごくごく僅かである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が僅か～中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が中である。黒雲母は黒色・金色、板状で、粒径が0.2～0.7㎜、認められない資料やごく僅か～僅かの資料がある。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.5㎜、量が僅か～中である。

当遺跡の西南方に黒雲母花崗岩が分布するが角閃石は殆どみられない。このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が比較的多いことから、近くでは糸島平野付近の砂礫と推定される。

資料番号196：砂礫種は花崗岩・閃緑岩・泥岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～３㎜、量が僅かである。石英・長石が噛み合っている。閃緑岩は灰色、粒形が角、粒径が0.5～1.5㎜、量がごく僅かである。石英・角閃石が噛み合っている。泥岩は暗灰色、粒形が亜角、粒径が４㎜、量がごくごく僅かである。古期層起源の様相を呈する。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～３㎜、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が中である。角閃石は黒色、柱状・粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.4㎜、量が中である。

このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が比較的多いことから、糸島平野付近の砂礫と推定される。また、前述の資料に比べて閃緑岩や泥岩が認められることから、同じ地点の砂礫でないと推定される。糸島平野に流れ込んでいる雷山川の砂礫構成は前述の資料の砂礫構成に似ており、東方の椚川や室見川では泥岩が稀に含まれる。

資料番号141：砂礫種は流紋岩・石英である。流紋岩は灰白色・灰色・暗灰色・黒色で、粒形が角・亜角・亜円、粒径が0.4～1.5㎜、量が多い。石基がガラス質で、石英の斑晶が認められるものもある。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～２㎜、量が多い。複六角錘あるいはその一部が認められるものが多い。

当遺跡の付近には関門層群の堆積物や流紋岩、西南方には黒雲母花崗岩が分布している。流紋岩が分布するような地の砂礫はこの資料のような砂礫構成を示す。河川等の影響により遺跡付近に分布する堆積物・流紋岩・花崗岩が混ざるような条件の地の砂礫は資料番号171の砂礫となると推定される。

資料番号151：砂礫種は花崗岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～４㎜、量がごく僅かである。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～３㎜、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.3～３㎜、量が中である。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.3㎜、量が僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が比較的多いことから、糸島平野付近の砂礫と推定される。

資料番号171：砂礫種は花崗岩・流紋岩・玄武岩・泥岩・片岩・石英・長石・輝石である。花崗岩は灰白色・灰色で、粒形が角、粒径が0.5～1.5㎜、量が僅かである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。流紋岩は灰白色・灰色で、粒形が角・亜角、粒径が0.5～６㎜、量が中である。石基がガラス質で、石英の斑晶がみられるものがある。泥岩は赤茶色・灰色で、粒形が角・亜角、粒径が１～３㎜、量がごく僅かである。玄武岩は灰緑色、粒形が角、粒径が0.4～0.7㎜、量がごくごく僅かである。片岩は灰色、粒形が角、粒径が１～５㎜、量が僅かである。泥質片岩である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～３㎜、量が多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～0.5㎜、量が僅かである。輝石は暗緑色、粒状で、粒形が角、粒径が0.3㎜、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は当遺跡付近で花崗岩の分布地に近い付近の砂礫と推定される。

資料番号122：砂礫種は花崗岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.5～１㎜、量がごく僅かである。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が多い。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.2㎜、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が稀であることから、当遺跡南西方の花崗岩の分布地付近の砂礫が推定される。

資料番号200：砂礫種は流紋岩・砂岩・石英・長石・輝石である。流紋岩は白色・灰白色・灰色・褐色で、粒形が角・亜角、粒径が0.3～２㎜、量が僅かである。石基がガラス質で、石英の斑晶がみられるものがある。砂岩は褐色で、粒形が亜角、粒径が1.5㎜、量がごくごく僅かである。細粒砂からなる。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.1～１㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.1～0.2㎜、量がごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1㎜、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は当遺跡付近の砂礫と推定される。

資料番号110：砂礫種は花崗岩・石英・長石・角閃石・輝石である。花崗岩は灰白色で、粒形が角、粒径が0.3～３㎜、量が僅かである。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～２㎜、量が中である。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.2㎜、量がごくごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒形が亜角、粒径が0.1～0.5㎜、量がごくごく僅かである。周囲が溶融した様相を呈する。

輝石は火山灰起源のものと形状から推定される。このような砂礫構成を示す砂礫は花崗岩質岩組成で、角閃石が稀であることから、当遺跡南西方の花崗岩の分布地付近の砂礫が推定される。

資料番号201：砂礫種は流紋岩・石英・長石・輝石である。流紋岩は白色・灰白色・暗灰色で、粒形が角・亜角、粒径が0.3～１㎜、量が中である。石基がガラス質で、石英の斑晶がみられるものもある。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.1～２㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2㎜、量がごくごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1㎜、量がごくごく僅かである。

このような砂礫構成を示す砂礫は当遺跡付近の流紋岩が分布する付近の砂礫と推定される。

以上のように砂礫構成から甕棺と151の壺と186・187の甕は福岡市西方の糸島平野の砂礫と推定され、他は当遺跡付近あるいは南西方の花崗岩分布地の砂礫構成を示す。福岡県小郡市で確認した例であるが、一対となる甕棺一基のみに多量の片岩の砂礫が含まれており、朝倉山地か福岡市東方の片岩分布地域の砂礫で作られていた。吉野ヶ里遺跡で出土しているように頭部がない遺骸が埋葬されている例や漆を塗っていることから、製作に擁する日数を考慮すれば、少なくとも一部の人々には埋葬容器の甕棺が用意されていたと推定される。このような推定にたてば、当遺跡の甕棺は一部の人に伴って糸島から運ばれてきたものであると推定される。長門や周防付近の河川の砂礫構成が調査できれば、より詳細に在地産の土器の砂礫構成について検討できるであろう。

第１表　宮迫神田遺跡の土器の表面にみられる砂礫

資料番号	器　種	石																鉱										類型と砂礫の採取推定地
		種																物										
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		黒雲母		角閃石		輝石		
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
194①	甕棺	L-微角	L-僅角															L-中	M-僅	L-中	M-中				M-中			１ｂ類型 糸島
197	甕棺	L-僅角	M-微角															M-中	M-中	L-中	M-僅		S-微板		M-中			１ｂ類型 糸島
194②	甕棺	L-僅角	M-稀角															M-僅	M-僅	L-中	M-中	S-稀板	S-僅板	S-稀	M-中			１ｂ類型 糸島
196	甕棺	L-僅角	L-微角		L-微角						L-稀亜角							L-中	M-中	M-中	L-中				M-中			１ｂｇ類型 糸島
186	甕	M-稀角	M-稀角															M-微	M-中	M-中	M-僅	M-稀板	S-僅板		S-僅			１ｂ類型 糸島
195	甕棺	L-稀角	L-僅角															M-僅	M-僅	M-中	M-中		S-微板		S-中			１ｂ類型 糸島
187	甕	L-微角	M-稀稀															M-中	M-中	L-僅	M-僅				S-中			１ｂ類型 糸島
141	甕					M-僅角	L-多亜角											L-多 E-多	L-多 E-多									４ｄ類型 在地
151	壺	L-微角	L-稀角															L-中	M-中	L-中	M-中				S-僅			１ｂ類型 糸島
171	甕		L-僅角			L-僅角	L-中角				L-微角			L-僅角				L-多	M-中		M-僅						S-稀	４ａｈｆ類型 在地
122	壺		M-微角															L-中	M-多	M-僅	M-多				S-稀			１ｂ類型 綾羅木付近？
200	甕					L-僅亜角	L-僅角		L-稀亜角									M-中 E-多	M-多 E-多		S-微						S-稀	４ｇｎ類型 在地
110	壺	L-僅亜角	L-僅角															L-中	L-多 E-稀	L-微	M-中				S-稀		M-稀	１ｄｎ類型 綾羅木付近？
201	甕						L-中角											L-多	L-多 E-多		S-稀						S-稀	４ｎ類型 在地

裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：　Ｌ＝粒径が２㎜以上　Ｍ＝粒径が２㎜未満0.5㎜以上　Ｓ＝粒径が0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体顕微鏡の倍率が30倍　実体顕微鏡による観察：　Ｌ＝粒径が１㎜以上　Ｍ＝粒径が１㎜未満0.3㎜以上　Ｓ＝粒径が0.3㎜未満　－＝以下の粒径がある　Ｅ＝自形　ＥＦ＝結晶面がある　Ｗ＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　フ＝フジツボ状　パ＝軽石状　球＝球状　類型区分は奥田の区分（1992）『庄内式土器研究』２を参照．資料番号と遺物番号は同じものである．

宮迫神田遺跡図版

調査区遠景（北から）

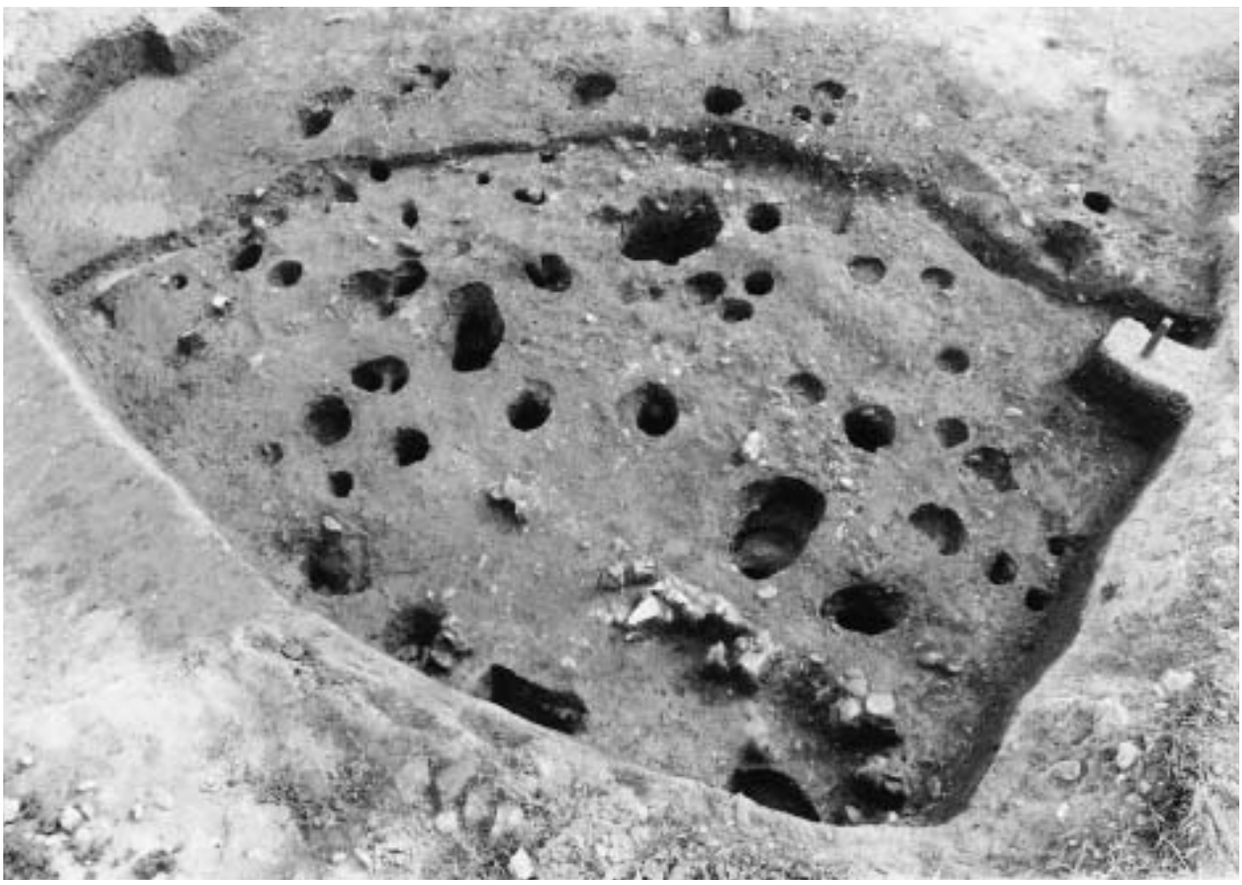
図版 2

調査区全景

調査区遠景（北東から）

D区　全景（西から）

図版 4



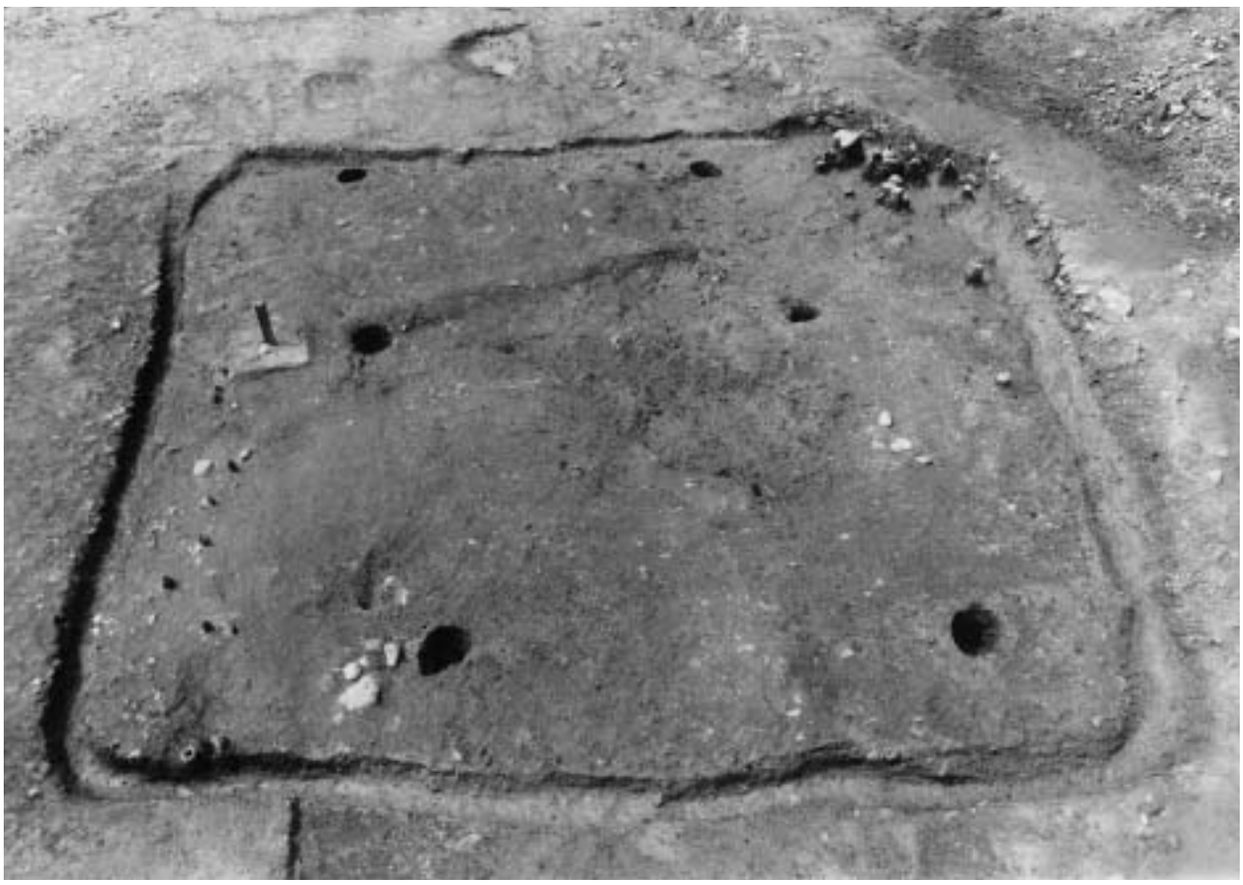
ＳＢ９　遺物出土状況（北から）

ＳＢ８　完掘状況（北から）

ＳＢ４　完掘状況（東から）

ＳＢ３　完掘状況（南から）

ＳＢ５　完掘状況（北から）



ＳＢ２　遺物出土状況（北から）

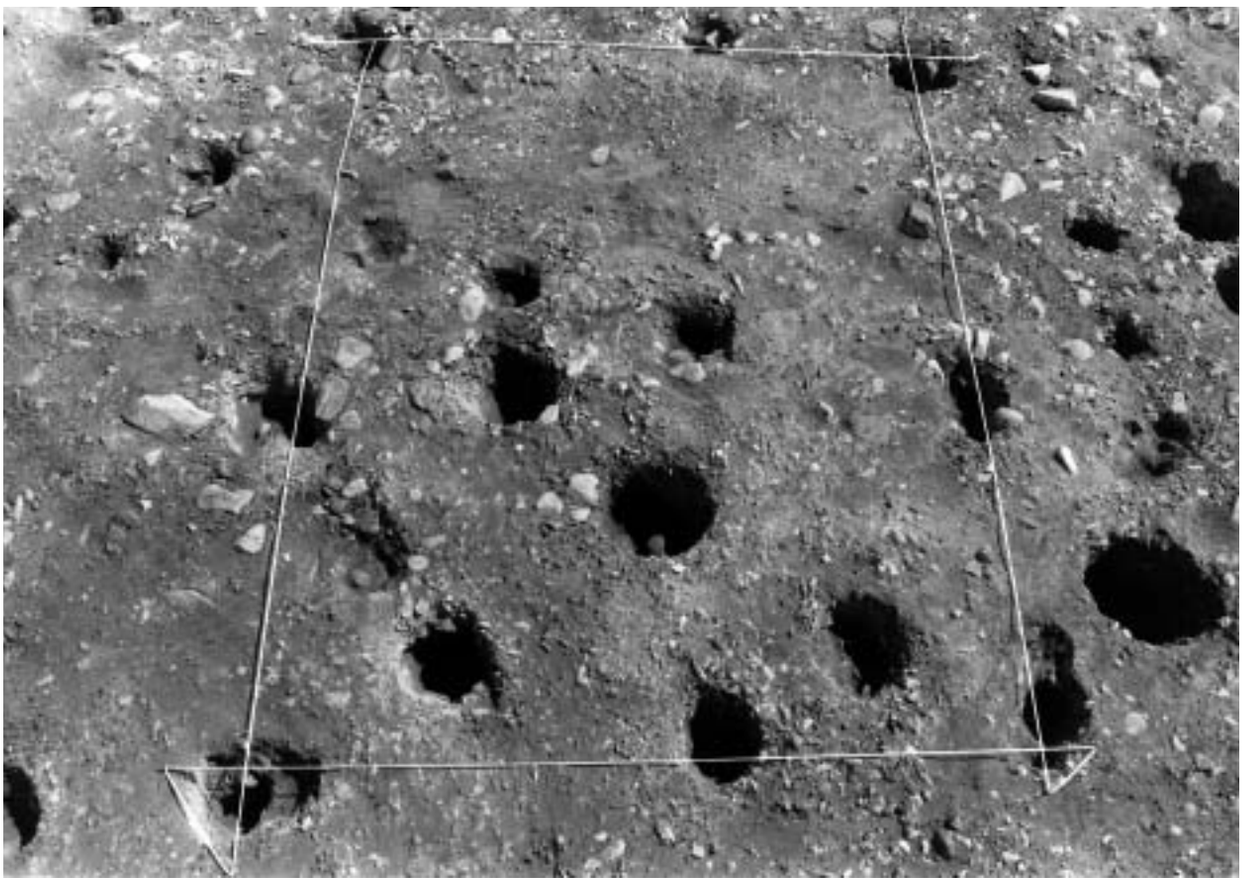
ＳＢ１　完掘状況（西から）

ＳＢ６　完掘状況（東から）

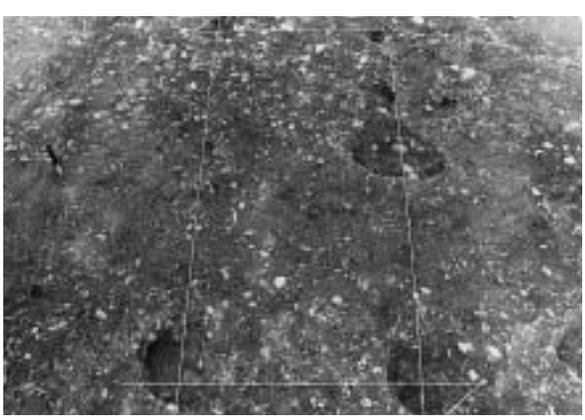
ＳＢ７　遺物出土状況（南から）

ＳＢ７　土器出土状況（西から）

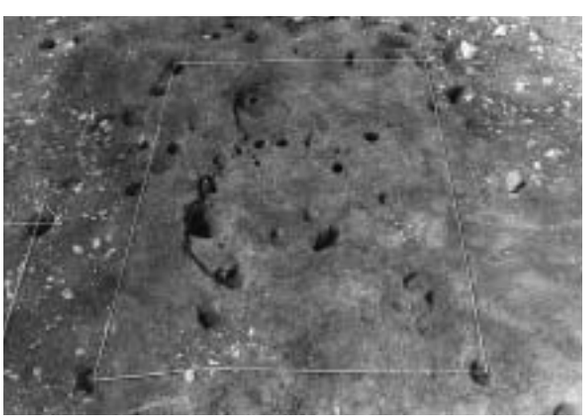
図版６



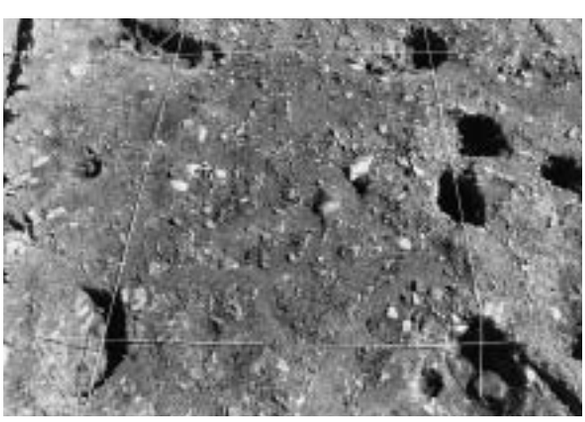
ＳＢ18（北から）



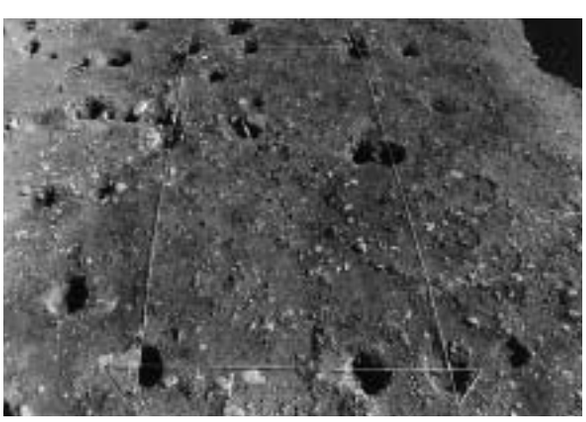
ＳＢ17（南から）



ＳＢ21（南から）



ＳＢ19（北から）



ＳＢ20（北から）

ＳＫ35　遺物出土状況（東から）

ＳＫ30　遺物出土状況（東から）

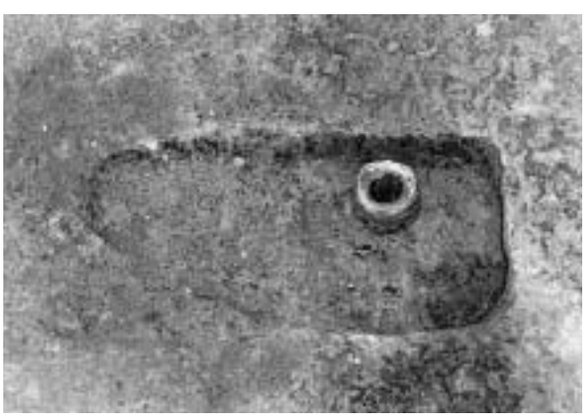
ＳＫ３　遺物出土状況（北から）

ＳＫ４　遺物出土状況（東から）

ＳＫ６　遺物出土状況（南から）

図版８

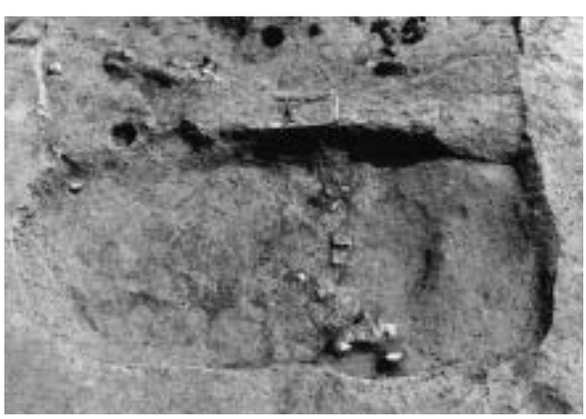
ＳＫ27　遺物出土状況（西から）



ＳＫ12　遺物出土状況

ＳＫ１　完掘状況（北から）

ＳＫ20　遺物出土状況（西から）

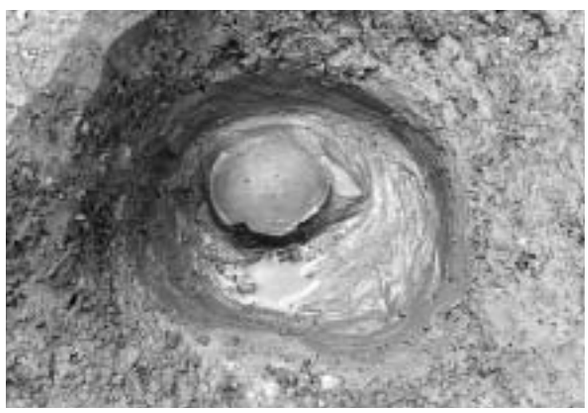


ＳＫ26　遺物出土状況（南から）

ＳＫ９　遺物出土状況（東から）

ＳＫ33　遺物出土状況（東から）

ＳＫ34　遺物出土状況（北から）



ＳＰ229　遺物出土状況（東から）

埋甕出土状況（北から）

Ｃ区　遺物包含層　咸平元宝出土状況（東から）

Ｃ区　遺物包含層　土器出土状況（東から）

Ｃ区　遺物包含層　土器出土状況（南から）

図版10

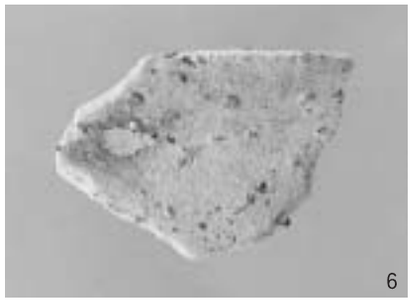
Ｃ区　遺物包含層　調査区北端下層（北から）

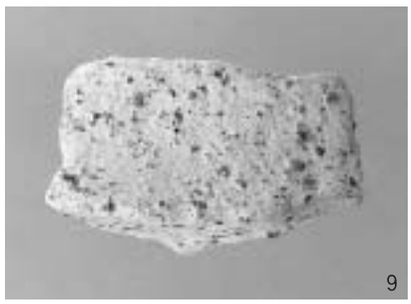
Ｃ区　遺物包含層　土器出土状況（南から）

Ｃ区　遺物包含層　遺物出土状況（北から）

Ｃ区　遺物包含層　トレンチ③土層（北から）

Ｃ区　遺物包含層　調査区北端土層（南から）





宮迫神田遺跡出土遺物(1)

図版12

14

15

16

17

19

20

21

22

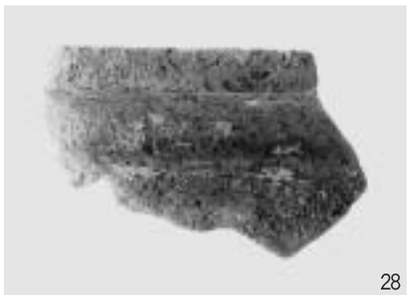
23

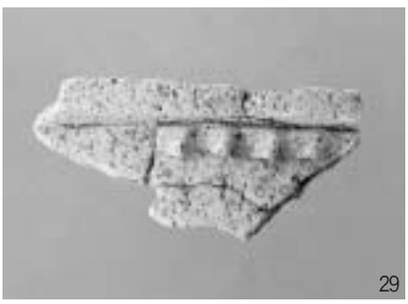
26

24

25

27


28


29

30

31

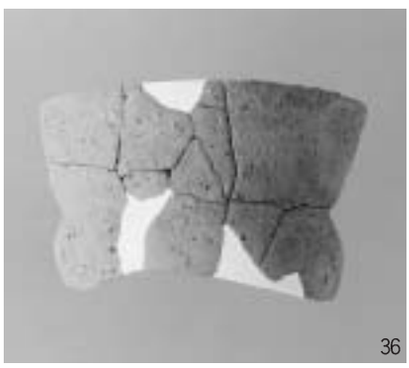
32

宮迫神田遺跡出土遺物(2)

33

34

35


36

39

40

41

42

43

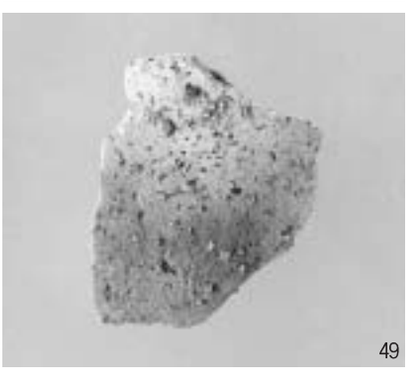
44

45

46

47

48


49

50

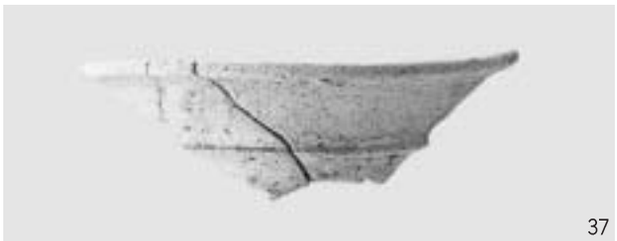
51

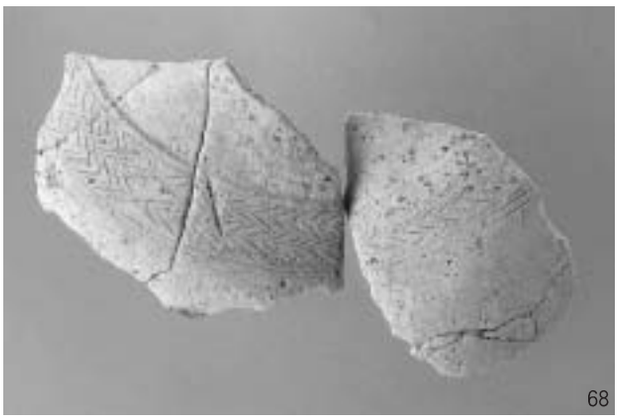
52

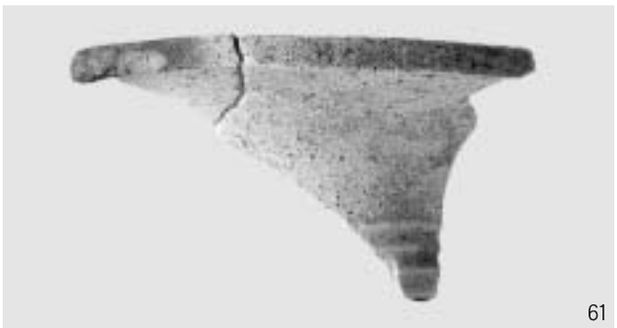
54

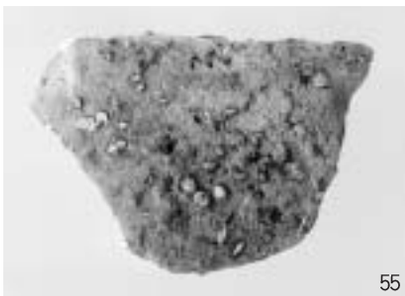
宮迫神田遺跡出土遺物(3)

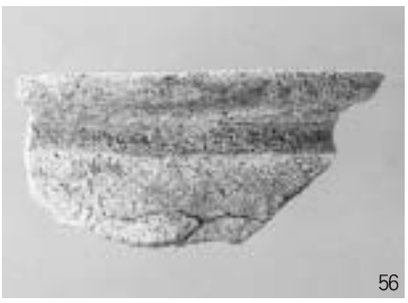
図版14

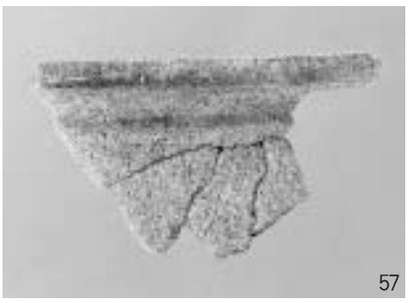


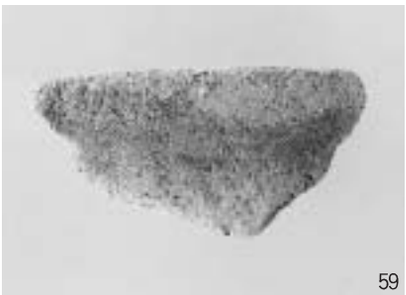


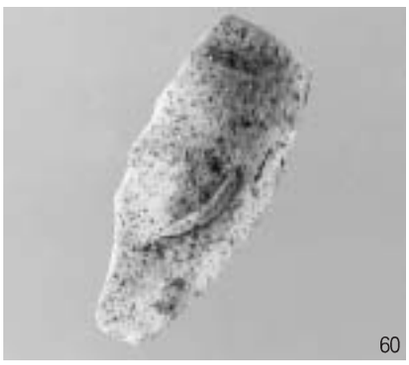


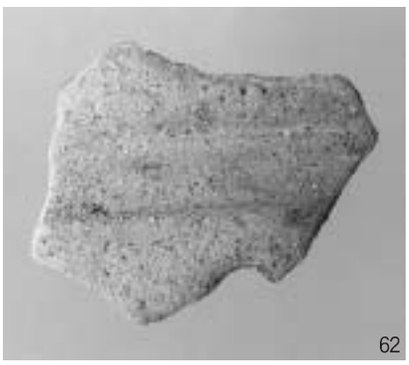


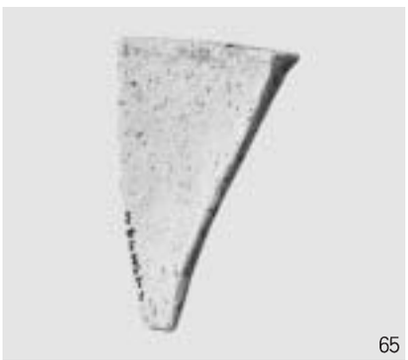












宮迫神田遺跡出土遺物(4)

67

69

73

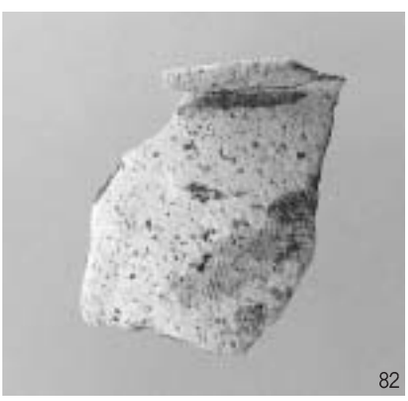
74

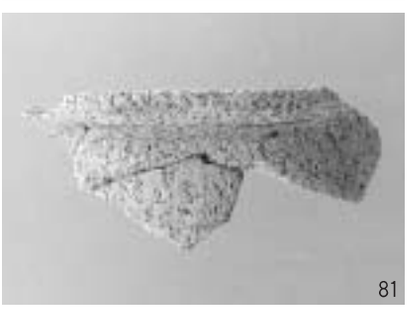
76

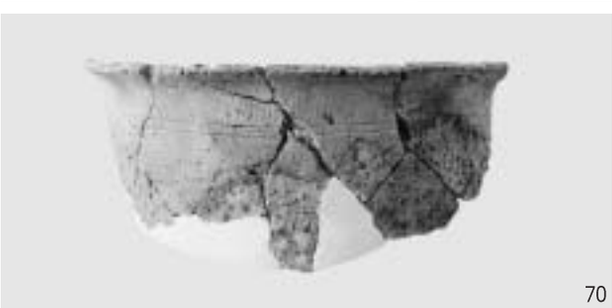
77

79

78


82

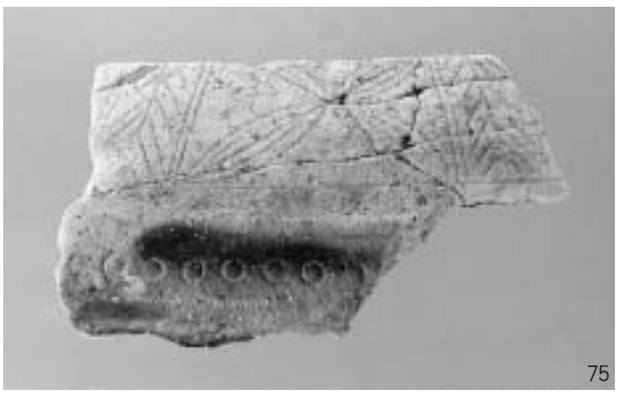

81


70

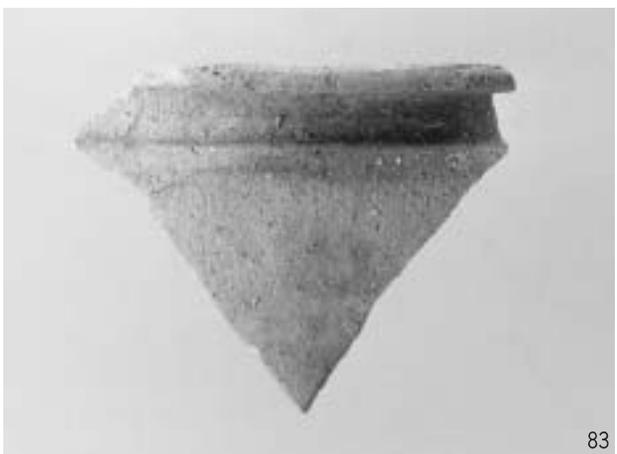
71

72

宮迫神田遺跡出土遺物(5)


75

80


83

85

84

86

87

88

89

90

91

宮迫神田遺跡出土遺物(6)

93

94

99

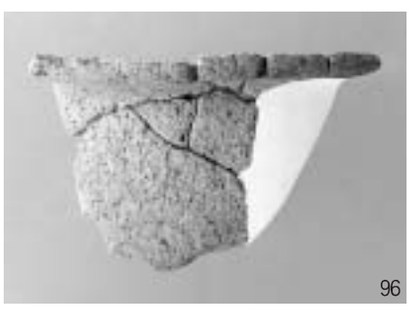
100

92

95

97

98


96

101

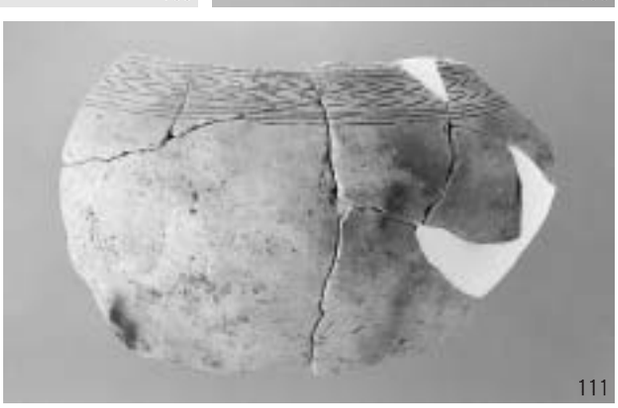
102

104

105

106

110


111

宮迫神田遺跡出土遺物(7)

図版18

103

113

108

109

107

112

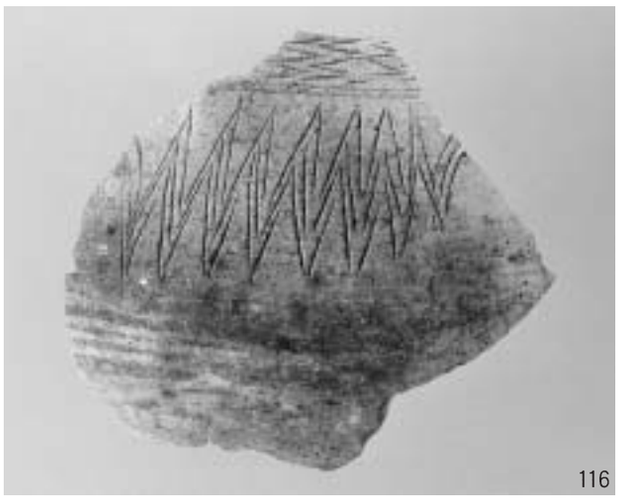
117

118

宮迫神田遺跡出土遺物(8)

114

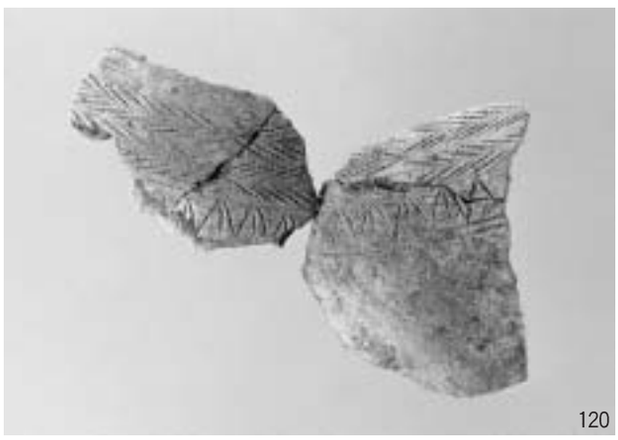
115

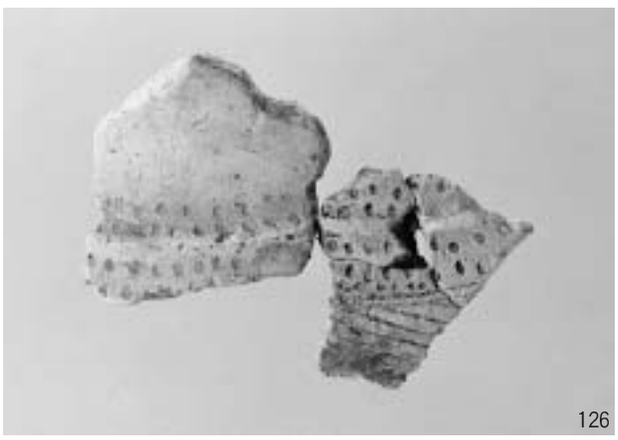

116

122

121

119


120


126

宮迫神田遺跡出土遺物(9)

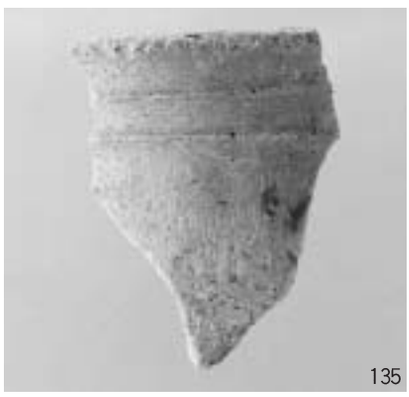
図版20

123

124

128

127

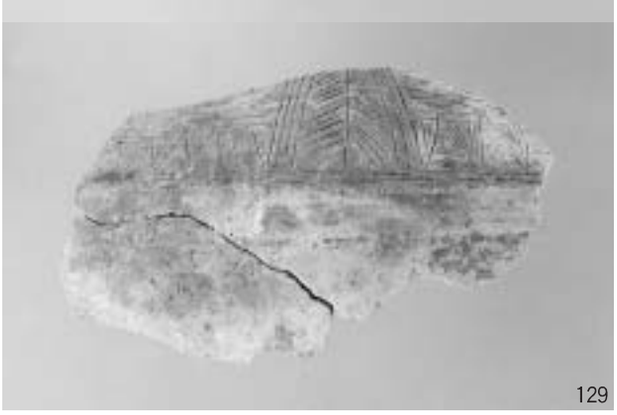

135

138

143

147

144


129

125

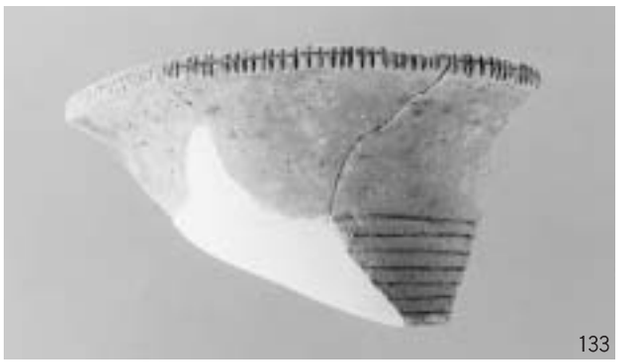
130

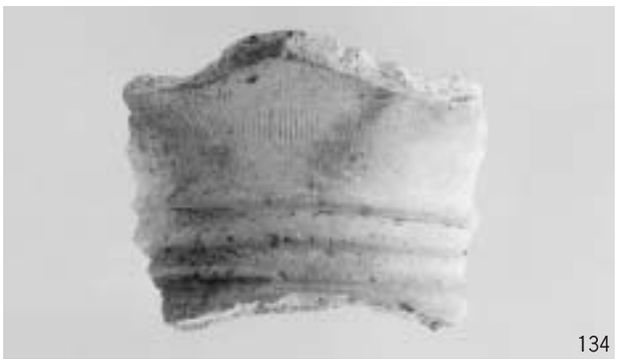
140

宮迫神田遺跡出土遺物(10)

131

132


133


134

136

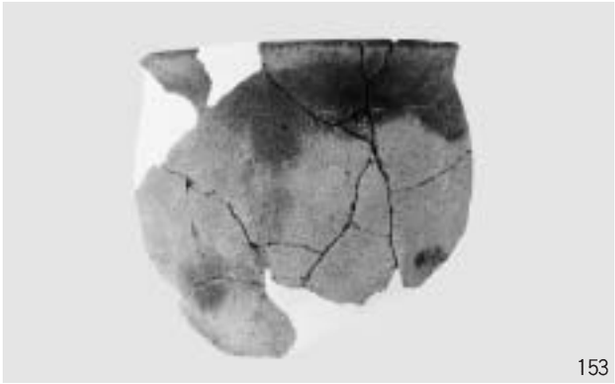
137

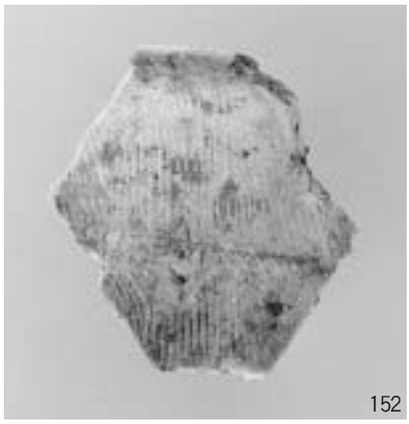
141

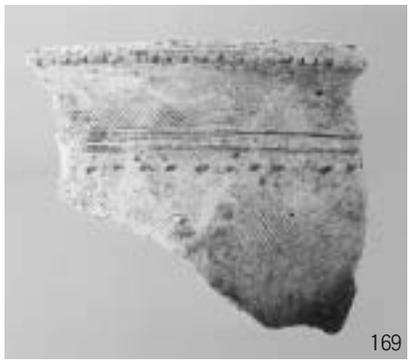
142

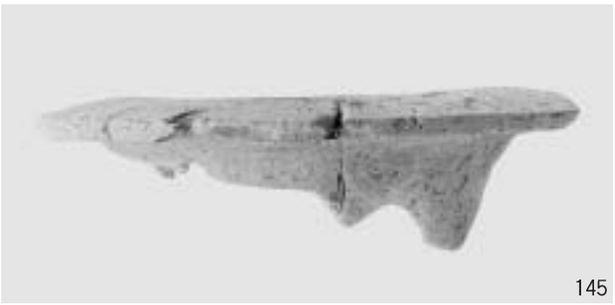
150

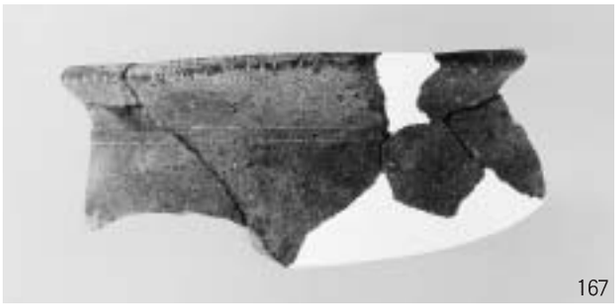
宮迫神田遺跡出土遺物(11)



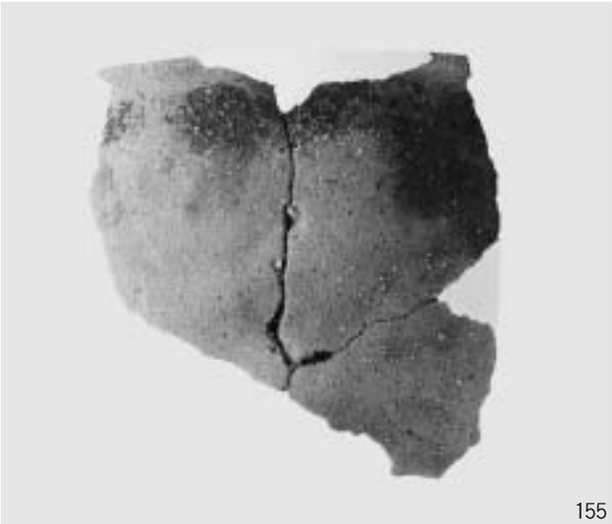








宮迫神田遺跡出土遺物(12)


155

158

156

157

160

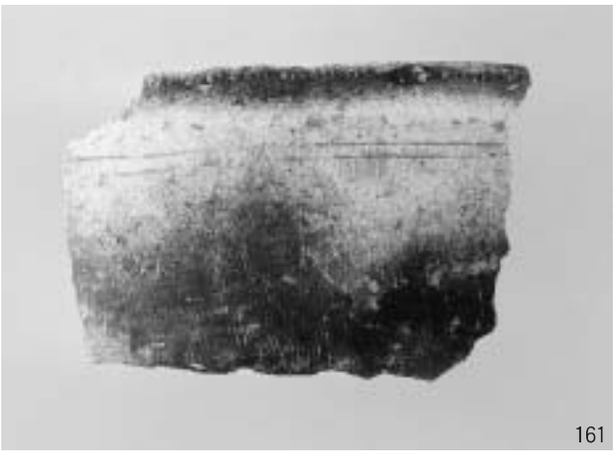
159

166

170

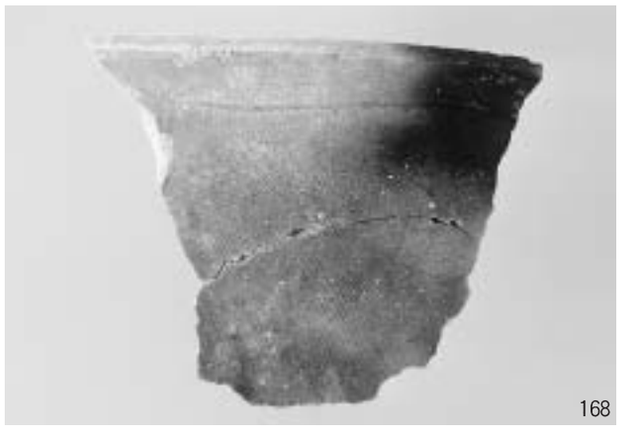
宮迫神田遺跡出土遺物(13)

図版24


161

163

162


168

164

165

171

175

宮迫神田遺跡出土遺物(14)

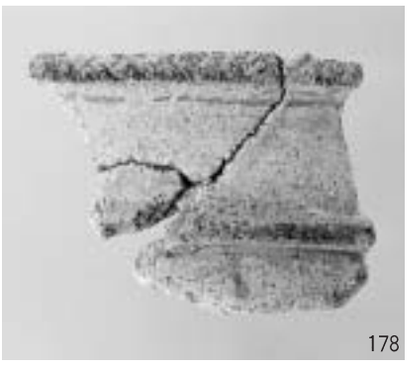
173

176

179

174

177


178

182

183

190

191

193

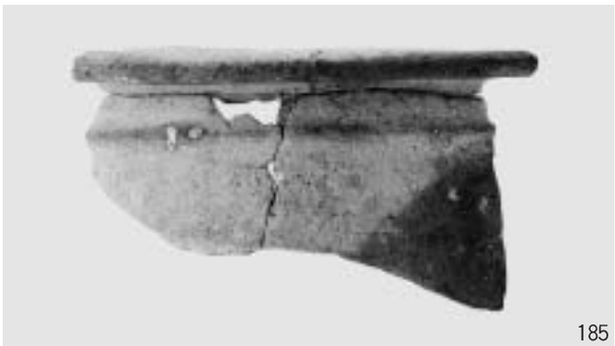
202

180

181

宮迫神田遺跡出土遺物(15)

184


185

186

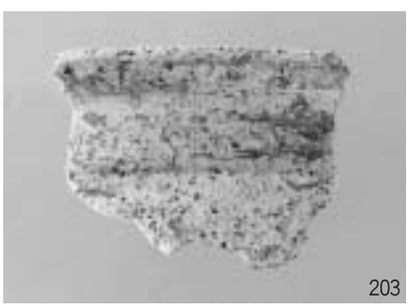
187

188

189

192

211


203

204

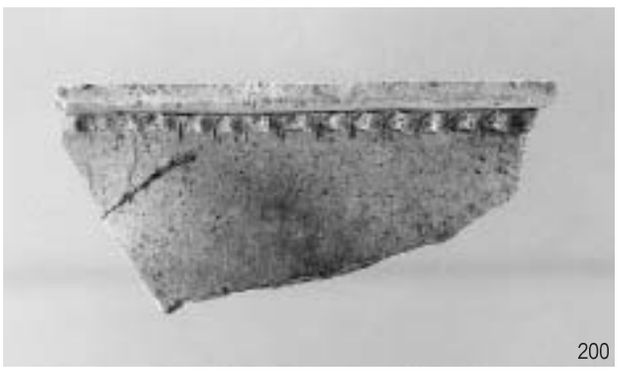
206

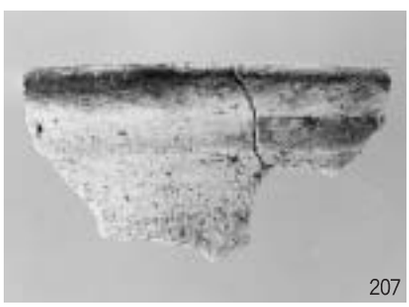
宮迫神田遺跡出土遺物(16)

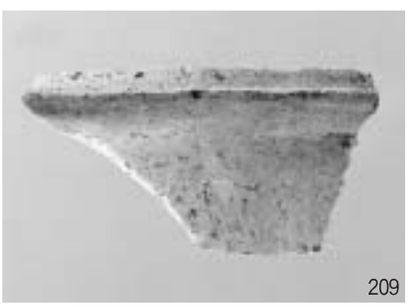
198

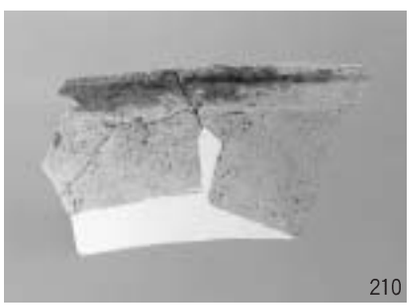
199

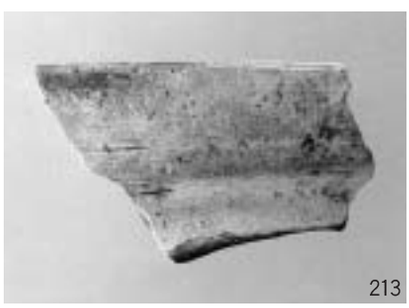
201


200


207


209


210


213

214

215

220

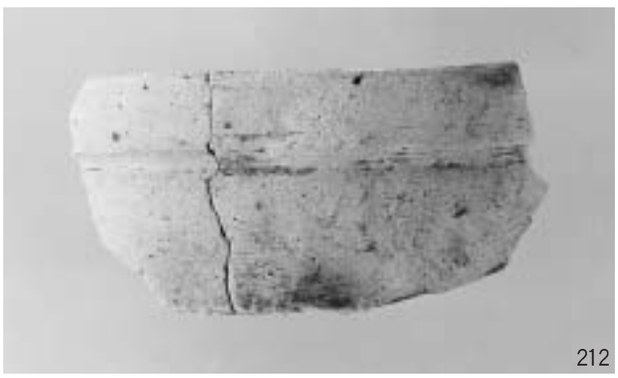
221

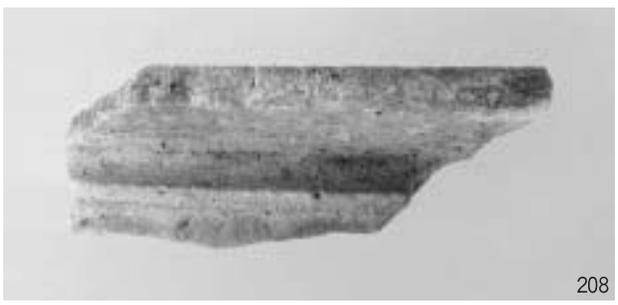
宮迫神田遺跡出土遺物(17)

図版28

217

218


212


208

219

223

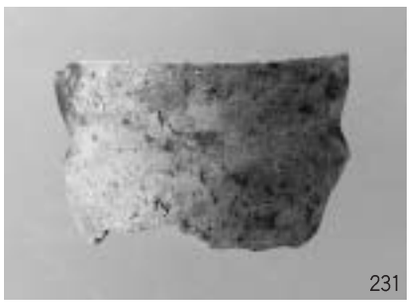
224

216

宮迫神田遺跡出土遺物(18)

225

226


231

227

228

229

230

232

233

234

235

236

237

239

240

宮迫神田遺跡出土遺物(19)

図版30

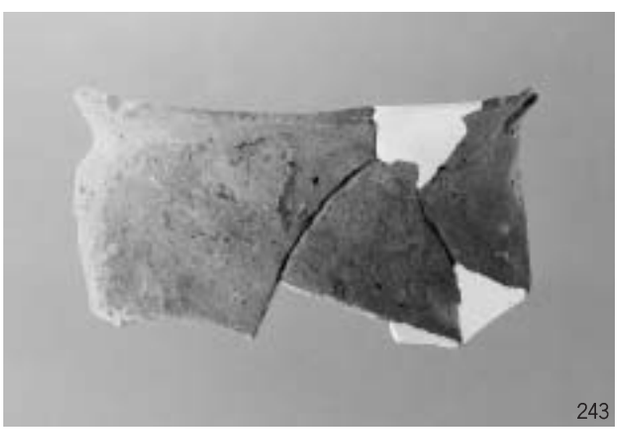
241

245

246

238

244


243

242

247

248

宮迫神田遺跡出土遺物(20)

249

250

251

252

253

254

258

259

260

263

264

265

256

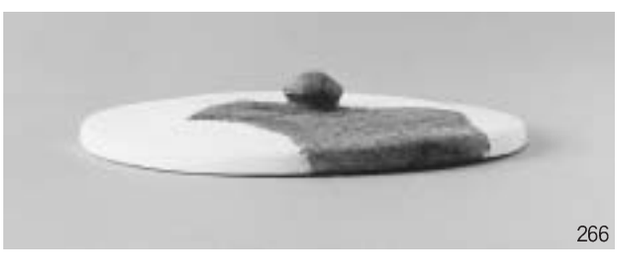
262

宮迫神田遺跡出土遺物(21)

図版32

255

257


266

261

268

267

269

270

271

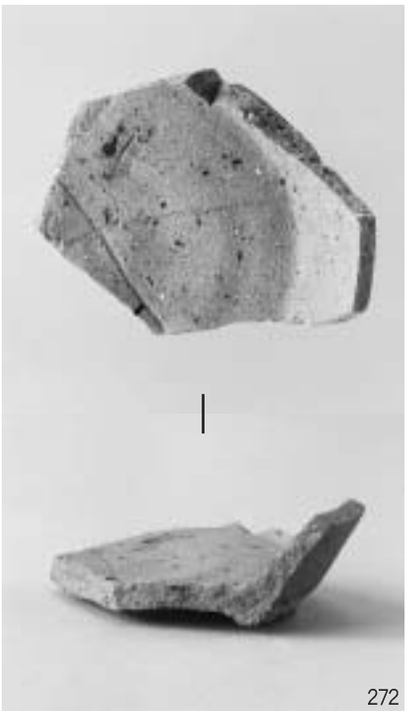
273

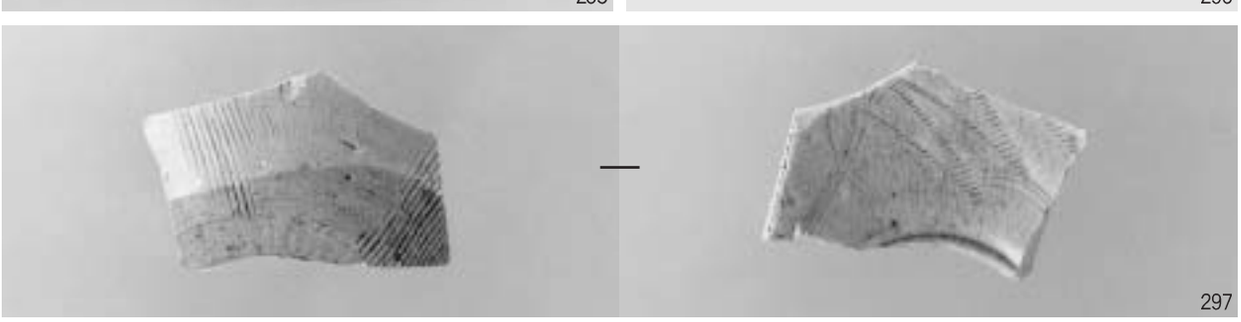
274

275

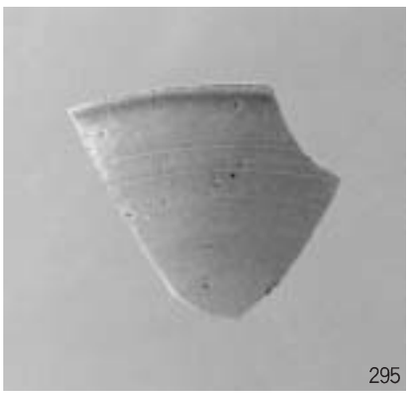
276

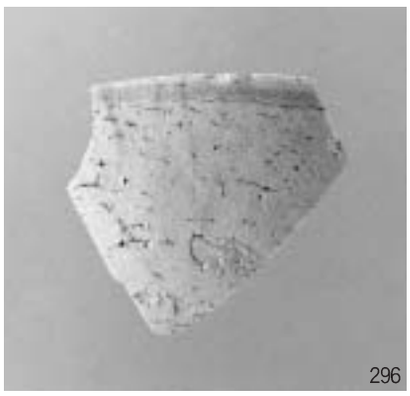
宮迫神田遺跡出土遺物(22)

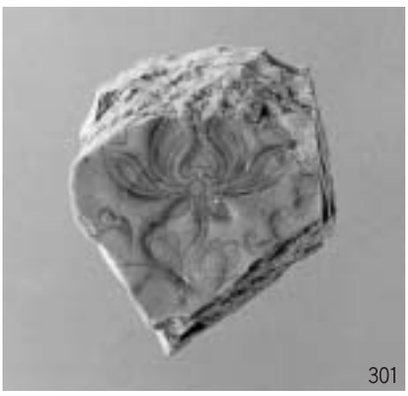


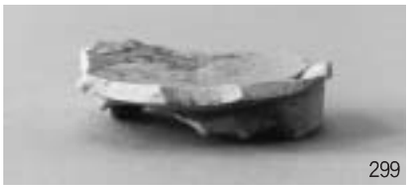


宮迫神田遺跡出土遺物(23)


295


296


301


299

300

302

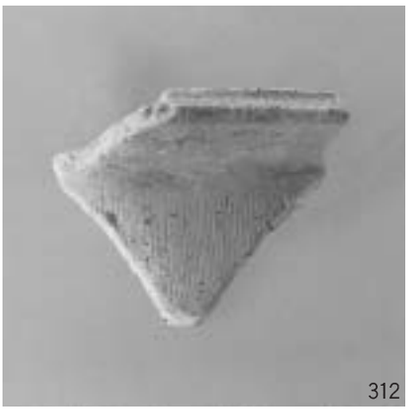
303

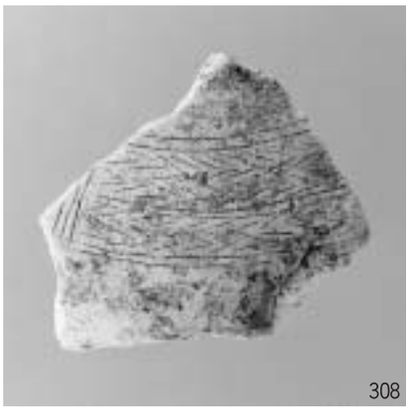
304

305

306

309

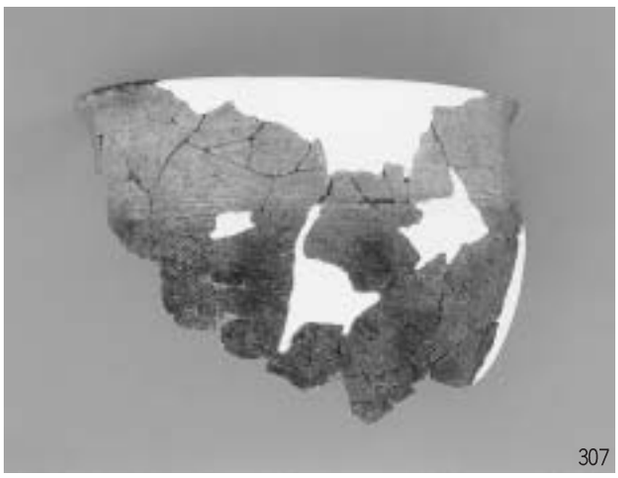

312


308

313

314

宮迫神田遺跡出土遺物(24)


307

310

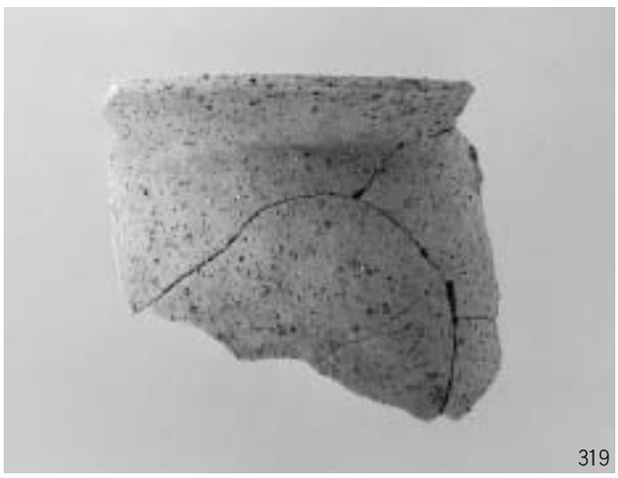
311

318

315

316

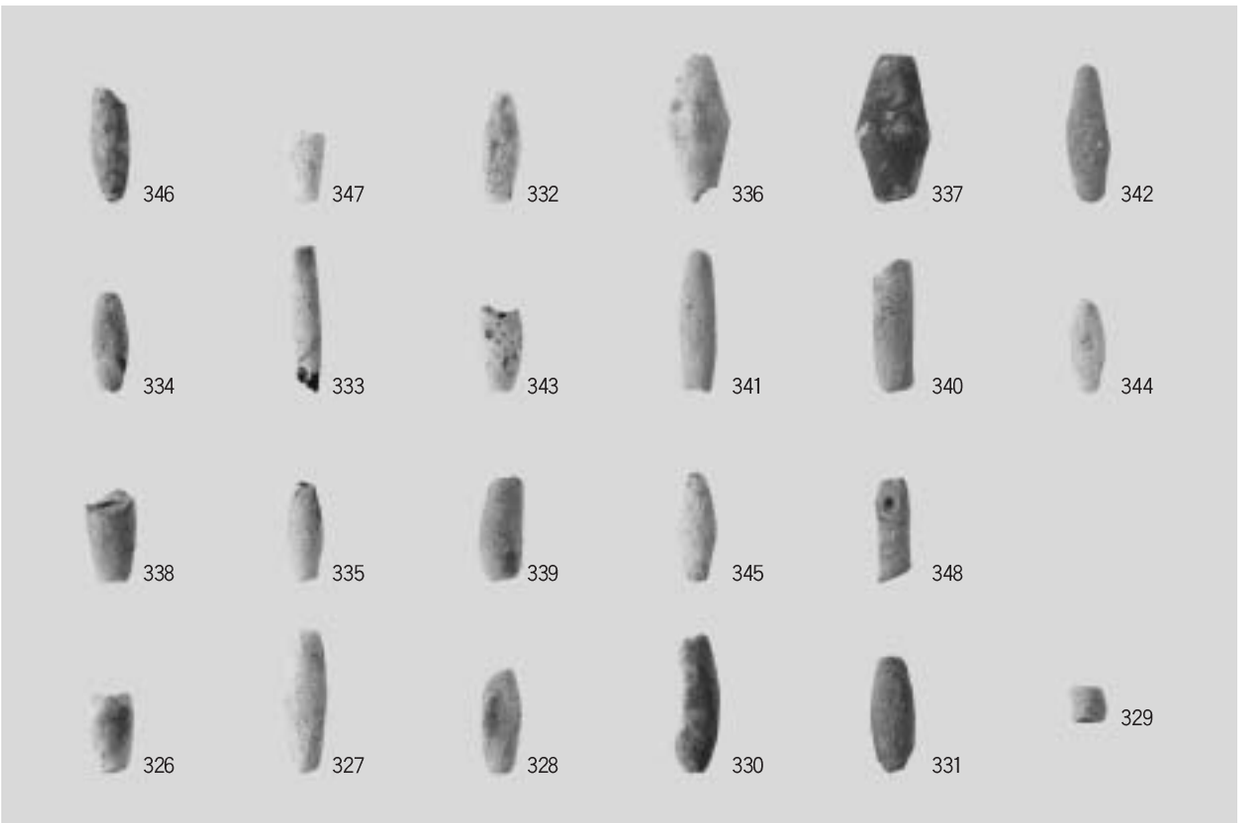
317


319

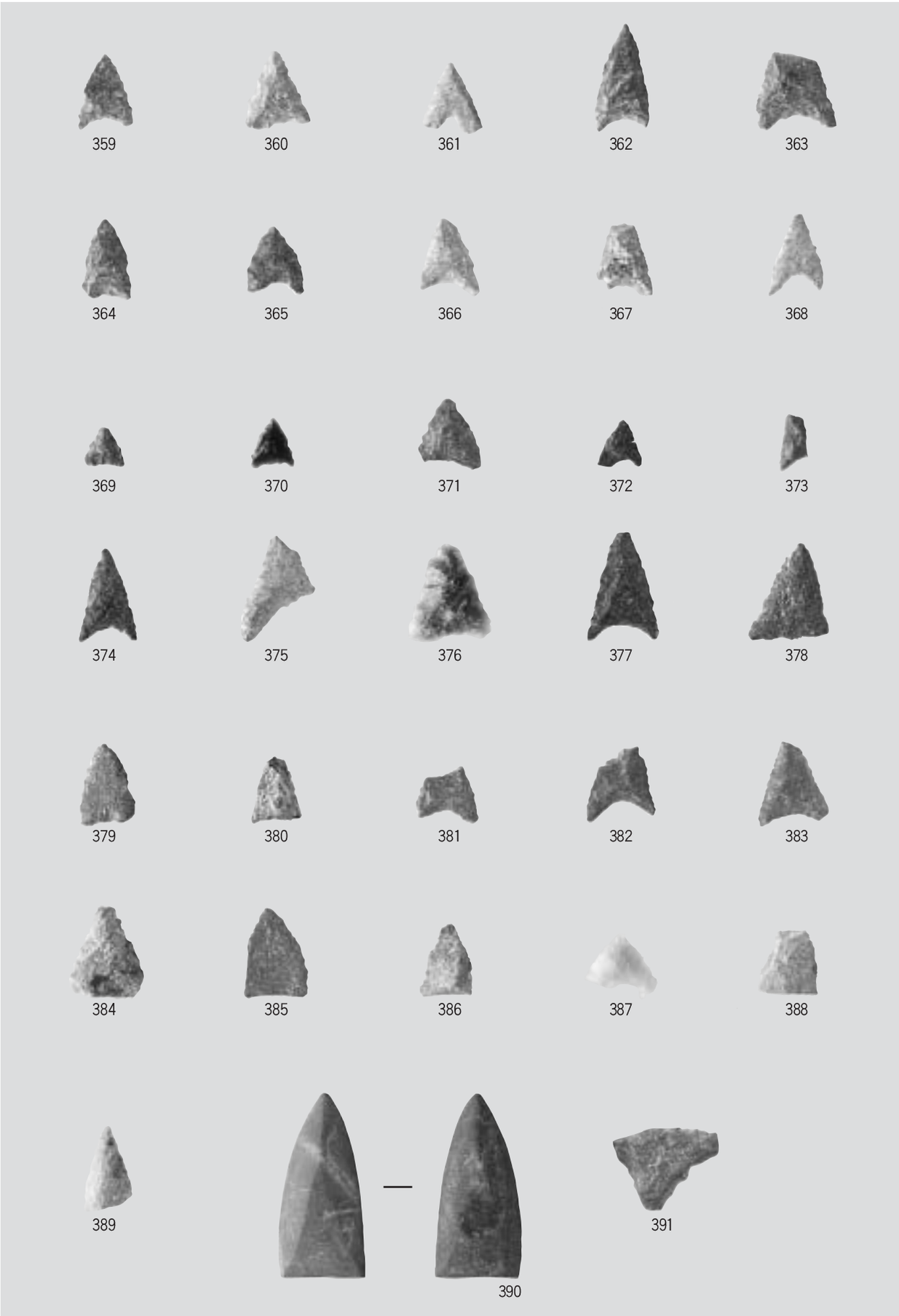
320

宮迫神田遺跡出土遺物(25)

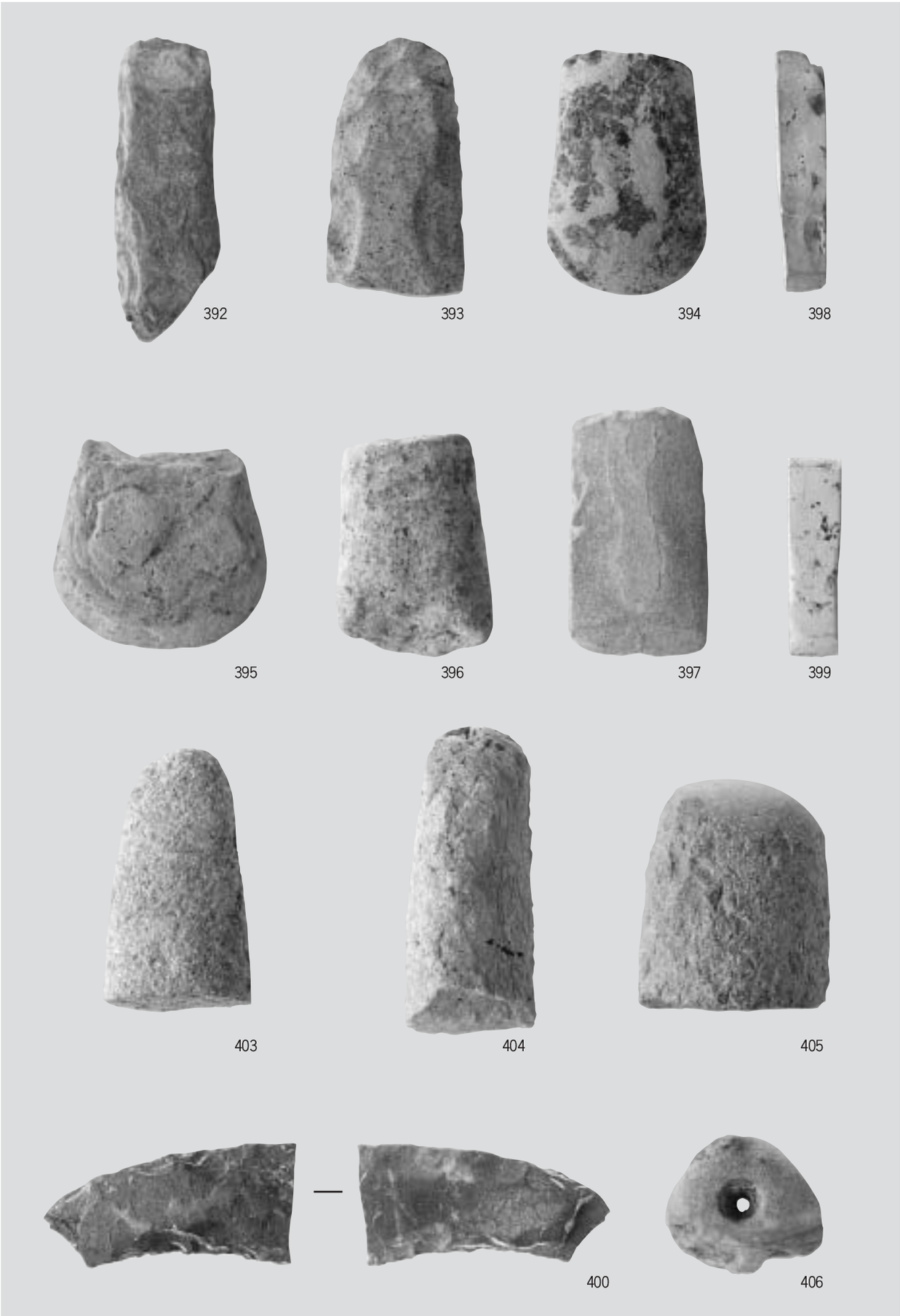
図版36



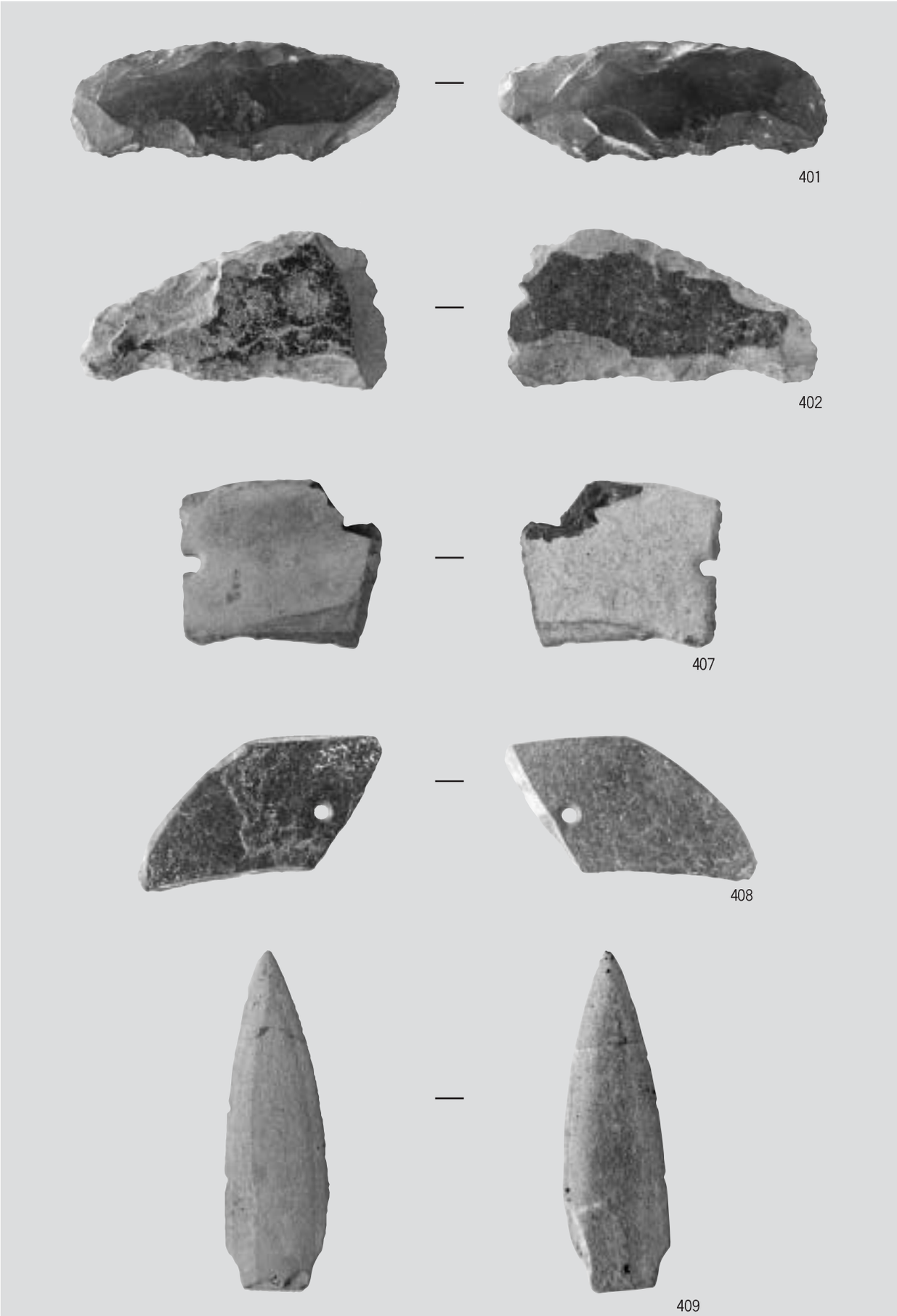
宮迫神田遺跡出土遺物(26)



宮迫神田遺跡出土遺物(27)



宮迫神田遺跡出土遺物(28)



宮迫神田遺跡出土遺物(29)

図版40

146

151

194①

194②

195

196

197

205

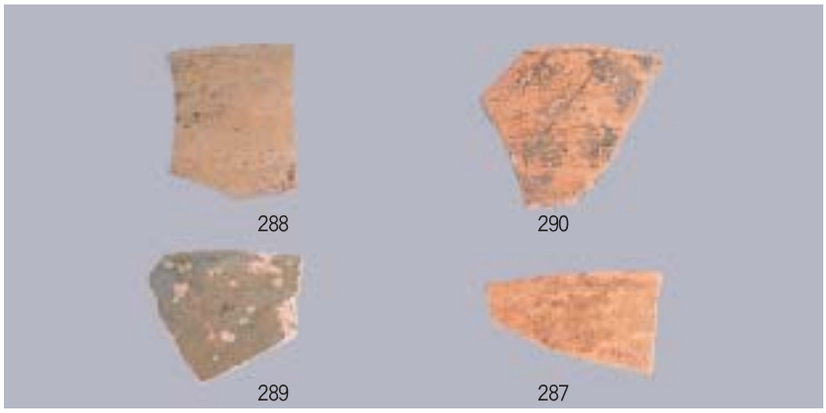
222

292

291

294

293



324

354

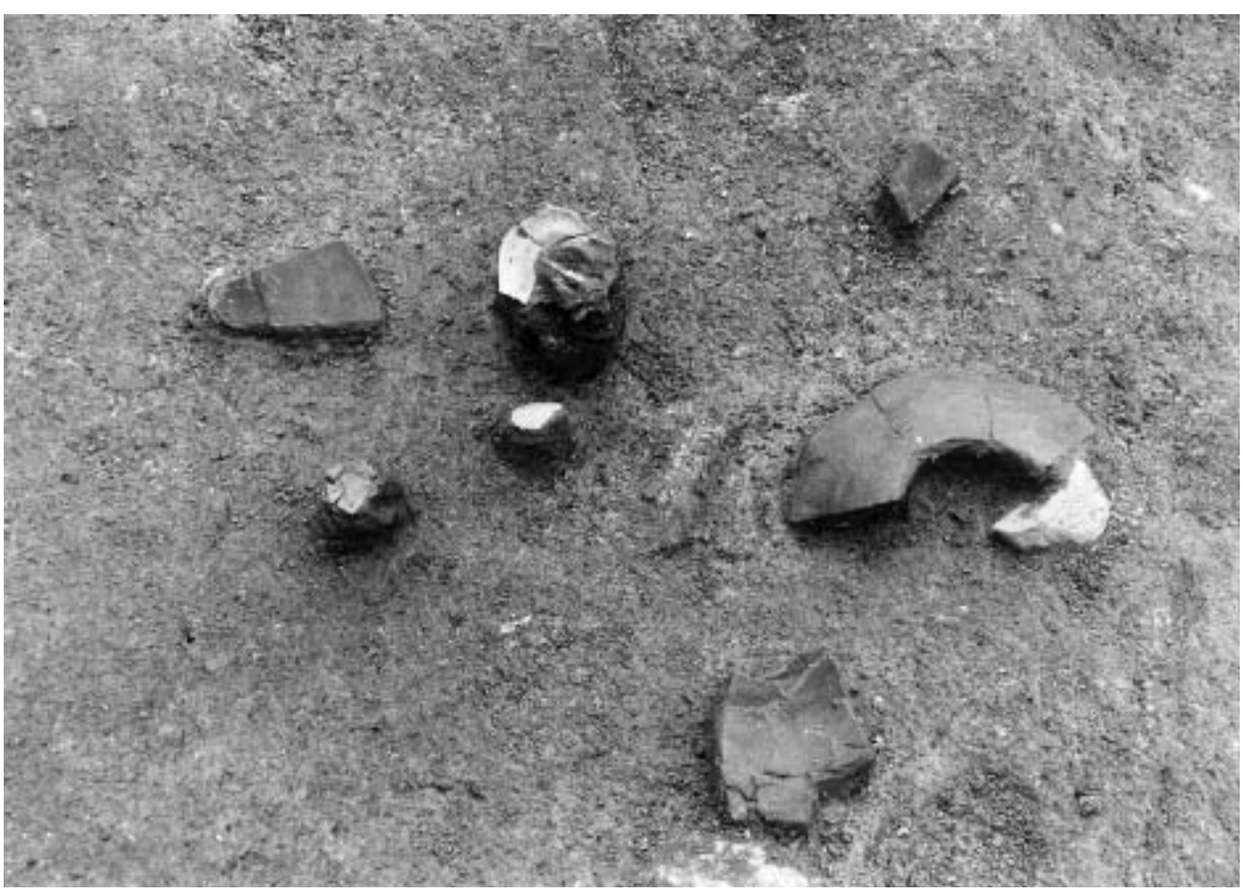
宮迫神田遺跡出土遺物(30)

的 場 遺 跡 図 版

調査区遠景（南東から）

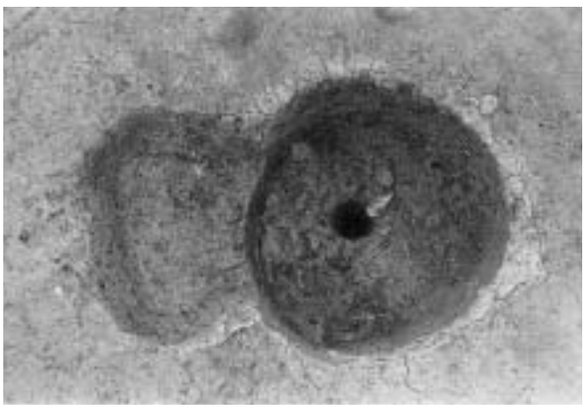
調査区全景

ＳＫ７　土器出土状況（東から）



ＳＫ９　土器出土状況（北から）

図版44



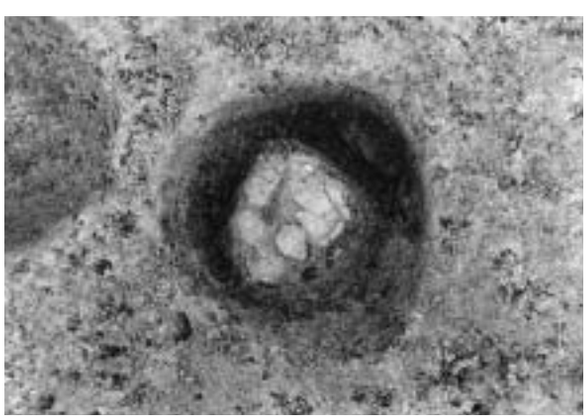
ＳＫ４・５　完掘状況（東から）

ＳＫ８　完掘状況（南から）

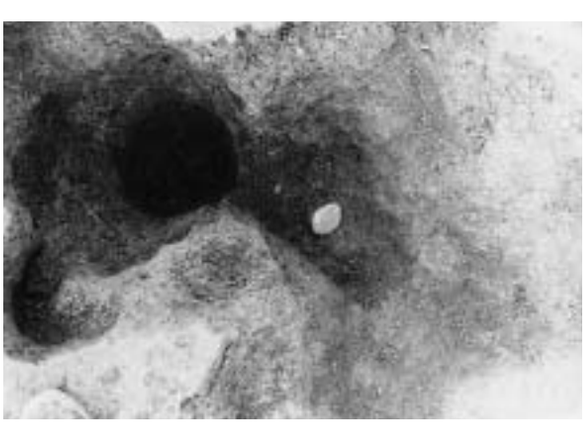
ＳＫ10　土器出土状況（西から）

ＳＫ２　完掘状況（南から）

ＳＫ12　完掘状況（北から）

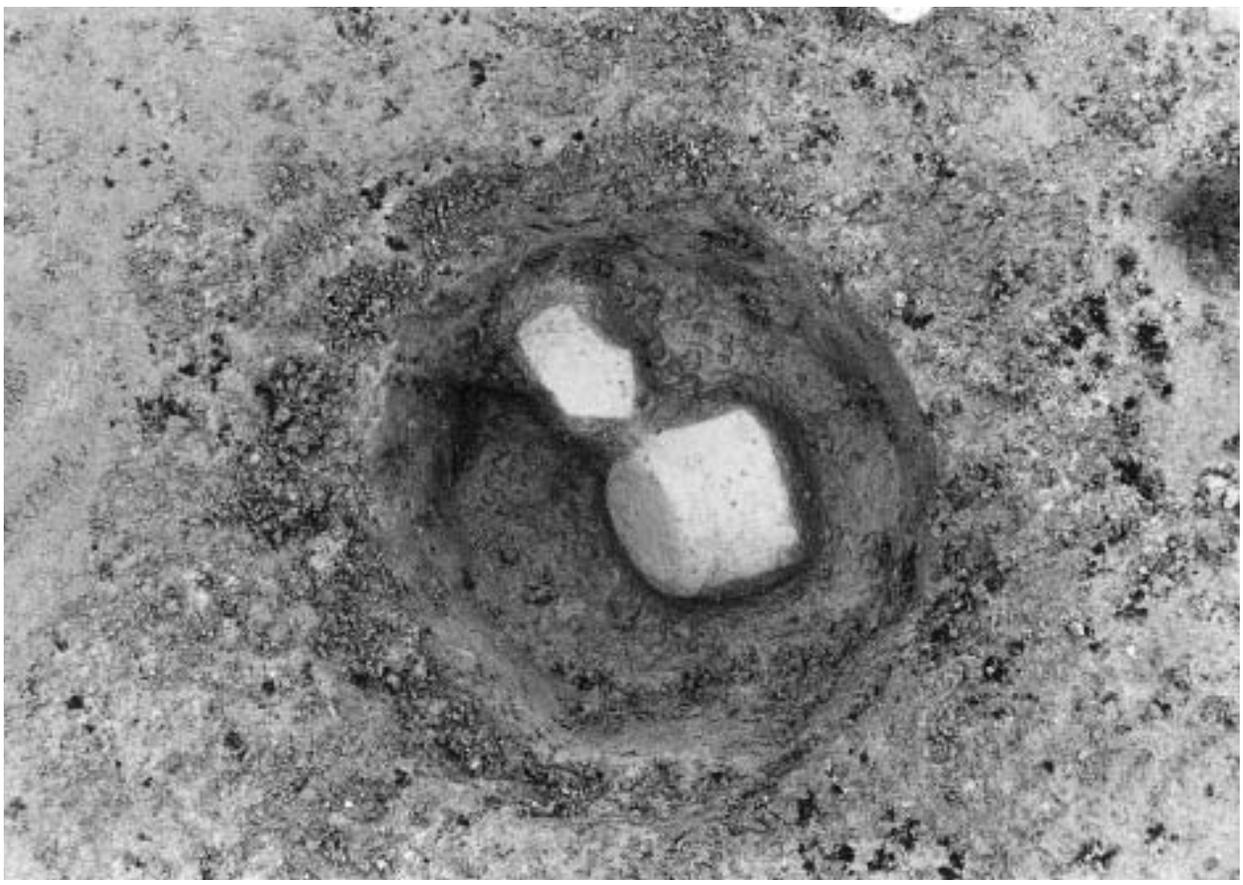


ＳＰ３　土器出土状況（南から）

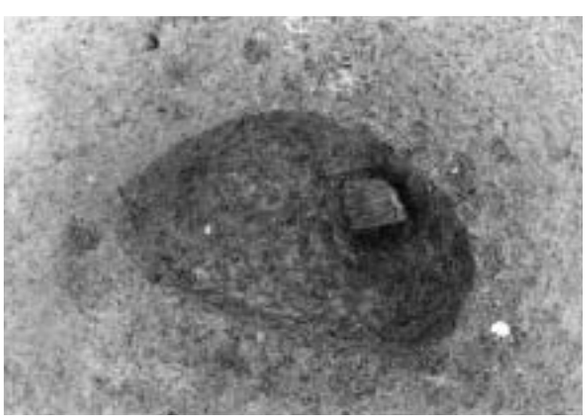


ＳＰ18　土器出土状況（南から）

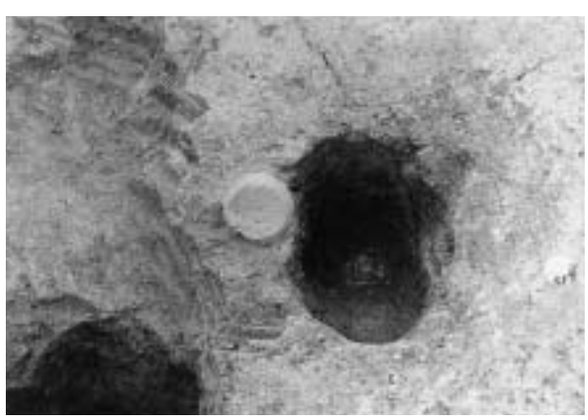
ＳＰ40　土器出土状況（西から）



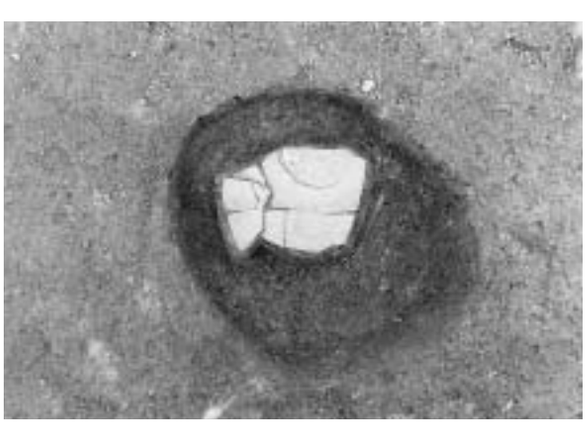
ＳＰ１　土器出土状況（西から）



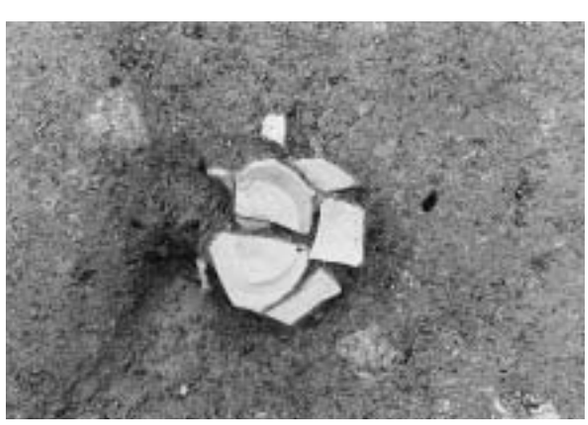
ＳＰ66　土器出土状況（西から）



ＳＰ82　土器出土状況（北から）

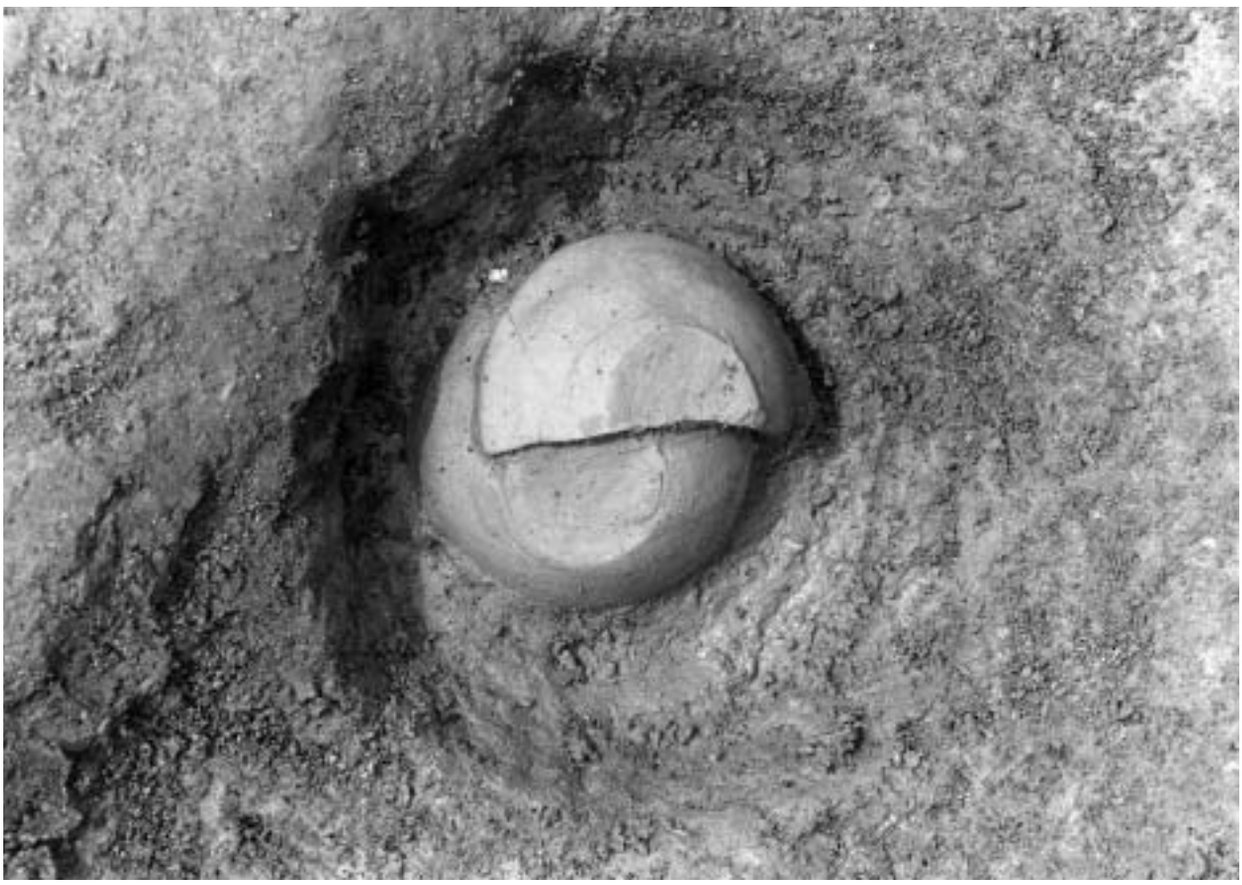


ＳＰ98　土器出土状況（南から）

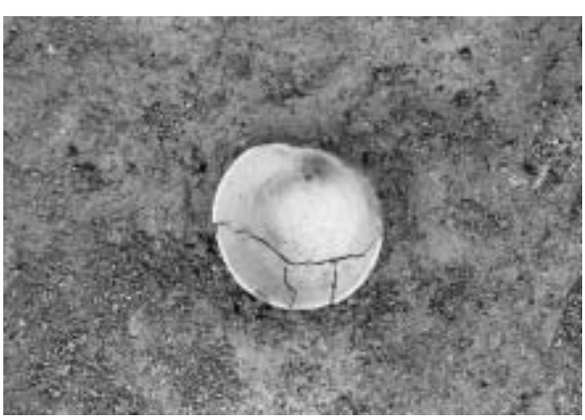


Ｄ区　遺物包含層　土器出土状況（南から）

図版46



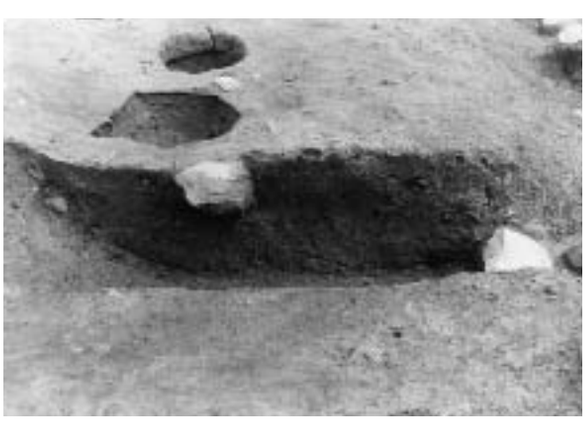
ＳＰ76　土器出土状況（東から）



Ｄ区　遺物包含層　土器出土状況（北から）

Ｄ区　遺物包含層　土器出土状況（南から）

Ｄ区　石列出土状況（北から）



Ｄ区　石列土層断面（西から）

土器溜状遺構　遺物出土状況（東から）

土器溜状遺構　土器出土状況（北から）

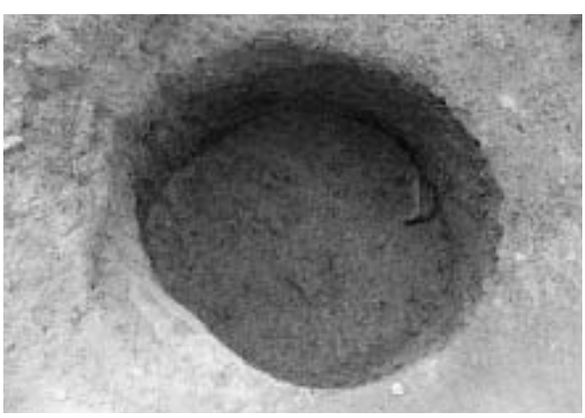
土器溜状遺構　土器出土状況（南から）

土器溜状遺構　遺物出土状況（東から）

土器溜状遺構　遺物出土状況（北から）

ＳＫ14　土器出土状況（北から）

土器溜状遺構　土器出土状況（北から）



ＳＫ13　完掘状況（北から）

ＳＫ14　完掘状況（南から）

土器溜状遺構　土器出土状況（東から）

土器溜状遺構　完掘状況（北から）

土器溜状遺構　遺物出土状況（南から）

土器溜状遺構　遺物出土状況（東から）

土器溜状遺構　遺物出土状況（西から）

土器溜状遺構　土層断面（東から）

的場遺跡出土遺物(1)

28

29

30

31

32

33

37

34

35

36

的場遺跡出土遺物(2)

図版52

38

39

40

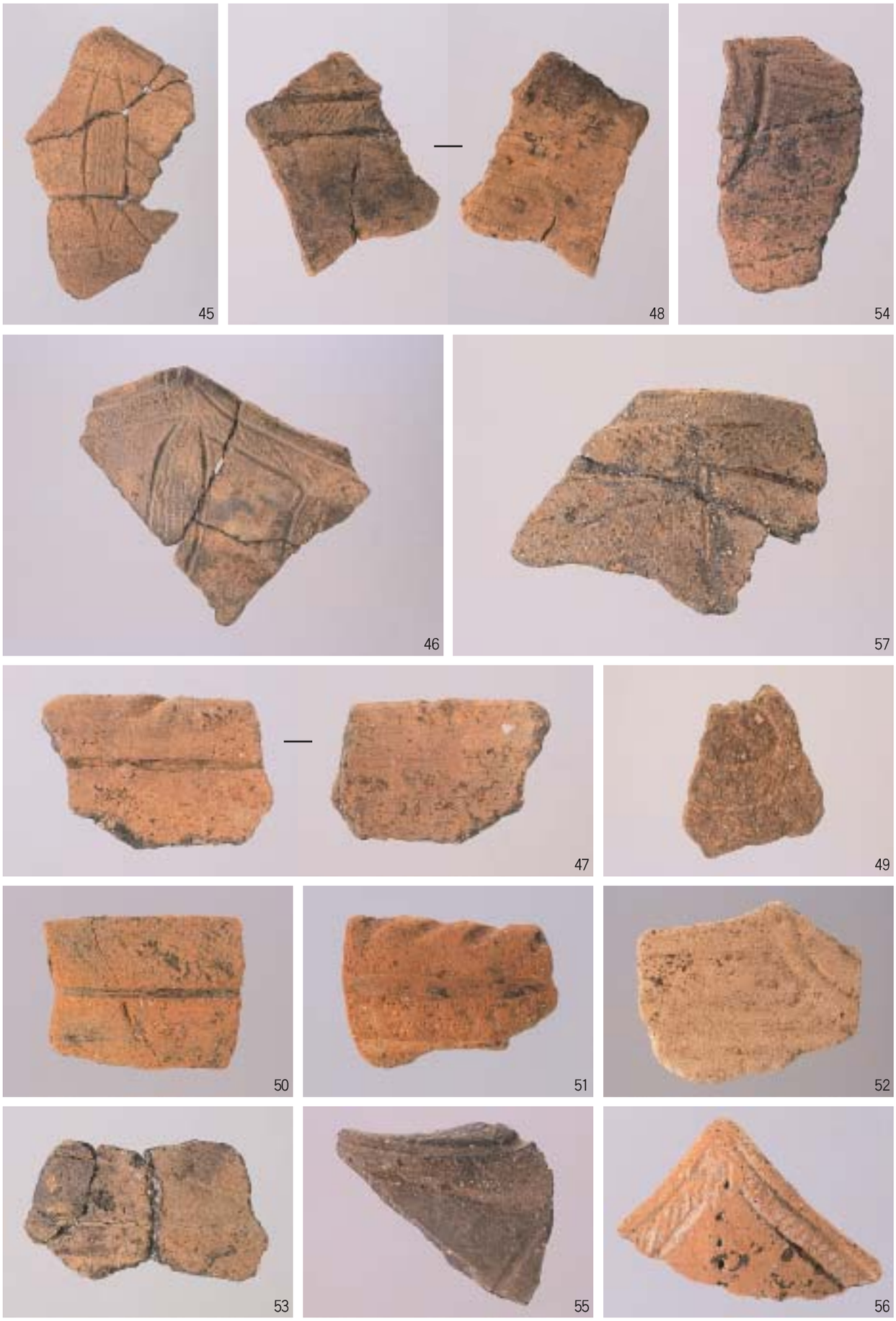
41

42

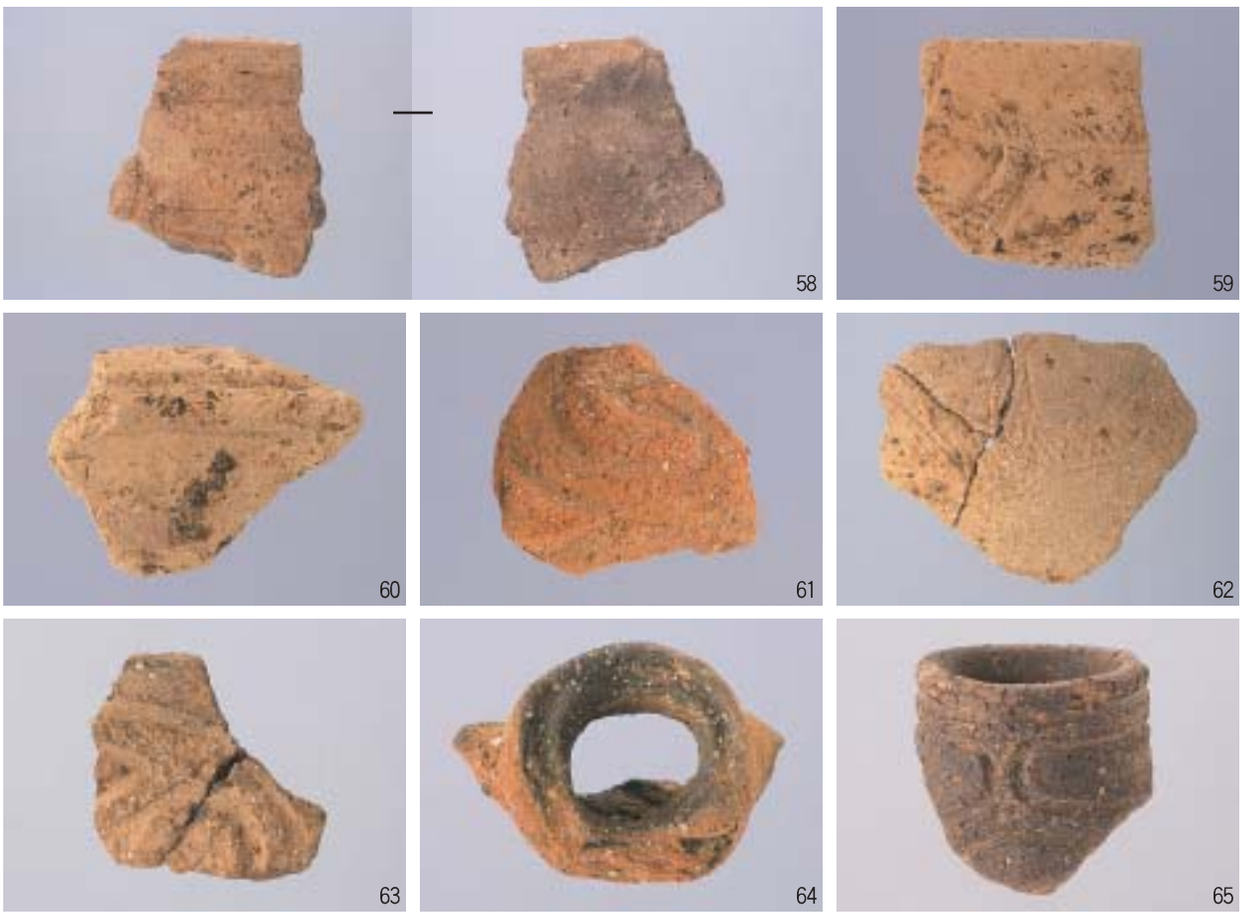
43

44

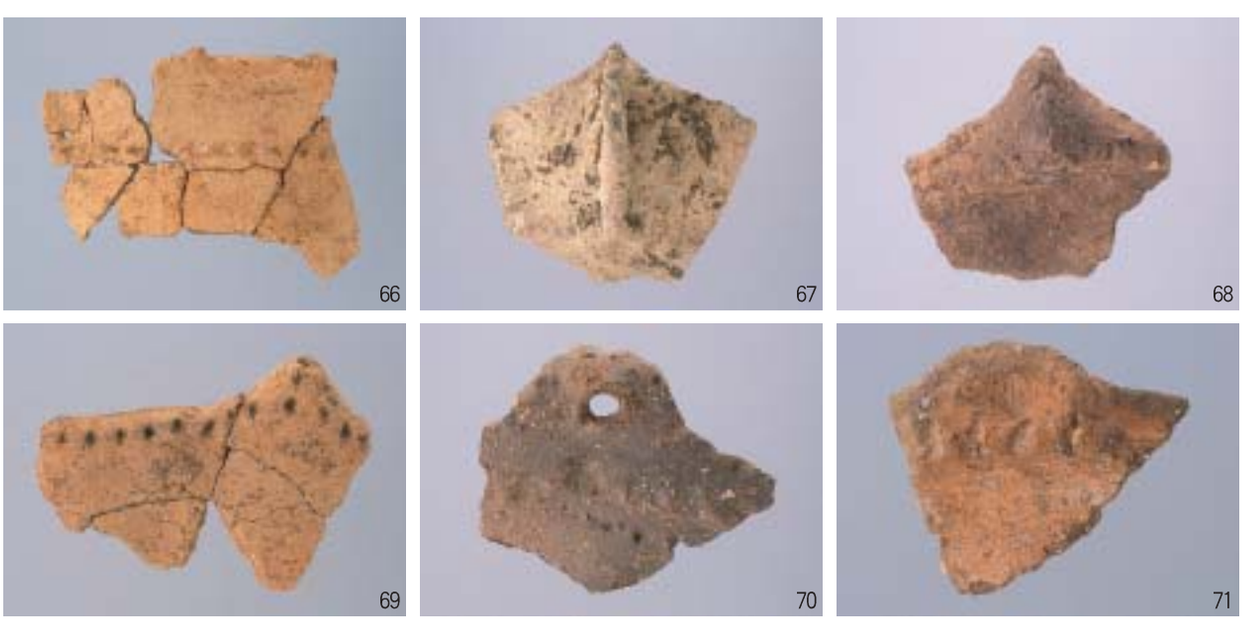
第56図　弥生時代以降の遺物
的場遺跡出土遺物(3)



的場遺跡出土遺物(4)

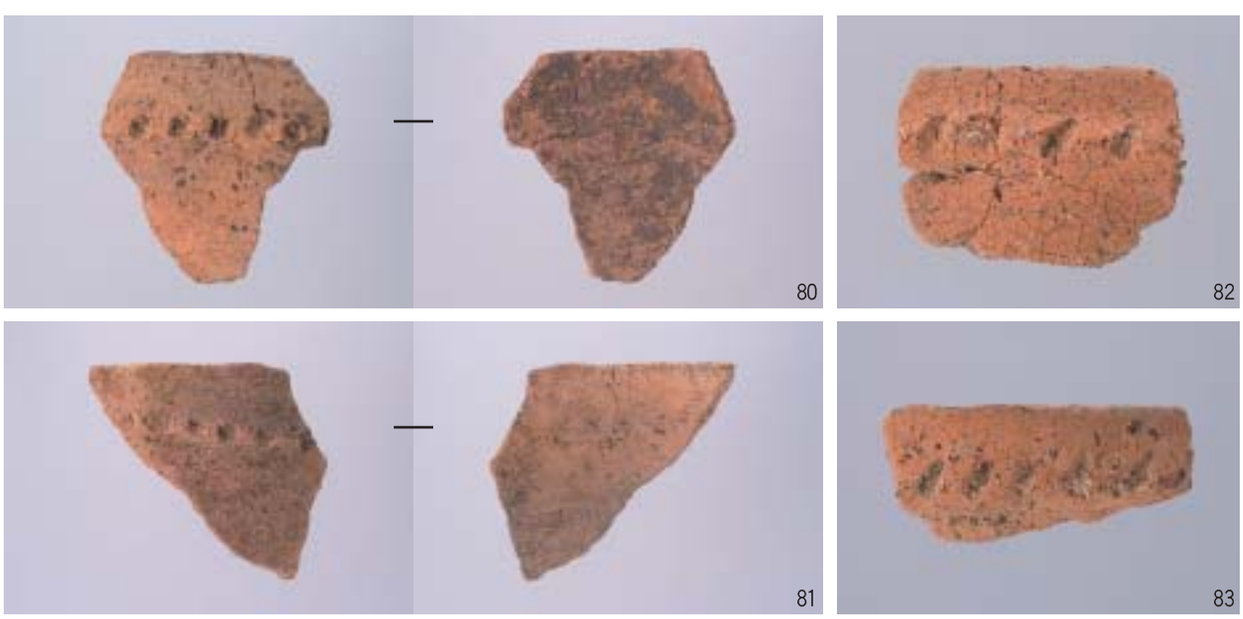


第57図　縄文土器実測図(1)

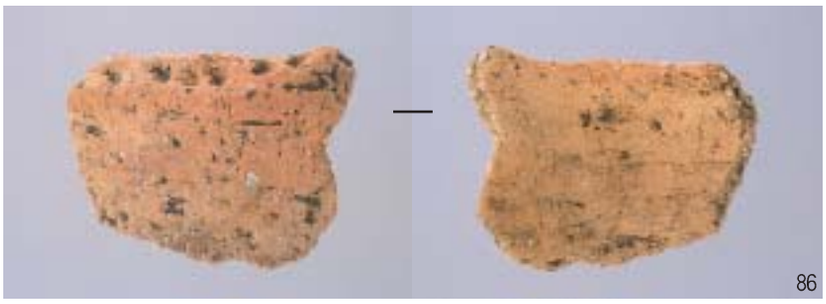


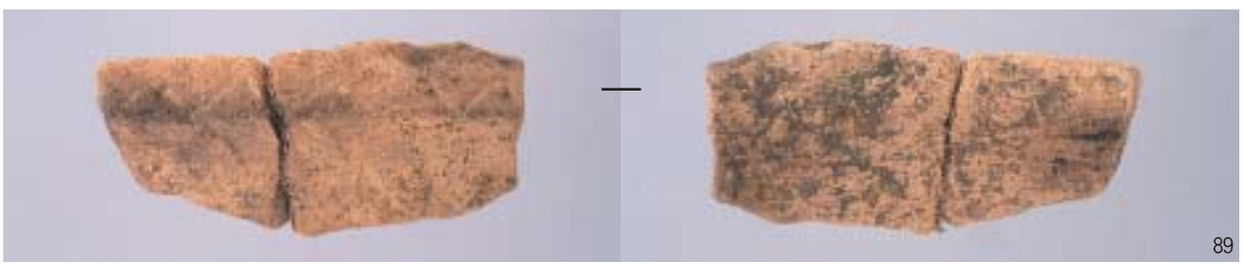
的場遺跡出土遺物(5)

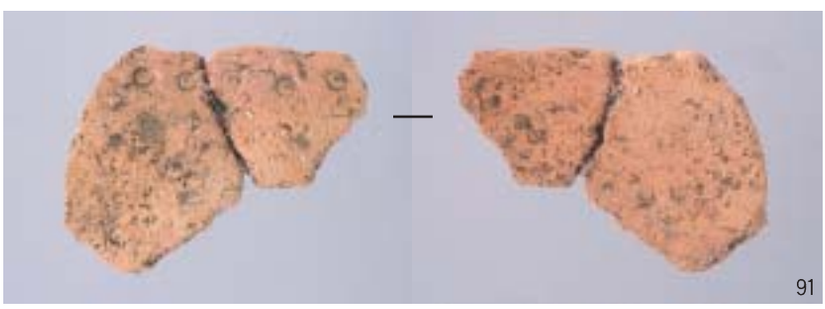
第58図　縄文土器実測図(2)

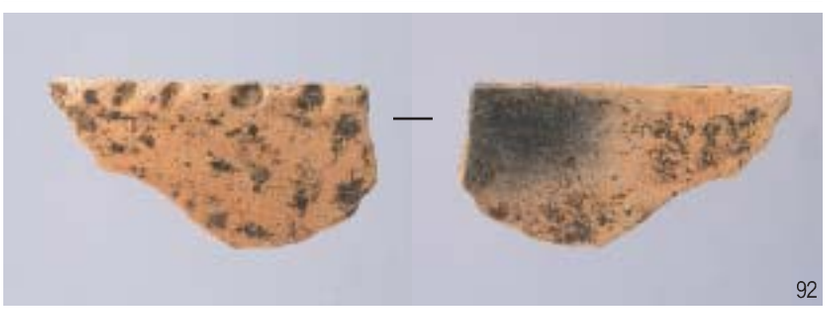


的場遺跡出土遺物(6)





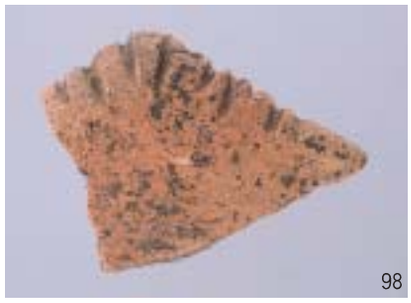




的場遺跡出土遺物(7)

96

97


98

99

100

101

102

103

第59図　縄文土器実測図(3)

104

106

105

107

的場遺跡出土遺物(8)

108

109

110

第60図　縄文土器実測図(4)

111

112

113

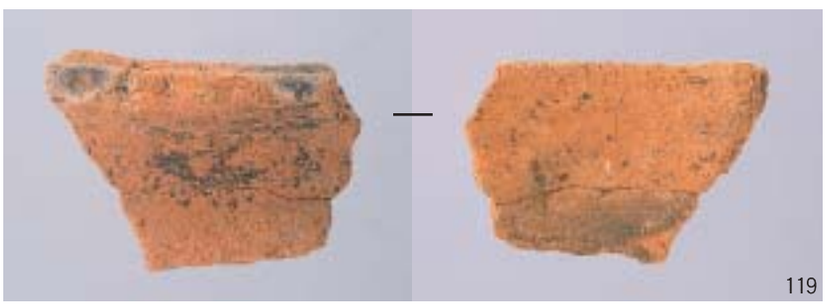
114

115

116

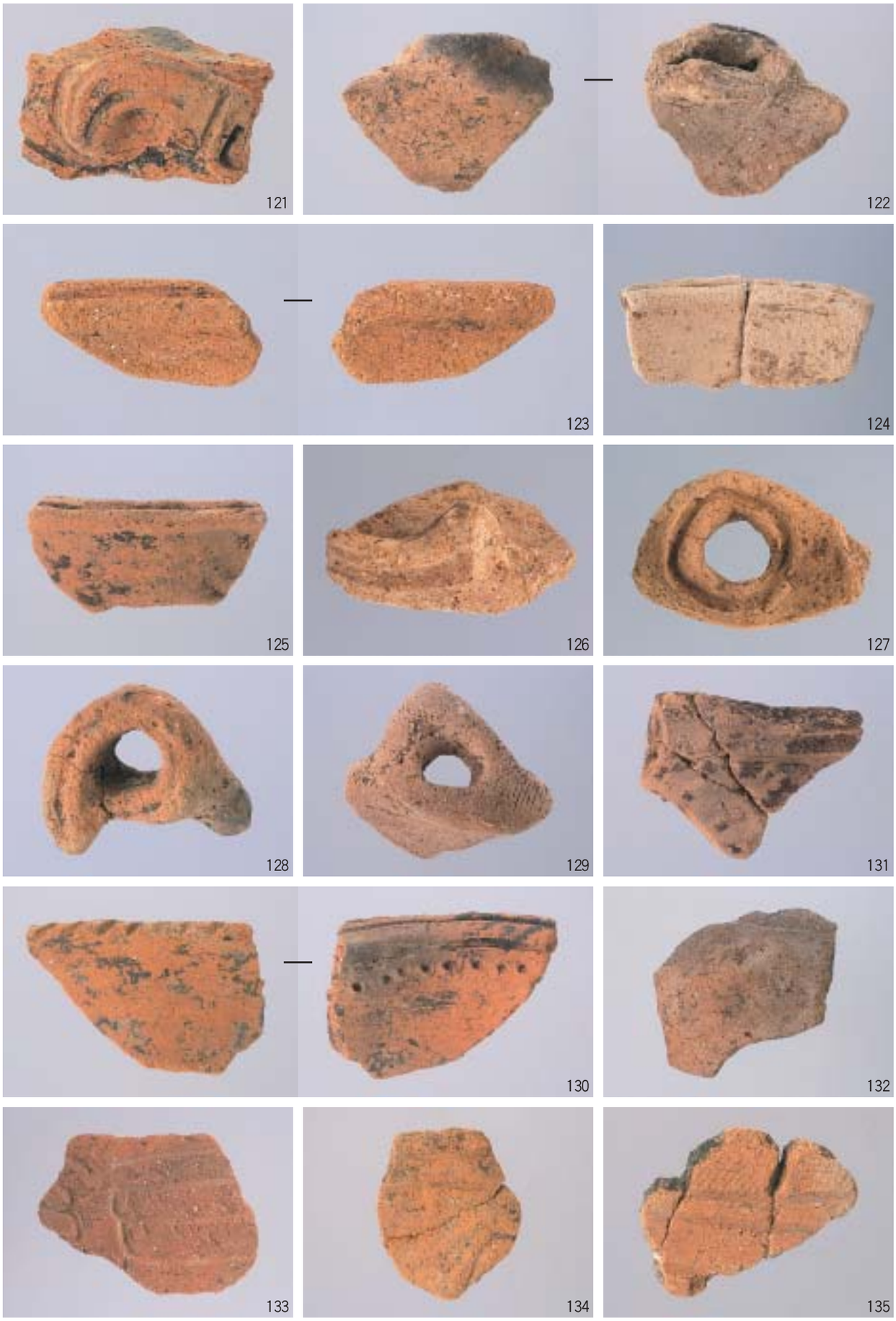
117

118


119

120

的場遺跡出土遺物(9)



的場遺跡出土遺物(10)

136

137

138

139

140

第61図　縄文土器実測図(5)

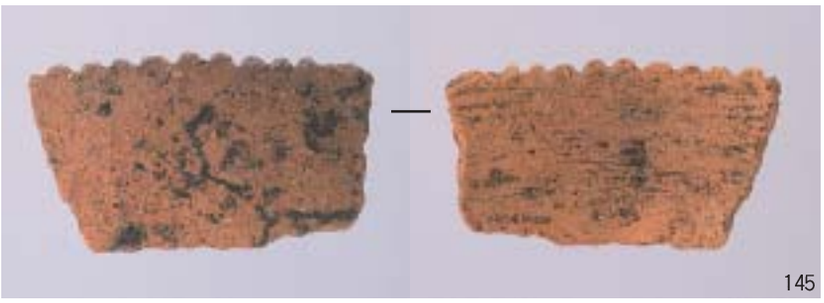
141

143

146

142

144


145

147

的場遺跡出土遺物(11)

148

149

150

151

第62図　縄文土器実測図(6)

153

152

159

154

156

155

157

158

的場遺跡出土遺物(12)

160

161

163

162

166

164

165

第63図　縄文土器実測図(7)

167

168

169

170

171

172

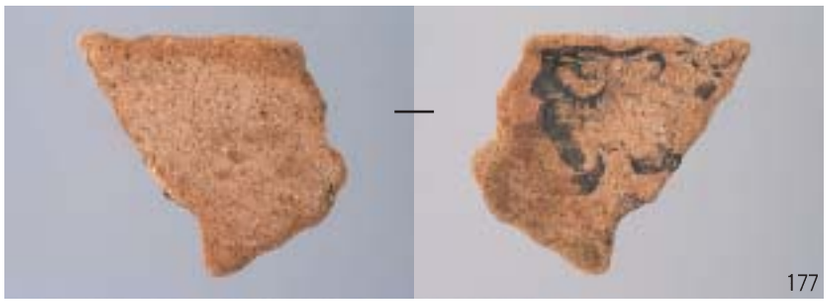
的場遺跡出土遺物(13)

173

174

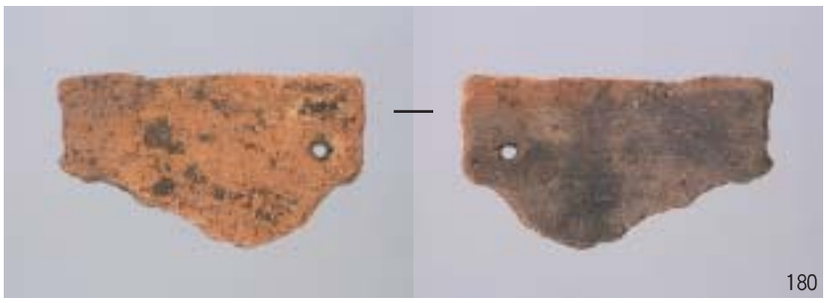
175

176


177

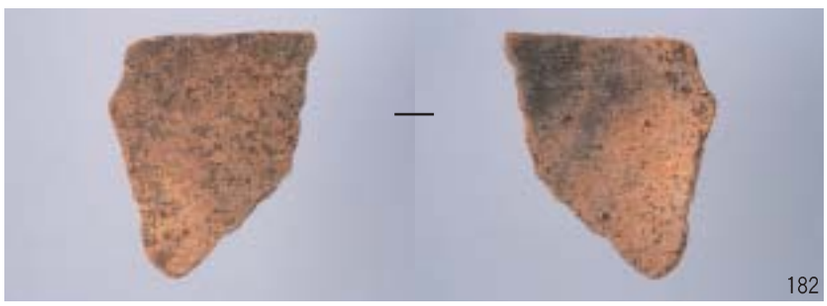
178

179


180

第64図　縄文土器実測図(8)

181

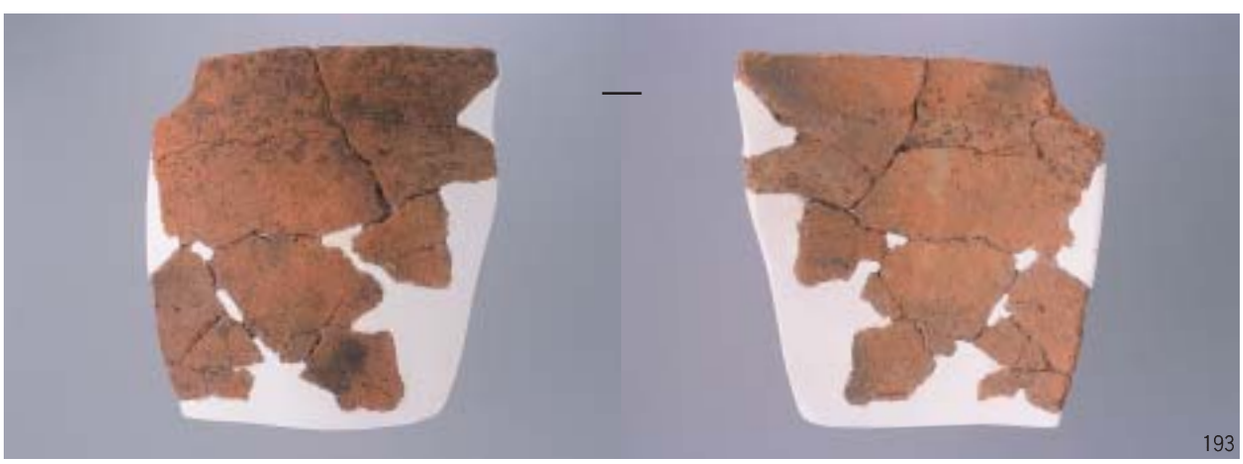

182

的場遺跡出土遺物(14)

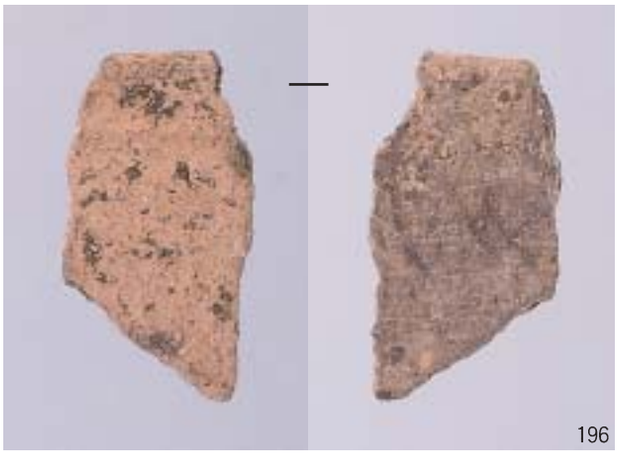
第65図　縄文土器実測図(9)

的場遺跡出土遺物(15)

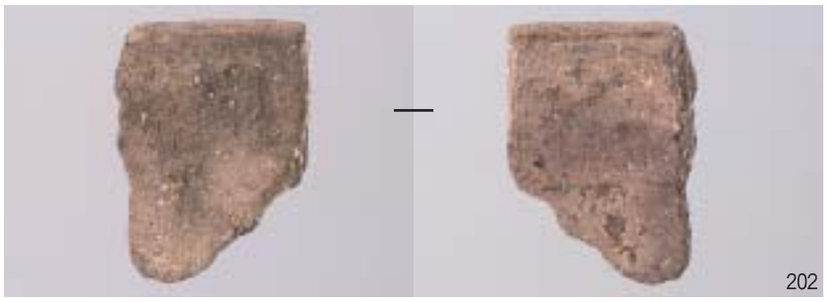
第66図　縄文土器実測図(10)

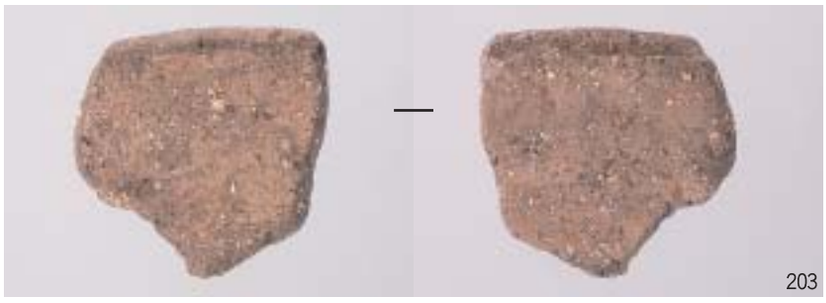


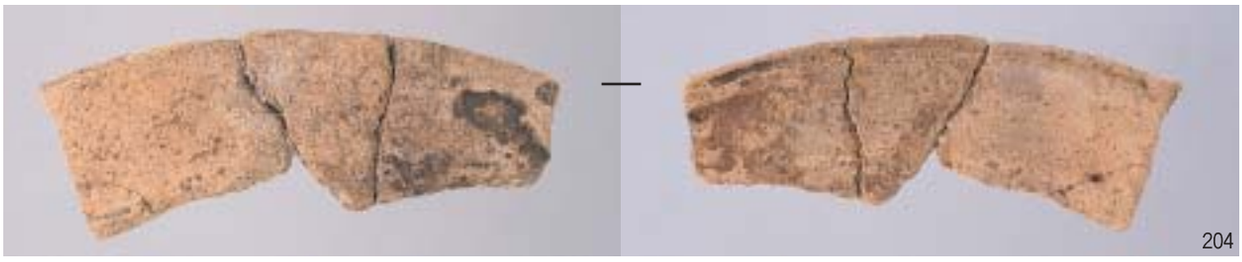
的場遺跡出土遺物(16)



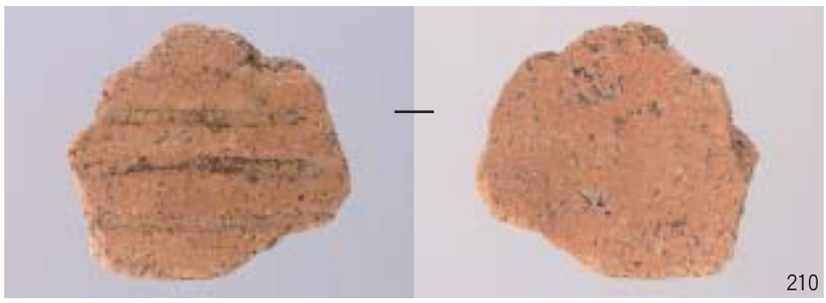
第67図　縄文土器実測図(11)



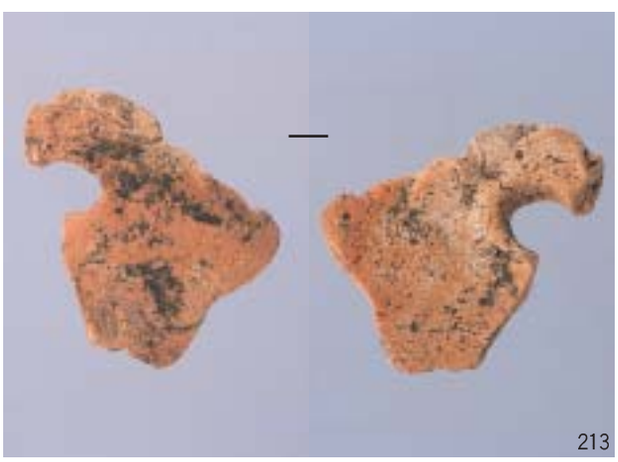




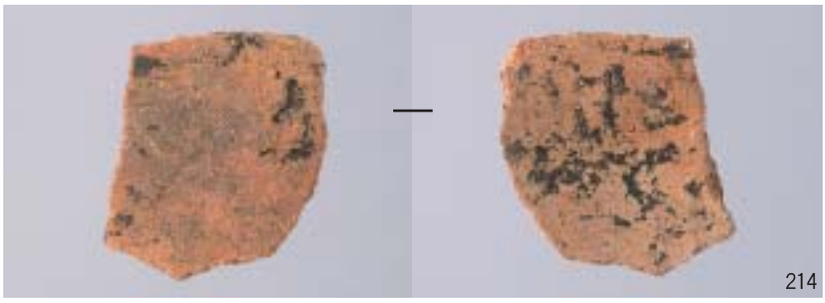
的場遺跡出土遺物(17)

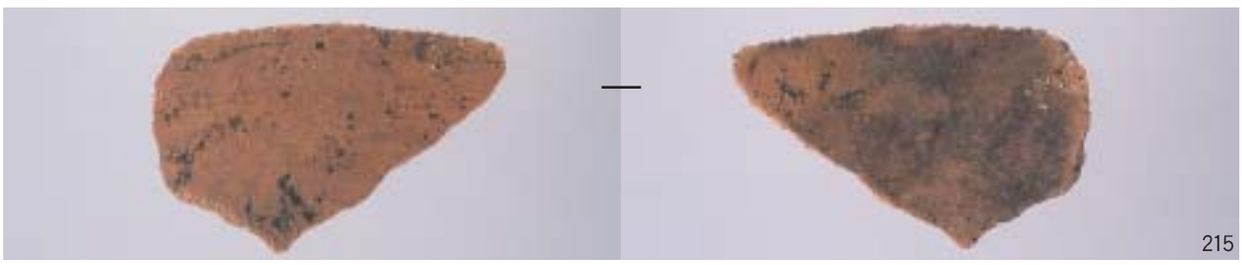


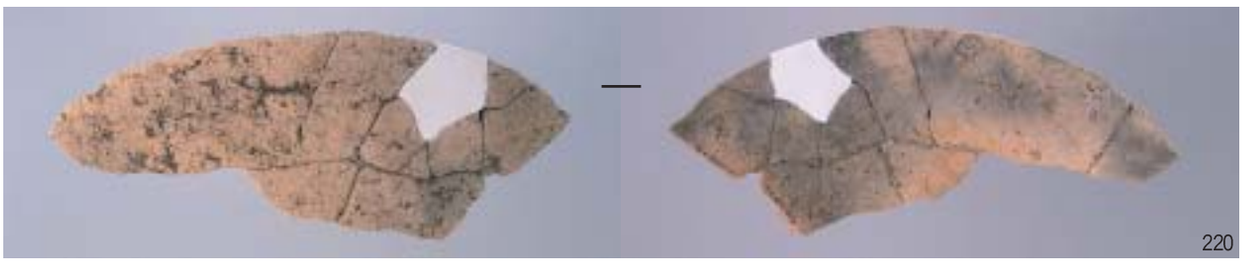
第68図　縄文土器実測図(12)

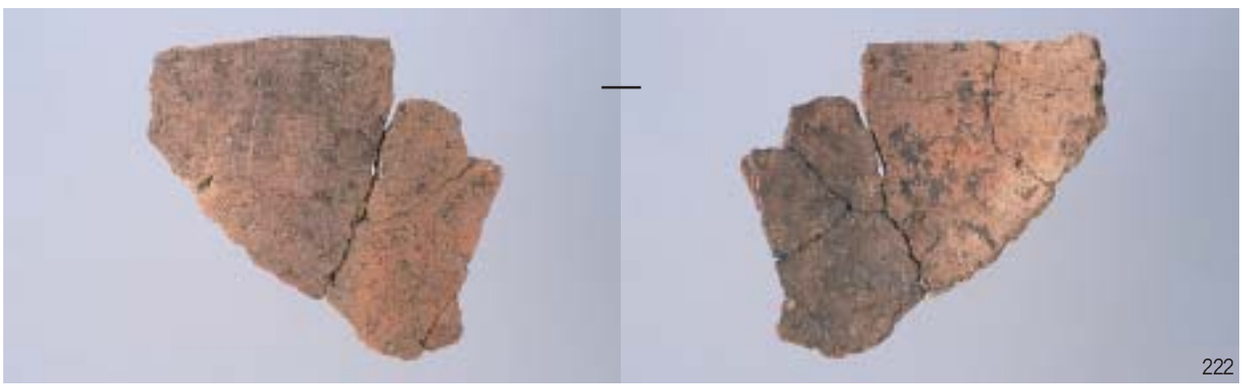


的場遺跡出土遺物(18)









的場遺跡出土遺物(19)

223

224

第69図　縄文土器実測図(13)

225

226

227

228

229

230

231

232

的場遺跡出土遺物(20)

233

234

235

第70図　縄文土器実測図(14)

236

237

238

239

240

241

的場遺跡出土遺物(21)

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

的場遺跡出土遺物(22)

254

255

第71図　縄文土器実測図(15)

256

257

258

259

260

261

262

263

的場遺跡出土遺物(23)

264

265

266

267

270

271

268

269

272

273

274

275

第72図　縄文土器実測図(16)

的場遺跡出土遺物(24)

第73・74図　石器・石製品実測図(1)(2)

報告書抄録

ふりがな	みやさこかんだいせき・まとばいせき		
書名	宮迫神田遺跡・的場遺跡		
副書名			
巻次			
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	下関市文化財調査報告書	山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第51集	11	第40集
編著者名	堀田　浩一　竹安　昭博 有馬　啓介　幸泉　満夫	小林　善也	
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	下関市教育委員会 （土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）	
所在地	〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号 TEL　083-923-1060	〒759-6121　山口県下関市豊北町神田上891-８ TEL　0837-88-1841	
発行年月日	西暦2005年３月25日（平成17年３月25日）		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやさこかんだ 宮迫神田 いせき 遺跡	やまぐちけんしものせきし 山口県下関市 ほうほくちょうおおあざ 豊北町大字 あわの 粟野	352012		34°19′41″	130°58′30″	20040510 ～ 20040820	2,300	ほ場整備
まとばいせき 的場遺跡	やまぐちけんしものせきし 山口県下関市 ほうほくちょうおおあざ 豊北町大字 かんだ 神田			34°18′17″	130°55′08″	20040727 ～ 20041104	1,300	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮迫神田遺跡	集落跡	弥生時代 ～ 中世	竪穴住居跡　10軒 掘立柱建物跡　20棟 土坑　36基 溝状遺構　2条 柱穴　約600個	縄文土器 弥生土器 緑釉陶器 六連式製塩土器 石剣 管玉 棗玉 ガラス小玉	弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡10軒を検出 北部九州系の甕棺片が出土
的場遺跡	集落跡	縄文時代 中世	掘立柱建物跡　８棟 土坑　14基 柱穴　約500個	縄文土器 土師器 瓦質土器	縄文時代後期の土器が多量に出土

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第51集
下関市文化財調査報告書　11
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書　第40集

宮迫神田遺跡
的　場　遺　跡

2005年３月

編集・発行　財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口市春日町３番22号
下関市教育委員会
（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）
〒759-6121　下関市豊北町神田上891-８

印　　刷　泉菊印刷株式会社
〒752-0927　下関市長府扇町８番48号